上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書　28

—更埴市内その7—

更埴条里遺跡・屋代遺跡群

（含む大境遺跡・窪河原遺跡）

—総論編—

2000.3

日　本　道　路　公　団
長　野　県　教　育　委　員　会
長野県埋蔵文化財センター

上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書　28

—更埴市内その7—

更埴条里遺跡・屋代遺跡群

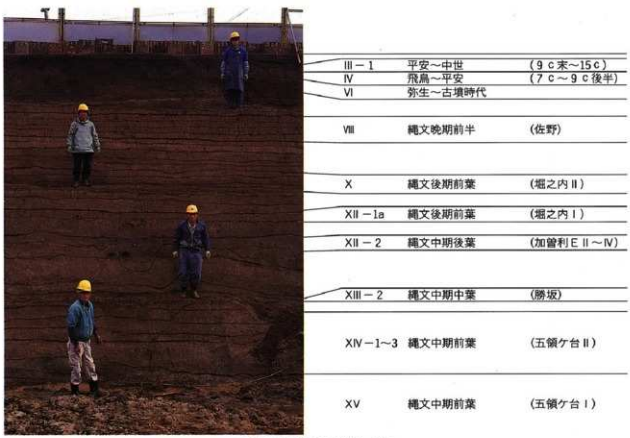
（含む大境遺跡・窪河原遺跡）

—総論編—

2000.3

日本道路公団
長野県教育委員会
長野県埋蔵文化財センター

更埴条里遺跡・屋代遺跡群・寝河原遺跡遠景（◀更埴条里遺跡A地区）



屋代遺跡群⑤b区基本土層

屋代遺跡群⑤区集落（手前は縄文中期後葉、奥は古墳時代～中世）

屋代遺跡群⑤区縄文中期後葉集落出土土器

屋代遺跡群⑥区第四水田対応面全景
（後方、森の手前が雨宮廃寺跡）

15号「国符」（1/4）
4 水田対応層・SD7035

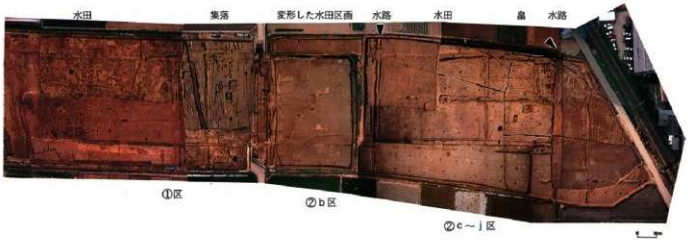
46号「乙丑年」（1/2）
3 水田対応層・SD7030

73号「荷札」（1/2）
3 水田対応層・SD8028

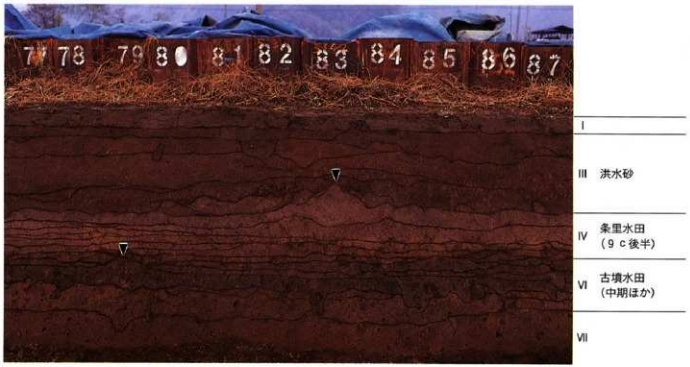
114号「郡符」（1/4）
3 水田対応層・SD7031

屋代遺跡群出土木簡

屋代遺跡群⑤区溝・流路出土遺物（7世紀後半～9世紀）



屋代遺跡群①・②区（自然堤防Ⅰ群側）の条里型地割と土地利用



屋代遺跡群②b区東壁基本土層

序

更埴市屋代地区における高速道関連の発掘調査は、平成２（1990）年度から平成７（1995）年度にかけて行われました。その後、整理調査は平成７（1995）年度から平成11（1999）年度に進められ、延べ10年を費やす大事業となりました。昨年秋には、上信越自動車道が新潟県上越市で北陸自動車道と接続し、全線開通の運びとなっております。この間、更埴条里遺跡・屋代遺跡群・窪河原遺跡に関しては、時代別の報告書６編10冊を刊行し、また、速報展や木簡学会の開催などを通して普及・公開に努めてきました。

現地調査においては、これまでの常識を覆す発見が相次いでありました。例えば、平成６（1994）年度調査では130点の木簡が出土しました。これらは、文字資料がわずかしか残っていなかった信濃国の古代史上に、多くの人名・地名をもたらすこととなり、当時の政治や経済、軍事、祭祀、流通などの実態に光を当てる貴重な資料となりました。ともに発見された数千点におよぶ木製祭祀具や水辺の祭祀施設も、埴科郡家が関与した祭祀のあり方を如実に示すものとして、重要な発見と言えましょう。

平成５（1993）年度には、地表下４～６ｍの深さから縄文時代中期（約4000～4700年前）の集落が姿を現しました。この発見は「丘陵上に住んでいる」という縄文人に対する固定観念を塗り替えるものでした。しかも、何層にもわたって集落が重なっていた点は、この地が住み良い環境にあったことを示しています。

このように、高速道関連の調査では、大規模な調査を実施することによって、多くの新知見を得ることができました。しかし、発掘調査は一過性の話題提供のために行われるものではありません。埋蔵文化財はもっともっと、ごくありふれた私たちの日常の中に浸透し、時には古代の知恵を得る材料として、あるいは自分たちの住む地域の移り変わりを知るための材料として、活用されるべきでありましょう。

『総論編』では、これまでに得られた資料や新知見をテーマ毎に総覧できるようにすること、そして、当地域における各時代の景観を復元することに重点を据えました。過去5000～6000年の間、人々は次々と起こる自然環境の変化や政治・経済・文化などの歴史的環境の変化と遭遇し、どのように対処してきたのでしょうか。その一つ一つの個面が刻み込まれているのが遺跡（埋蔵文化財）と言えましょう。遺跡から何を読みとり、今後に活かして行けばよいのか、この『総論編』が参考となることを願っています。

現在、屋代地区の景観は大きく変わろうとしています。高速道と新幹線の周囲には宅地・工場地などが広がり、これに対して農地は縮小し、かつて繁茂していた低地林に至っては千曲川の中州や神社の境内にわずかに見られるだけになりました。これが2000（平成12）年の景観です。しかしこうした状況は、本書に記された過去数千年間に、さまざまな表情を見せてきた景観のごくわずかな一断面にすぎません。そして、これからも刻々と景観は変貌をとげてゆくことでしょう。この一冊が、将来わたしたちの住む地域の景観を積極的に創出する上で、過去にさかのぼって考えるための一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査開始から本報告書の刊行に至るまで深い御理解と御協力をいただいた日本道路公団、長野県土木部高速道局、更埴市、同教育委員会、ちくま農業協同組合、地区対策委員会、地権者会等の関係機関、また、地元協力者の方々、発掘・整理作業に従事された方々、直接御指導・御助言をいただいた長野県教育委員会文化財・生涯学習課に対し心から敬意と感謝を表す次第であります。

平成12年３月21日

（財）長野県文化振興事業団
長野県埋蔵文化財センター
所長　佐久間鉄四郎

例　言

1．本書は、上信越自動車道建設工事にかかわる更埴条里遺跡、屋代遺跡群、および屋代遺跡群に属する大境遺跡、窪河原遺跡の発掘調査報告書の第６分冊（更埴市内その７）である。

1．本書は、これまで時代別に報告した第１分冊から第５分冊をまとめた『総論編』である。

1．本書を作成するにあたり、分冊で掲載した図表に加筆訂正した箇所がある。本書の見解が報告書作成における最終的な見解である。

1．本書で使用した地図は、日本道路公団作成の上信越自動車道倉科・雨宮地区平面図および更埴JCT～長野地区平面図（１：1000）をもとに作成したほか、建設省国土地理院発行の地形図（１：50000）、更埴市発行の地形図（１：10000）を使用した。

1．航空写真は、更埴地区の全景写真については長野県立歴史館から提供を受けたものと、国土地理院に版権のある昭和23年米軍撮影の写真を使用した。また、各調査区の写真は（株）新日本航業、（株）共同測量社に撮影を委託したものである。航空写真のモザイク作成は松尾カメラに発注した。

1．本報告書には次の方々から玉稿を賜った。記して謝意を表する（掲載順）。

第６章第４節	（株）パリノ・サーヴェイ	田中義文、辻本崇夫
第６章第５節、11節	国立歴史民俗博物館	辻誠一郎
第６章第６節	（株）パリノ・サーヴェイ	高橋　敦
第６章第８節２	天理参考館	金原正明
	（株）古環境研究所	金原正子
第６章第９節２	千歳サケのふるさと館	高橋　理
第６章第10節、７章	京都大学霊長類研究所	茂原信生
第６章第10節	獨協医科大学　第一解剖学教室	櫻井秀雄、芹澤雅夫
付　章	国立歴史民俗博物館	平川　南
	東京大学史料編纂所	山口英男
	弘前大学文学部	鐘江宏之
	長野県立歴史館	福島正樹、傳田伊史

1．執筆分担は次の通りである。

第２章第３節	市川桂子
第２章第２節、第４章第３節	鳥羽英継
第４章第２節	水沢教子
第５章第４節２（３）～（５）／付章（共同執筆）	宮島義和
第１章、第２章第１節、第３章、第４章、第５章（第４節２（３）～（５）以外）、第６章第１．２．３節、第８節１、第９節１、第８章、第９章／付章（共同執筆）	寺内隆夫

1．本書の編集・校正は担当者の合議の上、最終的には寺内が行い、小林秀夫・土屋積が校閲した。

1．遺構記号・遺構番号はすでに公表した各分冊と同じものを使用した。原則として発掘調査時の記号や番号を変更していないため、欠番などが存在する。

1．註・参考文献は各章あるいは節の末にまとめた。

1．発掘調査・報告書作成にあたり下記の諸氏・諸機関にご指導・ご援助をいただいた。記して謝意を表

する次第である。(敬称略、五十音順)

会田　進、会田容弘、青柳泰介、赤羽貞幸、穴沢義功、飯島哲也、石井　寛、石川日出志、市沢英利、市村勝己、出河裕典、伊藤俊治、井上　巌、井上喜久男、井原今朝男、今野　渉、岩崎卓也、植田弥生、上原真人、江浦　洋、大澤　哲、大塚文人、大塚昌彦、大平　茂、岡田正彦、岡村秀雄、岡村道雄、岡原正明、小口達志、小野紀男、尾見智志、風間栄一、門脇秀典、金箱正美、鎌江宏之、金子裕之、金原正明、金原正子、神村　透、河内晋平、北野博司、木下正史、桐原　健、金田章裕、北原糸子、国下多美樹、工楽善通、倉沢正幸、栗野克巳、小泉好延、肥塚隆保、輿水太仲、小平和夫、小平光一、小林謙一、小林正史、小林康男、小山岳夫、酒井潤一、斎野裕彦、坂井秀弥、齋藤孝正、櫻井秀雄、笹沢　浩、笹沢正史、佐藤雅一、佐藤和彦、佐藤信之、佐藤　信、沢田　敦、塩原俊文、茂原信生、渋谷恵美子、　清水みき、ジョーオン・ピジョオー、白沢勝彦、新川登亀男、菅原弘樹、助川朋広、鈴木三男、鈴木靖民、須田良平、須藤　隆、住田雅和、芹澤雅夫、高木勇夫、高島芙之、高橋　敦、高橋　理、高橋　学、滝沢敬一、田口昭二、辰巳和弘、巽　淳一郎、建石　徹、舘野和己、田中広明、玉田芳英、塚本師也、辻　尚子、辻　誠一郎、辻本崇夫、土橋　誠、都築恵美子、寺崎保広、寺崎祐助、寺島孝典、傳田伊史、戸沢充則、直井雅尚、中井一夫、中島庄一、永島正春、長島雄一、西本豊弘、丹羽　茂、能代修一、橋口定志、林　謙作、早川万年、林　幸彦、原　明芳、原田和彦、原田信男、樋口昇一、平川　南、平野　修、平林　彰、福島邦男、福島正樹、福田美和、藤川智之、藤沢高広、藤下典之、藤巻正信、古越永子、穂積裕昌、堀口萬吉、前島　卓、松井　章、松井　明、松田隆二、増田宗彦、三上徹也、翠川泰弘、南木睦彦、宮沢恒之、宮下健司、宮島　宏、宮本長二郎、村上　隆、望月由佳子、百瀬新治、森　明彦、森嶋　稔、矢口栄子、矢口忠良、矢島宏雄、矢島洋子、矢田　勝、山岸猪久馬、山口　明、山口逸弘、山口英男、山崎ます美、山下大輔、山田しょう、山田真一、山田昌久、山中　章、山中敏史、横山かよ子、義江彰夫、若尾正成、和田　率、綿田弘実、渡辺博人

国立歴史民俗博物館、更埴市教育委員会、長野県立歴史館、長野市教育委員会、長野市埋蔵文化財センター、奈良国立文化財研究所、木簡学会

また、センター内の調査研究員、あるいは現地調査に携わった方々から多くの助言を得ている。

校閲・執筆者以外で、調査・整理に関わった調査研究員は以下の通りである。

相沢秀樹、青木一男、井口慶久、市川隆之、出河裕典、伊藤克己、伊藤友久、稲場　隆、上田典男、上田　真、臼居直之、臼田武正、大久保邦彦、岡沢康夫、奥原　聡、大和龍一、河西克造、川崎　保、小林清人、桜井秀雄、澤谷昌英、島田正夫、清水　弘、下島浩伸、下平博行、武居公明、田中正治郎、谷　和隆、月原隆爾、常長虎徹、寺内貴美子、徳永哲秀、中沢道彦、中村　寛、夏目大助、贄田　明、西　香子、西嶋　力、西村政和、西山克己、野村一寿、馬場信義、伴　信夫、平出潤一郎、広瀬昭弘、廣田和穂、深沢重夫、福嶋正樹、藤沢袈裟一、藤原直人、渕井英知、本田　真、町田勝則、松岡昭彦、松岡忠一郎、宮入英治、宮下祐治、宮脇正実、百瀬忠幸、百瀬長秀、柳沢　亮、山極　充、山中　健、吉江英夫、吉沢信幸、依田　茂、若林　卓

1．本調査には、ベトナム文化・情報・スポーツ省のグエン・テ・フン氏が研修で参加している。
1．遺物写真の撮影・焼き付けは一部を除き、田村　彬、西嶋　力が行い、脆弱遺物の保存処理は長野県立歴史館　白沢勝彦・寺内貴美子、埋蔵文化財センターの臼田広之、水沢教子、相沢秀樹が担当した。
1．本書で報告した記録および出土遺物は長野県立歴史館が保管している。

本文目次

巻頭図版
序
例言
目次

第1章　調査の概要
第1節　本編の範囲……1
　1　報告書作成の方針……1
第2節　発掘調査の経過……2
　1　調査に至る経過……2
　2　発掘調査体制……3
　3　発掘調査の経過……7
　4　調査方法……11
　5　各地区別の調査方法と問題点……15
　（1）第1段階の調査　（2）水田跡の調査　（3）弥生時代後期～中世集落の調査
　（4）縄文時代集落の調査　（5）屋代遺跡群⑥区旧河道の調査
　6　普及・公開活動……21
第3節　資料整理の経過……22
　1　報告書刊行に向けて……22
　2　整理体制……22
　3　整理の経過……23
　4　普及・公開活動……25
第2章　遺跡の位置と周辺環境
第1節　遺跡の位置……27
第2節　歴史的環境……27
　1　考察のための前提……27
　（1）地域区分　（2）周辺遺跡の抽出と記載方法
　2　旧石器時代～縄文時代の歴史的環境……29
　3　弥生時代・古墳時代・古代の歴史的環境……30
　（1）居住域　（2）墓　域　（3）生産域　（4）その他
　4　12世紀～中世以降の歴史的環境……34
第3節　遺跡周辺の地形、地質環境……45
　1　善光寺平南部の地形・地質環境……45
　（1）長野盆地南部の地形　（2）遺跡周辺の地形・地質
　2　更埴条里遺跡・屋代遺跡群・窪河原遺跡の層序……49
　（1）七ツ石層　（2）反町層　（3）屋代層
第3章　調査対象とした地層

第1節　層序区分……53
1　層序区分と各層の特徴……53
（1）調査対象とした層の区分　（2）各層の特徴　（3）各地点の特徴
第4章　時期区分
第1節　層位区分と出土土器による時期区分……61
1　出土土器による時期区分……61
2　XII-2層出土の中期後葉土器の変遷……64
（1）中期後葉における時間軸の設定　（2）時期別の様相
3　善光寺平南縁の古墳時代前期～古代の土器編年（3世紀後半～11世紀後半）……66
（1）古墳時代の土器編年－古墳1期～古墳9期（3世紀後半～7世紀前半）－
（2）古代の土器編年－古代0期～古代15期（7世紀前半～11世紀後半）－
第2節　暦年代への比定……84
1　暦年代への比定……84
2　放射性炭素年代……84
（1）目的と委託先　（2）分析試料について　（3）測定機関と測定方法の違い
（4）測定結果　（5）成果と問題点
3　木簡による伴出遺物の暦年代推定……91
第5章　発掘調査資料総論
第1節　居住域（集落ほか）関連資料……93
1　概　要……93
（1）新たな問題を提起する資料群　（2）発見された集落などの特徴
2　各時代の集落、短期的滞在地の特徴とその変遷……94
（1）縄文時代中期集落　（2）縄文時代晩期前半～弥生時代前期並行期の短期的滞在地
（3）弥生時代～古墳時代の集落　（4）飛鳥・奈良時代の集落　（5）条里耕地の開発と
集落（古代5期～8期）　（6）古代2（洪水後）の集落　（7）中世の集落
第2節　集落内施設（建物など）……109
1　概　要……109
2　竪穴建物の特徴とその変遷……109
（1）竪穴建物　（2）縄文時代中期の竪穴建物　（3）弥生時代～古墳時代前半の竪穴建物
（4）古代の竪穴建物　（5）中世の竪穴建物
3　掘立柱・礎石建物の特徴とその変遷……113
（1）縄文時代の掘立柱建物　（2）古墳時代・古代の掘立柱・礎石建物　（3）中世の掘立柱建物
4　竪穴建物・掘立柱建物の建築材……115
5　竪穴建物（住居）の改築と利用期間の問題……116
6　集落内に存在するその他の施設……118
（1）区画や境界を示す施設　（2）井　戸
第3節　埋葬関連資料……121
1　概　要……121
2　各時代の埋葬施設とその変遷……121
（1）縄文時代の埋葬形態　（2）弥生時代～古代の埋葬形態　（3）中世の埋葬形態

第4節　祭祀・宗教関連資料 ……125
1　概　要 ……125
2　各時代の祭祀・儀礼・宗教関連施設、遺物とその変遷 ……125
（1）縄文時代の祭祀・儀礼痕跡　（2）弥生時代の祭祀・儀礼痕跡　（3）古墳時代の祭祀・儀礼痕跡　（4）古代の祭祀・儀礼、宗教関連資料　（5）仏教関連資料（古代～中世）
第5節　水田・稲作関連資料 ……138
1　概　要 ……138
2　各時代の水田・稲作関連資料とその変遷 ……138
（1）検出された水田面・畦畔　（2）用水路の変遷　（3）出土農耕具類の変遷
（4）稲作関連資料
3　水田・稲作の変遷 ……143
（1）縄文時代　（2）弥生時代　（3）古墳時代　（4）古代（条里以前）
（5）古代（条里水田）　（6）古代（洪水以後）　（7）中世・近世
第6節　畠作・果樹栽培、植物資源の採取関連資料 ……148
1　概　要 ……148
2　各時代における畠作・果樹栽培および植物資源採取の特徴とその変遷 ……148
（1）縄文時代　（2）弥生時代～古墳時代（VI層）　（3）郡家近隣の植物遺体群（7世紀後半～8世紀前半）　（4）条里開発期の畠跡（9世紀後半）　（5）古代（洪水以後）　（6）中　世
（7）近　世
第7節　狩猟・牧畜、漁撈畜関連資料 ……155
1　概　要 ……155
2　狩猟－縄文時代を中心とした動物利用－ ……155
（1）狩猟具の変遷　（2）猟　場　（3）狩猟対象動物　（4）骨・角の利用
3　牧畜・飼育と動物の活用－古墳時代以降の動物利用－ ……159
（1）古墳時代～古代における牛・馬飼育と利用　（2）中世・近世における牛・馬の利用
4　漁　撈 ……160
（1）漁撈の変遷　（2）集落別土錘出土数（古代）
第8節　手工業生産関連資料 ……163
1　概　要 ……163
2　縄文時代の石器・土器製作 ……163
（1）石器製作　（2）土器製作　（3）漆・ベンガラ
3　金属・ガラス製品生産 ……164
（1）概　要　（2）鉄製品生産　（3）ガラス玉生産
4　木製品生産 ……168
（1）縄文時代～弥生時代の磨製石斧と利用材　（2）古代における木製品生産
5　布・繊維製品生産 ……172
（1）概　要　（2）7世紀後半～8世紀前半の布生産　（3）9世紀代以降の布生産
（4）絹糸生産　（5）麻・苧生産　（6）ST4201建物群と布・繊維製品生産
第9節　交易と流通関連資料 ……177
1　概　要 ……177

2　縄文時代の交易 ……177
（1）石器・石材の搬入　（2）縄文時代の土器分布圏と搬入土器　（3）縄文時代晩期～弥生時代前期並行期
3　弥生時代～古代の交易・流通 ……178
（1）古墳時代までの土器・須恵器の搬入　（2）飛鳥、奈良時代前半の地域圏と流通
4　平安時代以降の交易、流通 ……181
（1）土器・陶磁器の搬入
第10節　屋代遺跡群における官衙および有力集落関連資料 ……182
はじめに ……182
1　屋代遺跡群④～⑥区集落と官衙の関係 ……182
（1）ST4201建物群とその周辺　（2）木簡に見る郡家の活動とST4201建物群周辺の工房
（3）郡家による祭祀と屋代遺跡群⑥区　（4）国府、軍団関連資料　（5）考古資料からみたST4201建物群の位置づけ
2　条里開発の主導者 ……188
（1）条里型地割施工開始の場所　（2）9世紀後半の新興勢力（屋代遺跡群①区集落）
（3）「八代」および「王強私印」
3　洪水復興期の主導者 ……189
4　中世居館 ……189
第11節　自然災害痕跡 ……191
1　洪水災害 ……191
2　地震災害 ……192
3　被災地区の変化 ……194
第6章　自然環境の変遷と利用資源の復元
第1節　自然環境と利用資源の復元をめぐって ……195
第2節　堆積物の特徴 ……199
はじめに ……199
1　灼熱消費量分析による堆積物の特徴 ……199
（1）灼熱消費量分析　（2）有機物量と堆積物の特徴
2　洪水砂の特徴 ……202
（1）更埴条里遺跡・屋代遺跡群のIII層について　（2）いわゆる仁和の洪水砂か？
第3節　微地形の変遷 ……205
1　ほ場整備直前（昭和30年代）の微地形 ……205
（1）方法と手順　（2）地表面に見られる地形の特徴
2　各時代の地形変遷 ……206
（1）縄文時代の地形変遷　（2）弥生時代～古代1（9世紀後半洪水前）の地形変遷
（3）古代2（9世紀後半洪水後）～中世・近世の地形変遷
第4節　更埴条里遺跡・屋代遺跡群・篠河原遺跡の古環境変遷と土地利用 ……210
はじめに ……210
1　縄文時代 ……210
（1）縄文時代の古環境　（2）縄文時代の土地利用

2　弥生時代から古墳時代 ……212
（1）弥生時代～古墳時代の古環境　（2）弥生時代～古墳時代の土地利用
3　古　代 ……212
（1）古代の古環境　（2）更埴条里遺跡の古代条里水田　（3）屋代遺跡群の古代条里水田
（4）屋代遺跡群の古代祭祀遺構の花粉分析
4　中世・近世 ……214
（1）中世・近世の森林植生　（2）旧五十里川の埋積過程　（3）自然堤防Ⅱ群の形成過程
（4）中世・近世の稲作の様態と土地利用
第5節　大型植物遺体群からみた更埴条里遺跡・屋代遺跡群の植生 ……223
はじめに ……223
1　縄文時代 ……223
2　古墳時代から古代 ……223
3　古代から中世・近世 ……225
4　大型植物遺体群からみた人と植物の関係史 ……226
第6節　各時代の木製品や住居構築材等の用材 ……228
はじめに ……228
1　追加試料の同定結果 ……228
2　総　括 ……228
（1）概　観　（2）利用材の変遷
まとめ ……232
第7節　古代の昆虫遺体 ……236
第8節　寄生虫卵等の分析 ……237
1　屋代遺跡群⑥区の寄生虫卵分析について ……237
2　屋代遺跡群⑥区の木樋遺構の遺体分析による検討 ……238
はじめに　（1）試　料　（2）寄生虫卵分析　（3）花粉分析　（4）種実同定
（5）考察
まとめ ……243
第9節　屋代遺跡群出土貝類・魚類遺存体 ……244
はじめに ……244
1　屋代遺跡群、雨河原遺跡出土貝類・魚類 ……244
2　屋代遺跡群（『古代1編』関連）出土貝類・魚類遺存体 ……245
第10節　上信越自動車道屋代遺跡群出土の脊椎動物遺存体 ……247
はじめに ……247
1　出土した動物遺存体 ……247
2　動物遺存体の出土状況 ……248
3　出土動物骨の状況 ……248
（1）イノシシ　（2）ニホンジカ　（3）ウ　シ　（4）ウ　マ
4　まとめと考察 ……250
第11節　更埴条里遺跡・屋代遺跡群の生態系史の解読に向けて ……252

第7章　更埴条里遺跡・屋代遺跡群・窪河原遺跡出土の人骨の時代的な変化
（縄文時代から中世まで）
はじめに ……254
1　縄文時代人骨 ……254
2　古代人骨（平安時代） ……254
3　中世人骨 ……255
まとめ ……256
第8章　景観の変遷
第1節　地形環境と地質環境 ……257
1　地理的環境　2　地質環境
第2節　景観の変遷 ……259
1　縄文時代の景観 ……259
（1）自然環境　（2）縄文時代前期後半～中期中葉　（3）縄文時代中期後葉
（4）縄文時代後期～晩期
2　弥生時代の景観 ……262
（1）耕地開発時代の景観形成　（2）本格的な開発前の景観　（3）弥生時代中期の開発
（4）弥生時代後期の景観
3　古墳時代の景観 ……264
（1）前方後円墳を見上げる景観の創出　（2）弥生時代後期～古墳時代前期
（3）古墳時代中期　（4）古墳時代後期
4　古代1（7～9世紀）の景観 ……266
（1）律令時代の集落景観と水田の再開発　（2）飛鳥～奈良時代（7世紀後半～8世紀前半）の景観
（3）平安時代前半期（8世紀末～9世紀後半）の景観
5　古代2（洪水以後）の景観 ……269
（1）いわゆる「仁和の大洪水」
（2）洪水後（9世紀末～11世紀）の景観
6　中世・近世の景観 ……270
（1）中世の開発と、ほ場整備以前の景観の原型　（2）中　世（12世紀代から）の景観
（3）中　世（13世紀以降）の景観　（4）近世の景観
第9章　結　語 ……273
付章　屋代遺跡群出土木簡補遺
第1節　新出木簡と保存処理後再読の経緯 ……*1*
第2節　新出木簡 ……*2*
第3節　保存処理後再読木簡の釈文 ……*3*
第4節　釈文を訂正した木簡 ……*5*

挿図目次

図1　調査経過……10
図2　地区設定図……12
図3　仮地区名と分割調査……13
図4　調査の手順……14
図5　鋼矢板の設置……14
図6　止水・安全確保ほか……15
図7　調査状況1……17
図8　調査状況2……19
図9　現地説明会などの実施……21
図10　整理状況……24
図11　更埴地方歴史地理的環境図……28
図12　周辺遺跡……36
図13　長野盆地の地形……45
図14　地形分類図（遺跡周辺）……46
図15　遺跡周辺の地質……48
図16　総合柱状図……51
図17　基本土層（1）……56
図18　基本土層（2）……58
図19　基本土層（3）……59
図20　雨河原遺跡H5区砂礫層……60
図21　層位区分と出土遺物（1）……61
図22　層位区分と出土遺物（2）……62
図23　縄文時代中期後葉の土器編年図……65
図24　古墳時代の土器編年簡略図……66
図25　古墳時代の土器　器種分類……67
図26　善光寺平南縁　古墳時代の土器編年表（3c後半～7c初頭）……68
図27　古代の土器　器種分類　1……70
図28　古代の土器　器種分類　2……70
図29　古代の土器編年簡略図　その1……71
図30　善光寺平南縁　古代の土器の消長（食膳具）編年表1（7c前半～9c末）……72
図31　善光寺平南縁　古代の土器の消長（煮炊具・鉢類等）編年表2（7c前半～9c末）……73
図32　善光寺平南縁　古代の土器の消長（貯蔵具）編年表3（7c前半～9c末）……74
図33　善光寺平南縁　古代の土器の消長（編年概念表）編年表4（8c中～9c末）……75
図34　古代の土器編年簡略図　その2……76
図35　善光寺平南縁　古代2の土器の消長　編年表5（9c後半～11c後半）……77
図36　善光寺平南縁　古代2の土器の消長（編年概念表）編年表6（9c後半～11c後半）……78
図37　古墳時代の土器　その1……79
図38　古墳時代の土器　その2……79
図39　古墳時代の土器　その3……80
図40　古墳時代の土器　その4……80
図41　古墳時代の土器　その5……81
図42　古代の食膳具　その1……81
図43　古代の食膳具　その2……82
図44　古代の食膳具　その3……82
図45　古代の食膳具　その4……83
図46　古代の食膳具　その5……83
図47　屋代遺跡群⑥区　木簡出土層位と紀年銘木簡……92
図48　縄文時代中期集落の変遷……96
図49　縄文時代晩期～弥生時代前期並行期の短期的落在地点……100
図50　弥生時代（弥生5期）～平安時代初頭（古代5期）の集落変遷……101
図51　古墳時代・古代の集落構造……103
図52　古代6期～8期前半の集落変遷と墨書土器……105
図53　平安時代（古代8期後半～15期）の集落変遷……106
図54　中世の集落……108
図55　竪穴建物、掘立柱・礎石建物の変遷……111
図56　炭化建築材の残存資料……116
図57　水田域における古代竪穴住居の改築……117
図58　古代集落の囲繞施設と区画（屋代遺跡群①区集落）……119
図59　井戸変遷図……120
図60　埋葬施設および埋葬姿勢の変遷……122
図61　縄文・弥生時代の祭祀関連遺構と遺物……128
図62　古墳時代～中世の祭祀関連遺構……131
図63　古墳時代～中世の祭祀・宗教関連遺構……133
図64　古代の木製祭祀具集中廃棄地点……135
図65　古代の木製祭祀具（人形、動物形）の変遷……136
図66　「畦畔状遺構」および「畦畔」断面模式図……138
図67　水路断面規模の変遷と切り合い関係……141
図68　農耕具の変遷……142
図69　縄文時代打製石斧の変遷……150
図70　畠跡の変遷……152
図71　縄文時代の石鏃と刃器……156
図72　縄文時代中期後葉集落のイノシシ骨出土状況と杭列……158
図73　漁撈具の変遷……161
図74　古代における屋代遺跡群周辺の土師出土数……162
図75　鍛冶関連遺構の変遷……165
図76　ガラス玉鋳型……167
図77　伐採具および木製品加工具、その他の工具……169
図78　布生産関連資料……173
図79　時期別紡錘車出土量とその材質……174
図80　鞴・鍛関連資料……175
図81　縄文時代中期　主要石器・石材搬入経路……177

図82　屋代遺跡群出土土器の系統と搬入経路（縄文時代中期前葉）……178
図83　奈良時代前期　屋代遺跡群をとりまく地域圏 …179
図84　古代の信濃国……180
図85　官衙関連遺物など……183
図86　ST4201建物群と周辺の遺構・遺物（古代Ⅰ期）185
図87　武具の変遷……189
図88　自然災害痕跡……193
図89　環境復元および動・植物遺体分析地点……196
図90　灼熱消費量……200
図91　Ⅲ層（９世紀第４四半期洪水砂）堆積厚模式図……203
図92　９世紀後半の洪水砂が見られた遺跡……204
図93　昭和時代の地表面等高線と各時代の遺構分布（１）……208
図94　昭和時代の地表面等高線と各時代の遺構分布（２）……209
図95　総合柱状図に基づく更埴・屋代・篠河原遺跡の古環境変遷……211
図96　更埴条里遺跡Ａ地区（後背湿地Ⅰ群）の主要珪藻化石群集……216
図97　更埴条里遺跡Ｋ地区（自然堤防Ⅰ群）の主要珪藻化石群集……216
図98　篠河原遺跡H6区（旧河道Ｂ）の主要珪藻化石群集……216
図99　珪藻化石……217
図100　更埴条里遺跡Ｂ地区（後背湿地Ⅰ群）の花粉化石群集……218
図101　屋代遺跡群⑥区SD7035（『古代１編』）の主要花粉化石群集の層位分布……218
図102　屋代遺跡群⑥区SD7030（『古代１編』）の主要花粉化石群集の層位分布……219
図103　篠河原遺跡H6区（旧河道Ｂ）の主要花粉化石群集……219
図104　花粉化石……220
図105　更埴条里遺跡Ａ地区（後背湿地Ⅰ群）の植物珪酸体群集……221
図106　更埴条里遺跡Ｉ地区（後背湿地Ⅰ群）の植物珪酸体群集……221
図107　屋代遺跡群⑥区北壁（旧河道Ａ内水田域）の植物珪酸体群集……221
図108　植物珪酸体・種実遺体……222
図109　木　材……234
図110　炭化材……235
図111　寄生虫卵・花粉分析地点……237
図112　屋代遺跡群⑥区の花粉ダイヤグラム……240
図113　屋代遺跡群⑥区の花粉・脂子遺体……241
図114　屋代遺跡群⑥区の種実……242
図115　屋代遺跡群出土のイノシシ・ニホンジカの出土点数の時代推移……249
図116　屋代遺跡群出土のウシ・ウマの出土点数の時代推移……249
図117　弥生時代中期の景観……263
図118　古墳時代中期の景観……265
図119　７世紀後半～８世紀前半の景観……267
図120　中世の景観……271
図121　34号木簡赤外線写真……6
図122　藤原宮木簡第８号実測図（部分）……6

付図１　更埴条里遺跡・屋代遺跡群・篠河原遺跡全体図（１）
付図２　更埴条里遺跡・屋代遺跡群・篠河原遺跡全体図（２）、基本土層図
付図３　発掘された水田跡（９世紀後半、洪水砂堆積直前）

写真図版

巻頭図版１　上　更埴条里遺跡・屋代遺跡群・篠河原遺跡遠景
　　下　屋代遺跡群⑤ｂ区基本土層
巻頭図版２　上　屋代遺跡群⑤区集落
　　下　屋代遺跡群⑤区・縄文中期後葉集落出土土器
巻頭図版３　上　屋代遺跡群⑥区、第４水田対応面全景
　　下　屋代遺跡群出土主要木簡
巻頭図版４　上　屋代遺跡群⑥区溝・流路出土遺物（７世紀後半～９世紀）
　　中　屋代遺跡群①・②区（自然堤防Ⅰ群側）の条里型地割と土地利用
　　下　屋代遺跡群②ｂ区東壁基本土層
写真図版１　新出木簡赤外線写真（上）・外形写真（下）

挿表目次

表1　調査体制……4
表2　更埴条里遺跡、屋代遺跡群、篠河原遺跡調査経過……8
表3　遺構記号一覧……11
表4　遺物注記記号一覧……25
表5　周辺遺跡……37
表6　層位と時期区分……63
表7　北信地域における3世紀～7世紀初頭の土器編年研究史……67
表8　古代の土器編年（7世紀前半～11世紀後半）各時期の定義……69
表9　更埴条里遺跡・屋代遺跡群放射性炭素測定値一覧（層位順）……86
表10　検出集落一覧……95
表11　祭祀・儀礼・宗教関連遺構と遺物一覧……126
表12　検出された水田遺構……139
表13　畠跡ほか一覧……149
表14　古代集落別土師出土数（高速道屋代遺跡群・更埴条里遺跡）……162
表15　屋代遺跡群④区溝・流路出土の古代木質遺物の樹種一覧……170
表16　時期別紡錘車数と竪穴建物数の比較……174
表17　災害痕跡一覧……191
表18　更埴条里遺跡、屋代遺跡群、篠河原遺跡　分析・鑑定一覧……197
表19　周辺遺跡の分析・鑑定一覧……198
表20　灼熱消費量測定値一覧……201
表21　旧層（層厚計測値一覧）……203
表22　樹種同定結果（『古代1編』補遺）……229
表23　住居構築材の時代別種類構成……230
表24　屋代遺跡群採取の昆虫遺体同定結果（『古代1編』より）……236
表25　寄生虫卵・花粉・種実同定分析試料一覧……238
表26　屋代遺跡群⑥区における寄生虫卵分析結果……239
表27　屋代遺跡群⑥区における花粉分析結果……240
表28　屋代遺跡群⑥区における種実同定分析結果……242
表29　屋代遺跡群⑥区出土貝類遺存体（『古代1編』補遺）……246
表30　屋代遺跡群⑥区出土魚類遺存体（『弥生・古墳編』『古代1編』補遺）……246
表31　屋代遺跡群出土の哺乳動物骨の出土点数の時代的推移……248

付表1　更埴条里遺跡・屋代遺跡群・篠河原遺跡の古環境変遷と土地利用

第１章　調査の概要

第１節　本編の範囲

１　報告書作成の方針

地域一括・時代別報告　平成７年度、上信越自動車道関係の整理がはじまるにあたり、更埴条里遺跡と屋代遺跡群（含む大境遺跡、窪河原遺跡）については、遺跡別とはせずに一括して報告する方針を立てた。

間断ない遺跡　その主な理由は、更埴条里遺跡Ａ地区から屋代遺跡群（窪河原遺跡）までの全長2.3kmをほぼ全面発掘し、その間、遺跡が途切れなかったことによる。このことは、従来の遺跡別（地区別）報告では、同一時期の水田面や水路をみすみす分断してしまうこと、また、同時期の集落と水田との位置関係などといった、調査対象地域全体の様相がつかみにくくなってしまうこと、などを意味していた。

景観復元　さらに、例えばⅢ-２層とした洪水砂は、更埴条里遺跡Ａ地区から屋代遺跡群⑥区の約２kmにわたって、９世紀第４四半期の水田や住居をパックしていた。この洪水砂を剥ぐことによって遺物・遺構の有無とは関係なく、一時期の「地表」を検出することが可能となった。これにより人間活動の痕跡を点（一定の範囲）でおさえる狭義の「遺跡」や、その集合・ネットワークとしての「遺跡群」をとらえる作業だけでなく、一時期の「景観」を復元しうる可能性が強まった。「景観」復元を目指すという課題を掲げるためにも、全地域を統合した報告書作成を選択した。

キー層による時代別分冊　時代別分冊方式をとった理由は、現地表直下から地表下８ｍにわたって、江戸時代から縄文時代に至る遺構・遺物が層位別に検出できたことにある。膨大な資料をまとめるにあたり、大きな環境の変化をもたらしたと思われる層を「キー層」として、時代別の分冊方式を採用した。

自然環境分析　各時代別分冊では、「景観」を復元するにあたって狭義の考古資料以外の微化石や動・植物遺体の分析を重視し、多くの研究者に参加を願った。『総論編』では、それらを元に自然環境と人間の営みの相関関係とその変遷を主眼として、まとめてゆく方針を立てた。

長野自動車道関連　また、窪河原遺跡については、上記の方針から、平成２年度に調査を実施した長野自動車道分についても含めた。

分冊の区分　各分冊の表題と刊行年度は以下のとおりである。また、本編はこれまでに刊行した時代別の事実報告を踏まえ、総合的に検討することを目指した『総論編』である。

第１分冊　『長野県屋代遺跡群出土木簡』平成７年度刊行

第２分冊　『更埴条里遺跡・屋代遺跡群－含む大境遺跡－　縄文時代（Ⅶ層～ⅩⅨ層）編』（本文、遺構図版、遺物図版・写真図版分冊）　平成11年度刊行

第３分冊　『更埴条里遺跡・屋代遺跡群－含む大境遺跡・窪河原遺跡－　弥生・古墳時代（Ⅵ層）編』　平成９年度刊行

第４分冊　『更埴条里遺跡・屋代遺跡群－含む大境遺跡・窪河原遺跡－　古代１（Ⅳ・Ⅴ層）編』（本文、図版分冊）　平成10年度刊行

第５分冊　『更埴条里遺跡・屋代遺跡群－含む大境遺跡・窪河原遺跡－　古代２・中世・近世（Ⅱ・Ⅲ層）編』（本文、図版分冊）　平成11年度刊行

第６分冊　『更埴条里遺跡・屋代遺跡群－含む大境遺跡・窪河原遺跡－　総論編』本編

第2節　発掘調査の経過

1　調査に至る経過

調査の受託　高速自動車道建設に関わる発掘調査は、日本道路公団と文化財保護委員会（現文化庁）との間で取り交わされた「日本道路公団の建設事業等工事施工に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱に関する覚書」に基づいている。上信越自動車道、中央自動車道長野線に関連する更埴条里遺跡、屋代遺跡群（含む大境遺跡、窪河原遺跡）の発掘調査については、調査を受託した長野県教育委員会から長野県埋蔵文化財センターが再委託を受け実施した。

遺跡名と境界　調査範囲は、周知の遺跡である更埴条里遺跡、屋代遺跡群におよぶ。地点毎の細部の調査範囲確定は、文化課（現文化財・生涯学習課）と長野県埋蔵文化財センターの試掘に基づいて行った。

遺構・遺物の分布には途切れる場所がなく、遺跡名の境界は遺跡台帳に則って便宜的に設定した。更埴条里遺跡と屋代遺跡群の境界は、低地を東流する五十里川とした。前者は主に後背湿地にあたり水田跡が予想され、後者は主に自然堤防上にあたり集落跡が予想された。さらに屋代遺跡群は、更埴市教育委員会の調査により、大境遺跡、窪河原遺跡の名称の付された地点がある。

大境遺跡は高速道屋代遺跡群④区のうち、下条堰の西側にある旧オリオン機械株式会社敷地部分である。遺構・遺物の内容は他の④区と一連と考えられるため、本書では④区として報告している。窪河原遺跡は、従来自然堤防Ⅱ群上のみを指していたが、今回の調査では、旧河道B（図14）以北の低地を含め窪河原遺跡とした。この地区は、自然堤防Ⅰ群上とは地形環境と開発時期が大きく異なることから、屋代遺跡群○区とはせず、窪河原遺跡の名称を用いて報告することとした。

調査範囲の確定　文化課による試掘調査は平成元年8月～2年7月にかけて実施され、以下の状況が確認された。

・更埴条里遺跡－全域で水田跡、K地区に集落
・屋代遺跡群－自然堤防背面に水田跡、①区ほかで集落、⑤区で遺構密集
・窪河原遺跡－自然堤防上に中世集落、畝状遺構、周辺に水田跡（時期不明）

さらに、屋代遺跡群については、水田跡が予想される⑥区の低地（旧河道A）が調査範囲に加わった。また、窪河原遺跡についても同様の理由から、低地（旧河道B～D）が調査範囲に加わった。

以上の試掘調査により、調査対象範囲は、南は有明山トンネル出口直下の低地から現更埴ジャンクションまでの全長約2.3kmのほぼ全域となった。調査予定表面積は、

・更埴条里遺跡　70,000㎡
・屋代遺跡群　46,000㎡
・大境遺跡　500㎡
・窪河原遺跡　56,000㎡（中央道分36,000、上信越道分20,000）㎡に及んだ。

本格調査の範囲　調査対象範囲の確定後、遺跡の状況が把握できにくかった窪河原遺跡については、平成2年6月と10月に埋蔵文化財センターによる試掘調査を実施した。その結果、旧河道C・Dにあたる低地には、近世以降の水田跡だけしか存在しないことが判明した。このことにより、本調査の範囲は、より古い水田跡の可能性がありH6区（旧河道B）とH2区（自然堤防上）の遺構密集地に限定することとなった。ただし、H6区は調査期間の制約から西側部分のみの調査とせざるを得なかった。

屋代遺跡群③b区西側地点は、平成3年の当センターによる試掘調査の結果、Ⅶ層に達する深度までカ

クランされていることが判明したため、本調査の範囲から除外した。また、下条堰などの大規模用水路については、一時的な移設場所の確保が期間内にはできず、調査を見送った地点がある。

主要な幹線道路（国道、県道）、鉄道（長野電鉄河東線）、河川（五十里川）、およびその隣接地は調査の対象から除外した。

各層に対する本格調査の実施は、試掘調査のトレンチ断面と出土遺構・遺物の状況から判断した。その結果、Ⅲ層、Ⅳ層、Ⅴ層、Ⅵ層、Ⅶ層上面での本格調査を予定し、計画を作成した。それより下層については、Ⅶ層上面までの調査終了後、だめ押しトレンチを設定して遺構・遺物の有無を判断し、調査すべき層の確定を行うこととした。そのため、Ⅷ層以下については、地区によって本格調査を実施した層が異なっている（『縄文剣』参照）。

発掘調査期間　冬季オリンピック開催前年（1997年）までに高速道開通が目指されたため、本格調査の期間は平成2（1990）年11月から平成6年（1994）12月に設定された。また、その後、高速バス停留所設置にともなう更埴条里遺跡の調査が平成7年（1995）度に追加された。

調査は、未買収地や移転の遅れによる残件の存在、すでに調査が進められていた他遺跡のことごとくが大遺跡であったことによる調査担当者不足などのため、制約を受けた。そのため、絶えず高速道事務所や工事関係者、文化課との協議を続け、薄氷を踏む状況の中、調査を続けることとなった。

調査期間の延長が困難なことが予想されたため、

① 遺構の広がりや作業効率は考えず、その時点で調査可能な地点を対象に、同時多発的な調査を行う。

② 調査担当者と作業員を大量動員し、また使用可能な重機や航空測量の多用などの物量作戦を計る。

以上2点の方針を基本として調査に入った。

調査は、期限に合わせるため、地区によって調査精度を変更せざるを得なかった点などの問題を残したが、ほぼ予定期間内に終了することができた。しかし、大人数による分割調査は、記録類の不統一、遺構の分断、二度手間、図面類の混乱を引き起こすこととなった。この点は、整理・収納段階にまで尾を引くこととなってしまった。

2　発掘調査体制

大量動員により短期間に調査を終了させるため、次頁以下の体制をとった。多少なりとも遺構の処理を急ぐ目的で、他班の調査研究員については、A遺跡の調査が終了しB遺跡の調査に移るわずかな期間についても、本遺跡の調査に編入されることとなった。また、地区によっては調査期間に余裕がなく、一時的に大量動員を計ったため、大人数の担当者、作業員数になっている。さらに、地区間の調査の進行状況によっては、調査中の担当地区・担当遺構の変更、移動、中断などが繰り返されることとなった。そのため、複雑な状況を呈している。

担当地区とその期間などについては表2を、分割された地区名は図3を参照していただきたい。

整理体制のうち、調査研究員については、各々の担当した内容とともに第3節に記載した。

表１－(1)　調査体制

	発掘調査					
	平成２年度	平成３年度	平成４年度	平成５年度	平成６年度	平成７年度
理事長	樋口太郎	宮崎和順	宮崎和順	宮崎和順 (～10/15) 佐藤善處 (10/16～)	佐藤善處	佐藤善處
副理事長	伊藤万寿雄	伊藤万寿雄	伊藤万寿雄	伊藤万寿雄	田村治夫	田村治夫
専務理事	塚原隆明	塚原隆明	－			
事務局長	塚原隆明	塚原隆明	峯村忠司	峯村忠司	峯村忠司	峯村忠司
参　事			樋口昇一	樋口昇一	樋口昇一	
総務部長	塚田次夫	塚田次夫	神林幹生	神林幹生	神林幹生	西尾紀雄
調査部長	小林秀夫	小林秀夫	小林秀夫	小林秀夫	小林秀夫	小林秀夫
技術参与	佐藤今雄	佐藤今雄	佐藤今雄	佐藤今雄		
総務部長補佐	松本忠巳	山嵜今朝寛	山嵜今朝寛	羽生田博行	羽生田博行	外谷　功
総務係長			羽生田博行	磯野道子	磯野道子	磯野道子
事務局員	永田伸男 青島重子 柳沢洋良	青島重子 三ツ井栄一郎 栗林高広	青島重子 栗林高広	堀川正子 栗林高広 下平正彦	堀川正子 篠原教雄 下平正彦	堀川正子 篠原教雄 下平正彦
長野事務所長	峯村忠司	峯村忠司	岡田正彦	岡田正彦	岡田正彦	
上田事務所長						小林（兼）
庶務部長	塚田（兼）	塚田（兼）				
庶務部長補佐	松本（兼）	山嵜（兼）				
庶務課長			山嵜（兼）	羽生田（兼）	羽生田（兼）	山口栄一
庶務係長			羽生田（兼）	磯野（兼）	磯野（兼）	
事務職員	永田（兼） 青島（兼） 柳沢（兼）	青島（兼） 三ツ井（兼） 栗林（兼）	青島（兼） 栗林（兼） －	堀川（兼） 栗林（兼） 下平（兼）	堀川（兼） 篠原（兼） 下平（兼）	石坂　裕

調査課長	宮下健司 (保河原)	臼田武正　(更埴条里) 百瀬長秀　(屋代遺跡群)	百瀬長秀 －	百瀬長秀 －	百瀬長秀 －	百瀬長秀 －
調査研究員	窪河原遺跡 ◎寺内隆夫 水内英一 中平智明 下島浩伸	更埴条里遺跡 ◎市川隆之 ○河西克造 松岡忠一郎 大久保邦彦 松岡昭彦 宮脇正寅 柳沢　亮 ○広瀬昭弘 宮島義和 武居公明 谷　和隆 ○櫻井秀雄 中村　寛 ○川崎　保 長谷川桂子 ○藤原直人 深沢重夫 馬場信義 稲場　隆 ○若林　卓 清水　弘 西嶋　力 澤谷昌英 ○上田典男 伊藤克己 岡沢康夫 小林清人 広田和穂 出河裕典 伴　信夫 野村一寿 西　香子 福嶋正樹	屋代遺跡群 ◎寺内隆夫 ○吉沢信幸 上田　真 本田　真 ○青木一男 中沢道彦 下島浩伸 田中貴美子 大和龍一 ○百瀬忠幸 夏目大助	更埴条里遺跡 ◎寺内隆夫 ○出河裕典 山極　充 清水　弘 宮島義和 ○河西克造 島田正夫 中村　寛 長谷川桂子 若林　卓 西村政和	屋代遺跡群 ◎寺内隆夫 ○水沢教子 伊藤克己 下平博行 ○田中正治郎 宮入英治 月原隆爾 夏目大助 ○本田　真 吉江英夫 ○吉沢信幸 宮下裕治 鳥羽英継 ○西　香子 松岡忠一郎 渕井英知 ○田中貴美子 大和龍一 市川隆之 上田典男 上田　真 臼居直之 河西克造 島田正夫 常長虎徹 中村　寛 贄田　明 西山克己 藤沢製裟一 宮島義和 柳沢　亮	更埴条里遺跡 ◎河西克造 清水　弘 井口慶久 ○町田勝則 上田　真 徳永哲秀 屋代遺跡群 ◎寺内隆夫 ○水沢教子 島田正夫 大和龍一 宮島義和 ○贄田　明 奥原　聡 澤谷昌英 ○馬場信義 月原隆爾 ○伊藤友久 依田　茂 ○出河裕典 市川桂子 ○西　香子 渕井英知 吉沢信幸 窪河原遺跡 ◎寺内隆夫 ○伊藤友久 青木一男 山中　健 依田　茂	屋代遺跡群 ◎寺内隆夫 平出潤一郎 ○宮島義和 島田正夫 水沢教子 西山克己 出河裕典 (文化財保護課) 市村勝巳 岡村秀雄 小平和夫 百瀬新治 (県立歴史館) 三上徹也 窪河原遺跡 ◎寺内隆夫 ○島田正夫 依田　茂 ◎は班長 ○は地区担当	更埴条里遺跡 河西克造

表１－(2)

	整理作業			機構改革により制度変動	整理作業	
	平成７年度	平成８年度	平成９年度		平成10年度	平成11年度
理事長	佐藤善逓	戸田正明	戸田正明	理事長	吉村午良	吉村午良
副理事長	田村治夫	佐久間俗四郎	佐久間俗四郎	所　長	佐久間俗四郎	佐久間俗四郎
事務局長	峯村忠司	青木　久	青木　久	副所長	山崎悦雄	山崎悦雄
総務部長	西尾紀雄	西尾紀雄	山崎悦雄	管理部長	同上	同上
調査部長	小林秀夫	小林秀夫	小林秀夫	管理部長補佐	宮島孝明	宮島孝明
総務部長補佐	外谷　功	外谷　功	外谷　功	管理部職員	小岩一雄 （上田整理機）	長浦忠雄
総務係長	磯野道子	田中勝男	田中勝男			池田浩之
事務局員	堀川正子 篠原教雄 下平正彦	篠原教雄 宮沢　弘	池田浩之 宮沢　弘			青木雄一

調査部長	小林秀夫	小林秀夫
調査課長	広瀬昭弘 （第３課長）	土屋　鐘 （第２課長）
調査研究員	別掲（第３節）	

上田事務所長	小林（兼）	小林（兼）	小林（兼）
庶務課長	山口栄一	山口栄一	山口栄一
事務職員	石坂　裕	石坂　裕 （～9/30）	小岩一雄
		小岩一雄 （10/1～）	
調査課長	臼田武正	臼田武正	臼田武正
調査研究員	別掲（第３節）		

※平成２～６年度は篠ノ井事務所所属
平成７～10年度は上田事務所所属
（平成10年度は上田整理機）
平成11年度は篠ノ井整理棟所属

発掘調査参加作業員

相沢　勇、相沢志げ美、相沢隆生、相沢金人、青木　清、青木くに子、青木けさ子、青木幸子、青木千春、青柳八重子、青山はつ子、赤池英夫、赤塩千代乃、赤塚秋子、赤羽啓子、浅賀美竜子、朝倉今朝雄、朝倉三郎、朝倉広志、朝田照司、朝日キミ子、朝日重光、朝日　勉、朝日由紀子、芦田久子、阿部すゑ子、天野一男、雨宮フジ、荒井武雄、荒井幸雄、井口　琴、伊熊静子、池内今子、池内なつ子、池田すわ、池田ひで、池田喜美子、池田敬昌、池田輝昭、池田展敏、池田真砂子、石井ゆみ子、石浦市郎、石浦光子、石黒栄信、石坂計子、石坂けさみ、石坂泉吾、石坂節司、石坂　忠、石坂芳子、石坂好子、石田幸子、石田多美子、石田美津子、石原邁郎、板倉くみ子、市川乙次郎、市川しづ江、市川　泰、市川由一、市川よし子、伊藤　篤、伊藤さつき、伊藤花子、伊藤正美、伊藤百江、伊藤好明、稲田きく子、稲玉好子、稲葉とみい、稲葉寛樹、井上久子、井原嘉三、伊部今夫、今井さち子、今井せつ子、入井久夫、岩井常樹、岩崎寛治郎、岩崎鷹雄、岩崎利子、岩渕花子、上嶋浜次郎、上原喜八郎、上原千恵、上原利男、上原与子、氏家　正、牛沢輝雄、内堀春江、内山恵美子、内山加須江、内山佳代子、内山清子、内山国子、内山けさみ、内山すま子、内山春男、内山文枝、内山光男、内山怜子、宇都宮美枝、宇都宮義久、浦野和子、大川和子、大川成司、大久保信義、大久保文江、大沢寛司、大柴はつい、大島春江、太田喜和子、太田けさい、太田里子、太田千代美、太田正俊、大鶴辰雄、大鶴比男、大峡　満、大峡吉子、大平秀治、大室千恵子、大矢敏夫、大矢信雄、大矢ひろ子、岡田皖子、岡田栄子、岡田勝義、岡田みち子、岡田好子、岡藤清流、岡部つる子、岡村のり子、岡本頴美江、小河原惣四郎、荻原栄子、荻原幸三、長田圭二、押木静子、小野喜斉、小野田　尚、小野義富、親松静子、親松恒人、親松とめ、加賀野井幸三、笠井さち子、笠井重義、笠井みさ子、風間邦雄、柏原艶子、春日幸子、片桐寿郎、加藤袈裟巳、加藤功一郎、加藤光治、加藤周子、加藤充也、加藤幸弘、金井　覚、金井寿美子、金井英雄、金本すみ江、金子実子、兼山忠晴、上林けさ子、神谷文子、神谷松ゑ、唐沢将男、唐沢睦子、神田千尋、木島信雄、北川原いせ子、北沢昭子、北澤公法、北沢輝子、北澤貞子、北沢茂人、北澤すい子、北沢節子、北沢利子、北沢富幸、北沢久枝、北島かず子、北島久美子、北島保親、北原かず子、北原こぎく、北原茂子、北原治男、北原ひさ江、北原好子、北村麻子、北村梅二、北村喜久江、北村久美子、北村春子、北村陽子、北村芳子、木村重子、桐山みとし、国光一穂、久保　茂、久保千枝子、久保ます江、久保田まき、久保田朝子、窪田栄子、窪田伍一郎、窪田千代子、久保田優世、窪田義己、倉石袈裟雄、倉石千種、倉石みつ江、倉石順子、倉島甲子男、倉島紀代子、倉嶋とし江、倉嶋七三子、倉嶋光子、倉島安男、

倉島由美子、倉島洋子、倉田　正、栗林まさ子、栗林良子、栗原今朝男、黒岩信治、鍬持つる子、鍬持春男、小池市治、小池清典、小出富子、小出紀彦、神頭和志、甲田泰明、合津伸治、神津幸雄、神戸あさえ、神戸小富士、神戸富子、高沼千恵子、越　鶴子、越川みよし、小島岩尾、小島光子、小平朝光、小玉きみお、児玉武秀、児玉兵四郎、小林英子、小林栄四郎、小林方子、小林清寿、小林けん、小林修一、小林タイ、小林たけ子、小林　保、小林貢子、小林奈美江、小林信子、小林春枝、小林晴子、小林久恵、小林久覚、小林文江、小林政江、小林美喜雄、小林　緑、小林みや子、小林由香、小林幸雄、小林義光、小松　北、小松よね、小松川富雄、駒村立子、駒村康子、駒村暉子、小宮山きち、小宮山　茂、小宮山静江、小宮山武男、小宮山武義、小山かな子、小山君子、小山くによ、小山弘六、小山周一、小山富江、小山ミサオ、厳田美代子、近藤春子、近藤久子、近藤よしの、斉郷けさ、斎藤教子、斎藤国興、斎藤けさき、斎藤　静、斎藤はつ子、酒井愛子、酒井　薫、酒井しず子、坂井徳男、坂井利男、坂井夏子、酒井光友、坂井美代子、酒井元雄、坂口きよ子、坂口けい子、坂口潤子、坂口初枝、坂口みさ子、桜井志げ子、佐藤　古、佐藤芙蓉喜、佐藤　進、佐藤武江、佐藤弥生、沢　恒夫、沢崎治男、塩野入仁一、宍戸静江、志津きよい、篠沢きよ、篠原ことし、篠原隆一郎、島崎千代子、島崎信江、島田愛子、島田志ず枝、島谷　久、島田　稔、島田良夫、清水栄子、清水かおる、清水すみ江、清水威子、清水敏雄、清水とみ子、清水みつ子、霜島忠重、庄田政祐、白石英子、白田きくえ、神保行雄、杉浦敏男、杉原　清、杉村寿枝、杉山　勇、鈴木きん子、鈴木たい子、鈴木竹子、鈴木敏子、鈴木鈴子、鈴木秀子、須田幾久世、須田友江、須藤　隆、春原喜よ子、春原幸子、春原静江、春原輝江、春原供史、関一雄、関口よし子、関屋　きく、関屋キヨ子、関谷雅子、関屋むつ子、瀬下利男、背山はつ子、園部昭二、高木信治、高地まつよ、高野　明、高野幸子、高野隆美、高野　操、高橋清子、高橋倉蔵、高橋三平、高橋桂子、高橋正親、高橋守雄、高松貞雄、高松定雄、滝沢一郎、滝沢シゲ子、滝澤せつ、滝沢久子、滝澤広幸、滝澤正雄亀、滝沢森江、武三郎、竹内　薫、竹内いき子、竹内和雄、竹内せつ、竹内富子、竹内寿美子、竹内平治、竹内光男、竹内行子、竹内吉晴、竹口よみ子、竹村　卓、竹本多四郎、田子与一郎、田尻ナヲ子、田尻　勝、田尻やす子、多田一江、多田滝治郎、立川貴美子、立川　進、辰野一枝、辰野政治、龍堰重徳、田中厚子、田中美子、田中カオル、田中克人、田中きよい、田中研一、田中　勤、田中　実、田中義夫、棚田浩子、棚田よしみ、田辺美江子、谷口　武、玉井文子、玉井三夫、田村茂子、千賀久男、塚口延子、塚田　朗、塚田光造、塚田茂栄、塚田宣子、塚田のり子、塚田萬治、塚田康雄、塚田祐子、塚田幸紀、塚田芳子、塚原春枝、土屋昭一、土屋清八、出川信美、出河　滉、手塚郁夫、寺沢恵子、寺沢琢郎、寺島典子、伝田伊代三、戸井つや子、樫　和子、時沢富士子、徳嵩勧子、徳永　一、徳永　博、利根川文雄、鳥羽徳子、富沢三男、友部武良、戸谷ハル子、戸谷龍澄、富山儀昭、永井常蔵、永井百合子、中川辰已、中川麻由美、長崎邦子、長崎富二、中沢　幸、中澤正一、中沢すみ子、中沢智恵子、長沢はない、中沢久子、中沢ヒデ子、中澤雅一、中沢雄司、中沢よし子、中沢義之、中島勉一郎、中島勘蔵、中島　勁、中島まさ子、中島力之輔、中條宇助子、中條武良、中曽根啓一、中曽祢けさ、中曽祢文次、中牧巳喜子、中村秋夫、中村菊美、中村静枝、中村弘、中村美智子、中村光雄、中村泰幸、中村雄二、中村善海、中村　廉、中山照夫、夏目紘子、新村弘子、新村雅仁、西沢ひさ江、西川一郎、西澤　修、西澤清夫、西沢さわ子、西澤拾太郎、西沢昭二郎、西沢久夫、西沢秀雄、西沢歩実水、西沢幸子、西沢善人、西沢義信、西村　章、西村あつ子、西村いさ子、西村甲子郎、西村　幸、西村里子、西村久林、西村　誠、西村美登子、西村雄次、二瓶留冬、根岸達雄、野沢新作、野沢なか江、野沢花枝、野沢八弘、野田泰蔵、野村貞子、羽毛田とし、橋立秀子、端谷ふで子、橋詰定子、橋詰　始、橋本静子、長谷川敦子、長谷川征子、羽田　一、羽生田紀美、羽生田せつ、馬場一生、馬場孝子、林吾一郎、林部友秋、林部美美、林　秩八、原　和好、原　甲、原　みつエ、原田正人、原山祥子、平林佐佳子、平林ふさ子、平林やい子、廣田修年、広田文子、深沢恵子、深沢優子、藤井三保、藤岡佳子、藤島とみ子、藤本正治、藤本百合、古沢恭子、古沢小夜子、古沢泰子、古畑真一、保坂覚子、細尾行雄、細川美秋、堀内広人、堀内ます子、堀内雄一、堀内良子、堀川喜伊子、堀川裕江、堀本香代子、本道光子、前島鶴雄、牧野なか、真島たけの、真島友見、間嶋美好子、増尾治雄、増田益利、待井市子、待井京子、町田いづみ、町田栄司、町田貞義、町田淳一、町田登吾、松井セイ、松岡定雄、松尾みさ子、松尾よし子、

松沢さだめ、松沢　守、松島すみ子、松島房江、松林明子、松林深水、松峯芳子、松本　悟、松本正人、松本幹雄、松本義治、丸田忠雄、丸山　あい、丸山かねみ、丸山邂逅、丸山園枝、丸山はつ子、丸山ふくじ、丸山美知子、丸山茹、丸山芳朗、三宅肥左古、三上義子、三沢喜代人、三沢まさる、水口高志、水沢岩男、水野きく江、溝端ひろ子、三井ユキ、南沢信子、峯村けさみ、峯村敏子、峰村ひとへ、峯村清明、峯村文則、宮入権子、宮入さち、宮入哲哉、宮尾多喜男、宮尾つる代、宮尾久子、宮尾正夫、宮尾昌晴、宮尾美代子、宮川調江、宮坂てるじ、宮坂義憲、宮崎さちき、宮崎志げ子、宮崎忠生、宮崎鶴井、宮崎とも子、宮崎好子、宮崎米雄、宮沢和亜、宮沢勝子、宮沢幸子、宮沢茂子、宮沢政司、宮沢仙太郎、宮沢ツネ子、宮沢とく子、宮沢晴子、宮沢弘臣、宮沢ふじ江、宮沢　勝、宮沢美代子、宮沢義広、宮下勝子、宮下清子、宮下十二郎、宮下良治、宮下るい子、宮嶋孝哲、美谷島昇、宮島初枝、宮島ふくい、宮島まき子、宮原京三郎、宮原末子、宮原ちよ子、宮原豊男、宮原豊子、宮本繁子、宮本貞治、宮本久恵、宮本ひろ子、武藤信子、村石豊治、村沢吉刑、村田　佐、村田章雄、村田あさみ、村田きよ子、村田順子、村田英之、村田富士枝、村田雅子、村松庄三郎、村松とく子、村松良子、持田四郎、望月武志、望月ミツ、百瀬　正、柳沢悦子、柳沢京子、柳沢久美子、柳沢眞次、柳沢春枝、柳沢文男、柳沢文子、柳沢征夫、柳沢松江、柳沢るり子、柳沢玲子、藪一義、山岸　元、山岸　清、山岸貞義、山岸忠吉、山口技子、山口信公、山崎克孝、山崎清江、山崎重子、山崎静枝、山崎高子、山崎富功、山崎長高、山崎善枝、山下大輔、山下まつじ、山城嘉雄、山田洋子、山本和美、行入武子、横沢　昇、吉池為男、吉川正巳、吉沢政広、吉原静子、吉原たけ子、吉原俊子、吉原幸雄、依田すず子、依田芳子、米田ちえ子、米山敏子、六川幸雄、若林和明、若林信一朗、若林孝伊、若林忠夫、若林雅治、若林なを、若林ひろ子、若林米子、涌井恭江、和田正子、渡辺武清、渡辺忠雄、渡辺年治、渡辺春子、和根崎　剛

3　発掘調査の経過

今回の発掘調査にあたって、以下の4点が行程上の大きな課題となっていた。期限内に発掘調査を終了させるため、試行錯誤が繰り返された。

第1点は、調査区が広範囲にわたったため、人員の確保、調査法の確認と連絡、全体の統括に苦慮したことである。人員については、他遺跡の調査期間の間隙をぬって他遺跡の担当者に応援を願い、さらには整理班、文化課、歴史館からも応援を受けた年もあった。作業員についても同様であり、地元だけでなく、バスやタクシーによる大量輸送により人員の確保を行った。

第2点は、期限が切られていたにも関わらず残件が多く、調査日程が組みづらかったことであり、その都度当事者間での調整を必要とした。

第3点は、工事との並行調査となったため、先行して工事に入る地区や工事用道路の確保、さらには周辺農地や住宅への道の確保などによって、狭い範囲での分割調査を余儀なくされたことである。当事者間の調整はもとより、分割したための作業ロスが響くこととなった。

第4点は、地表下4～6mに存在していた縄文時代集落の発見、あるいは、130点にのぼる木簡を含む多量の木製品が層位別に出土した流路・溝などの発見である。当初の予想を大幅に上回る状況にたびたび遭遇し、調査日程の変更を協議しなくてはならなかった。

これら、次々と生じる問題によって、調査日程は変更につぐ変更が続いた。これらの経過は紙数の関係上、簡略化し表2、図1に示す。

表2　更埴条里遺跡、屋代遺跡群、窪河原遺跡調査経過

更埴条里遺跡

仮地区名	仮小地区名	調査開始	中・近世面（古代2）	平安水田面（Ⅳ層上）	古代面（Ⅳ層）	弥生・古墳面（Ⅵ層）	弥生面（Ⅷ層上）	縄文晩期～後期（Ⅷ～Ⅹ層）	縄文後期前～中期後（ⅩⅡ-1～2層）	縄文中期中～（ⅩⅢ層以下）	担当者	備考
A	本線	91.4.9		～	～6.18			6.19～8.27			河西、宮脇、大久保、松岡忠、松岡昭、柳沢	
A	農道下	91.10.21		～	～10.31			11.1～12.6			宮脇、河西	農道、水路確保
A	工事用道路	91.5.17		～	～5.22			－			市川稔	工事用道路確保
B	本線	91.8.1		～	～10.16			10.17～11.11			広瀬、宮島、武居、谷	
B	工事用道路	91.11.12		～	～11.19			－			広瀬、宮島、武居、谷	工事用道路確保
C	本線	91.4.8	～5/1	5.2～	～7.15			－			市川、川崎、櫻井、長谷川、中村	
C	工事用道路	91.12.5		～	～12.11			－			市川	工事用道路確保
D	本線	91.7.17	～8.23	8.5～	～9.9	9.10～10.24		10.29～11.24			藤原、稲場、深沢	
D	工事用道路	91.11.25		～	～12.4	12.5		12.6～12.20			藤原、稲場、深沢	工事用道路確保
D	バスストップ	95.5.10		～5.12				－			河西	追加調査
E	本線	91.7.18	～9.4	8.7～	～10.7	10.8～10.30		10.31～12.6			若林、清水、澤谷、西嶋	
E	工事用道路	91.12.2			～12.9	12.9～12.11		12.12～12.26			若林、清水、澤谷、西嶋	工事用道路確保
E	バスストップ	95.5.10		～5.12				－			河西	追加調査
F	本線	91.7.29	～8.5	7.31～	～10.1	10.2～10.29		10.30～12.13			上田典、伊藤、岡沢、小林	
F	工事用道路	91.12.3			～12.7	12.8～12.10		12.11～12.13			上田典、伊藤、岡沢、小林	工事用道路確保
G	本線	91.7.29	～8.5	8.2～	～8.28	8.29～9.20	9.21～10.19	10.20～12.5			川崎、柳沢、中村、福島	
G	工事用道路	91.12.6			～12.9	12.10～12.11	12.12～12.13	12.16～12.25			川崎、柳沢、中村、福島	工事用道路確保
H	本線	93.4.8		4.26～	～6.23	6.21～6.24		6.25～8.19		～8.19	河西、清水、井口	
H	工事用道路	91.9.24	～10.22	～	～11.21	11.22～12.5		12.6～12.26		～12.26	長谷川、松岡	工事用道路確保
I	本線	93.4.16	～	～	～6.29	6.30～7.8		91.12.8～12.25、92.3.11～3.19			町田、河西、井口、徳永、上田真	
I	工事用道路	91.9.11	～	～	～12.16	12.12～12.17		93.7.9～9.13			松岡、西	工事用道路確保
J	本線	92.3.16	～8.18	5.18～	～7.24	7.28～8.19		8.20～11.5		～11.5	河西、長谷川、中村、島田	
K	本線	92.4.6	～7.21	7.22～	～10.27			11.14～12.25		～12.25	出河、宮島、山極、清水、長谷川	
K	工事用道路	91.9.6	～	～	～12.26	10.28～11.13		－			広田	工事用道路確保
J-K間	生萱街道下	93.6.14	～6.14	93.6.15～	～6.17	6.17					河西、清水	市道部分

屋代遺跡群

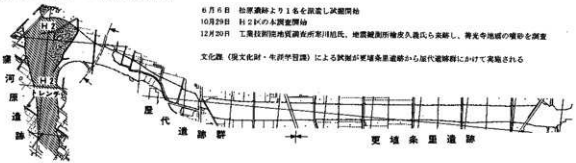
仮地区名	仮小地区名	調査開始	中・近世面（古代2）	平安水田面（Ⅳ層上）	古代面（Ⅳ層）	弥生・古墳面（Ⅵ層）	弥生面（Ⅷ層上）	縄文晩期～後期（Ⅷ～Ⅹ層）	縄文後期前～中期後（ⅩⅡ-1～2層）	縄文中期中～（ⅩⅢ層以下）	担当者	備考
①	a	91.6.7	～8.9（旧五十里川部分）	削平	6.14～8.5	8.6～8.12		－			寺内（他地区調査の間隙を縫って）	旧五十里川最下層調査 11/26～
①	b．c	91.4.3	～7.16	4.26～7.30	7.31～8.29	9.2～10.9	青木、下島、中沢	10.23～11.5			寺内、吉沢、本田、上田真	北平遺跡終了後合流
①	d．e	91.7.15	～10.9	9.2～	～11.14	11.15～12.13 上田真単独		12.16～12.19			同上	
①	d．e 工事用道路	91.8.29	～	～10.18	d．e区に合流						中沢単独	Ⅳ層上部までカクランによりd．e区調査に追いつく
①	f	91.10.3	～10.29	10.29～11.15	11.15～12.26、92.3.9～5.22	5.26～6.16		6.11～6.23			91年度　寺内、下島、中沢、田中貴、大和（10.14～）、上田真（12/17～）、夏目（12.4） 3月期　寺内、上田真、中沢、下島、田中貴、大和（3/9～3/27） 92年度　寺内、田中貴、大和、柳沢（4月のみ）	遺構多数につき松原遺跡終了後動員
①	g	92.7.20	～8.20	8.21～9.8	9.9～11.24	11.25～12.9	12.9～12.21	12.22～	～12.25		田中貴、大和	
②	a	92.5.25	～6.10 寺内単独	6.10～6.18 寺内単独	－	6.18～7.2 寺内単独	7.2～7.17 田中貴単独	－			寺内（古墳面まで）、田中貴（弥生・古墳面）	土砂搬出路、工事用道路の確保のため
②	b	93.7.28	～8.19	8.20～9.3	9.4～10.7	9.10～10.20	10.19～11.5	11.6～	～11.26		西、吉沢、樹井、	
②	c	91.10.4	～11.13	10.29～11.27	11.27～12.4（①f先行へ）	92.7.1～7.31	8.3～9.25	－			91年度　百瀬忠、夏目 92年度　西、松岡、樹井	松原遺跡終了後、91年度に先行調査
②	d.e.g	92.3.3	～3.24	3.24～5.26	5.20～7.15	7.1～7.31	8.3～9.25	－			西、松岡、樹井	
②	f		9.7～9.15	9.16～10.2	10.1～	～10.27	10.28～11.18	11.17～	～12.18		西、松岡、樹井	搬出路の確保

仮地区名	仮小地区名	調査開始	中・近世面（古代2）	平安水田面（IV層上）	古代面（IV層）	弥生・古墳面（VI層）	弥生面（VII層上）	縄文晩期～後期（VIII～X層）	縄文後期前～中期後（XII-1～2層）	縄文中期中～（XIII層以下）	担当者	備考
②	h		92.10.16～10.21	10.22～10.26	10.25～	～11.16	11.17～12.3	12.3～12.25			西、松岡、渕井	用水路の切り回し
②	i	92.5.11	～5.27 寺内単独	5.28～6.18（6.18―時中断）寺内単独	再開 7.20～10.9	10.12～11.16	11.17～12.3	12.3～12.25			西、松岡、渕井、宮島	IV層検出のみ首藤長
②	j	92.11.16	～12.1	12.1～12.3	12.3～	～12.9	12.14～12.21				西、松岡、渕井、	搬出路の確保
③	a北	92.4.27	～5.28	5.29～7.17	7.17～8.10	8.27～9.29	10.8～10.23	11.13～	～12.18		吉沢、宮下、鳥羽	水田域先行調査
③	a南（集落）	92.4.27	～5.28	5.29～7.17	7.17～12.16（途中中断）	12.7～12.15 寺内単独	12.16～12.24	—			吉沢、宮下、鳥羽。10.23以降順次中村、河西、島田、宮島。古墳面検出寺内	遺構多数につき更埴条里遺跡より動員
③	a南（集落外）	92.4.27	～5/28	5.29～7.17	7.7～（途中中断）	9.29～11.27	11.27～12.17 寺内単独	12.24～	～12.25		吉沢、宮下、鳥羽。弥生面寺内	
③	b	93.4.6	～5.6	4.21～5.20	5.17～7.1	6.14～7.8	7.8～7.27	7.28～	～8.26		西、吉沢、渕井	
③	b農道下、プレハブ下	トレンチ調査	92.11								寺内	プレハブ下撹乱により本調査放棄
③	c	93.4.8		～4.13	4.13～	～4.30	4.30				吉沢	農道部分
④	a	93.4.7	～4.20（馬場、月原）	4.21～4.28（馬場、月原）	4.28～5.26	5.26～28（中断） 8.18～8.25（寺内）	10.4～10.21（伊藤、依田）	10.22～10.27			馬場、月原（～5.26）。10月より伊藤、依田	新幹線調査との調整で担当者交代
④	b	92.6.9	～9.21（6.7月寺内単独）	9.18～9.21	9.22～	～12.7	12.7～12.24	?	4.13 確認トレンチ		中世検出まで寺内、8月より本田、吉江。12月上田真合流。縄文トレンチ寺内	小滝遺跡調査期間との調整
④	c	92.9.2	～9.24（中世面寺内単独）	～9.24（ほとんど削平）	9.25～	～12.14	12.14～12.22	12.24～93.1.8 93.4.7～4.8	4.9～4.28	4.28	田中正、夏目、宮入	松原古墳調査期間との調整
④	d	93.5.6				5.6～	～9.17				馬場、月原。縄文は出河	新幹線関連、大穴遺跡との調整で担当者交代
④	e	93.4.21	～5.11	5.12～	～	～	～5.25	—			出河	生活道路確保
④	f	93.10.14	～	～6.18	5.18～	10.20～	～12.2	12.8～12.13	12.13～12.16	12.16～12.17	宮島	生活道路確保
④	g	93.10.13	～	～		～10.20	10.20～11.5	11.8～11.10	11.12～12.13	12.15～12.17	出河	生活道路確保
⑤	a	93.4.7	～	～	～	～8/9	8.10～8.18	8.19～9.29（南は直にXII層へ）	8.19～11.25	11.25～12.17 94.3.14～4.28	贄田、藤谷、奥原。3月は寺内、水藤、宮島、渕井、島田	3月は土砂搬入路
⑤	b	92.4.6	～5.7	5.8～	検出面連続	～93.1.5	1.5～1.8	4.7～4.13	4.14～8.26	8.11～	水藤、下平、伊藤。市川、臼居、上田典、原（11.9～12.18）。常長、贄田、藤沢（11.9～12.22）。河西、宮島（12.21～）	遺構多数につき榎田遺跡、整理班より動員
⑤	b電柱下	93.4.19	～	～	～	～4.26	4.26	4.26～	上記合流		寺内	残件
⑥	a	93.12.20 トレンチ	94.3.28～4.19	4.20～5.17	5.17～	～	～12.28	8.4～9.7	9.8～10.7	10.7～12.28	宮島、島田、寺内。西山（9.19～）	途中島田（10.3～11.18）篠河原遺跡の調査へ、整理班より動員
⑥	b		5.17～5.31	5.31～6.8	6.8～	～	～12.28	9.9～9.22	9.22～11.22	11.14～12.28	寺内、平出 文化課・歴史館（9.21～交代で1・2名）	調査期限のため文化課、歴史館からも動員
⑥	c		94.8.9～	～8.19	8.19～	～	～12.28				宮島、島田。出河（9.19～）	土砂搬出路確保、整理班より動員
	国代一篠河原境道路下	95.1.8	～1.10								寺内	立合調査（断面観察のみ）

篠河原遺跡

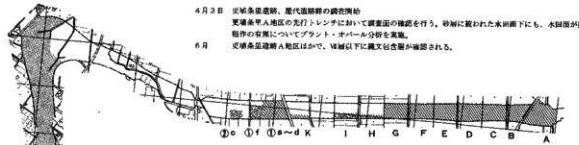
仮地区名	仮小地区名	調査開始	中・近世面（古代2）	平安水田面（IV層上）	古代面（IV層）	弥生・古墳面（VI層）	弥生面（VII層上）	縄文晩期～後期（VIII～X層）	縄文後期前～中期後（XII-1～2層）	縄文中期中～（XIII層以下）	担当者	備考
H2	1～12トレンチ（低地域）	90.6.6	～6.15	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	寺内	松原遺跡調査期間中派遣
H2	13～23トレンチ（微高地域）	90.10.22	～10.31	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	寺内	松原遺跡調査期間中派遣
H2	集落域	90.11.1	～12.26	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	寺内、木内、中平、下島	
H5		93.8.2	～10.1	トレンチ設定、全て砂利層のため時期の特定できず							伊藤（友）、依田、青木（～9/3）、山中（～9/3）	微高地下砂礫層の調査
H6		94.10.3	～11.18	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	島田、依田、（吉澤）	

平成２(1990)年度　　窪河原遺跡調査開始



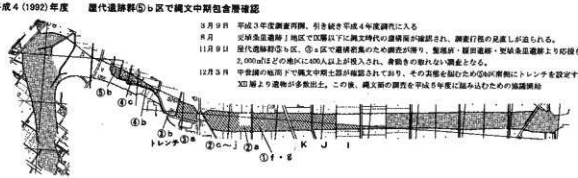
6月6日　粕原遺跡より１名を派遣し試掘開始
10月29日　科２Kの本調査開始
12月20日　工業技術院地質調査所粟田祐民、地震観測所権皮久義氏ら来跡し、発光年地磁の情報を調査
文化庁（現文化財・生活学習課）による試掘が更埴条里遺跡から屋代遺跡群において実施される

平成３(1991)年度　　更埴条里遺跡・屋代遺跡群調査開始



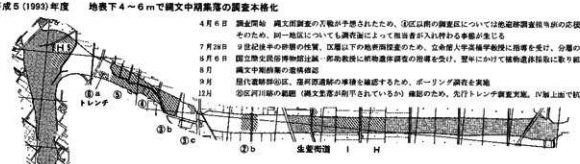
4月３日　更埴条里遺跡、屋代遺跡群の調査開始
更埴条里A地区の先行トレンチにおいて調査面の確認を行う。砂層に覆われた水田面下にも、水田面が認められる。
稲作の有無についてプラント・オパール分析を実施。
6月　更埴条里遺跡A地区はかで、Ⅵ層以下に縄文包含層が確認される。

平成４(1992)年度　　屋代遺跡群③ｂ区で縄文中期包含層確認



3月9日　平成３年度調査再開、引き続き平成４年度調査に入る
8月　更埴条里遺跡１地区で弥生以下に縄文時代の遺構面が確認され、調査行程の見直しが迫られる。
11月9日　屋代遺跡群③ｂ区、③ａ区で遺構密集のための調査が難り、整理班・屋内遺跡・更埴条里遺跡より応援を受ける。
2,000㎡ほどの他区に600人以上が投入され、発掘をの限れない調査となる。
12月3日　中世層の地面下で縄文中期土器が確認されており、その広がりを知るため③ｂ区南側にトレンチを設定する。
Ⅻ層より遺物が多数出土。この後、縄文期の調査を平成５年度に組み込むための協議開始

平成５(1993)年度　　地震下４～６ｍで縄文中期集落の調査本格化



4月6日　調査開始　縄文面調査の困難が予想されたため、①区以南の調査区については地域開発調査機与会の応援を得る
そのため、同一地区についても調査面によって担当者が入れ替わる事態が生じる
7月28日　９世紀後半の跡僧の検実、区画以下の地形測量をのため、立命館大学吉崎昌一助教授に指導を受け、分層の基準とする
8月6日　国立歴史民俗博物館辻誠一郎助教授に前地層探調査の指導を受け、堅年における植物遺体指取に取り組む
8月　縄文中期跡集の遺構確認
9月　屋代遺跡群⑥区、屋代原遺跡の準備を確認するため、ボーリング調査を実施
12月　⑥区河川跡の範囲（縄文集落が削平されているか）確認のため、先行トレンチ調査実施。Ⅳ層上面で杭列を検出

平成６(1994)年度　　屋代遺跡群⑥区で木簡・木製品、祭祀遺構多数検出　　平成７(1995)年度　　パストップ地点の調査

3月14日　⑥ａ区調査再開、引き続き⑤ａ区調査開始。⑤ｂ区は残作のため５月開始にずれ込む
6月8日　最初の木簡「物部」出土。この後、多量の木製品が出土し始め、当初計画の変更を余儀なくされる。
7月4日　国立歴史民俗博物館平川南先生に木簡調査の指導を受け、10月には歴文展開のための木簡検討委員会を設置する
8月22日　調査期間を確保するため、古代の遺構検出化等、一部を切り取し縄文包含層への掘削を開始
9月19日　調査期間の延長が差しくなり、発掘機上り応援を受ける。さらに11月から江文化課、歴史館職員が交代で調査に加わる
10月3日　屋河原遺跡H.I.K区の調査開始。残作の処理が遅れ全面調査断念。
12月　中期前葉集落の地形復元、祭祀比較関連の調査を断念し、重機による掘り下げを行う。
12月28日　XIX層までの包含層確認トレンチの断面図を取り終え調査を終了
1月6日　屋代遺跡群一帯河原遺跡間の表選部分の工事に立会施設開を作成
平成７年５月　更埴条里遺跡D・E地区のパストップ地点の追加調査実施

図１　調査経過

4　調査方法

調査の手引き　調査の手順、地区設定方法、遺跡・遺構記号などは、長野県埋蔵文化財センターの内部資料である『遺跡調査の方針と手順』に則っている。ただし、より緊急性が増していたため、写真撮影や図面作成の簡略化、重機や航空測量の多用、遺構の状況に応じた調査レベルの格差付けなどを行っている。

遺跡記号　遺跡名は長野県教育委員会作成の遺跡台帳に記載されている名称とした。ただし、大境遺跡は屋代遺跡群④区として図面作成、注記を行った。さらに記録の便宜を計るため、大文字アルファベット3文字の遺跡記号を設定している。1文字目は、県内を9地区に分割した記号で、長野市・更埴市域は「B」である。2～3文字目は遺跡名の頭文字から取っている。ただし、記号が複数遺跡で重複する場合は頭文字以外で表している。本書で使用する遺跡名と遺跡記号は以下の通りである。

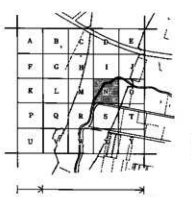
更埴条里遺跡	こうしょくじょうりいせき (Koushokujouriiseki)	BKS
屋代遺跡群	やしろいせきぐん (Yasiroisekigunn)	BYS
窪河原遺跡	くぼがわらいせき (Kubogawaraiseki)	BKU

遺構記号　遺構記号は検出時の規模や形状から決定している。そのため、遺構の種類や性格に適合しない場合がある。しかし、図面類や注記は現地で付した記号を使用しており、混乱をさけるため、できるだけ現地で付した記号をそのまま使用している。ただし、現地でSQなどとしたものの、明らかに竪穴建物跡と認定できた場合などは、報告書段階で遺構記号をSBに変更している。この場合は一覧表に必ず旧遺構名を併記した。主な遺構記号は表3の通りである。

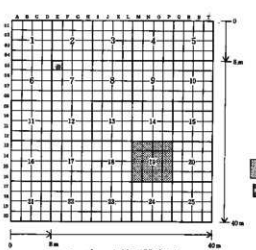
表3　遺構記号一覧

SA	木杭や計10～50cmほどのピットが列状（溝内を含む）に検出され、建物にならないと判断された遺構（杭列、柵列など）
SB	2～3m以上の平面プランを持ち、掘り込みを有する。底面は床となりピットや火処を伴う場合がある。長野県以外の記号使用方法と異なる代表格であるため注意していただきたい（竪穴建物跡一般、竪穴状遺構）
SC	連続する硬化面や盛土、溝に挟まれた帯状部分、それらの痕跡（畦畔・道路など）
SD	帯状の掘り込み（人工溝、自然流路）
SF	単独で存在し、火を焚いた跡が面的に広がるもの（焼土跡）
SH	石が面的に集中するもの（集石、配石）
SK	遺構の一部ではなく単独で存在するSBより小型の落ち込み（墓、井戸、その他土坑一般）
SL	SCで囲まれた面（水田面、畠面）
SM	盛土、盛り礫などを有する墓
SQ	遺構は明確でないが、遺物が集中的に出土した範囲
ST	複列以上で、ピット（柱穴）や石（礎石）が規則的に並ぶもの（掘立柱建物、礎石建物跡）
SX	上記以外の不明遺構

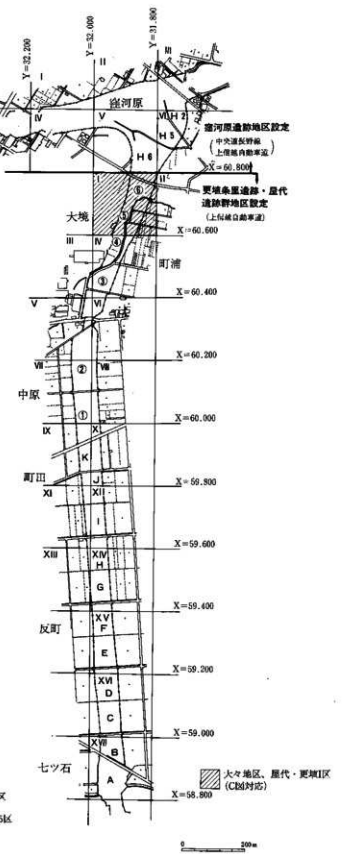
A　発掘調査対象範囲



C　大地区設定図



D　中・小地区設定図



B　小字名と大々地区設定図

図2　地区設定図

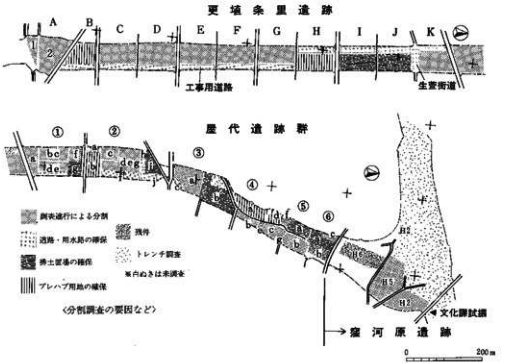


図3　仮地区名と分割調査

調査区の設定　調査区は図2に示した。国土地理院の平面直角座標系の第Ⅶ系を基点に200ｍ×200ｍの区画を設定し、これを大々地区と呼称し北西から南東に Ⅰ・Ⅱ……とローマ数字で示した。大々地区を40ｍ×40ｍに分割した区画を大地区とし、北西から南東へA～Yとした。大地区を8ｍ×8ｍに分割した区画を中地区とし、北西から南東へ1～25の番号を付した。これを個別遺構、割付図の測量基準とした。

大地区を2ｍ×2ｍの400区画に分割したものを小地区とした。小地区は、大地区の北西隅を基点としてX軸上に西から東へA～T、Y軸上に北から南へ01～20の数字を付し40区分してA01……で1区画とした。小地区は遺物取り上げなどの基準となっている。さらに、縄文面については、遺物分布図作成の代わりとして1ｍ×1ｍの小々区画を設定し、遺物の取り上げを行った。

工程上の仮地区　実際の調査区は生活道路や水路を基準に更埴条里遺跡ではA～K地区、屋代遺跡群では①～⑥区、窯河原遺跡はH2、H5、H6区、の仮地区に区分して調査を行っている。さらに、残件や工事工程との兼ね合いからさらに調査区を分割している。その場合、屋代遺跡群ではアルファベットの小文字を利用して①a区のように呼称した。遺構平面図や遺物分布図については、全てX－Y軸を基準として図化した。出土遺物についても基本的には同様であるが、測量杭設定前の表土剥ぎ段階や掘削中に出土した資料については、仮地区名で取り上げを行っている。また、調査区全景写真や写真ファイルなども仮地区毎に整理されている。これらについては、図3の分割された仮調査区名を参照していただきたい。

調査手順　基本的な調査の進め方は、次の通りである（図4）。

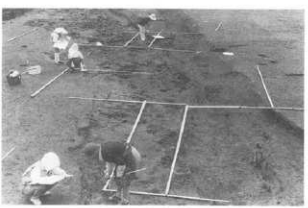
止水用矢板の設置 → 排水溝を兼ねた調査区外周トレンチの掘削 → トレンチ断面での遺構検出面・遺物包含層の確認 → 重機による調査面までの土剥ぎ → 測量基準点の設定・遺構検出作業 → 遺構掘り下げ → 遺構の図化・写真 → 航空写真・測量 → 次の調査面までの重機による土剥ぎ → 同様の手順の繰り返し → 矢板の止水限度前後までのだめ押しトレンチよる層と遺構・遺物包含有無の確認 → 埋め戻し

止水方法　止水は調査区を囲う鋼矢板の設置にはじまる（図5）。調査地点の地形や、予想される掘削深度の違いに応じて4～8ｍの矢板を設置した。さらに、矢板で囲繞した調査区側に排水用の溝を掘削した。

外周トレンチの掘削（更埴条里遺跡J地区）

遺構検出面までの剥ぎと遺構検出（J地区）

遺構の掘り下げ（J地区）



遺構の図化（I地区）

図4　調査の手順

鉄道隣接区では振動を抑えるための機械を導入

模式図

図5　鋼矢板の設置

こうした対策を講じても、田植え時には調査区中央付近で浸透圧による湧水があり、竪穴建物床面が絶えず水没する状態が見られた。そのため、排水溝からの常時排水に加え、遺構内にトレンチを掘削しポンプによる排水を行った。縄文集落の調査では止水矢板の効果が限界に達し、水没状態の中での柱穴検出を余儀なくされた。最終年度には、その対策として井戸掘削による地下水の強制排水を実施した（図６）。

安全確保　調査面が深部に達したため、法面の安全勾配の確保を行った（図５）。また、雨水などによる土砂崩落をさけるため、常時ビニールシートで法面を被った。さらに、調査区周囲には防護フェンスを設置し、調査面へ降りるまでの箇所には階段や手すり設置した（図６）。ヘルメット着用を原則とした。

調査の迅速化　広大な調査区と遺跡の内容を調査期間に照らしあわせ、いくつかの工夫を行いスピードアップを行った。土砂の掘削については、重機を多量に投入し、遺構面ギリギリまで機械による掘削を行った。測量や写真撮影については、航空測量・写真を多用し、詳細な遺構・遺物分布図は業者に委託する方法を取った。また、遺構・包含層の掘り下げを優先させるため、所見や注記の書き込みの省略、発掘途上におけるメモは８㎜ビデオに録画し後日再検討する方式をとった。

５　各地区別の調査方法と問題点

(1)　第１段階の調査

現地の発掘調査に入る前に、情報を収集し調査の目的と作業の円滑を計るため、第１段階の調査を行っている。情報は、① 更埴市教育委員会が周辺で行った調査の報告書、② 更埴市教育委員会に地元住民から寄せられた遺物出土の情報、③ 文化課による試掘調査の結果、④ 当センターがこれまでに行ってきた

強制排水用井戸の掘削

排水用トレンチ、法面シート、階段と手すり

冬の調査前、準備体操

墓域でのお祓い

図６　止水、安全確保ほか

低地遺跡での成果や経験、などを元にした。

これらによって、調査の主眼を以下の3点に設定した。

① 水田跡の調査

② 自然堤防上の集落調査

③ 縄文包含層の有無確認

水田跡については、研究史的にも著名な条里遺構の復元を第一とし、これに加え当地区では検出例のなかった弥生・古墳時代の水田跡の探査、条里水田以降の耕地の変遷などが課題にあがった。

集落については、すでに遺構が密集することが予想された自然堤防上の調査の充実に加え、水田域との境などの状況を明確にすることを課題とした。

縄文時代の遺構・遺物については、まず、その有無を確認することを目標とした。

(2) 水田跡の調査

善光寺平（長野盆地）における水田跡の調査は石川条里遺跡、川田条里遺跡など、当センターでの調査実績があがってきていた。今回の調査にあたっても、原則的には上記遺跡の調査手順を参考に行った。

試掘トレンチによる確認　遺構面の確認は、まず試掘トレンチを設定し、断面観察と同一断面におけるプラント・オパール分析を実施し、本格調査を行う面の確定を行った。更埴条里遺跡では本格調査に先立ち、全地区において断面観察とプラント・オパール分析を実施した。A地区では従来から存在が明確であった条里水田面の下に泥炭層が存在し、さらにその下層に2面の水田跡の存在が判明した。

水田面の調査　原則として、試掘トレンチの断面観察によって畦畔や田面が見つかった層を全面調査の対象とした。また、プラント・オパールが多量に検出された層や畦畔検出の可能性が認められる層（主にIV層の中位～下面）については、一部地区で平面検出を実施した。これによって、IV層下面（VI層上面）の広範囲で古墳時代の水田跡が発見された。

条里水田の検出　条里水田はほとんどの地点で厚い洪水砂層（III層）に被われていたため、この砂を丁寧に剝いで行くことを基本とした。ただし、調査期間の制約から砂層の上部は重機によって除去した。そのため、地盤が軟弱であった地区では水田面に窪みができた箇所がある。これはわずかな影響であったが、より重大な問題は残土置き場で生じた。前年度分の残土を仮置きした地区では、条里水田面で50～80cm近くが沈む状況が見られ、田面の傾斜や水配りの方向が不明になってしまった。

田面・畦畔の調査　田面の精査は、両刃鎌、移植ゴテ、スプーンなどを使用して行った。その結果、広範囲に犂跡や土起こしの凹凸を確認することができた。ただし、広範囲を短期間で仕上げなければならなかったため、1点1点の足跡を徴細な形状まで復元することは行わず、歩行列の確認にとどまった。

また、すべての畦畔については、手作業による解体を行い、牛馬骨骨や歯、その他の遺物を採取し、断面観察を実施した。

条里水田以前の水田検出　条里型地割に則った水田の上限がいつまで遡るかを解明するため、断面観察では畦畔が明確でなかったIV層を、ジョレンでスライスするように掘り下げた。しかし、上層水田の溶脱、集積などの影響を強く受けていたため、明確な水田区画を検出することはできなかった。

V層水田の検出　更埴条里遺跡A～C地区では、条里水田面下に泥炭層が見つかり、試掘トレンチの結果、より下層に水田の存在が予測されていた。ここでは、畦畔の高まりは明確でなかったが、平面精査において土質の変化が認められた帯状部分を畦畔痕跡と認定する方法を取った。

VI層上面の砂層　屋代遺跡群①f区は古代の集落域であったため、IV層を徐々に掘り下げて遺構の検出を行った。その過程で部分的な砂層がVI層上面の水田畦畔を被っていることが判明した。その後、屋代遺跡

砂層（Ⅲ-2層）を剝ぎ水田面を検出（②区）

乾燥した調査面への散水（②区）

期限間際の追い込み調査（③a区）

発泡ウレタンによる脆弱遺物の取り上げ

古代面、縄文面の並行、分割調査（⑥区）

図7　調査状況　1

群においてはVI層上面で田面・畦畔検出を主眼とした調査に時間を費やした。この結果、一部では砂層に被われた水田が見つかり、その他の地区でも、VI層中に残った畦畔の痕跡を検出することに成功した。一方、更埴条里遺跡でもVI層上面を丹念に精査した地区で畦畔の痕跡を検出した。

撮影・測量　水田面の平面測量と撮影は航空測量に外部委託した。また、分割調査により分断された垂直写真の接合は、コンピューターによる画像処理を外部委託した。

(3) 弥生時代後期～中世集落の調査

調査方法　集落の調査は「遺跡調査の方針と手順」、および当センターのこれまでの実績を基に進めた。

屋代遺跡群①、③区などで、洪水砂層を被った竪穴建物が認められたため、検出の際には、遺構外の施設についても注意を払った。遺物の取り上げは、床面近くやカマド・貯蔵穴などでは大型土器破片や礫を図化し、埋土中については、完形あるいはそれに近い土器の図化を原則とした。獣骨や金属製品などは出土位置を点で表現した。また、鍛冶関連の遺構については、その可能性がわかった段階で土壌サンプルを採取した。カマド内や建物内の炭化物集中範囲については、一部で動・植物遺体採取を目的とした土壌サンプルを採取した。また、記録については、調査担当者の経験年数に大きな格差があったため、基本的な事項については、所見カードに○×方式を採用し、それ以外の所見を明記するようにした。

応援態勢による混乱　発掘調査を終了させるため、平成4年冬には大量動員がかけられた。2,000㎡余りの調査区に300名余りの調査員と作業員が足の踏み場もなくひしめく状況となり、作業効率が大幅に落ち込む結果となった。調査自体は終了にこぎつけることができたが、遺跡破壊を前提とした必要最低限の記録保存については問題を残す結果となった。狭い範囲をさらに分割した調査においては、同一遺構を多くの担当者が分割調査することにつながり、遺構図や所見が入り乱れ、また、必要な図が欠落するなど混乱を引き起こした。その影響は報告書刊行以降まで続くと考えられる。

(4) 縄文時代集落の調査

縄文時代包含層の確認　第1段階の調査②（P15）によって、窪河原遺跡で井戸掘削中に縄文土器が出土したとの情報を得た。写真での確認であったため摩耗の有無などははっきりしなかったが、旧千曲川流路に近い地点からの出土であったため、流れこみの可能性が強いと判断した。発掘調査の開始後、更埴条里遺跡側でVII層以下で遺構・遺物が出土しはじめ、縄文時代の包含層が存在することが明確となった。この時点では、広い調査区内に遺物や遺構がわずかに認められる程度であったため、以後の調査では、先行トレンチを設定し、遺物・遺構が確認された段階で面的な調査に移ることとした。

平成4年12月3日　SD5001土層断面図作成用トレンチ内から縄文土器が多量に出土した。これを受けて設定した縄文中期包含層確認用のトレンチ（④区c区北壁際、⑤b区南壁際）からもおびただしい土器片、打製石斧が出土し、集落跡の存在が示唆されるようになった。そのため、急遽文化課、道路公団との協議を行い、平成5年度に本格調査を実施することとなった。

集落の調査　縄文中期後葉の集落は地表下4mにあることから、竪穴建物跡や遺物の残存状況がひじょうに良好であることが予想された。ただし、調査期間との兼ね合いから以下の調査方法を取った。

まず、大量に出土した遺構検出面の遺物は、大まかな分布状況を把握するためと下部遺構との関係をとらえるため、平面では1mメッシュ毎に取り上げた。また垂直分布については、XII-2層を最低でも上・下層に分けて取り上げを行った。

遺構は他の調査面に比べ分層に注意を払い、代表的な遺構に限ってはさらに分層を詳細に行い、層毎の遺物採取と動・植物遺体採取のための土壌サンプリングを実施した。遺物については細片に至るまで出土

縄文包含層確認のためのトレンチ調査（㉜b区）

XV層（縄文中期前葉）までの掘削（⑤a区）

扶少地区での縄文調査（④d区）

大量に出土した遺物の図化（⑤b区）

木製品出土地点の調査（⑥b区）

層位、地形区分などの指導（高橋先生）

植物遺体採取方法などの指導（辻先生）

図8　調査状況　2

位置を図化した。

集落の範囲確認　集落内調査の精度を高める一方、集落範囲の確定と、同一層の広がりを確認する目的で、南側は、屋代遺跡群④区～更埴条里遺跡H地区にかけてXII層に達するトレンチを設定した。一方、北側の範囲については、千曲川の旧河道の間隙をぬって遺構が残存している可能性を確かめるため、ボーリングによって堆積物の調査を行った。

中期前葉集落の調査　平成5年度、⑤b区の調査期限が迫った段階で、中期後葉より下層の中期前葉遺物包含層（XIV）が集落跡であることが判明した。調査可能な深さの最下層にあった前葉集落は、各年度とも、調査期間がせまった段階で取り組まざるを得ず、調査精度を下げざるを得ない結果となった。

遺物取り上げのための遺構内分層は最低限にひかえ、遺物位置の図化も少なくした。また、平成6年度調査においては周堤の存在が明確であったが、作業員による掘り下げ速度や土量などと調査日数との計算から、周堤の全面調査と地形復元を断念した。調査の主眼は、沖積地深くに埋没した集落の重層性を確認することに移した。XIV-1層検出集落については個々の遺構の細部に時間を費やすよりも、調査区全体の遺構分布状況を把握するにとどめ、下層における遺構の存在と遺跡のあり方を確認することとした。

(5)　屋代遺跡群⑥区旧河道の調査

調査に至る経緯　更埴市教育委員会による周辺部の調査では、旧河道の深部に達する所見は得られていなかった。そのため、中世以降の水田跡の調査と河川跡の確認を目的とし、調査計画を作成した。

平成5年度の⑥a区試掘トレンチにおいてIV層上部で杭列が確認された時点でも、木簡の包含層に到達しなかったため、多少の調査計画変更で足りると考えていた。

木簡、木製品の出土と調査方法　平成6年度、IV層上面までの調査は比較的順調に進んだ。しかし、下層から多量の木製品や木簡が出土しはじめた段階で、調査方法をより綿密にする必要が生じ、調査計画の変更も余儀なくされた。

調査区では人工溝と流路が交錯しており、まず、各々の新旧関係と一条一条の流れを押さえ、遺物の混乱を防ぐため先行トレンチを複数設定した。これにより、確定した溝・流路を一条ずつ掘り下げた。

遺物は多岐にわたった。特に、祭祀に関する遺物がブロック状に出土したため、水流による遺物の移動や混在が少ないと判断し、木製祭祀具、獣骨、土器、礫などの出土位置を極力図化する方法を取った。また、木簡には年代の決め手となる文字が書かれている可能性があったため、板材の多くは出土位置を一点ずつ記録し、他の遺物との対応関係が把握できるようにした。

また、各層には木屑や植物遺体が密集して出土する部分があり、これらについてブロックサンプリングを行った。特に木屑については木簡の削屑の可能性が考えられたため、試みに一部を現地で水洗し文字の有無を確認した。残念ながら、墨痕は皆無であり、また、削りの方法は建築部材に関するものである可能性が高まったため、削屑全てを回収することはやめブロックサンプリングとした。

木簡は、文字の一部が見えた段階で取り上げ、保存処理室内でのクリーニング作業にまわした。

湧水溝の削平　上記の調査方法を実施したため、これらの溝と重複関係にあった縄文時代包含層の調査が実施できない状況が続いた。最終の調査期限からさかのぼってぎりぎりと判断された8月22日、古代の湧水溝を削平する形で縄文面の調査を並行して実施することとした（図7下）。これは、古代の遺構のうち、縄文の包含層に掛かる湧水点付近の調査を先行させ、図化が終わった段階で縄文包含層まで掘削することとした。一方、縄文の包含層が残存していない溝の下流では引き続き古代の溝を掘り続けるという方策をとった。このため、湧水に関わる祭祀遺構については、湧水点と諸施設、遺物集中区を分断して調査する結果となった。また、古代の湧水周辺の地形復元も机上で行わなければならない状況となった。

応援体制　また、大幅な調査日程の遅れを解消するため、当センター内部の整理課からの応援以外に、文化財保護課（現文化財・生涯学習課）や県立歴史館からも調査員を派遣していただいた。

6　普及・公開活動

発掘調査期間中、現地における見学会と速報展を通じて普及・公開を行った。

現地説明会　平成２年度の窪河原遺跡を除き毎年度実施した。

開催日	公開地区	見学者数	状　況
平成３年９月１日	更埴条里Ｋ地区、屋代遺跡群①区	310名	防災の日の行事に重なり出足不調
平成４年７月19日	更埴条里Ｋ地区、屋代遺跡群③ａ区	155名	埋文関係者少なく大半が地元の一般者
平成５年５月28日	屋代遺跡群⑤区縄文集落	304名	県外からも多数の縄文研究者が来訪
平成６年10月30日	屋代遺跡群⑥区木簡出土溝と縄文集落	367名	県外から多数の来訪者あり

小学校などの見学会　近隣小学校の森将軍塚古墳への遠足が毎年春にあり、その途上であったことも手伝って見学の申し込みが多数あった。また、平成３年度から６年度にかけて東部町教育委員会や社会科教職員、その他の見学があった。

速報展　毎年度、当センターの速報展に出土遺物などを出品した。

開催日	場　所	出土品
平成３年２月17日～24日	長野市立博物館	窪河原遺跡珠洲大甕ほか
平成４年２月１日～16日	長野県民文化会館	
平成５年２月６日～14日	長野市立博物館	更埴、屋代古代土器など
平成６年２月５日～13日	長野市立博物館	更埴条里遺跡出土銅印、屋代遺跡群縄文土器など
平成６年11月３日～12月11日	長野県立歴史館	企画展「赤い土器のクニ」にあわせ、本間パネルを展示

現地説明会の実施

近隣小学校の見学会

図９　現地説明会などの実施

第3節　資料整理の経過

1　報告書刊行に向けて

資料整理は、遺物の水洗・注記、図面・写真などの整理、台帳の作成といった基礎的な整理作業と報告書刊行に必要な作業を行った。期間は報告書刊行までであり、その後は県立歴史館へ移管される。

上信越自動車道関係の報告書作成は、平成11年度までと決定され、平成7年度より本格的な整理に入った。報告書は時代（層位）別の分冊スタイルとした。

2　整理体制

事務局、管理部については、表1（P5）に示したとおりである。直接、報告書作成に携わる調査研究員、調査員、整理作業員は以下の通りである。寺内を班長とし、遺跡別、時期別、遺物別などと分冊の編集を各々が担当する方式をとった。詳細な分担については、各分冊の執筆担当、凡例を参照していただきたい。

調査研究員、調査員

平成7年度　（上田調査事務所）
寺内隆夫、河西克造、平出潤一郎、鳥羽英継、宮島義和、相沢秀樹、水沢教子

平成8年度　（上田調査事務所）
寺内隆夫、河西克造、平出潤一郎、鳥羽英継、宮島義和、相沢秀樹、水沢教子

平成9年度　（上田調査事務所）
寺内隆夫、平出潤一郎、鳥羽英継、宮島義和、水沢教子

平成10年度　（上田整理棟）
寺内隆夫、平出潤一郎、鳥羽英継、宮島義和、水沢教子

平成11年度　（篠ノ井整理棟）
寺内隆夫、鳥羽英継、宮島義和、水沢教子

整理作業員一覧

赤羽利治、浅井とし子、朝倉妙子、阿部礼子、阿部高子、飯田和子、池田恵子、石田多美子、今井せつ子、今井博子、今井美枝子、岩下邦子、上原陽子、臼田知子、内山市子、内山美砂、梅沢淳子、梅田康子、梅原　祝、大内秀子、大沢映子、大沢　豊、太田豊子、大谷恵子、大西啓子、大原はるえ、大山久子、岡田皖子、岡野みさ子、奥　幸子、小根山貞子、笠井純子、笠井すみ子、風間春芳、春日永子、片桐はまよ、加藤爾子、門脇秀典、金子寅子、金子幸雄、唐沢裕子、北島康子、北村久美子、北村幸枝、工藤めぐ美、久保ます江、久保田和江、窪田　順、桑原はるみ、小坂井定子、古平道子、児玉紀子、小林英子、小林早苗、小林淑子、小林芙美子、小林保子、小宮山秀子、斎藤恵子、西東千佳子、坂口延子、坂巻ケン子、坂本けい子、佐藤昭子、佐藤弘子、椎塚フサ江、宍戸静江、清水明日香、下中明子、白取多美子、鈴木洋子、関口　静、関口よね子、高橋禎子、武井美栄子、竹内幸子、竹内省子、田島吉子、田中みつ子、榎原さと子、土屋京子、寺沢光子、伝田名正、鳥居由香、鳥居和子、中村節子、中村優子、南波　操、西村ウメノ、西沢京子、西松まり子、羽地麻衣子、原内美和子、樋口かほる、樋口敏恵、平林明美、深町良子、藤井三保、保坂豊子、本田淑江、前野よしえ、牧田恭子、松本和生、松林明子、丸山公子、丸山すみ子、南沢　勇、茂輪明子、

宮川千栄子、宮崎鶴井、宮原広子、三好とも子、母袋欽哉、母袋満喜子、森　恵子、森次由美子、藪　一義、山岸さとみ、山崎恭一、山下大輔、山田清子、山野井智子、山内和夫、山村容子、山本和美、吉池敦子、米沢須美子

3　整理の経過

整理期間　平成７年度から11年度にかけて、報告書刊行のための整理作業を行った。この間に第１章１節に示した順に報告書を刊行した。

整理の分担　整理作業は、以下の分担を基本とした。

寺内隆夫（～平成11年度）　全体統括、渉外、『弥生・古墳編』『古代１編』『総論編』編集、縄文前期から中期中葉の整理、弥生～古代の遺構整理、弥生～中・近世の石製品の整理、層序の確定など

相沢秀樹（～平成８年度）　脆弱遺物（骨）の処理、台帳作成、仮全体図作成など

河西克造（～平成８年度）　更埴条里遺跡全体の基礎整理、古墳水田、条里水田の整理など

鳥羽英継（～平成11年度）　弥生から近世の土器、陶磁器、土製品の整理、中・近世の金属製品の整理、周辺遺跡、関連文献のまとめなど

平出潤一郎（～平成10年度）　鍛冶関連遺構の整理、弥生から古代の金属製品整理、脆弱遺物（植物遺体など）の整理など

水沢教子（～平成11年度）　『木簡編』『縄文編』編集、縄文中期後葉から晩期の整理、木簡の整理など

宮島義和（～平成11年度）　『古代２・中世・近世編』編集、木製品・玉類・骨角製品の整理、古代２～近世の遺構整理など

遺物写真の撮影・焼き付けは田村彬（～平成10年度）・西嶋力（平成11年度）がおこなった（一部外部発注）。

また、当センター調査研究員外で、門脇秀典（平成11年度）が縄文時代の石器の整理を担当した。さらに、木簡の釈文・解説の作成、動・植物遺体の鑑定・分析、その他理化学分析を外部研究者に依頼した。依頼先は各分冊の各項目に記した通りである。

脆弱遺物の保存処理は長野県立歴史館に依頼した。

実測は縄文土器、近世陶器、縄文石器について（株）シン技術コンサルタント・（株）こうそくに委託した。委託内容は、実測用写真のみ、素図作成まで、トレースまでの３種類である。最終的には水沢、寺内、鳥羽、門脇がチェックを行った。また、縄文土器の展開写真は小川忠博氏に委託した。

脆弱遺物の整理　平成７・８年度は木製品、骨角器や人骨・獣骨、金属器など、主に脆弱遺物の処理、実測・写真などを先行させた。

木製品のうち木簡については早急に保存の方策を考えなければならなかったため、報告書の刊行を先行させた。事務所内に赤外線照射機を導入し、木屑を含めて墨書、墨痕の有無を判別し、平川氏ら（木簡検討委員会）によって釈文の作成も事務所内で行った（図10）。また、『木簡編』刊行後に確認されたものについては県立歴史館の協力を得た。

木簡以外の木製品については、一部のみを展示用に保存処理し、残りは実測などを先行させ、シーラーパック内にホウ酸ホウ砂溶液とともに仮収納した。骨類は、ウレタン取り上げの骨類の解体・掘り出し・クリーニングを行い（図10）、台帳作成後、茂原・櫻井氏へ鑑定依頼した。

金属製品については、錆落としの一部は上田調査事務所（当時）で行い、本格的な処理は県立歴史館に依頼した。また、鍛冶遺構から採取した剥片や砂鉄などの選別・採取は穴沢義功氏の指導を受け、平成10年度まで継続して行った（図10）。

種実類などの選別　また、環境復元の重要な資料となる多量の種実類の水洗選別に精力を傾けた（図10）。

辻誠一郎、南木睦彦、住田雅和、福田美和氏らに指導を受け、土壌水洗から顕微鏡下での選別までを上

ウレタン取上人骨の再クリーニングと実測

遺物への注記、図面整理

鍛造剥片の採取

大型植物遺体の採取方法の指導

赤外線装置による木簡の解読

木簡の公開（平成7年4月30日）

図10　整理状況

田事務所で行った。また、平成10年度からは、同様の要領で炉やカマド内の種実のほか、獣骨片、魚骨片などの採取も実施した。

注記、接合作業　大量の遺物を短期間で注記するため、印字用機械を導入した（図10）。ただし、微細なものや崩れやすいものについては手書きとした。また、縄文土器の一部では印字したものが接合や移動のため判読できない状況が生じた。このため、ニスを上塗りする行程を加えた。接合作業は、期間の関係で包含層同士や遺構間では原則として行わなかった。復元も報告書写真に掲載した極少数にとどめた。

遺物への注記方法　次頁表4の例を基本とした。

実測、トレース　石器、土器、土製品の実測は、弥生時代から中世のものについては手取り実測を行った。縄文土器や近世陶器の一部については写真実測、あるいは写真のみを業者委託とした。トレースについては、縄文中期後葉土器、石器については業者委託とした。

遺構図関係については、分冊の刊行に合わせて平成８年度より編集、トレースを行った。調査期間との兼ね合いから同一地点や同一遺構についてまで、複数担当者が交代で関わる場合があり、遺構図の編集には困難を極めた。そのため、記載は一部の記録類が充実した例を除き、最低限にとどめざるを得なかった。

整理作業場所の移動　平成７年３月県立歴史館内で冬期整理作業を開始後、平成７年４月からは上田事務所（整理棟）、平成11年４月からは篠ノ井整理棟へ移動して整理作業を行った。一万箱程度の遺物、記録類の梱包を、編集作業と並行して進めたため、整理作業の中断を余儀なくされたとともに、収納場所などに混乱が生じてしまった。

また、整理作業員交代が遅れを生じさせる要因となってしまった。

4　普及・公開活動

整理期間中に以下の展示会、講演会などを通じ普及・公開を行った。

遠報展ほか

平成７年４月30日　長野県立歴史館　木簡を１日限定で公開、3000余以上の入場者があり関心の高さを実感した。

平成８年２月17日～３月３日　長野県立歴史館　木簡パネルなど展示

平成８年10月５日～11月10日　長野県立歴史館の秋季企画展「木簡が語る古代の信濃」　木簡

表４　遺物注記記号一覧

１．基本的な注記

遺跡記号→ 遺構記号・番号−遺構内層位→取上番号
BYS　SB5001　　2L　　16

２．縄文集落面での注記

遺跡記号→地区・グリッド→基本土層→遺構記号・番号→取上番号
BYS　I121J36　14−1bL　SQ7003　21

３．更埴条里遺跡の注記は『方法と手順』に則っておこなった

４．略　号

現地での注記	注記記号	備　考
＜遺跡名＞		
更埴条里遺跡	ＢＫＳ	
屋代遺跡群	ＢＹＳ	
篠河原遺跡	ＢＫＵ	
地区名		
ⓐａ	３ａ	遺跡記号に密着
＜層＞		
層	Ｌ	
１　層	１Ｌ	
最上層	ＭＵＬ	
上層／検出中	ＵＬ	
中　層	ＭＬ	
下　層	ＬＬ	
最下層／底部	ＭＬＬ	
溶脱層	ヨウ	
集積層	シュ	
表　土	１Ｌ	
盛　土	モリド	
砂　層	サソウ	
炭化物層	スミＬ	
○○層下面	Ｔメン	
平安水田面	４ａＬ上メン	
古墳面	４ｂＬ上メン	報告書ではⅥ層上面
＜方向＞		
東　壁	Ｅカベ	
○○西側	○○Ｗ	
その他		
排土中	ハイド	
トレンチ	トレ	
攪　乱	カク	
セクション面	セク	
セクションベルト	ベルト	
だめ押し面	ダメ	
＜遺構内＞		
層位は上記と同様		
床　面	ユカ／床	
床下／掘方	ホリ	
カマド	Ｋ／カ	
カマド袖	Ｋソデ	
煙　道		
炉	ロ／炉	
柱穴、貯蔵穴ほか	Ｐ	
埋甕	ウメ	
＜遺　物＞		
土器　１	１	土器は全て番号のみ
石　１	Ｓ１	
骨　１	Ｂ１	
※土器、石器など通して番号がついている場合は、番号のみ		
遺物集中	ＳＱ	整理段階でＳＱ番号を付したもの
一括№15	一括15	縄文中期後葉のみ、土器一括取り上げ
土器集中	ＰＧ	
番号なしの場合は層位名、遺構名のみ		
ＳＢ５００１Ａ区	ＳＢ５００１Ａ	遺構内をＡ～Ｄに４分割した場合

や土器・木製品展示協力

平成８年11月23日～12月15日　長野県立歴史館　当センター企画展「千曲川流域の縄文文化」　縄文土器展示

平成９年６月17日～12月23日　文化庁主催「発掘された日本列島'97」　木簡と伴出遺物を展示協力

平成10年３月22日～５月10日　長野県立歴史館　当センター企画展「千曲川流域の古墳時代」　子持ち勾玉など展示

平成10年６月４・５日　長野県立歴史館　木簡学会開催にあわせ木簡などを展示

平成11年１月23日～２月13日　長野県民文化会館展示室「発掘された大昔のくらし」　縄文土器、木簡パネル

平成11年４月１日～５月９日　更埴市森将軍塚古墳館の企画展「掘り出された古代の黒代」　縄文土器などを展示協力

平成11年８月28日～９月19日　長野市立博物館　文化庁主催「発掘された日本列島'99」にあわせ同時開催された地域展示に木製祭祀具、骨塩ほか展示協力

平成11年11月20日～12月５日　飯田市上郷考古博物館　当センター主催「速報展」　木簡パネル等を展示

平成11年12月11日～12月26日　更埴市民ギャラリー　当センター主催「写真で見る発掘調査」　木簡パネル等を展示

平成12年１月31日～２月10日　県庁1Fロビー　パネル展示

平成12年２月１日～２月12日　平安堂新長野店　「遺跡発掘写真展」パネル展示

平成12年２月２日～２月12日　長野県民文化会館　「平成11年度企画展」パネル展示

見学会　社会科教職員研修、津南町教育委員会一行ほかが整理作業の見学に訪れた。

講演会・講座・成果発表会など

平成６年６月４日　寺内隆夫　「屋代遺跡群」　長野県考古学会1994年度遺跡調査報告会

平成７年２月４日　小林秀夫　「最新の発掘調査成果－屋代遺跡群・大穴古墳群－」　第１回シナノクニフォーラム

平成７年６月４日　寺内隆夫　「屋代遺跡群」　長野県考古学会1994年度遺跡調査報告会

平成７年12月２日　宮島義和　「発掘された屋代の古代」　歴代高校講座

平成７年12月３日　寺内隆夫・水沢教子　「長野県屋代遺跡群と出土木簡」　木簡学会研究集会

平成７年12月10日　寺内隆夫　「屋代遺跡群の発掘調査成果」　国立歴史民俗博物館基幹研究「日本歴史における災害と開発Ⅰ－第４回研究集会」

平成８年６月２日　水沢教子　「更埴市屋代遺跡群の木簡」　長野県考古学会1996年度研究大会

平成８年７月７日　寺内隆夫・辻本崇夫　「屋代遺跡群・更埴条里遺跡の自然科学分析結果からみた善光寺平南部の古環境について」　国立歴史民俗博物館基幹研究「日本歴史における災害と開発Ⅰ－第４回研究集会」

平成８年７月14日　水沢教子　「信州出土の木簡と古代の信濃」　平成８年度軽井沢資料館、追分宿郷土館教養講座

平成８年９月15日　水沢教子　「屋代遺跡の縄文時代－浅間山麓と関連して－」　平成８年度軽井沢町歴史民俗資料館教養講座

平成８年10月19日　水沢教子　「屋代遺跡群出土木簡の記録簡」　非文献資料の基礎的研究研究会

平成８年10月20日　寺内隆夫　「考古学から見る屋代木簡」　長野県立歴史館「木簡が語る古代の信濃」講演会

平成８年11月３日　宮島義和　「屋代遺跡群７世紀後半の木製祭祀具について」　長野県立歴史館「木簡が語る古代の信濃」研究報告会

水沢教子　「屋代遺跡群出土木簡の製作技法と廃棄方法」　長野県立歴史館「木簡が語る古代の信濃」研究報告会

平成９年６月５日　寺内隆夫　「考古資料から探る古代地方豪族の拠点」　信濃国分寺資料館市民講座

平成９年７月13日　水沢教子　「屋代木簡が語る古代の人々」　信濃国分寺資料館市民講座

平成９年11月29日　水沢教子　「更埴市屋代遺跡群が語るもの」　八十二文化財団教養講座

平成10年２月10日　水沢教子　「更埴市屋代遺跡群出土木簡とその周辺」　石川県埋蔵文化財保存協会文字資料集成委員会

平成10年３月30日　水沢教子　「更埴市屋代遺跡群出土の木簡について」　長野県文化財保護協会

平成10年６月５日　寺内隆夫　「信濃の古代と屋代遺跡群」　木簡学会長野特別研究集会

各種刊行物への写真提供　このほか、周辺市町村史や一般図書、学術雑誌などへの木簡、縄文集落の調査状況、遺構の写真を提供し、普及・公開をはかった。

第2章　遺跡の位置と周辺環境

第1節　遺跡の位置

更埴市・千曲川右岸（図12）　更埴市屋代から雨宮地籍、千曲川右岸の自然堤防上には多くの遺跡が立地している。これらの遺跡を総称した名称が屋代遺跡群（・雨宮遺跡群）である。その中で、古代以降に形成された比較的新しい自然堤防Ⅱ群に立地するのが窪河原遺跡である。屋代遺跡群の中心部は自然堤防Ⅰ群上に位置しており、調査対象範囲の一部は大境遺跡（屋代遺跡群④区の一部）と命名されている。更埴条里遺跡との境は便宜的に五十里川とした。更埴条里遺跡は自然堤防の南側に広がる後背湿地Ⅰ群を中心としている。

調査対象地区の位置　上信越自動車道はこの地域を南北に縦断する形で計画され、発掘対象地区は更埴条里遺跡Ａ地区（更埴市屋代字七ツ石）から窪河原遺跡（更埴市雨宮字窪河原）の全長約2.3kmにわたる。各調査地区の地籍名は、図版1に示したとおりである。国土座標では、更埴条里遺跡Ａ地区南端が、第Ⅶ系Ｘ＝58.8km、北端の窪河原遺跡がＸ＝62.0km。東西は窪河原遺跡で広くＹ＝－31.9kmから－32.10kmである。北緯36°31′50″～36°33′、東経138°8′付近にあたる。

第2節　歴史的環境

1　考察のための前提

(1)　地域区分

屋代遺跡群をとりまく周辺地域の歴史的環境を考察するにあたって、便宜的に、対象地域をいくつかの小地域に区分した。地域区分の方法は、千曲川と山並とによってとり囲まれた小地域とそれに接する山麓・高地面を1つの単位として把握した。基本的な小地域の区分は、『更級埴科地方誌』に森嶋　稔氏の提示した区分（森嶋1978）に概ね従っている（図11）。今回対象となるのは、図11のⅠ、Ⅱ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ、Ⅶ、Ⅷの各小地域である。

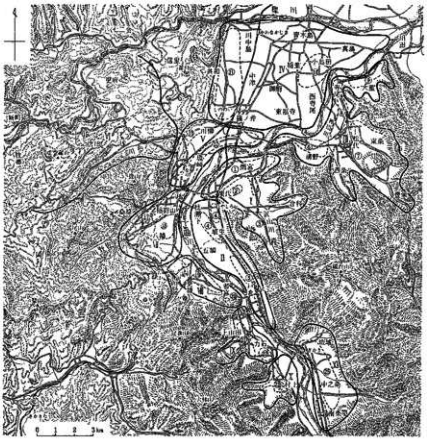
(2)　周辺遺跡の抽出と記載方法

① 周辺遺跡の抽出にあたっては、『鳥林遺跡他』報告中の「歴史的環境と周辺の遺跡」（綿田1994）と『石川条里遺跡』報告中の「歴史的環境と周辺遺跡」（臼居1997）に掲載された文献にあたった。また、『更級埴科地方誌』、『更埴市史』、『戸倉町誌』や新規の報告書で不足部分を補った。

② 上記の文献調査において、文献間で記載内容が合わないものもあったが、綿田1994と臼居1997に提示されてある文献、及び『長野県史考古資料編全一巻(一)遺跡地名表』で再調査の上訂正した。

③ 遺跡名が違うものも地図を確認の上、明らかに同一と思われるものは同一のものとして扱い、遺跡名は『更級埴科地方誌』又は『更埴市史』にそろえた。

④ 綿田1994、臼居1997の遺跡存続欄に◎や○があるもので、参考文献が明記されておらず、該当する文



地形面		地域面
Ⅰ	屋代沖積面	① 諏宮・屋代自然堤防面
		② 屋代微高地面
		③ 武山川形状地面
Ⅱ	埴生・戸倉沖積面	④ 埴生微高地面
		⑤ 戸倉微高地面
Ⅲ	松代沖積面	⑥ 徳野自然堤防面
		⑦ 松代複合扇状地面
		⑧ 寺尾自然堤防面
		⑨ 大室自然堤防面
Ⅳ	川中島扇状地面	⑩ 小島田微高地面
		⑪ 共和山麓台地面
Ⅴ	塩崎沖積面	⑫ 松節・横田自然堤防面
		⑬ 塩崎山麓台地面

地形面		地域面
Ⅵ	信郷丘陵面	⑭ 塩川水系面
		⑮ 犀川水系面
Ⅶ	佐野川扇状地面	⑯ 稲荷山自然堤防面
		⑰ 桑原山麓台地面
		⑱ 佐野川微高地面
Ⅷ	更級洪積台地面	⑲ 更級洪積台地面
		⑳ 若宮山麓台地面
Ⅸ	上山田洪積台地面	㉑ 上山田洪積台地面
		㉒ 力石微高地面
Ⅹ	村上洪積台地面	㉓ 上平山麓台地面
		㉔ 綱島洪積台地面
Ⅺ	坂城洪積台地面	㉕ 坂城洪積台地面
		㉖ 南条自然堤防面

更埴地方歴史地理的環境図

更級埴科地方誌第二巻Ｐ450より抜粋

図11　更埴地方歴史地理的環境図

献を見つけることができなかったものについては、少数ではあったがやむをえず除外した。

⑤　各遺跡の調査結果は、表５－１～表５－５と図12によって示したが、その記載方法は以下のように行った。

ア、旧石器時代、縄文時代、12世紀～中世・近世については、その遺跡で住居が出土している場合は●、遺構が出土の場合は◎、遺物のみ出土の場合は○にした。線上に○印があるものは、両時期にまたがる遺物が出土していることを示す。

イ、弥生時代、古墳時代、古代については横棒グラフで表記し、住居が検出されている場合を黒ぬりとした。土坑や溝などの遺構や包含層から遺物が発見されている場合は点線で表現してある。また、棒グラフの幅の広狭は、遺構の多少を示す。これは各遺跡内の多少であって、他遺跡と比較してのものではない。広狭の大まかな目安は、一番太いもので住居が３軒以上、中位の太さで２軒程度、細いものは１軒のみである。２～３時期にまたがってしか時期判断できない遺構も多く、さらにすべての遺構の遺物が報告書に掲載されているとは限らないので、前述の基準にそってグラフ化を試みたが、厳密さに欠ける場合も多い。しかし、大まかな傾向は十分つかめると思われる。

⑥　墓域の表記は、墓が１基検出されている場合は①で示し、複数の墓の検出がある場合は墓群としている。人骨が出土しているものは墓と断定できるが、人骨の出土がない場合、遺物の出土状況と遺構の形状から墓と判断できるもの以外は墓としていない。また、出土遺物等により明確な時期判断ができない場合はこの表には載せていない。したがって、実際の墓の数はこの表より多くなる。

⑦　各時代の時期のとらえ方については、古墳前期から古代末までは屋代遺跡群の編年観にあわせて記載し、その他の時代については一般的呼称に従っている。

⑧　各地域面の呼称は長いので、「　」をつけて略して記載することが多い。例えば「Ⅰ　屋代沖積面とそれをとりまく山麓部・高地面」の場合「Ⅰ　屋代沖積面……」とする。各地域面の正式名称は表５－１～表５－５の左上に記している。

２　旧石器時代～縄文時代の歴史的環境

旧石器時代　設定した７つの地域面のうち、「Ⅳ　川中島扇状地面とそれに接する山麓部・高地面」には遺跡が未確認であるが、その他の地域面には遺跡が存在し、その数は13遺跡である。高地面と山麓部に多く発見されているが、千曲川に近接した段丘状の扇崖上に位置する三島Ａ遺跡（52－２）でも、硅岩製の尖頭器と剥片が発見されている。千曲川右岸では、高地面の遺跡としては、沢山Ａ遺跡（９－３）で黒曜石製のナイフ形石器と先刃掻器が発見されている。山麓部の遺跡では、県山遺跡（７）で頁岩製の石刃が２点、上ノ平遺跡（63）で黒曜石製の彫刻器１点が採集されている。千曲川左岸では、高地面の遺跡として瀬原遺跡（30－２）で尖頭器、上和沢遺跡（30－９）で黒曜石製の神子柴型尖頭器と石刃、石核状の黒曜石塊、佐野山Ａ遺跡（44－７）でも黒曜石製のナイフ形石器、頁岩製の凸形彫刻器や小石刃、猪平遺跡（16－１）では頁岩製の神子柴型石斧、下辺遺跡（16－２）では頁岩製のナイフ形石器、塩崎城見山砦遺跡（16－３）では安山岩製と頁岩製の尖頭器８点、頁岩製と玉髄製の掻器が３点、蛇紋岩製の磨製石斧が２点、その他として剥片、砕片155点が出土しており旧石器時代の後半期～終末期に位置付けられている。また、山麓部の遺跡としては、鶴前遺跡高速道地点（14－２）から黒曜石のナイフ形石器が１点、中村遺跡（53）ではシャールスタインの尖頭器が発見されている。

縄文時代草創期　遺跡数は非常に少ない。鶴前遺跡高速道地点（14－２）からは頁岩製の槍先形尖頭器が耕作土中から１点採集されており、草創期の可能性が指摘されている。このほかに、池尻遺跡（44－６）では、神子柴型石斧に属する蛇紋岩の刃部磨製石斧、神子柴型尖頭器に属する蛇紋岩製の石槍等が出土している。神子柴型尖頭器や神子柴型石斧は土器と共伴する場合としない場合があり、土器と共伴する場合は草創期に位置付けられている[註1]。『更埴市史』（森嶋1994）では神子柴型の尖頭器や石斧が出土している池尻遺跡（44－６）、上和沢遺跡（30－９）を草創期・過渡期と位置付けている。このようにみると旧石器時代の項で述べた上和沢、猪平例などもこのような位置付けにすることも可能である。

縄文時代早期　全部で25遺跡が確認されている。「Ⅶ　佐野川扇状地面の山麓部と高地面」、更に、「Ⅷ更級洪積台地面に接する高地面」に遺跡が多い。遺構の伴わない遺跡が多い中で、「Ⅶ　佐野川扇状地面……」の山麓部の小坂西遺跡（40－４）と鳥林遺跡（40－８）では住居跡が確認され、高地面に属する池尻遺跡（44－６）ではすり鉢状の落ち込み遺構が検出されている。今回の対象地で最古の住居として検出されているのは鳥林遺跡（40－８）で、押型文期の立野式に属する竪穴住居が２軒出土している。炉・柱穴はみられず、不整な隅丸方形を呈している。小坂西遺跡（40－４）では、早期末の茅山上層式・柏垈式を伴う竪穴住居が１軒出土している。楕円形プランで柱穴・炉がみられる一般的な形である。柏垈式は北信地方の初見とされる。

縄文時代前期　全部で26遺跡が確認されている。そのうちで竪穴住居が確認されたのは５遺跡、竪穴住居以外の遺構が確認されたのが３遺跡であり、早期よりも明らかに増加傾向がうかがえる。遺跡全体での立地は早期と変らず高地面や山麓部に多く、平坦部にも数を増してくる。山麓部で住居の確認できた遺跡をみると、鶴前遺跡高速道地点（14－２）では、前期前半の竪穴住居が１軒、小坂西遺跡（40－４）でも前期前葉の竪穴住居が１軒存在する。小坂西例は方形プランで壁・柱穴・地床炉を備え、該期に一般的な形態である。山麓部を離れた平坦部で住居が確認できた例は、石川条里遺跡高速道地点（15－１）で、前期初頭の竪穴住居が３軒、中田遺跡（52－４）では前期中葉の黒浜式に属する竪穴住居が１軒、円光房遺跡（52－５）

では前期初頭の中道式の竪穴住居が1軒、さらに前期後葉の諸磯b式の竪穴住居が1軒確認されている。この前期初頭の円光房遺跡例と石川条里遺跡例が、今回の対象地において平坦部に進出してきた住居の初現となる。

縄文時代中期　27遺跡29地点から中期の遺物が出土している。高地面と山麓部にも引き続き多くの遺跡が存在しているが、山麓部から離れて、より千曲川に接近した平坦部（自然堤防上、扇状地上台地等）にも遺跡が多数確認できるようになる。住居跡の確認できるのは3遺跡と前期よりも少ないが、前期ときわだった違いは、住居が大規模な集落を構成して検出されることである。また、今回の調査対象地内ではこれらの集落が平坦部に集中し、大々的に展開していたことも特徴となる(注2)。高速道屋代遺跡群⑤区（1-3）では、中期初頭の五領ヶ台Ⅱ式併行期に22軒の竪穴住居が作られ、屈葬人骨等も検出された。中期中葉（勝坂期）では竪穴住居は1軒と減少するが、中期後葉（加曽利EⅡ～Ⅳ式併行）には再び大規模に集落が展開する。屈葬人骨を埋めた墓坑も検出されており、住居跡総数は72棟を数え、中央に広場をもって環状に展開すると推測されている。円光坊遺跡（52-5）にも中期末葉の集落が大規模に展開する。住居の数を円光坊遺跡の編年に沿って示すと曽利Ⅱ期に2軒、曽利Ⅲ期に1軒、曽利Ⅳ期に2軒、曽利Ⅴ期に13軒、曽利Ⅵ期に4軒となる。敷石住居の数も多い。また近接する巾田遺跡（52-4）でも中期末葉の住居が1軒、配石跡が5ヶ所、そして環状列石跡が認められている。これらは近似する時期の遺構群であり、配石跡のいくつかは敷石住居の可能性が高い。

縄文時代後期　22遺跡28地点で後期の遺物が出土している。遺跡の立地は基本的に中期と似た傾向を示す。住居跡は、円光坊遺跡（52-5）のみで検出されている。後期の竪穴住居跡が9軒で、そのうち堀之内Ⅱ式に属するものが4軒、加曽利B式に属するものが2軒みられる。その他の遺跡では焼土跡や土坑といった遺構の検出が多い。

縄文時代晩期　28遺跡32地点で遺物が確認できる。高地面の遺跡が減少し、山麓部や平坦部に遺跡が集中する傾向がみられ、後期までの立地と明確な変化がみられる。千曲川後背湿地内の微高地に立地する高速道更埴条里遺跡E地区（4-6）、H地区（4-5）、J地区（4-4）では新たに掘立柱建物跡が検出され、居住の場も更に広がりつつあることが理解できる。他に住居跡が発見されている遺跡としては、鶴前遺跡高速道地点（14-2）で氷Ⅰ式後半の竪穴住居が1軒、円光坊遺跡（52-5）で佐野Ⅰa式の竪穴住居が1軒である。

3　弥生時代・古墳時代・古代の歴史的環境

(1)　居住域

対象とした7つの地域面のうち居住域の変遷が明確にとらえられるのは、「Ⅰ　屋代沖積面……」「Ⅴ塩崎沖積面……」「Ⅳ　川中島扇状地面……」「Ⅱ　埴生・戸倉沖積面……」であるが、特に「Ⅰ　屋代沖積面……」での変遷は典型的なあり方を示している。ここでは「Ⅰ　屋代沖積面……」にスポットをあてながら、他の地域面とも比較する中で弥生時代から古代までの居住域の変遷を述べてみたい。

① 縄文時代晩期は、後期までの立地とは変化し、高地面の遺跡が減少し、山麓部や平坦部に遺跡が集中する傾向がみられた。この立地条件がひきつがれ、縄文晩期の遺物や遺構が発見されている遺跡では弥生時代前期、中期の遺物が発見される例が多く、縄文晩期から弥生時代への立地面での継続性がみられる。弥生時代において、千曲川の対岸となる「Ⅴ　塩崎沖積面……」と「Ⅰ　屋代沖積面……」の両地域で集落のあり方に明瞭な差がみとめられる。「Ⅴ　塩崎沖積面……」では広範囲にわたって各時期を通じて多数の住居をもつ集落が展開し、後期の箱清水期においては、高速道篠ノ井遺跡（11-4）で防御用の環壕をもつ集落が形成されるなど弥生時代の中核的居住域となる(注3)。これに対し「Ⅰ　屋代

沖積面……」のあり方は、散発的に弥生時代の住居が発見される程度で非常に見劣りするものとなる。稲作の受容期において「V　塩崎沖積面……」の優位性は顕著である。

② 弥生時代にみられた「I　屋代沖積面……」と「V　塩崎沖積面……」の対象的なあり方は、3世紀後半頃から徐々にその格差が縮小し、両地域とも千曲川の自然堤防上を舞台に集落が大きく展開していく。居住域が時代をおうごとに徐々に拡大していく姿は、「I　屋代沖積面……」の自然堤防上の遺跡で明確に観察できる。弥生時代末期から3世紀後半にかけて、「I　屋代沖積面……」の自然堤防上には、大境遺跡（1-2）、高速道屋代遺跡群⑤区（1-3）、新幹線屋代遺跡群2区（1-12）、生仁遺跡（2-8）等が存在していたが、5世紀には城ノ内遺跡（1-4）が加わり、6世紀には新幹線屋代遺跡群6区も加わり、7世紀には地ノ目・一丁田遺跡（1-14）や町浦遺跡（2-1）が加わって集落域がより拡大する。そして、8世紀には馬口遺跡（1-5）や自然堤防I群緑辺の新幹線更埴条里遺跡5区（4-2）にも集落域が拡大する。さらに9世紀には、高速道屋代遺跡群③区（1-6）、同①・②区（1-7）、松ヶ崎遺跡（1-8）や高速道更埴条里遺跡K地区（4-3）、新幹線更埴条里遺跡3・4区（4-1）などが相次いで新しい集落として成立し、自然堤防I群上や後背湿地I群内の微高地に非常に多くの居住域が形成される。これらの集落は9世紀末まで継続する。7世紀までの自然堤防I群上での居住域の拡大、8世紀に入って自然堤防I群縁辺部への拡大、そして9世紀代には後背湿地内の微高地も含めてより顕著な居住域の拡大が明確に観察できる。これらは、生産域の開発・拡大と結びついておきた姿であろう。

③ 9世紀代まで順調に居住域を拡大してきた「I　屋代沖積面……」に大きな異変が起きるのは、9世紀末の仁和の洪水の少し前である。それまで営々と栄え継続してきた伝統的集落のほとんどが突然廃絶してしまう。自然堤防上には9世紀末から約100年弱の間、人影がとぎれてしまう。この傾向は「V　塩崎沖積面……」、「VII　佐野川扇状地面……」、「II　埴生・戸倉沖積面……」といった他の地域面でも共通してみられるできごとであり、古代の集落史上の大きな画期となる。

④ 9世紀末以降、上記の伝統的集落にかわって居住域として繁栄する場所には次の4つのタイプがみられる。

a　千曲川後背湿地内の微高地での展開

これは8世紀～9世紀にかけて新たに成立した集落が、引き続き10世紀代まで継続する例である。新幹線更埴条里遺跡3・4区（4-1）、高速道更埴条里遺跡K地区（4-3）、高速道更埴条里遺跡I地区（4-4）などがあげられる。

b　山麓部への進出

大穴遺跡（6-2）、清水製鉄遺跡（6-3）に典型的にみられる。「V　塩崎沖積面……」での鍋前遺跡高速道地点（14-2）や「VII　佐野川扇状地面……」の鳥林遺跡（40-8）もこの例に該当する。

c　高地面への進出

「I　屋代沖積面……」では未確認だが、「V　塩崎沖積面……」での猪平遺跡（16-1）、「VI　信田丘陵面」での宮ノ下遺跡（30-5）等があげられる。今回の調査対象地外ではあるが「III　松代沖積面……」に対応する高地面の稲葉遺跡もこれに該当する。

d　新たな地域面への展開

9世紀代から展開し始めて10世紀代以降大きく展開する特異な地域面として「IV　川中島扇状地面……」があげられる。この地域面では、田中沖遺跡（20-2、20-3）が6世紀以来の伝統的集落として10世紀代も継続するが、9世紀に新たに成立する南宮遺跡（20-1）や築地遺跡（21-1）にその典型的な例をみることができる。特に南宮遺跡は10世紀代を中心として1000軒を越える大規模集落跡となり、平安時代後半の信濃国最大の人口密集地であった可能性も高いと考えられている[注4]。

⑤　④で述べた集落は10世紀代で廃絶するものが多く、11世紀代まで継続する例は南宮遺跡（20-1）や築地遺跡（21-1）等のごく特定の遺跡のみである。そして、これらの集落の廃絶と時を同じくするかのように、再び伝統的居住域であった自然堤防上に集落が展開し始める（1-3高速道屋代遺跡④区、1-6高速道屋代遺跡③区、1-7高速道屋代遺跡①・②区、2-8生仁遺跡）。「Ⅴ　塩崎沖積面……」では新幹線篠ノ井遺跡（11-1）、聖川堤防地点遺跡（11-5）等があげられる。

⑥　古代の土器が出土するのは11世紀後半までであり、それ以後しばらくは遺跡そのもののあり方がつかみづらい時期となる。

(2) 墓　域

古墳成立以前における墓のあり方を考えるにあたって、「Ⅴ　塩崎沖積面……」の動向は重要である。縄文時代晩期にはその終末期に高速道篠ノ井遺跡（11-4）で土坑墓が、聖川堤防地点遺跡（11-5）では土器棺墓の可能性が指摘される細密条痕が施された大形甕が出土している。

縄文時代晩期終末～弥生時代前期には市営塩崎体育館地点遺跡（11-7）で火熱を受けた骨片や乳歯を伴う土器棺再葬墓が、弥生時代中期初頭の高速道篠ノ井遺跡（11-4）では、骨化後に10体以上の人骨を埋納した礫床墓が、鵜萩七尋岩除遺跡（14-3）では、土坑から弥生時代中期前半の土器と共に少なくとも5体分とされる多量の焼人骨が出土した。さらに圧巻となるのは市道松節小田井神社地点（12-4）の木棺墓群である。ここでは、弥生時代中期初頭の25基の木棺墓と4基の土坑が群をなして検出されている。各群間では、副葬品の優劣がみられ、管玉2点と小形土器10点を副葬品とした墓をもつ群が、他の群に対して優位であったと考えられている。弥生時代中期後半の栗林期では、今回の対象地外になるが「Ⅲ　松代沖積面……」の松原遺跡で礫床木棺墓もみつかっており、それが数基から10数基まとまって集団墓地を形成している。弥生時代後期になると新幹線篠ノ井遺跡（11-1）で円形周溝墓群が出現する。幅9mで長さが120mの範囲内でも55基が検出されており、幅はさらに100m近くまで広がることが予想され、推定で600基以上の円形周溝墓が集落に近接した位置に密集して作られたことになる。副葬品をもたないグループの中に一部でガラス小玉、銅・鉄鋤、ミニチュア土器等をもつ小グループがみられ、集落内での階層差がより拡大している実態をみることができる。しかし、副葬品を多くもつ首長的な性格の人々も一般集落員と同じ共同墓地に葬られている点が弥生時代までの大きな特徴となる。聖川堤防地点遺跡（11-5）では円形周溝墓のほかにそれにやや後出する墓として方形周溝墓も検出されている。また、この他の墓制として市道松節小田井神社地点（12-4）では合口壺棺がみられ、石川条里遺跡高速道地点（15-1）では土器棺墓群がみられるなど様々な墓制がうかがえる。これらの墓域は居住域の近くに造られることがほとんどだが、この傾向は古墳時代前期までひきつがれている。

古墳時代前期には円形周溝墓はなくなり、方形周溝墓（11-2　大規模自転車道地点遺跡、11-4　高速道篠ノ井遺跡、12-6　市道篠ノ井南253号線）や、木棺墓や土坑墓（11-4　高速道篠ノ井遺跡）が検出されている。また聖川堤防地点遺跡（11-5）では、方形周溝墓の陸橋部が発達した形態をとる前方後方型周溝墓が出現する。この中には溝幅4m、全長20mを越える大形のものもあり、弥生時代には首長もともに葬られた集団墓地から、一転して特定個人のために土地を大がかりに占有して墓を造営する古墳時代的造墓の姿が明らかになってくる。

集落に近接した墓域でこのような傾向がみられる一方で、特定個人の造墓の動きは集落を離れた山上へも展開されることになる。その先鞭をきるのが3世紀後半に「Ⅲ　松代沖積面……」を見下ろす山上に造られた北平1号墳である。この古墳と集落との比高差は150mもあり、前方後方墳状の張り出し部をもつ低墳丘墓として位置付けられている。そして4世紀の中ごろには「Ⅰ　屋代沖積面……」を見下ろす山上

に全長100ｍの前方後円墳である森将軍塚古墳（101）が、４世紀末までには「Ⅴ　塩崎沖積面……」を見下ろす山上に前方後方墳である全長32ｍの姫塚古墳（119）や全長93ｍの前方後円墳である川柳将軍塚古墳（120）が造られる。以後、この善光寺平南縁の千曲川をはさんだ沖積地には、前方後円墳や大型円墳が時代とともに造られる一大古墳地帯となる。これらの古墳については、千曲川左岸、右岸に展開する前方後円（方）墳を一連の首長系列の中でとらえようとする説が有力である。その系列とは、姫塚（119、左岸）→森（101、右岸）→川柳（120、左岸）→土口（104、右岸）→中郷（132、左岸）・倉科（109、右岸）→有明山（100、右岸）といった流れとして想定されている。これらの前方後円墳は、６世紀初頭には完全に姿を消すことになるが、これと前後するように「Ⅲ　松代沖積面……」に大室古墳群の形成が始まり、合掌型石室という特異な形態をもつ小形積石塚古墳が出現し、総数500基を越える大群集墳として展開する。群集墳は発掘調査件数が少なく、時期や内容など明確にならない部分が多いが、各地域面ごとに展開している姿がとらえられ、７世紀最末～８世紀前半の大穴古墳群２～６号墳（103）の築造をもって終焉を迎える。

古墳築造停止以後、これらの古墳のいくつかは追葬の場として、しばらくの期間使われることとなる。また、それ以外の墓としては、９世紀前半段階までは明らかにならない部分が多い。再び墓が遺跡から発掘されるようになるのは、９世紀後半以降である。集落の内部や縁辺部にみられる場合が多く、多くは土坑の形態をとるが（1-2大境遺跡等）、火葬墓の形態をとるものもある（1-13新幹線屋代遺跡群６区、51-３平田遺跡等）。骨や副葬品が伴わない場合、積極的に墓とは断定しなかったため実際はもう少し多いかもしれないが、それでも各時期の各遺跡にしめる数は単独か又は少数であり、中世の墓が墓群を形成するのとくらべて大きな違いとなる。

(3)　生産域

水田跡（含畠跡）　千曲川右岸、左岸の「Ⅰ　屋代沖積面……」と「Ⅴ　塩崎沖積面……」の後背湿地に良好な水田遺構が検出されている。明確な水田跡は弥生時代からであるが、石川条里遺跡高速道地点（15-1）では、プラント・オパール分析や周辺遺跡で縄文時代晩期の遺跡が弥生集落へと継続する状況が多いことなどから、すでに縄文時代晩期から低湿地の一部に水田が存在した可能性が指摘されている。最も早く水田遺構が確認できるのは石川条里遺跡高速道地点（15-1）で弥生中期後半の栗林期から後期の箱清水期にいたる水田遺構が確認されている。弥生時代の水田は傾斜の度合いに応じて規格されたため不整形となり、畦には補強のために杭が打ち込まれている。古墳時代には、同じく石川条里遺跡高速道地点（15-1）で古墳時代前期後半ないし中期前半の畦畔が14条、屋代遺跡群①～④区でも同様の時期に小区画の水田跡が発見された。屋代遺跡群の例では田面の多くが20㎡以下の小型で、水田区画の数も300近くにのぼっている。

古代になると、屋代遺跡群⑥区で洪水砂にパックされた７世紀後半～８世紀前半の３面の水田が検出された。９世紀代の水田跡は発見例が多く、９世紀前半～中ごろからのものとして高速道更埴条里遺跡（4-7、4-5・6、4-4）や高速道屋代遺跡群⑥区（1-3）、新幹線屋代遺跡６、７区（1-13）等があげられる。また、９世紀末の大洪水の砂層によって埋没した水田跡は今回の対象地だけでも21遺跡にのぼっている。この埋没水田は、東西南北を約109ｍ（１町）間隔の大畦によって区画された条里型水田である。中世・近世の水田跡が確認されているものとしては、屋代清水遺跡（6-1）、篠河原遺跡（1-11）、石川条里遺跡高速道地点（15-1）、長野市石川条里遺跡（15-3）等があげられる。その他時期不明の水田跡の検出は多い。一方畠跡としては、９世紀代に検出例が多く新幹線更埴条里遺跡３区、５区（4-1、4-2）や高速道屋代遺跡群②区、③区（1-7、1-6）、高速道更埴条里遺跡Ｋ地区（4-3）、新幹線屋代遺跡群６区（1-13）でみられている。畝状遺構として検出されるが、屋代遺跡群②区、③区例では９世紀末の洪水砂の下

から条里地割内に水田と同時に畠も作られている状況が明確となった。

須恵器窯跡　各地域面に最低１つ以上は須恵器窯跡が確認できているが、正式な発掘調査を経たものは少ないため不明な部分が多い。窯業地帯として重要な位置をしめるのは「Ⅵ　信田丘陵面」に密集する窯跡群である。ここには長野県最古の松ノ山窯跡（309）が存在し、その開窯は６世紀初頭とされる。この窯以後継続する窯は未発見であるが、この地域面には９世紀代を中心とした窯が密集している。また、「Ⅶ佐野川扇状地……」や「Ⅷ　更級洪積台地面……」にも重要な窯跡が存在する。ここは８世紀代を中心とした窯が確認されている。屋代遺跡群のある「Ⅰ　屋代沖積面……」には矢ノ口窯跡（300）が１例のみ知られるが、すでに資料が散逸しており具体相は知られない。屋代遺跡群への須恵器の供給は、肉眼観察と胎土分析の結果、７世紀後半までは陶邑を中心とした搬入品が多く、７世紀末から在地産主体に転換する。在地での供給先は主に「Ⅵ　信田丘陵面」「Ⅶ　佐野川扇状地面……」「Ⅷ　更級洪積台地面……」の３地域からであることが明らかになった（『古代１』）。

(4)　その他

祭祀関係の遺跡については、生仁遺跡（2-8）で弥生時代の卜占骨や鹿骨が出土している。古墳時代のものとしては石川条里遺跡高速道地点（15-1）で、車輪石や石釧等を出土した古墳時代前期後半の大規模祭祀場がみられる。また高速道屋代遺跡群⑥区（1-3）では、古墳時代中期以降、集落のはずれの旧千曲川斜面に「水辺の祭祀」施設が設けられ、特に７世紀後半以降は、大量の木製祭祀具や獣骨等が出土するなど９世紀まで祭祀の場として継承されている。またこの地点では国符木簡、郡符木簡等の古代の木簡も多数出土し注目を集めた。寺院関係の遺跡では、布目瓦の散布地として「Ⅰ　屋代沖積面……」には雨宮廃寺跡（2-5）が、「Ⅴ　塩崎沖積面……」には上石川廃寺跡（600）が、「Ⅶ　佐野川扇状地面……」では青木廃寺遺跡（601）が存在する。貞観八年（866年）の定額寺に列せられた屋代寺（埴科郡）、安養寺（更級郡）との関係が注目される。また古瓦が大窯跡地帯である「Ⅵ　信田丘陵面」の原市場窯跡（305）、専照寺裏遺跡（314）、赤田城南遺跡（315）、鹿ノ入窯跡（303）等で出土しており供給先の１つとして注目される。神社に関係する遺跡は未発見であるが、10世紀前半成立の『延喜式』には埴科郡関係で５社、更級郡関係で11社の式内社の名称がみえる。また、同じく10世紀前半成立の『倭名鈔』には更埴地方の郷名もみられ、更級郡には９郷、埴科郷には７郷が知られる。『更級埴科地方誌』（森嶋　1978）では各地域面に対応するこの式内社と郷名について以下のような推定を行っている。

Ⅰ　屋代沖積面……栗狭神社、祝神社……屋代郷、倉科郷、大穴郷
Ⅱ　埴科・戸倉沖積面……中村神社……船山郷、磯部郷
Ⅳ　川中島扇状地面……氷鏡斗賣神社、願氣神社、布施神社……斗女郷、池郷郷、氷鏡郷
Ⅴ　塩崎沖積面……長谷神社……小谷郷
Ⅵ　信田丘陵面……清水神社、當信神社……清水郷、當信郷、小谷郷
Ⅶ　佐野川扇状地面……治田神社、武水別神社……小谷郷
Ⅷ　更級洪積台地面……佐良志奈神社……更級郷

4　12世紀～中世以降の歴史的環境

中世の「Ⅰ　屋代沖積面……」には加納屋代四ヶ村と倉科庄という庄園が成立し、「Ⅱ　埴生・戸倉沖積面……」には、船山郷という公領が存在している。対岸の千曲川左岸にも更級洪積台地面には十箇郷という公領が、「Ⅶ　佐野川扇状地面……」には小谷庄から始って「Ⅳ　川中島扇状地面……」との間に四宮庄、石川庄、布施本庄といった庄園及び布施御厨、富部御厨といった御厨が成立している。考古学の発

掘でも「VI　信田丘陵面」を除く6つの地域面で住居の跡が発見されており（表5－1～表5－5の●印）、それらはこういった庄園や公領、御厨の中に存在していた集落の一端をなすものであろう。墓群や火葬施設も発見されている。経塚は「IV　川中島扇状地面……」と「VI　信田丘陵面」を除く各地域面にみられるが「VIII　更級洪積台地面……」に多い。中世城館跡については、山上に立地するものと平地に立地するものを分けて図・表化した。山上に立地するのはいわゆる城郭で、土口将軍塚古墳（104）がある薬師山山上に存在しない点だけは例外であるが、平地への見通しの良い山上や尾根の先端上にまんべんなく配置されている。平地に立地するのは、たとえば館とか屋敷とかよばれるものである。「I　屋代沖積面……」では、そこに付随すると考えられる大溝の発掘例はあるが、館や屋敷そのものは発掘されていない。館、屋敷そのものが発掘された例としては石川条里遺跡高速道地点（15-1）や於下館（22-1）があげられる[注1]。近世以降については遺物の出土はみられるものの、溝などの遺構以外には居住域、墓域共に明確な遺構としての検出例は少なく、考古資料からは明確にならない部分が多い。

註1　大竹憲昭氏の御教示による。

2　今回の調査対象地から少し範囲を広げると、千曲川左岸では上水内郡小川村の筏遺跡に、更に千曲川右岸でも小県郡真田町の四日市遺跡に縄文中期の大きな集落が展開されている。これらの地域は高地面または山麓部にあたる集落であり、平坦部に大々的に展開される集落と共に共存している。
小川村教育委員会　1991『筏遺跡』
真田町教育委員会　1990『四日市遺跡』

3　調査対象地外になるが、弥生中期の環壕集落の例としては「III　松代沖積面……」の松原遺跡や長野市若穂の榎田遺跡があげられる。

4　矢口忠良　1995「市宮遺跡の古代ムラ」『図説・北信濃の歴史　上』　なお、正式報告は現在作成中である。

5　中世城館跡については河西克造氏に御教示いただいた。

引用・参考文献

表5－1～表5－5に掲載した各遺跡の参考文献は多数にのぼるため、「周辺遺跡掲載文献一覧」として最後にまとめて掲載した。ここにはそれ以外のものについてのみ掲載する。

森嶋　稔　1978「第二節　更埴地方古代の歴史地理的把握」『更級埴科地方史』第2巻

綿田弘実　1994「第二節　歴史的環境と周辺の遺跡」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書13　鳥林遺跡他』

臼居直之　1997「第二節　歴史的環境と周辺遺跡」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書15　石川条里遺跡』第1分冊

戸倉町誌編纂委員会　1999　『戸倉町誌』第二巻　歴史編上

財長野県埋蔵文化財センター　1998　『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書4　松原遺跡　縄文時代』

長野県史刊行会　1981『長野県史　考古資料編』全1巻(1)遺跡・地名表

永峰光一・鈴木孝志　1957「長野県埴科郡松代町西条地区入組　稲葉遺跡調査概報」『信濃』9-4

図12　周辺遺跡

表5－1　周辺遺跡　1

(△)は高速道の略　(■)は新幹線の略

	I 屋代沖積面 とそれをとりまく 山麓部・高地面	番号	遺跡名	旧石器	縄文 早期	縄文 前期	縄文 中期	縄文 後期	縄文 晩期	弥生 前期	弥生 中期	弥生 後期	弥生 終末期	古墳 前期	古墳 中期	古墳 後期	古墳 終末期	飛鳥	奈良	平安	平安	平安	平安	平安	平安	平安	平安	平安	平安	中世城館	近世	文献
居住域	a 屋代・雨宮台地縁辺部	1-1	荒神																											○		芋焼遺跡
		1-2	大塚																											○		馬場遺跡
		1-3	国指定史跡			○	●	○	○																					●	○	馬場遺跡
		1-4	城ノ内																											○		7
		1-5	高口																													
	屋代遺跡群 (1)	1-6	国指定史跡						○																					○	○	馬場遺跡
		1-7	国指定史跡			○	○																							○	○	馬場遺跡
		1-8	根小屋																											○		屋
		1-9	大屋																													屋
		1-10	宮の原																													芋焼遺跡
		1-11	城内東																											●	○	屋
		1-12	国指定史跡																													屋
		1-13	国指定史跡																													屋
		1-14	焼之原－工場																											○	○	屋
		2-1	町屋																											○		跳越遺
		2-2	下条																													屋
		2-3	民家																													芋焼遺跡
		2-4	大日堂																													屋
	雨宮遺跡群 (2)	2-5	国指定史跡																													跳越遺
		2-6	国指定史跡					○																								屋
		2-7	大宮																													屋
		2-8	屋下					○																								芋焼遺跡
	土口遺跡群 (3)	3-1	土口				○																									屋
		3-2	宮ノ前				○																									屋
	b 千曲川後背湿地内微高地面	4-1	国史跡指定・遺																											●		屋
		4-2	国史跡指定遺																											●		屋
		4-3	国史跡指定遺				○	○																						○	○	馬場遺跡
	更埴条里遺跡 (4)	4-4	国史跡指定・遺				○	●																						○	○	馬場遺跡
		4-5	国史跡指定・遺					●																								馬場遺跡
		4-6	国史跡指定遺					●																								馬場遺跡
		4-7	国史跡指定遺					○																								馬場遺跡
		4-8	新田																													馬場
	生型遺跡群	5	長・屋敷																													芋焼
	c 有明山山麓、舎利・高橋沢地域	6-1	屋代清水				○	○																						○	○	屋
	有明山山麓	6-2	大代		○	○	○																							○		馬場
		6-3	諏方神社			○	○	○																						○		馬場
	舎	7	舎山	○																												屋
		8-1	北山																													屋
	舎利	8-2	舎舎木																													馬場
		8-3	舎利山ノ神				○																									屋
	d 高地面	9-1	丸屋		○	○																										屋
		9-2	芋ノ平			○																										屋
		9-3	西山A	○																												屋
		9-4	西山B		○																											屋
		101	森原平安土城跡		○	○			○																					○	○	屋
墓		100	信州山田平古墳	1遺跡	30m									後期（6C前）																		馬場遺跡
	古墳 有明山	101	森原平安土城	1遺跡	10m																											?
		102	森原平安古墳群	(12 基)																												屋
		103	大塚古墳群	(6 基)																												馬場遺
		104	上山原墓群A地	1遺跡	40m																											馬場遺跡群
	上山	105	土口東古墳群	(7 基)											後期																	馬場
		106	宮本古墳群	(10 基)											後期																	馬場
		107	土口古墳群	(5 基)											後期																	馬場
	生型	108	生型古墳群	(5 基)											後期																	馬場
		109	倉科古墳群	1遺跡	40m									中期																		馬場遺跡
		110	倉科古山古墳	(6・7)横穴	9基											後期																馬場
	舎利	111	人塚古墳群	(9・7)横穴	7基											後期																馬場
		112	竹原古墳群	(5 基)												後期																馬場
		113	矢ノ口古墳群	(13 基)												後期																馬場
		114	石山古墳群	(22 基)												後期																馬場
		115	田端古墳群	(5 基)												後期																馬場
	舎	116	舎古墳群	(3 基)												後期																馬場
		117	舎利山古墳群	(3 基)												後期																馬場
古墳以外	a 屋代・雨宮台地縁辺部	1-1	国指定史跡					遺																					○		芋焼遺跡	跳越
		1-2	国指定史跡																										○		城跡	跳越
	屋代遺跡群	1-3	大塚																		○										遺跡	馬場遺
		1-13	国指定史跡																		○											屋
		1-1	荒神							遺		土器製作工房						遺構	土器製作遺構													屋
		1-11	城内東																												遺跡	屋
	雨宮遺跡群	2-8	屋下																												遺跡	芋焼遺跡
		2-7	大宮																遺構	土器製作遺構												屋
	b 千曲川後背湿地内微高地面	4-3	国史跡指定遺																												遺跡	芋焼遺跡
	更埴条里遺跡	4-5	国史跡指定遺																												遺跡	屋
		4-4	国史跡指定遺																													屋
	牛堂遺跡群	5	舎・舎前																												遺跡	屋
	c 有明山山麓	101	森原平安古墳																												遺跡	上
	a 屋代・雨宮台地縁辺部	1-3,5,7	国指定史跡							古墳		土器製作工房									○											馬場
生産域（水田跡）		1-8	根小屋																		○											屋
		1-10	宮の原																		○											屋
		1-12	城内東																		○											屋
		1-17	町屋(1990)																		○											屋
		1-15	国指定史跡																		○											屋
		4-10	本堂寺																		○											馬場遺跡
	b 後背湿地	4-1	屋代清水																		○										水田跡遺構	屋
		4-7	国史跡指定遺																		○											屋
		4-5	国史跡指定遺																		○											屋
		4-4	国史跡指定遺																		○											屋
		4-9	国史跡指定遺																		○											屋
		4	長峰遺跡	1985年																	○											屋
		4-1	国史跡指定・遺																		○											屋
		4-9	国史跡指定遺																		○											屋
		4-1	国史跡指定遺																		○											屋
		4-3	国史跡指定遺																		○											屋
	c 千曲川田川流	1-3	国史跡																		○											屋
		1-11	城内東																		○										水田跡	屋
		1-13	国指定史跡																		○											屋
寺院		300	丸ノ三遺跡																													馬場
中世城館跡	山上	601	唐崎山城																													跳越
		602	葛城城																													跳越
		603	天城城																													跳越
		604	聖城城																													跳越
		605	屋代城																													芋焼遺跡
	平地	650	生仁館																													屋
		651	四戸小屋																													屋
その他		900	人物埴輪																													松原

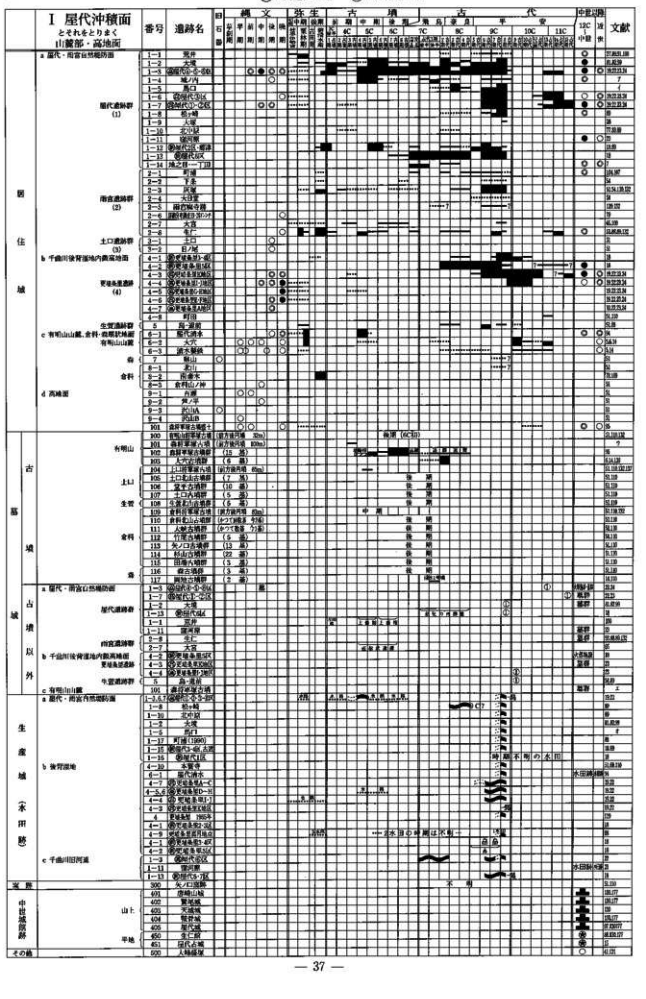


表５－２　周辺遺跡　２

㊨は高速道の略　㊧は新幹線の略

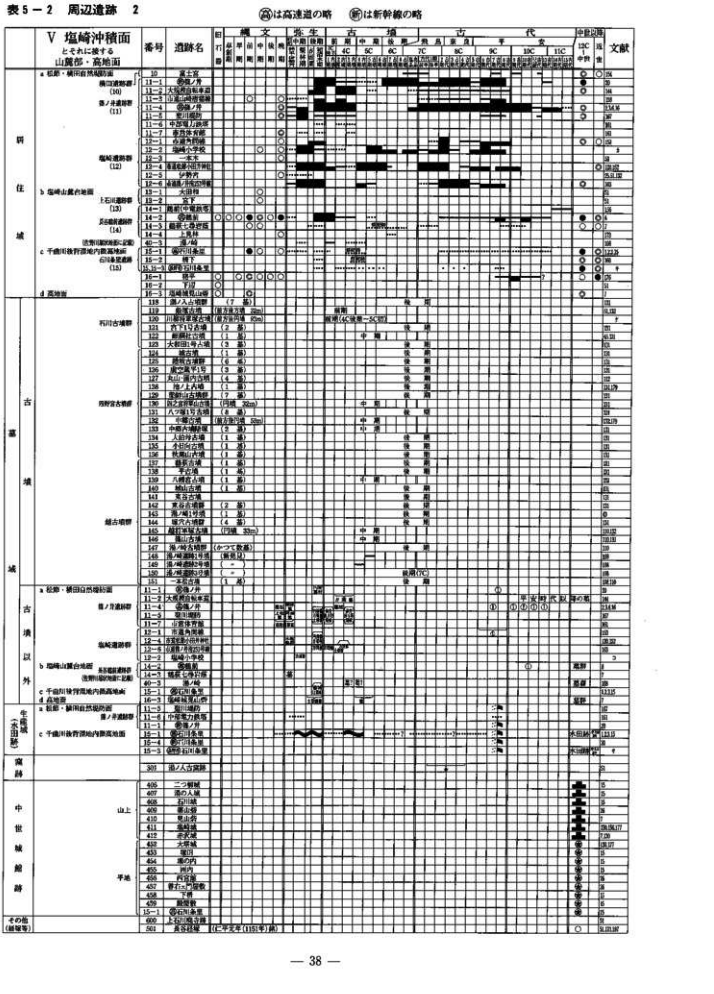


表５－３　周辺遺跡　３

Ⅳ 川中島扇状地面とそれに接する山麓部・高地面

区分	地区	番号	遺跡名	記事	中世（12C～中世）	近世	文献
居住域	a 扇端部	20－1	南宮				189
居住域	a 扇端部	20－2	田中沖Ⅰ			○	140
居住域	a 扇端部	20－3	田中沖Ⅱ	？	◎	◎	184
居住域	b 扇央部	21－1	篠ノ井		●		39
居住域	b 扇央部	21－2	田牧新田	？	◎		174
居住域	c 扇頂部	22－1	於下		●	◎	30
居住域	c 扇頂部	22－2	今里		○	◎	30
居住域	d 共和山麓台地面	23－1	寺内				52
居住域	d 共和山麓台地面	23－2	光林寺裏山				52
墓域 古墳		152	観村1号古墳	（前方後円墳　43m）　後期（6C前半）			131,132
墓域 古墳		153	観村古墳	（２号、３号）　後期			131
墓域 古墳		154	境内古墳群	（１～３号）　後期			131
墓域 古墳		155	岡田裏古墳	（１基）　後期			131
墓域 古墳		156	寺内古墳	（１基）　後期			131
墓域 古墳	紙沢古墳群	157	上大久保古墳	（１～２号）　後期			131
墓域 古墳	紙沢古墳群	158	北石津古墳	（１基）　後期			131
墓域 古墳	紙沢古墳群	159	鷲龍石古墳	（１基）　後期			131
墓域 古墳	紙沢古墳群	160	大師塚古墳	（１基）　後期			131
墓域 古墳	紙沢古墳群	161	将軍塚古墳	（１基）　後期			131
墓域 古墳	紙沢古墳群	162	南石津古墳	（複数）　後期			131
墓域 古墳	紙沢古墳群	163	梅遊北山古墳	（１基）　後期			131
墓域 古墳	紙沢古墳群	164	大平1号古墳	（１～３号）　後期			131
墓域 古墳	紙沢古墳群	165	布施塚古墳	（円墳　２基）　中期？			131,132
墓域 古墳	紙沢古墳群	166	紙沢1号古墳	（２号、３号）　後期			131
墓域 古墳	紙沢古墳群	167	山廻新田古墳	（１基）　後期			131
墓域 古墳	紙沢古墳群	168	藤塚古墳	（１基）　後期			131
墓域 其他		22－1	於下		火葬施設		30
生産域（水田跡）	b 扇央部	21－2	田牧新田	時期不明の水田			174
生産域（水田跡）	c 扇頂部	22－1	於下	時期不明の水田			30
窯跡		302	小金山窯跡	不明			51
中世城館跡	山上	413	鐘の城		▲		130
中世城館跡	平地	461	内後館		⊛		130,177
中世城館跡	平地	462	於下館		⊛		9,130
中世城館跡	平地	463	名称なし		⊛		177
中世城館跡	平地	464	大塚館		⊛		130,177
中世城館跡	平地	465	広田城		⊛		130
中世城館跡	平地	466	東昌寺館		⊛		15
中世城館跡	平地	467	富部館		⊛		15
中世城館跡	平地	468	東福館		⊛		130,177
中世城館跡	平地	469	小森館		⊛		130
中世城館跡	平地	470	横田城		⊛		130,177
中世城館跡	平地	471	布施館		⊛		130

Ⅷ 更級洪積台地面とそれに接する山麓部・高地面

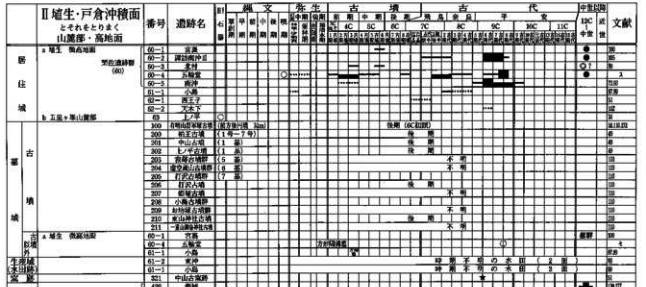
区分	地区	番号	遺跡名	旧石器	縄文 草創期	早期	前期	中期	後期	晩期	記事	中世（12C～中世）	近世	文献
居住域	a 更級洪積台地面	50－1	下吉野C											72
居住域	a 更級洪積台地面	50－2	下吉野C－1									◎		66
居住域	a 更級洪積台地面	50－3	下吉野C－2											66
居住域	a 更級洪積台地面	50－4	西久保						○					51,66
居住域	横沢遺跡群（51）	51－1	トノ田										○	62,72
居住域	横沢遺跡群（51）	51－2	鶴田											62
居住域		52－1	三島平								？	○	○	47,48
居住域		52－2	三島A	○										49,52
居住域		52－3	三島B				○	○						51
居住域		52－4	市田				●	●	○	○				51
居住域		52－5	円光房				●	●	●	●		●		46
居住域		52－6	猪石				○							51
居住域		52－7	参行山					○						51
居住域		52－8	相舟								？			51
居住域		52－9	花駒											51
居住域	b 谷窪山麓台地面	53	中村	○										46
居住域	c 高地面	54－1	八王子山A.B											46
居住域	c 高地面	54－2	弁天				○							51
居住域	c 高地面	54－3	古屋敷			○	○							51,102
居住域	c 高地面	54－4	八幡林			○								51
居住域	c 高地面	54－5	芝平			○	○		○					51
居住域	c 高地面	54－6	聖湖			○								51
居住域	c 高地面	54－7	大池南尾根			○								51
居住域	c 高地面	54－8	大池南			○	○		○					51
居住域	c 高地面	54－9	大池B								9C代？			51
居住域	c 高地面	54－10	檀棄					◎						51
墓域 古墳		190	双子塚古墳1号								（１基）　後期			49
墓域 古墳		191	双子塚古墳2号								（１基）　後期			49
墓域 古墳		192	三島古墳								（１基）　不明			49
墓域 古墳		193	柴塚古墳								（１基）　後期？			49
墓域 古墳		194	藤ノ木古墳								（２基）　後期			49
墓域 古墳		195	安坂山古墳								（１基）　後期（7C後～8C初）			49
墓域 古墳		196	大新田古墳								（１基）　後期（7C中）			49
墓域 古墳		197	猿山古墳								（１基）　後期			49
墓域 古墳		198	西芝原古墳								（１基）　後期			49
墓域 古墳		199	中村古墳								（１基）　後期			49
墓域 古墳以外	横沢遺跡群	51－1	トノ田								①			62
墓域 古墳以外	横沢遺跡群	51－3	平田								①			62
墓域 古墳以外		52－5	円光房								[illegible]			46
窯跡		319	峰越山古窯跡								★（8C）			51
窯跡		320	西洞古窯跡								★（8C）			51
中世城館跡	山上	424	中院林城									▲		50
中世城館跡	山上	425	皆城									▲		50
中世城館跡	山上	426	若宮入山城									▲		50
中世城館跡	山上	427	芝絲小城									▲		130
中世城館跡	山上	428	葉栗城									▲		130
中世城館跡	平地	474	明徳寺館									⊛		49
その他（経塚等）		503	安坂山経塚									○		49
その他（経塚等）		504	技士山経塚									○		49
その他（経塚等）		505	小丸山経塚									不明		49
その他（経塚等）		506	長峯根経塚									不明		49
その他（経塚等）		507	千本桐経塚									不明		49
その他（経塚等）		602	鳳平								（宝数拡興）	○？		49
その他（経塚等）		603	西久保瓦窯										○	66

表５－４　周辺遺跡　４

区分	Ⅵ 信田丘陵面	番号	遺跡名	旧石器	縄文	弥生・古墳・古代	中世以降	文献
居住域	a 藤川氾濫面	30−1	小山田池		○早期 ○前期			51
		30−2	瀬原	○				51
		30−3	大清水		○後期 ○晩期	弥生後期 ……		145
		30−4	大峰(信田小学校)		○中期	8C〜9C ……		145
		30−5	宮ノ下		○前期 ○中期 ○後期	5C ■……　8C ―　10C ―		136
		30−6	戸口			9C ……		51
		30−7	大上			9C ―		51
		30−8	山田屋敷			7C ……		51
		30−9	上和沢	○				51,110
	b 深川氾濫面	31−1	牧内		○中期			51
		31−2	桐原大久保		○中期			51
墓域 古墳		169	小山田藤塚	(1〜5号)		後期		130
		170	白山塚古墳	(1 基)		後期		131
		171	赤田大塚古墳	(2 基)		後期		128
		172	田野口大塚古墳	(前方後方墳 20m)		中期		51,115,132
		173	桜田塚古墳	(1 基)		後期		131
窯跡		303	嵐ノ入窯跡			★ 9C		51
		304	前田窯跡			★ 9C		51
		305	新古場窯跡	(瓦 6)		★ 9C		51
		306	鶏鶴窯跡					[illegible]
		307	イモシャクボ窯跡			★ 9C		51
		308	城ノ腰窯跡			★ 9C		51
		309	板ノ山窯跡			★ 6C		51,130
		310	灰原古窯跡			★ 9C		51
		311	信田日向古窯跡			★ 9C		51
		312	東前田古窯跡			★ 9C		51
		313	大峯古窯跡			★ 9C		51
		314	専照寺裏遺跡	(瓦)		不明		51
		315	赤田城南遺跡	(瓦)		不明		51
中世城館跡	山上	414	有尾城				▲	130
		415	孤立城				▲	130
		416	新山城				▲	128
		417	草の城				▲	130
		418	西の城				▲	130,177
		419	和田城				▲	130,136,177

区分	Ⅶ 佐野川扇状地面とそれをとりまく山麓部・高地面	番号	遺跡名	旧石器	縄文	弥生・古墳・古代	中世以降	文献
居住域	a 桑原山麓台地面	40−1	治田池下		○中期			139
		40−2	治田池A		○早期 ○前期			51
		40−3	湯ノ崎			弥生 ……　古墳前期 ―　4C〜5C ……		108
		40−4	小坂西		●早期 ●前期 ○晩期	弥生 ……　古墳前期 ―　8C ■　9C ……―	●	7
		40−5	小坂西沖		○早期 ○晩期			52
		40−6	小坂東		○後期			110
	桑原遺跡群	40−7	新町			9C ……		51,110
		40−8	鳥林		●早期 ○前期 ○中期 ○後期 ○晩期	古墳前期 ……　9C ―　10C ―	○	7
	b 佐野川微高地面　八幡遺跡群	41−1	青木			9C ― ··?	●	32,56
		41−2	北屋敷			9C ―		54
		42	興光寺		○中期			110
	c 八幡山麓部	43−1	石原A		○後期	7C〜9C ……		54
		43−2	白石			弥生後期 ……　9C ……	○	54,89
		43−3	社宮司			8C ■……9C		39
		43−4	峯			8C〜9C ……		54,89
		43−5	外西川原			弥生後期 ■―　4C〜6C ……――		89,90
		43−6	舞台			弥生後期 ……		52
		43−7	坪山		○中期 ○晩期	弥生後期 ―　5C ……		101
	d 高地面	44−1	大久保		○中期			51
		44−2	藤山		○早期 ○中期			51
		44−3	いちご平		○後期			51
		44−4	峠A・B		○早期			51
		44−5	峠C		○早期			51
		44−6	池尻		○草創期 ◎早期 ○前期 ◎中期 ○後期 ○晩期	弥生 ……　9C ―　10C ―		9
		44−7	佐野山A	○	○早期			51
		44−8	佐野山B		○早期 ○前期			51
		45−1	篠ノ井開拓地		○早期			51
		45−2	上平沢		○中期			51
		45−3	八幡山ノ神		○後期			51
墓域 古墳	小坂古墳群	174	楠見塚古墳	(1 基)		後期		130,131
		175	浦見塚古墳	(1 基)		後期		130,131
		176	宝剣1号古墳	(1 基)		後期		130,131
		177	小坂塚古墳	(1 基)		後期		130,131
		178	堀ノ口1号古墳	(1 基)		後期		130,132
	吹上塚古墳群	179	吹上塚西古墳	(1 基)		中期		130,131
		180	吹上塚東古墳	(1 基)		前期		130,131
		181	中原古墳	(1 基)		後期		130,131
	八幡古墳群	182	矢先山1号古墳	(1 基)		中期		130,131
		183	矢先山下古墳	(1 基)		不明		[illegible]
		184	山ノ神古墳	(1 基)		不明		[illegible]
		185	鞍塚古墳	(1 基)		後期		[illegible]
		186	こがの墓1号古墳	(1 基)		後期		[illegible]
	柳沢山古墳群	187	柳沢山古墳群	(11 基)		後期		[illegible]
		188	柳沢杉ノ木古墳	(1 基)		7C		58
		189	有宮塚古墳	(1 基)		6C ―		101
墓域 古墳以外	a 桑原山麓台地面	40−3	湯ノ崎			周溝墓	墓群	108
		40−4	小坂西				火葬墓	7
	b 佐野川微高地面	41−1	青木				墓	32,56
窯跡		316	池尻古窯跡			★ ·?		51,110
		317	向山古窯跡			★		51,110
		318	上日向古窯跡			★		51
中世城館跡	山上	412	永沢城				▲	7
		421	小坂城				▲	139
		422	龍王城				▲	138
		423	佐野城				▲	130,177
	平地	472	稲荷山城				㊗	130,177
		473	八幡松田館				㊗	130
その他(経塚等)		502	矢崎山経塚				○	51
		601	青木廃寺遺跡					[illegible]

表5－5　周辺遺跡　5



	Ⅱ埴生・戸倉沖積面 とそれをとりまく 山麓部・高地面	番号	遺跡名	縄文	弥生	古墳	古代	中世以降	文献
居住域	a 埴生 微高地面	60－1	宮原					●	1
	芝佐遺跡群 (60)	60－2	諏訪神沖Ⅱ					●	2
		60－3	北村					○	3
		60－4	五輪堂	○				●	4
		60－5	前沖						5
		61－1	小島						6
		62－1	西王子						7
		62－2	天木下						8
	b 五里・屋山麓部	63	上ノ平	○					9
墓域 古墳		100	石明山古墳			後期 (6C初期)			10
		200	桃王古墳			後期			11
		201	中山古墳			後期			12
		202	七ノ平古墳			後期			13
		203	宮塚古墳群			不明			14
		204	盛安寺古墳群			不明			15
		205	打沢古墳群						16
		206	打沢古墳			後期			17
		207	都塚古墳			不明			18
		208	小島古墳群						19
		209	紅坂堀古墳群			不明			20
		210	東山神社古墳			後期			21
		211	一貫山御陵神社古墳			不明			22
古墳	a 埴生 微高地面	60－1	宮原					鎌野	23
		60－4	五輪堂				○		24
		61－1	小島						25
生産域		61－2	東沖			時期不明の水田 (2期)			26
水田跡		61－3	小島			時期不明の水田 (3期)			27
窯跡		321	中山古墳群			室			28
中世城館跡	山上	430	東城						29
		431	堀平城						30
		432	弥井城						31
		433	宮城神小屋						32
		455	加代城						33
その他		507	桜ヶ峰経塚					○	34
		508	千本神経塚						35

文献の補足
ア…31.52.81.91.103.114.132　イ…29.30.57.74.76.80.86.89.132　ウ…51.55.95.110.132　エ…51.55.95.110.132　オ…29.30.57.74.76.80.86.89.132　カ…132.139.142.143.168
キ…148.149.150.151.157.163.166.170　ケ…33.39.44.122.132　コ…132.139.142.143.168　サ…148.149.150.151.157.163.166.170　シ…34.51.109.110.119
ス…59.60.71.75.85.93.132.186　セ…59.60.71.75.85.93.132.186

周辺遺跡掲載文献一覧

1　㈶長野県埋蔵文化財センター　1988　『長野県埋蔵文化財センター　年報』5
2　㈶長野県埋蔵文化財センター　1989　『長野県埋蔵文化財センター　年報』6
3　㈶長野県埋蔵文化財センター　1990　『長野県埋蔵文化財センター　年報』7
4　㈶長野県埋蔵文化財センター　1991　『長野県埋蔵文化財センター　年報』8
5　㈶長野県埋蔵文化財センター　1992　『長野県埋蔵文化財センター　年報』9
6　㈶長野県埋蔵文化財センター　1993　『長野県埋蔵文化財センター　年報』10
7　㈶長野県埋蔵文化財センター　1994　『中央自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書13　更埴市内・長野市内その1　鳥林遺跡　小坂西遺跡　鶴萩七尋岩陰遺跡　赤沢城跡　塩崎城見山砦遺跡　地之目遺跡　一丁田遺跡』
8　㈶長野県埋蔵文化財センター　1994　『中央自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書14　長野市内その2　鶴前遺跡』
9　㈶長野県埋蔵文化財センター　1994　『長野県埋蔵文化財センター　年報』11
10　㈶長野県埋蔵文化財センター　1995　『長野県埋蔵文化財センター　年報』12
11　㈶長野県埋蔵文化財センター　1996　『上信越自動車道　埋蔵文化財発掘調査報告書7　長野市内その5　大星山古墳群北平1号墳』
12　㈶長野県埋蔵文化財センター　1996　『上信越自動車道　埋蔵文化財発掘調査報告書23　更埴市内その2　長野県屋代遺跡群出土木簡』
13　㈶長野県埋蔵文化財センター　1996　『長野県埋蔵文化財センター　年報』13
14　㈶長野県埋蔵文化財センター　1997　『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書22　更埴市内その1　清水製鉄遺跡　大穴遺跡』
15　㈶長野県埋蔵文化財センター　1997　『中央自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書15　長野市内その3　石川条里遺跡』
16　㈶長野県埋蔵文化財センター　1997　『中央自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書16　長野市内その4　篠ノ井遺跡群』
17　㈶長野県埋蔵文化財センター　1997　『長野県埋蔵文化財センター　年報』14
18　㈶長野県埋蔵文化財センター　1998　『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書3　更埴市内　更埴条里遺跡　屋代遺跡群』
19　㈶長野県埋蔵文化財センター　1998　『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書25　更埴市内その4　更埴条里遺跡・屋代遺跡群　－弥生・古墳時代編－』
20　㈶長野県埋蔵文化財センター　1998　『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書4　長野市内その1　篠ノ井遺跡群　石川条里遺跡　築地遺跡　於下遺跡　今里遺跡』
21　㈶長野県埋蔵文化財センター　1998　『長野県埋蔵文化財センター　年報』15
22　㈶長野県埋蔵文化財センター　1999　『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書26　更埴市内その5　更埴条里遺跡・屋代遺跡群　－古代1編－』

23	財長野県埋蔵文化財センター	2000	『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書27　更埴市内その６　更埴条里遺跡・屋代遺跡群　－古代２、中・近世編－』
24	財長野県埋蔵文化財センター	2000	『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書28　更埴市内その７　更埴条里遺跡・屋代遺跡群　－縄文編－』
25	磯崎正彦	1959	「長野県篠ノ井市伊勢宮遺跡の古式弥生土器」『信濃』Ⅲ-11-６
26	塩崎村史刊行会	1971	『塩崎村史』
27	岡田正彦	1969	「長野県更埴市荒井遺跡採集の一括資料」『信濃』Ⅲ-21-11
28	岡田正彦	1970	「長野県更埴市屋代大塚遺跡調査報告」『信濃』Ⅲ-22-４
29	岡田正彦	1971	「長野県更埴市屋代馬口遺跡調査報告」『信濃』Ⅲ-23-５
30	岡田正彦	1973	「長野県更埴市馬口遺跡出土の線刻手付水瓶」『長野県考古学会誌』５
31	岡田正彦	1977	「城之内遺跡」『日本考古学年報24』
32	岡田正彦・竹内三千夫	1972	「更埴市大字八幡青木遺跡発掘調査報告」『長野県考古学会誌』14
33	下平秀夫	1968	「川柳将軍塚古墳発見の堝輪円筒棺をめぐって」『信濃』Ⅲ-20-４
34	下平秀夫	1970	「長野県更埴市条原池尻遺跡調査概報(2)」『信濃』Ⅲ-22-４
35	鵜原宏行・高崎光司ほか	1979	「善光寺平南部における古墳の突測調査」『信濃』Ⅲ-31-12
36	丸山敏一郎	1974	「善光寺平南縁の自然堤防上の遺跡について」『信濃』Ⅲ-26-５
37	丸山敏一郎	1976	「善光寺平南縁の古墳立地について」『信濃』Ⅲ-28-４
38	丸山敏一郎	1976	「更埴市島・道前の土坑墓」『長野県考古学会誌』26
39	宮下健司	1979	「長野県川柳将軍塚古墳をめぐる古文献」『信濃』Ⅲ-31-９
40	宮下健司	1985	「長野県石川条里周辺における原始・古代の空間構造」『信濃』Ⅲ-37-９
41	宮本邦基	1934	「長谷寺発掘金環の経緯に就て」『信濃』Ⅰ-３-６
42	宮本邦基	1939	「信濃国篠ノ井町発見の子持ち勾玉」『中部考古学会報』４-１
43	桐原　健	1966	「長野県更埴市稲荷山湯の峠一本松古墳覚書」『信濃』Ⅲ-18-９
44	桐原　健	1979	「川柳将軍塚古墳の再認識」『千曲』23
45	桐原健・松尾昌彦	1984	「長野県飯綱社古墳の出土遺物」『信濃』Ⅲ-36-４
46	戸倉町教育委員会	1990	『円光院遺跡－更級地区県営は場整備事業に伴う緊急発掘調査報告書－』
47	戸倉町教育委員会	1990	『三島平遺跡』
48	戸倉町教育委員会	1993	『三島平遺跡Ⅱ』
49	戸倉町誌編纂委員会	1999	『戸倉町誌第二巻歴史編上』
50	戸倉町誌編纂委員会	1999	『戸倉町誌第二巻歴史編上　戸倉町の遺跡図』
51	更級埴科地方誌刊行会	1978	『更級埴科地方誌　第２巻　原始古代中世編』
52	更埴市教育委員会	1961	「城ノ内－信州千曲河岸の土師式集落の研究－」
53	更埴市教育委員会	1969	『生仁』
54	更埴市教育委員会	1970	「下条・氷厩遺跡－長野県更埴市の古代集落遺跡発掘調査報告書－」
55	更埴市教育委員会	1973	『長野県森将軍塚古墳』
56	更埴市教育委員会	1977	『長野県更埴市大字八幡青木遺跡発掘調査報告書』
57	更埴市教育委員会	1978	『屋代馬口Ｋ－長野県更埴市屋代遺跡群馬口Ｋ遺跡緊急発掘調査報告書－』
58	更埴市教育委員会	1978	『更埴市建物杉ノ木古墳発掘調査報告』
59	更埴市教育委員会	1981	『更埴市栗佐遺跡群五輪堂遺跡－長野県屋代南高等学校地点試掘確認調査報告書－』
60	更埴市教育委員会	1982	『更埴市栗佐遺跡群五輪堂遺跡Ⅱ－長野県屋代南高等学校地点発掘調査報告書－』
61	更埴市教育委員会	1983	『長野県更埴市横沢遺跡群Ⅰ－横沢地区は場整備に伴う発掘調査報告書－』
62	更埴市教育委員会	1983	『横沢遺跡群Ⅰ－横沢地区は場整備に伴う発掘調査報告書－』
63	更埴市教育委員会	1984	『長野県更埴市横沢遺跡群Ⅱ－横沢地区は場整備に伴う発掘調査報告書－』
64	更埴市教育委員会	1984	『長野県更埴市八幡遺跡群北精付遺跡－西部沖口場整備に伴う発掘調査報告書－』
65	更埴市教育委員会	1984	『大宮遺跡－雨宮転作促進研修センター建設に伴う発掘調査報告書－』
66	更埴市教育委員会	1984	『横沢遺跡群Ⅱ－横沢地区は場整備に伴う発掘調査報告書－』
67	更埴市教育委員会	1985	『長野県更埴市市神遺跡Ⅱ－長野信用金庫屋代支店建設に伴う発掘調査報告書－』
68	更埴市教育委員会	1985	『長野県更埴市横沢遺跡群Ⅲ－横沢地区は場整備に伴う発掘調査報告書－』
69	更埴市教育委員会	1985	『本誓寺遺跡調査の概要』
70	更埴市教育委員会	1985	『長野県更埴市社宮司遺跡－西部沖県営は場整備に伴う発掘調査報告書－』
71	更埴市教育委員会	1985	『更埴市栗佐遺跡群五輪堂遺跡Ⅲ－屋代南高校改築に伴う発掘調査報告書－』
72	更埴市教育委員会	1985	『横沢遺跡群Ⅲ－横沢地区は場整備に伴う発掘調査報告書－』
73	更埴市教育委員会	1985	『雨沖遺跡Ⅱ－長野信用金庫屋代支店建設に伴う発掘調査報告書－』
74	更埴市教育委員会	1986	『屋代遺跡群馬口遺跡－長野県屋代高等学校改築に伴う発掘調査報告書－』
75	更埴市教育委員会	1987	『更埴市栗佐遺跡群五輪堂遺跡Ⅳ－長野県屋代南高等学校特別教室棟建設に伴う発掘調査報告書－』
76	更埴市教育委員会	1987	『屋代遺跡群馬口遺跡Ⅱ－長野県屋代高等学校体育館建設に伴う発掘調査－』
77	更埴市教育委員会	1987	『北中原遺跡－市営住宅屋代団地建設に伴う発掘調査報告書－』
78	更埴市教育委員会	1987	『更埴市倉科地区・八幡地区工業団地計画地点調査報告書』
79	更埴市教育委員会	1988	『長野県更埴市屋代遺跡群－更埴条里水田址詳細分布調査報告書－』

80　更埴市教育委員会　1988『屋代遺跡群馬口遺跡Ⅲ－長野県屋代高等学校プール等建設に伴う発掘調査報告書－』
81　更埴市教育委員会　1988『城ノ内遺跡Ⅲ』大境遺跡Ⅲ』
82　更埴市教育委員会　1988『大境遺跡－中部電力幌送電用鉄塔建設に伴う発掘調査報告書－』
83　更埴市教育委員会　1988『北中原遺跡Ⅱ－市営住宅屋代団地建設に伴う発掘調査報告書－』
84　更埴市教育委員会　1988『白石・石原Ａ・峯遺跡－県営工業団地建設に伴う確認調査報告書－』
85　更埴市教育委員会　1988『五輪堂遺跡Ⅴ－屋代南高校改築に伴う発掘調査報告書－』
86　更埴市教育委員会　1989『長野県更埴市屋代遺跡群馬口遺跡Ⅳ－長野県屋代高等学校合宿所建設に伴う発掘調査報告書－』
87　更埴市教育委員会　1989『長野県更埴市小島遺跡－都市計画道路駅前線工事に伴う発掘調査報告書－』
88　更埴市教育委員会　1989『長野県更埴市　生仁遺跡Ⅲ－県営消雪地区落水防除事業に伴う発掘調査報告書－』
89　更埴市教育委員会　1990『平成元年度　更埴市埋蔵文化財調査報告書』
90　更埴市教育委員会　1990『外西川原遺跡』
91　更埴市教育委員会　1991『城ノ内遺跡Ⅲ　荒井遺跡Ⅱ』
92　更埴市教育委員会　1991『舞台遺跡－県営は場整備事業西部沖地区姥捨工区工事に伴う発掘調査報告書－』
93　更埴市教育委員会　1991『南沖遺跡Ⅲ・五輪堂遺跡Ⅵ－更埴警察署庁舎官舎建設工事に伴う発掘調査報告書－』
94　更埴市教育委員会　1992『屋代清水遺跡－県立歴史館建設に伴う発掘調査報告書－』
95　更埴市教育委員会　1992『史跡　森将軍塚古墳－保存整備事業発掘調査報告書－』
96　更埴市教育委員会　1994『長野県更埴市屋代遺跡群　大境遺跡Ⅳ・Ⅴ　中部電力雨宮変電所・鉄塔建設に伴う発掘調査報告書』
97　更埴市教育委員会　1995『長野県更埴市　屋代城跡範囲確認調査報告書』
98　更埴市教育委員会　1995『更埴条里水田跡高月地点遺跡－森地区農業集落排水終末処理場建設に伴う発掘調査報告書－』
99　更埴市教育委員会　1995『大境遺跡Ⅵ－オリオン機械鋪倉庫建設に伴う発掘調査報告書－』
100　更埴市教育委員会　1995『荒井遺跡Ⅲ　官衙遺跡』
101　更埴市教育委員会　1995『坪山遺跡・判官塚古墳－県営は場整備事業西部沖地区長尾根工区工事に伴う発掘調査報告書－』
102　更埴市教育委員会　1995『平成５年度　更埴市埋蔵文化財調査報告書』
103　更埴市教育委員会　1996『城ノ内遺跡Ⅳ』
104　更埴市教育委員会　1996『町浦遺跡－大東建託鋪倉庫建設に伴う発掘調査報告書－』
105　更埴市教育委員会　1996『諏訪南沖遺跡Ⅲ－西友更埴店建設に伴う発掘調査報告書－』
106　更埴市教育委員会　1996『城ノ内遺跡Ⅳ－長野電子工業鋪新工場建設に伴う発掘調査－』
107　更埴市教育委員会　1998『町浦遺跡Ⅱ－大東建託鋪倉庫建設に伴う発掘調査報告書－』
108　更埴市教育委員会　1998『猫ノ崎遺跡・一本松古墳－稲荷山公園建設に伴う発掘調査報告書－』
109　更埴市教育委員会　1998『平成９年度　更埴市埋蔵文化財調査報告書』
110　更埴市史編纂委員会　1994『更埴市史　第１巻　古代・中世編』
111　依藤慶二　1977『長野市四ッ谷遺跡出土の須恵器』『長野県考古学会誌』29
112　笹沢　浩　1971『長野市篠ノ井囲内古墳出土の壁画』『長野』38
113　笹沢　浩　1975『長野市四ッ谷遺跡出土の後期弥生式土器』『信濃考古』39
114　笹沢　浩・岡田正彦　1978『更埴市城之内遺跡』『信濃考古』27
115　矢中隆・山田昌久　1987『長野市田野口大塚古墳の測量調査』『信濃』Ⅲ-39-４
116　小林秀夫　1975『善光寺平における積石塚古墳の諸問題』『長野県考古学誌』21
117　小林秀夫　1976『長野市四ッ谷特殊遺構の遺物』『信濃考古』36
118　信濃史料刊行会　1956『信濃史料』　第一巻（上・下）
119　森嶋　稔・米山一政　1964『長野県更埴市桑原地尻遺跡調査報告(1)』『上代文化』34
120　森嶋　稔　1976『銅鐸及び石製模造鉾』『篠ノ井市指定文化財調査報告書』
121　森嶋　稔　1981『信濃経塚資料にみる二・三の課題』『信濃』Ⅲ-33-12
122　森本六爾　1929『川柳将軍塚の研究』
123　大室古墳群調査会　1970『信濃大室古墳群北支群緊急発掘調査報告書』
124　大塚初重　1964『信濃大室古墳群』『古代学研究』30
125　大塚初重　1969『信濃大室古墳群』『考古学集刊』４-３
126　大塚初重・小林三郎・石川日出志　1993『信濃大室　積石塚古墳の研究　Ⅰ』
127　竹丸三千夫　1974『長野市松代町清野四ッ谷遺跡の古式土師』『信濃』Ⅲ-26-２
128　長野遺跡分布図
129　長野県教育委員会　1968『地下に発見された更埴条里遺構の研究』
130　長野県教育委員会　1983『長野県の中世城郭跡　分布調査報告書』
131　長野県史刊行会　1981『長野県史　考古資料編』　全１巻(1)遺跡地名表
132　長野県史刊行会　1982『長野県史　考古資料編』　全１巻(2)主要遺跡（北・東信編）
133　長野県史刊行会　1986『長野県史　通史編』　第２巻　中世
134　長野県史刊行会　1988『長野県史　考古資料編』　全１巻(4)遺構・遺物
135　長野県史刊行会　1989『長野県史　通史編』　第１巻　原始・古代

136　長野県町村誌刊行会　1985『長野県町村誌』
137　長野市・更埴市教育委員会　1987『土口将軍塚古墳－重要遺跡確認緊急調査－』
138　長野市教育委員会　1974『長礼山２号墳発掘調査略報』
139　長野市教育委員会　1978『塩崎遺跡群－塩崎小学校地点遺跡　第１次調査報告－』
140　長野市教育委員会　1978『田中沖遺跡　第１次発掘調査概報』
141　長野市教育委員会　1978『中村遺跡－松代西条小学校地点遺跡の調査報告－』
142　長野市教育委員会　1979『塩崎遺跡群－塩崎小学校地点遺跡　第２次調査報告－』
143　長野市教育委員会　1980『四ッ屋遺跡（１～３次）・穂岡遺跡・塩崎遺跡群（第３次）』
144　長野市教育委員会　1980『篠ノ井遺跡群－大規模自転車道地点遺跡の調査報告－』
145　長野市教育委員会　1981『箱清水遺跡・大峯遺跡・大清水遺跡』
146　長野市教育委員会　1981『湯谷古墳群・長礼山古墳群・駒沢新町遺跡』
147　長野市教育委員会　1981『長野・大室古墳群－分布調査報告書－』
148　長野市教育委員会　1983『浅川扇状地遺跡群向諏訪遺跡・川田条里的遺構・石川条里的遺構』
149　長野市教育委員会　1984『石川条里的遺構・上駒沢遺跡』
150　長野市教育委員会　1985『石川条里的遺構(3)（付・上駒沢遺跡）』
151　長野市教育委員会　1985「長野市二ツ柳埋没水田址の調査」『信濃』Ⅲ-37-9
152　長野市教育委員会　1986『塩崎遺跡　Ⅵ－市道松節－小田井神社地点遺跡－』
153　長野市教育委員会　1987『塩崎遺跡　Ⅴ　殿屋敷遺跡－角間地区市道改良事業地点－』
154　長野市教育委員会　1987『横田遺跡群　富士宮遺跡　鉄塔建設に伴う緊急発掘報告』
155　長野市教育委員会　1988『町田田遺跡』
156　長野市教育委員会　1989『長野市塩崎鶴前遺跡・塩崎城跡－中部電力　俯送電用鉄塔建設に伴う発掘調査報告書－』
157　長野市教育委員会　1989『石川条里遺跡(4)』
158　長野市教育委員会　1989『篠ノ井遺跡群Ⅱ－市道山崎唐須線地点－』
159　長野市教育委員会　1989『松代城跡－平成元年度発掘調査概報－』
160　長野市教育委員会　1989『中条遺跡－長野県松代高等学校体育館建設事業地点－』
161　長野市教育委員会　1990『篠ノ井遺跡群Ⅲ－中部電力北信坂城線鉄塔地点・長野市営塩崎体育館地点－』
162　長野市教育委員会　1990『屋代遺跡Ⅱ－国補中小河川綿川改修事業地点－』
163　長野市教育委員会　1991『塩崎遺跡群(5)・塩崎遺跡群市道篠ノ井南253号線地点・石川条里遺跡(5)－石川条里遺跡消防塩崎分署地点－』
164　長野市教育委員会　1991『田中沖遺跡Ⅱ　長野市神明広田区圃整備事業地点』
165　長野市教育委員会　1991『松原遺跡　長野南農業共同組合集荷場施設建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
166　長野市教育委員会　1991『石川条里遺跡(6)－篠ノ井西部地区県営圃場整備事業にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書－』
167　長野市教育委員会　1992『篠ノ井遺跡群(4)－屋川堤防地点－』
168　長野市教育委員会　1992『塩崎遺跡群(7)塩崎小学校・水泳プール改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
169　長野市教育委員会　1992『南宮遺跡』
170　長野市教育委員会　1993『石川条里遺跡(7)長野市北野土地改良区圃整備事業　県営住宅みこと川団地建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
171　長野市教育委員会　1993『松原遺跡Ⅱ－市道松代東111号線地点－』
172　長野市教育委員会　1993『松原遺跡Ⅲ　主要地方道中野更埴線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
173　長野市教育委員会　1993『上見林遺跡　主要地方道長野信州新線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
174　長野市教育委員会　1993『田牧居畑遺跡－長野県住宅供給公社稲里住宅団地造成地地点－』
175　長野市教育委員会　1993『史跡　松代藩主真田家菩所－宗教法人長国寺廟屋建設に係る現状変更に伴う発掘調査報告書－』
176　長野市教育委員会　1994『篠平遺跡・宮ノ下遺跡－更埴カントリークラブ造成事業に伴う緊急発掘調査報告書－』
177　協本事一責任編集　1980『日本城郭体系』　第８巻　長野・山梨　新人物往来社
178　日本窯業史研究所　1977『長野市松代　原地遺跡』
179　米山一政　1966「中郷神社前方後円墳」『篠ノ井指定文化財調査報告書』
180　米山一政　1971『竹原笹塚古墳』『長野市の文化財』
181　米山一政　1973『雪聞大塚古墳』『長野県指定文化財調査報告』４
182　米山一政　1973『桑根井空塚』『長野県指定文化財調査報告書』４
183　米山一政　1976『長礼山１号古墳』『日本考古学年報』27
184　本村豪章　1972『長野市篠ノ井光林寺裏出土遺物の研究』『MUSEUM』254
185　矢口忠良　1968『長野県更埴市桑原地区太田屋向山古窯址出土須恵器について』『信濃』Ⅲ-20-７
186　矢島宏雄　1978「馬背を出土した更埴市五輪堂遺跡」『長野県考古学会誌』31
187　林　和男　1985「矢作山経塚出土の経筒」『長野』123
188　郷土出版社　1994『信州の大遺跡』

第３節　遺跡周辺の地形、地質環境

１　善光寺平南部の地形・地質環境

(1)　長野盆地南部の地形（図13）

長野盆地は南北長さ40km、東西幅８～10km、標高330～400ｍの紡錘形をした盆地である。西側は西部山地、東側は河東山地に明瞭に区分される。盆地の周辺は流入する中小河川の扇状地で埋められる。長野市街地の中心部は裾花川扇状地上に発達し、盆地南部は犀川扇状地からなる。盆地の中央部を南北に流れる千曲川は、それらの扇状地の発達に影響され自由蛇行している。

千曲川氾濫原上には、自然堤防や旧河道の砂堆・中州などの微高地と旧河道・後背湿地などの微低地があり、微地形を形成している。千曲川は更埴市稲荷山・八幡付近で河床勾配を１/1000ｍと緩め、北西から北東方向へ流れの向きを変え、蛇行を始める。千曲川の左岸側には八幡、稲荷山、塩崎、平久保、旧篠ノ井（東篠ノ井、横田）、東福寺にかけて大規模な自然堤防が発達し、その西側には後背湿地が発達する。右岸側も雨宮・清野・松代・牧島の自然堤防とその東側には後背湿地となる湧入低地が形成されている。

図13　長野盆地の地形（「中部地方Ⅰ」赤羽、花岡1988に加筆）

(2)　遺跡周辺の地形・地質（図13・図14）

長野盆地東側の河東山地は壮年期の浸食地形を示す。河東山地から延びる主な尾根は北西―南東方向に延び、さらに枝状に小さな尾根が広がる。山麓線は入り組んでおり、千曲川氾濫原と山地との境界線はリアス式海岸線のようである。更埴条里遺跡はその枝状に広がる一重山と唐崎山の尾根に囲まれた大規模な後背湿地に位置し、屋代遺跡群は更埴条里遺跡の北側に形成されている雨宮の自然堤防上に位置する。発掘地は自然堤防と後背湿地をちょうど南北に縦断するように設定されている。

地形区分　自然堤防の頂部は北西―南東方向に傾斜が見られ、屋代高校北部で標高357.5ｍ、屋代工業団地周辺では長野電子工業辺りで標高356.7ｍ、雨宮集落では長野電鉄河東線雨宮駅の南部にある雨宮坐日吉神社の辺りで標高355.9ｍである。雨宮の自然堤防の北・西側には比高約１～1.5ｍの明瞭な小崖が発達し、崖に沿って幅約50ｍ～180ｍ、長さ約５kmにわたって数本の明瞭な旧河道が確認できる。旧河道の一部には発掘調査所見により、河道の存続時期のわかるものもある。この小崖をもって氾濫原をⅠ群・Ⅱ群に区分した。Ⅰ群は細粒のシルト～粘土の堆積物を主とし、Ⅱ群はそれより粗粒の砂～シルトの堆積物からなる。更埴条里遺跡は後背湿地Ⅰ群に、屋代遺跡群は自然堤防Ⅰ群に、篠河原遺跡は旧河道に囲まれた自然堤防Ⅱ群に位置する。自然堤防Ⅰ群と後背湿地Ⅰ群とは地形的にも地質的にも連続しており、境界は

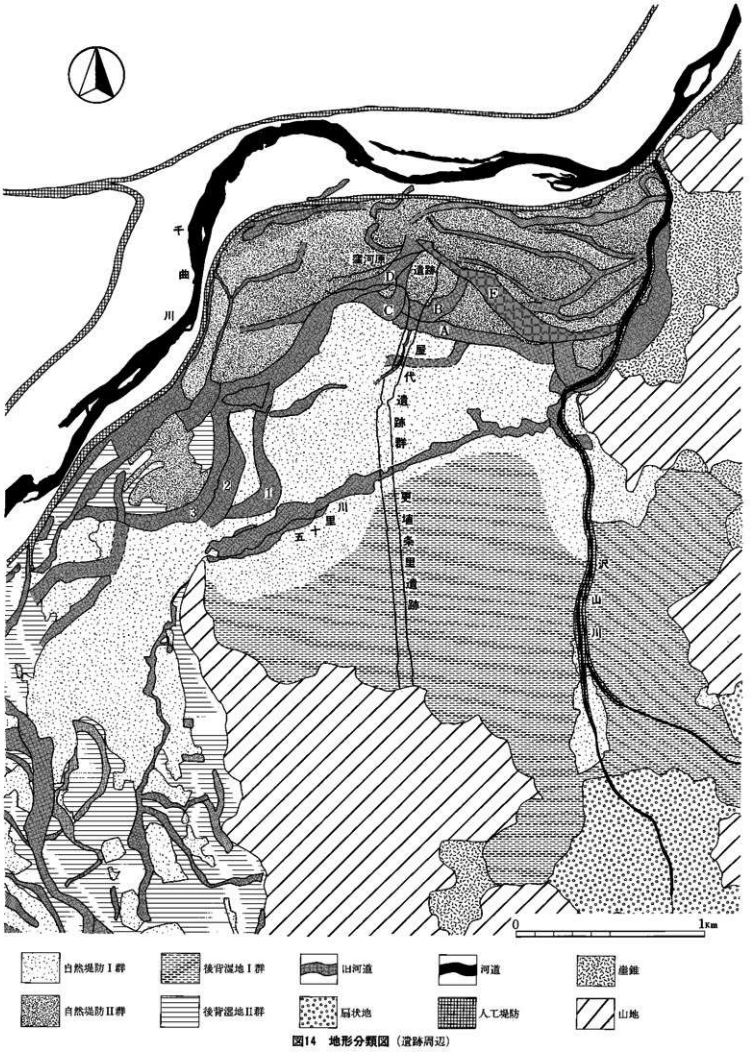


図14　地形分類図（遺跡周辺）

不明瞭である。発掘で得られた所見では後背湿地Ⅰ群と区分されている中にも古代の集落域が存在する。地形分類図では古代８期前半（Ⅲ層洪水砂堆積）以前の集落域と水田域の境付近を境界とした。後背湿地は全体的に北西部から南東部へ傾斜しており、標高は最も高いところで一重山の東側の357ｍ、最も低いところで森、中河原の西側で354ｍである。

埋没微地形　自然堤防上にも後背湿地上にも、周囲よりやや高い微高地や、やや低い帯状の凹地が認められる。自然堤防上の帯状凹地は後背湿地上のものと比べ目立つ。河川の働きにより削りこまれた跡である。河道または水路として機能していたものと考えられる。規模の大きなものは埋没地形として現地表面にまで影響を与え、微地形・土地利用などに違いを見せているものもある。今回加筆・修正した地形区分図では発掘調査によって得られた埋没微地形のデータを新たに加えた。

屋代遺跡群④区の調査では弥生時代から古墳時代前期と思われる溝跡（SD4530）が検出された。非常に浅く、下位にも大きな削り込みはみられない。しかし現地表面においてこの付近は自然堤防上でもやや低くなること、屋代高校北側にも帯状に低い部分が見られること、土口バイパス（更埴市教育委員会）調査においても現水田地の部分は遺構が磯になっていることから、この部分は自然堤防上の帯状の凹地であり、かつて細流の働きによって流水があったことも考えられる。

屋代中学校の校庭で地表面の観察からは不明であったが、校舎新設地における大塚遺跡（更埴市教育委員会1999）の調査においては、古墳時代の流路と思われる大溝の形が確認されている。やや北東に離れた新幹線調査では、長野電鉄河東線の踏み切り付近に流路の一部が確認されている。この流路はかなり規模が大きいようだが、自然堤防Ⅰ群とⅡ群を区別してきたような明瞭な崖は形成していない。

一般的に自然堤防上＝居住域、後背湿地上＝生産域（この場合水田域）とされるが、沖積地における地形面も平坦ではなく、自然堤防上でもより高所に居住域が営まれ、微低地は水田域として利用される。同様に後背湿地上でもその中の微高地には住居が建てられることもある。

千曲川の旧河道　自然堤防Ⅰ群とⅡ群を区分するような旧河道は、その規模・大きさからみて千曲川の旧河道といえる。調査所見により旧河道は古い順にＡ、Ｂ、Ｃ、Ｄ、Ｅと確認できる。旧河道Ａは古墳時代中期には河道であったが、７世紀後半には早くも埋没し水田化がはじまる。調査は下部まで達することができず、削り込まれた時期は不明であるが、屋代遺跡⑥区では縄文時代晩期の包含層を削っていることや大境遺跡では古墳時代前期の住居を切っている（更埴市教育委員会1995）ことから、古墳時代頃と考えられる。崖より北側では推定でも現地表面より５ｍは削っていると思われ、縄文時代の包含層はない。この深さは現在の千曲川の水面の標高とほぼ一致する。旧河道Ｂは９世紀後半の洪水砂層（Ⅲ層）を削って存在し、中世までには埋没してしまっている。よって平安時代後期の流路であった可能性が高い。旧河道Ｃ・Ｄとも洪水砂よりも新しい。旧河道ＣではⅢ－１層に対応するのは砂礫層であり、旧河道Ｄはトレンチ調査で近世の水田跡が確認されている。旧河道ＡとＥの間、長野電鉄河東線雨宮駅の北側には「雨宮の渡し」の碑がある。中世後半の川中島合戦における伝承地で、それが正しいとすれば旧河道Ｅは中世後半に河道であった可能性がある。また、屋代高校北側の一丁田尻遺跡における旧河道（旧河道番号なし）では洪水砂は堆積しておらず、中世の水田？が存在するようである（更埴市教育委員会1999）。

五十里川　五十里川は戸倉町徳間地籍で屋代堰として千曲川から取水され戸倉町内川の東方で戸倉用水と合わせて五十里川となる。中州状の微高地の間をぬうように旧河道の微低地の中を流れ、屋代の市街地を通り一重山で東西方向に流れを変えて雨宮の自然堤防と後背湿地とのほぼ境を流れる。唐崎山西方で沢山川と合流する。現在は河川改修が進み直線的であるが、かつては自然の姿で流れ小さな解析谷を形成していた。調査では河道中央にまで達しなかったが、屋代遺跡群①区側の最下層からは、９世紀以前にさかのぼる遺物は見つかっていない。条里型地割や更埴条里遺跡Ｋ地区集落のあり方から見ても、五十里川の河

谷が深く刻まれるのは、９世紀末以降の可能性が大きい。

崖錐扇状地　森・倉科にはそれぞれ鏡台山・三滝山から流れ出る沢山川・三滝川による表面勾配36／1000の急傾斜の崖錐扇状地が形成されており、集落はその斜面上に立地する。生産・土口は崖錐性の堆積物が

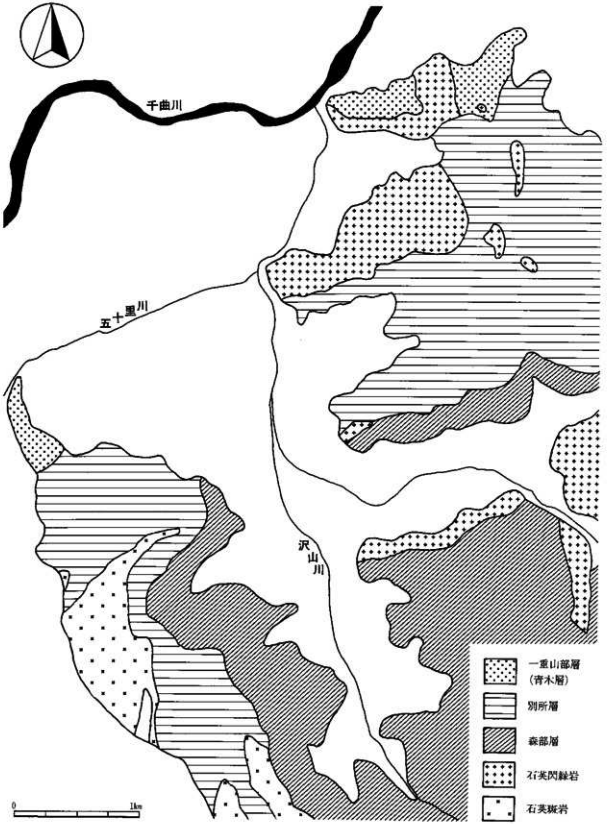


図15　遺跡周辺の地質（加藤・赤羽1986に加筆）

押し出し地形を作る。沢山川は三滝川を途中、東小学校あたり（かつては少し下流の生仁）で合流し、笹崎（薬師山の先）で千曲川と合流する。沢山川は天井川となり、周囲に徴高地を形成している部分もある。

新第三系の地質　河東山地には中新世の堆積岩と貫入岩類が分布し石材として利用されている。中新世前期～中期の内村層上部に相当する横尾部層、森・豊栄部層は、緑色凝灰岩・凝灰角礫岩と黒色頁岩・砂岩からなる。森部層の模式地は更埴市森の沢山川上流である。倉科周辺一大峰山周辺一沢山川周辺に分布する。黒色頁岩層の新鮮な部分はかなり硬質である。中新世中期の別所層は更埴市森将軍塚古墳付近採石場を模式地とし、主に河東山地から長野盆地へ鋸歯状に突出した尾根に分布する。黒色頁岩を主体とするが、最下部・中・上部は緑色凝灰岩が主である。森部層の黒色頁岩と肉眼では区別がつかないが、森部層の方が硬質であると感じられる。遺跡で出土する石器の石材は森部層または別所層の黒色頁岩を使用していると思われる。

中新世貫入岩類は長野盆地底には分布しない。中新世中期から後期に何回かに分けて貫入した石英閃緑岩は更埴条里遺跡・屋代遺跡群の東方約２～３kmの更埴市生萱、土口、倉科に分布する。生萱には大正時代に設置された採石場があり、石英閃緑岩は生萱石と呼ばれ主に間知石や割栗石として利用されていた。縄文時代中期後葉の敷石住居、古代の竪穴住居のカマド石、礎石などはこの石英閃緑岩を使用している。

調査地南方の有明山南東には白色～灰白色の大型石英の斑晶がみられる石英斑岩が分布する。

千曲川を挟んで対岸の西部山地に分布する中新世後期の小川層に相当する裾花凝灰岩部層も、カマド石の一部としてまれに使用されている。炭化物の付着や赤褐色の変色がみられ風化が著しいが、黒雲母・石英の斑晶の目立つ粗粒のこの凝灰岩は岩相からみて下部層にあたり、長野市四野宮、長谷付近に分布するものと考えられる。

２　更埴条里遺跡・屋代遺跡群・窪河原遺跡の層序

更埴条里遺跡・屋代遺跡群に分布する堆積層を発掘調査・道路公団ボーリングの資料を基に七ツ石層、反町層、屋代層の３つに大区分し、さらに屋代層を細分した。屋代層は地層命名規約（日本地質学会1952地質雑誌　58巻p.112-113）に基づいているが、七ツ石層・反町層はボーリング調査位置の小字名であるため今後変更の必要があるかもしれない。ボーリング資料は既にサンプリングから時間が経過しており、保存状態も悪く肉眼観察に耐えられないため、全て道路公団のボーリング調査報告書の結果を使用している。下位より順に説明する。

(1)　七ツ石層

模式地　更埴条里遺跡Ａ・Ｂ地区　ボーリング資料

分　布　更埴条里遺跡Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ地区

有機質の粘性土を主体とし砂質土、砂礫土との互層である。地表面下22.2～25.2ｍ以深から50.5ｍ（標高332～304ｍ付近）までは確認されている。層厚約27ｍである。下限は不明である。上位の反町層との間には不整合があると考えられる。

粘性土はDc1、Dc2、Dc3、Dc4に区分されている。Dc1は茶褐色の有機質粘土～腐植土で若干炭化した木片が点在する。Dc2は帯黒褐色～茶褐色の有機質粘土～シルトである。Dc3は茶褐色～灰色の有機質粘土～粘土である。Dc4は帯緑灰色の径１～２cmの角礫を混入する粘土である。Dc1～Dc3は腐植物を多量に混入する。粘土は部分的に含水大でやわらかい層準もあるが、全体的に含水少なく硬い。

砂質土は青灰色～黒灰色の中～粗粒砂、礫混じり中～粗粒砂である。礫は径５mm～２cm大の軽石を主とする。スコリアを多量に含み、まれに凝灰岩礫も含む。上位の反町層と比較すると相対的に高いＮ値が測

定された。

砂礫土は帯灰青色の径5～10㎜の亜円～円礫を主とし、マトリックスは粘土である。含水は少ない。

ボーリング調査結果に地質時代は更新世、地層区分は古期氾濫原堆積層と記載があることから、七ツ石層の堆積時期は20,000年以前と推定した。年代測定を行っていないので詳しいデータはない。

(2) 反町層

模式地　更埴条里遺跡F・G地区　ボーリング資料

分　布　更埴条里遺跡・屋代遺跡群全体に確認される。

層相は変化し更埴条里遺跡A・B地区は砂を主体とし砂礫層を挟み、他の地区は礫を主体とする砂礫層である。地表面下5.8m～11mから22m（標高348～332m付近）に分布し、層厚約9～16m程度である。下位の七ツ石層を不整合で覆い、上位の屋代層に不整合で覆われると考えられる。

公団資料では更埴条里遺跡F～G地区付近を主な分布としており、記載は以下の通りである。帯緑灰色、帯黒灰色、茶褐色の礫径2～5㎝の亜円～円礫を主とした砂礫層である。径7～10㎝の礫が点在し、砂をブロック状・縞状に取り込むこともある。マトリックスは中～粗粒砂で粘土分も多く認められる。更埴条里遺跡A・B地区～E地区にかけては層相変化し砂質土に漸移していると考えられる。

屋代遺跡群③、④区となると、帯青黒灰色、帯緑黒灰色、帯茶褐色の径2～5㎝の亜角～円礫を主体とする。径6～10㎝の礫が点在する。マトリックスはシルト～粗粒砂である。

年代測定は行われていないが、約10,000年前から20,000年前までと推定される。その理由として上位の下部屋代層の下部層準であるXVI層が縄文時代前期後葉の下島式土器を包含するため約5,000年前の年代が与えられること、ボーリング資料と調査での所見を合わせると反町層の最上部と下部屋代層のXVI層とのレベル差が5m程度であることから、堆積物の砂礫からシルトへの急激な変化を不整合面としてとらえるなら更新世一完新世の境？とするのが適当と思われる。

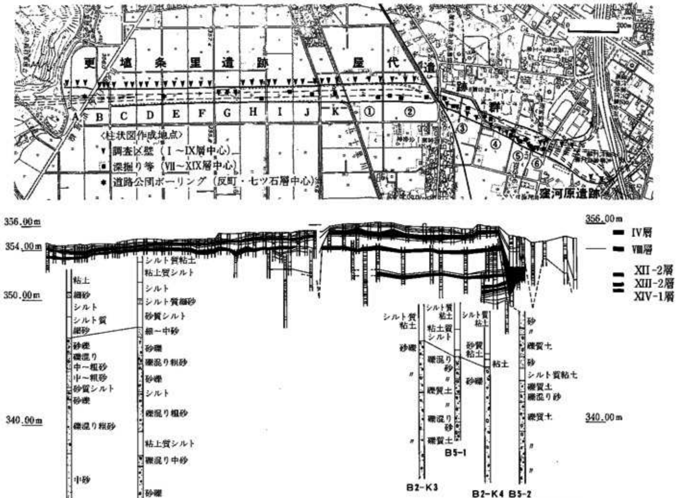
(3) 屋代層

模式地・分布　更埴条里遺跡・屋代遺跡群・窪河原遺跡全域

調査地全域に分布する完新世の堆積物である。発掘調査により上部・中部・下部の3つに分け、さらに色調・粒度、遺物の包含の有無などによってI層からXIX層に細分した。屋代層上部層はI層からIII層、屋代層中部層はIV層からVI層、屋代層下部層はVII層からXIX層である。窪河原遺跡での屋代層中部層が砂礫層であることを除けば屋代層はほとんどシルト～粘土質で、細粒の堆積物から構成されていることが大きな特徴である。更埴条里遺跡A地区と屋代遺跡群⑥区とでは同一の層準でも層相の変化はあるが、自然堤防の堆積物・後背湿地の堆積物といった明確な区分はできない（更埴条里遺跡A・B地区に分布するV層のみIV層と同時異相の関係にある）。一般的に自然堤防と背後の後背湿地との境は不明瞭なことが多いが、本遺跡では堆積物からの区分もできないのでより不明瞭になっている。

引用・参考文献

更科・塩科地方誌刊行会　1986『更科・塩科地方誌　自然編』
建設省北陸地方建設局千曲川工事事務所　1993『信濃の巨流　千曲川』
加藤碵一・赤羽貞幸　1986『長野地域の地質』地域地質研究報告（5万分の1地質図幅）地質調査所
大矢雅彦編　1983『地形分類の手法と展開』古今書院
赤羽貞幸　1995「最終氷期以降における長野盆地の古環境」『第四紀研究』27，p37-44



地質時代			層序		模式柱状図	層厚（m）	岩相	考古時代	遺構・遺物
第四紀	完新世	屋代層	上部層	Ⅰ		0.1～0.4	灰褐色、砂質シルト層	現代	
				Ⅱ		0～0.3（～3.1）	灰褐色、粘土質シルト層	中・近世	水田・畠・集落
				Ⅲ		0.1～0.5（～1.6）	１は黒褐色、２はにぶい黄褐～灰黄褐～灰褐色、細粒砂層	平安～中世	水田・畠・集落
			中部層	Ⅳ・Ⅴ		0.05～0.6（～2.7）	Ⅳは黒褐～暗褐～褐灰色、粘土質シルト　Ⅴは灰黄褐～オリーブ黒色、シルト混じり粘土層	飛鳥～平安	水田・畠・集落
				Ⅵ		0.04～0.3	黒褐色、粘土質シルト層	弥生～古墳	水田・集落
			下部層	Ⅶ		0.1～1.2	にぶい黄褐～褐色、砂質シルト層	縄文晩期後葉	焼土跡・土器・石器
				Ⅷ		0.1～0.3	黒褐～暗褐色シルト層	縄文晩期中葉	集落
				Ⅸ		0.5～1.1	にぶい黄褐～黄褐色、シルト層、砂層を挟む	縄文後期後半	焼土跡・土器・石器
				Ⅹ		0.2～0.5	にぶい黄褐～暗褐色、シルト層	縄文後期前半	焼土跡・土器・石器
				ⅩⅠ		0.2～0.5	にぶい黄褐～暗褐色、シルト～細粒砂層		焼土跡・土器・石器
				ⅩⅡ 1		0.3～0.6	にぶい黄褐色、シルト層	縄文後期前半	焼土跡・土器・石器
				2			黒褐色、シルト層	縄文中期後葉	集落
				3			にぶい黄褐色、シルト層		焼土跡・土器・石器
				ⅩⅢ 0		0.5～0.8	暗褐色、シルト層	縄文中期中葉	焼土跡・土器・石器
				1			灰褐～にぶい黄褐色、シルト層		焼土跡・土器・石器
				2			灰黄褐～暗オリーブ褐色、シルト層		集落
				3			暗灰黄褐色、シルト層		焼土跡・土器・石器
				ⅩⅣ 1		0.7～0.9	オリーブ黒色、シルト層、砂層を挟む	縄文中期前葉	集落
				2			にぶい黄褐～暗灰黄褐色、シルト層		焼土跡・土器・石器
				3			にぶい黄褐色、シルト層		焼土跡・土器・石器
				ⅩⅤ		0.2～0.5	暗オリーブ褐～灰色、シルト層		焼土跡・土器・石器
				ⅩⅥ		0.6	黒～灰色、シルト層	縄文前期後葉	焼土跡・土器・石器
				ⅩⅦ		0.6	黒～灰色、シルト層、しまりよい		
				ⅩⅧ		0.9	オリーブ黒～灰色シルト層、しまりよい	？	大形礫１点
				ⅩⅨ		0.4以上	オリーブ黒色、シルト層、しまりよい		
	更新世	反町層				14.7～17.6	砂礫層　砂主体（BKS）　礫主体（BYS）		
		七ツ石層				28.3以上	有機質粘土層		

図16　総合柱状図（『古代１編』を改訂）

井関弘太郎　1983 『沖積平野』東京大学出版会
日本道路公団関東第二建設局上田工事事務所　1989 『上信越自動車道　更埴地区第二次土質調査報告書』日本物理探査株式会社
日本道路公団関東第二建設局上田工事事務所　1992 『上信越自動車道　更埴JCTランプ橋構造物基礎調査総括報告書』（株）東京ソイルリサーチ
日本の地質「中部地方Ⅰ」編集委員会　1988 『中部地方Ⅰ』共立出版
更埴市史編纂委員会　1994 『更埴市史』 第１巻　古代・中世編
㈶長野県埋蔵文化財センター　1992 『長野県埋蔵文化財センター　年報』 8
㈶長野県埋蔵文化財センター　1993 『長野県埋蔵文化財センター　年報』 9
㈶長野県埋蔵文化財センター　1994 『長野県埋蔵文化財センター　年報』 10
㈶長野県埋蔵文化財センター　1996 『長野県屋代遺跡群出土木簡』
㈶長野県埋蔵文化財センター　1998 『更埴条里遺跡・屋代遺跡群－弥生・古墳編－』
㈶長野県埋蔵文化財センター　1999 『更埴条里遺跡・屋代遺跡群－古代１編－』
㈶長野県埋蔵文化財センター　1998 『新幹線　更埴条里遺跡・屋代遺跡群』
長野県教育委員会　1968 『地下に発見された更埴条里遺構の研究』
更埴市教育委員会　1995 『大境遺跡Ⅵ』
更埴市教育委員会　1999 『平成１０年度　更埴市埋蔵文化財調査報告書』

更埴条里遺跡Ｊ地区深掘り　堆積状況の調査

第3章　調査対象とした地層

第1節　層序区分

1　層序区分と各層の特徴

(1)　調査対象とした層の区分

調査対象とした層　調査対象としたのは屋代層（第2章第3節）のうち、安全の確保が可能と考えられたXIX層（トレンチ）までである。このうち、表土を除くII層～VII層上面までは全面調査を原則とした。これまでに遺構・遺物の有無に関する情報がなかったVII層以下（縄文時代に対応する層）については、先行トレンチで遺構・遺物の有無を確認し、その状況に応じて調査の方法を変更した。

大別層区分（ローマ数字）　調査の達した層を大きくⅠ～XIX層に分層した（付図2）。これらは、大半の地区で対応関係がつかめることを前提とした区分である。更埴条里遺跡から篠河原遺跡に至る地域は、後背湿地、自然堤防、旧河道を含んでおり、おのずと堆積環境、層相を異にしている。そのため、広範囲におよぶ洪水砂などの明確な層理面を基準とした。例えば、9世紀後半の洪水砂とその土壌化した層をIII層とし、その上層をII層、下層をIV層とした。IV層以下については、砂層による区分とともに、大半の調査関係者（作業員を含む）が明らかに黒色化していると共通理解できた層（VI層、VIII層……）を鍵層とした。層区分で混乱を起こすことなく調査を円滑に運ぶためである。また、V層は調査が進むにつれて、本来IV層に含まれるべき層との見解をえた。しかし、取り上げ遺物や図面の混乱をさけるためV層のままとした。

細別層区分　各地区で特有な層、あるいは他地区との対応関係に確証が持てない細別層は、ローマ数字の後に算用数字とアルファベットで記した。例えば、屋代遺跡群④・⑤区で区分できたXII-1層とXII-2層は、南部の調査地点では区分が難しくなり、また④・⑤区との対応関係が不明瞭であった。そのため、大きくXII層として一括したのち、明確に区分できた地区では、縄文後期前葉のXII-1層と縄文中期後葉のXII-2層に細別した。さらに、XII-1層は、上部の黒色化した部分と下部の黄褐色の部分に分離できた地点ではXII-1a層とXII-1b層に区分した。

このように、細別層名は各地区独自に上から1→2→3と付けており、必ずしも他地区と共通する層を示すとは限らない。例えば、篠河原遺跡H2区13トレンチのII-6層とH6区のII-6層は、全地区共通のII層の中で、各々の地区の6番目の層ということであり、同一層ではない。ただし、II-4層やXII-2層といった複数地区で共通する層については、その旨を記した。

また、細々別層区分で使用したa層、b層の表記は、上位層から順に付けたか、あるいは狭い範囲内での部分的な層などに使用しており、土壌学でいうa層、b層ではない。

こうした細別層名は、どの地区で付したものかを明確にするため、細別した地区名を明記した。例えば、集落域であった更埴条里遺跡K地区のIV-1層は水田域のIV-1層と土質が異なっているため、地区名であるKK（更埴条里遺跡K地区）を付しIV-KK-1層と記した。

縄文時代に対応する層のうち、区分の基準とした屋代遺跡群⑤区との対応関係が不明確であった地区の層については、大別層名も記さず上位から算用数字を付けた例がある。例えば、更埴条里遺跡A地区のX

層以下の砂層については、対応関係がつかめず、時期も限定できないため、12～18層と記した。この場合１～11層については対応関係がつかめたため、Ⅰ～Ⅹ層に表記を変更している（図17）。

層名の表記方法　複雑な表記となっているため、代表的な例を示しておく。

例１＞　更埴条里遺跡Ａ地区（KA）の、Ⅷ層上半部（２細分のうちの１番目）は、他地区と異なり湿地化？し、さらに上層水田の影響を受け白色斑紋などが見られた。このⅧ層上半部を、

Ⅷ－KA－１層　と表記している（図17）。こうした表記方法が基本的なパターンである。

例２＞　屋代遺跡群⑥区（Y6）のⅡ層のうち、上から１．２番目の層は窪河原遺跡の全地区で見られたⅡ-３、Ⅱ-４層と共通する。そのため、１．２番目の層は共通性を重視してⅡ-Y6-３とⅡ-Y6-４層としてある。３番目以下の層は対応関係が不明確であるため、上から順番にこの地区独自に数字をふっている。よって、Ⅱ層のうち上から４番目の層は、

Ⅱ-Y6-６層　と表記している（図19）。

例３＞　Ⅲ層は９世紀第４四半期の洪水砂であり、その土壌化した部分をⅢ-１層としている。窪河原遺跡H6区（U6）では、旧河道Ｂが Ⅲ層を切り込んでおり、旧河道Ａ以南に見られるようなⅢ層は存在していない。しかし、出土した遺物の年代ではⅢ-１層に対応する層が存在する。そのため、これらの層をⅢ-１層（対応層群）とし、その中をこの地区独自に上部から１～11に区分した。

また、この１～11がさらに、わずかな砂層、水田耕土、畠耕土などに細分できたため、小文字のアルファベットで表記した。例えば、Ⅲ-１層のうち上から６番目の水田耕土（a）は、

Ⅲ-U6-1.6a層　と表記している（図19）。

同様に畠耕土（b）は、Ⅲ-U6-1.6b層である。

図17～19に掲載していない細別層の注記に関しては、各分冊を参照していただきたい。

(2)　各層の特徴（付図２）

ここでは、大別層（ローマ数字）の特徴と時期について概略を記す。

Ⅰ層　ほ場整備（昭和40年代）以降の耕作土、盛土、カクランである。

Ⅱ層　９世紀第４四半期の洪水砂（Ⅲ層）の上部に堆積し、現代のカクランを受けていない層をⅡ層とした。後背湿地では層厚が薄くシルト質である。水田として利用されていた期間が長く、溶脱層と集積層のセット関係が見られる。自然堤防Ⅰ群高所（屋代遺跡群⑤区周辺）では黒色化しており、やや砂質になる。

屋代遺跡群⑥区以北の旧河道内では堆積量が多く、砂とシルトが互層となる。ここも水田として利用されており、溶脱と集積のセット関係が複数確認される。また、窪河原遺跡H2～H6区北部では、畠として利用されており、黒色化が進んだ畠耕土と、黄褐色に近いシルト～砂の層が互層となっている。屋代遺跡群⑥区以北で共通のⅡ-３層の砂は19世紀後半の洪水砂と推定される（第４章参照）。

Ⅲ層　９世紀第４四半期の洪水砂で、土壌化した黒褐色砂質土のⅢ-１層と下部の灰黄褐～黄褐色のⅢ-２層砂に分かれる。更埴条里遺跡Ａ地区から屋代遺跡群⑥区に存在し、河道が重複する窪河原遺跡では下部の砂礫層がⅢ層に対応すると考えられる。

Ⅳ層　明確に黒色化したⅥ層の上層に見られ、シルトを主体とした堆積層である。屋代遺跡群①・②区の一部ではⅥ層との境にわずかな砂層が存在した。Ⅳ層上部はⅢ層に被覆されている。屋代遺跡群⑥区旧河道Ａ内では、急速な埋積がはじまった段階以降をⅣ層とした。同じくⅢ層で被覆されている。時期は、古墳時代後期頃？（確定できる資料なし）から９世紀第４四半期にあたり、旧河道Ａ内では７世紀前半から９世紀第４四半期に形成された層である。広範囲にわたって水田化されており溶脱層と集積層の細分が可能

である。水田化されなかった屋代遺跡群④区北部から⑥区では黒褐色土の単層である。また、旧河道A内は洪水砂と水田耕土によってさらに細分した。窪河原遺跡では下部砂礫層が対応すると考えられる。

V層　更埴条里遺跡A～C地区でのみ見られる。泥炭層に近い（第6章第2節）黒色粘土～シルト層である。時期的にはIV層と並行し、下部はVI層に並行する可能性がある。弥生時代後期から平安時代の遺物を包含し、9世紀代の水HHが2面確認されている。

VI層　IV層の下位に位置し、更埴条里遺跡D地区から屋代遺跡群⑥区で明瞭に黒色化する。シルトを主体とし上部が黒褐色、下部が黄褐色を呈する。屋代遺跡群②～③区でさらに細分が可能であった。下位の砂層をもってVII層と分離した。VI層上面は古墳時代中期の水田面となっており、VII層との境では弥生時代前期並行期（水式）の遺構・遺物が見つかっている。窪河原遺跡ではVI層以下は不明である。

VII層　にぶい黄褐～褐色の砂を主体とする。屋代遺跡群の北部ほど粒度が粗くなり、堆積量も多くなる。若干粒度が細かくなり、暗い色調を示す細別層が認められる。上下は、シルト質で黒色化するVI層とVIII層に挟まれる。

VIII層　更埴条里遺跡A地区から屋代遺跡群⑥区で、明瞭に黒色化するシルトを主体とした層である。上位はVII層の砂層、下位はやや砂質化するIX層である。更埴条里遺跡A地区などの後背湿地で白色斑紋が認められるほかは、均質な層である。縄文時代晩期前半（佐野式）の遺構・遺物が認められる。

IX層　更埴条里遺跡A地区から屋代遺跡群⑥区で認められる。明瞭に黒色化するVIII層と、やや黒色化しシルト質となるX層の間層をIX層として一括した。全般的にはVII層に比べ細粒の砂が主体となる。屋代遺跡群の北部ほど粒度が粗くなる傾向が認められる。不明瞭ではあるが、土壌化部分が2～3層認められる。縄文時代後期（加曽利B式）の遺物や時期不明の遺構が認められる。

X層　砂質のIX層とXI層に挟まれ、土壌化していたシルト質の層をX層とした。更埴条里遺跡I地区から屋代遺跡群⑥区で確認できたが、更埴条里遺跡H地区以南については対応関係が不明確となる。にぶい黄褐～暗褐色を呈する。屋代遺跡群⑤区では2～3枚黒色化した層が見られ、間層に薄い砂の堆積が認められた。縄文後期（堀之内II式）の遺構と遺物が見つかっている。

XI層　砂層で、上部がやや黒みがかっている。遺構と遺物がわずかに確認されている。

XII－1層　屋代遺跡群④～⑥区で明確に区分できたが、それ以南の地区では区分と対応関係が不明瞭となるためXII層として一括した。XII層全体がシルト質となっており、黒色化した帯がXII－1a層とXII－2層である。XII－1a層では縄文後期（堀之内I式）の遺構と遺物が見つかっている。

XII－2～3層　屋代遺跡群④区～⑥区で確定できるが、それ以南については距離の離れたトレンチ断面同士での比較であるため、対応関係が明確ではない。他の層に比べ炭化物を多く含み、明瞭に黒色化したシルトがXII－2層である。下部の黄褐色シルト～細砂をXII－3とした。縄文時代中期後葉（加曽利E式併行期）の遺構と遺物を包含する。

XIII層　屋代遺跡群④～⑥区を基準とした。それ以南については対応関係が判然としない。明瞭に黒色化したシルトはXIII－2層である。また、その上下にも若干黒色化した層が認められ、XIII－1a層とXIII－3a層とした。間層はやや黄褐色を示す部分があるが、大半は色調・土質ともに区分が難しくなっている。XIII－2層からは縄文中期中葉（勝坂式併行期）を中心とした時期の遺構と遺物が出土している。XIII－3層には縄文中期前葉の遺物が混在する。

XIV－1層　XIV層は、色調の暗い砂層（XIV－1a層）をもってXIII層との境とした。XV層との境は複数の砂層が認められる所までをXIV層とし、再びシルト化する層をXV層とした。XIV層は縄文中期前葉のうち、五領ヶ台II式～直後型式併行期の遺構・遺物を包含する。屋代遺跡群⑤・⑥区で厚く堆積し、南部へ行くにつれ堆積が薄くなる。シルト質で明確に黒色化するXIV－1b層は屋代遺跡群④～⑥区で確認でき、それ

以南では対応関係が不明確である。XIV-1c層は砂層である。各層理面に遺構と遺物が存在する。

XIV－２～３層　確認できた地区はXIV－１層と同じであり、やはり屋代遺跡群北部が最も厚く堆積している。シルトと砂が互層となっており、各々の層理面に若干の焼土跡や遺物が散布している。土器型式はXIV－１層とほぼ同じかやや古い土器を含む程度で、時間差はあまりなかったものと考えられる。

XV層　黒色化したXV－１層と褐色のXV－２層に分離できる。縄文中期前葉（五領ヶ台Ⅰ式併行期）の遺構と遺物が出土している。

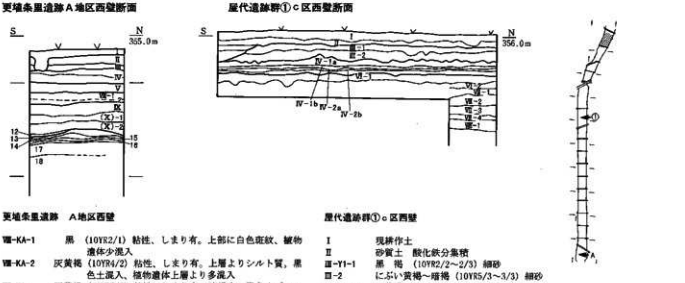
XVI層　これ以下の層は、屋代遺跡群⑤・⑥区のトレンチでのみ確認できた層である。黒色化したXVI－１層と褐色のXVI－２層に分離できる。縄文前期後半（諸磯ｃ式併行期）の遺構と遺物が出土している。

XVII～XIX層　黒色化した層と灰褐色の層が互層をなしており、それぞれをセットとしてXVII層～XIX層とした。XVIII層からは敲き痕と磨り痕が明瞭に残る白石が出土したが、時期は不明である。

(3)　各地点の特徴

ここでは、長大な調査範囲の中から、地形や土地利用の異なる地点の代表的な断面を取り上げる。各々の地点では、現地での肉眼観察のほか、灼熱消費量、プラント・オパール、珪藻、花粉などの分析を行った。それらの結果については第６章に掲載する。

更埴条里遺跡Ａ地区（後背湿地Ⅰ群）（図17）　南側山地の直下に位置し、後背湿地Ⅰ群中最も標高が低くなる地点である。現地表面で354.6ｍを計る。各層には南側山地からの崩落礫が若干含まれている。II層は水田化されており、鉄分などの溶脱が見られ灰褐色を呈する。植物遺体を若干含んでいる。III層の堆積は今回の調査範囲中最も薄く10～20cmにとどまり、洪水が自然堤防を越えた地点から離れていることを示



更埴条里遺跡　Ａ地区西壁

Ⅷ-KA-1	黒　(10YR2/1) 粘性、しまり有。上部に白色斑紋、植物遺体少混入
Ⅷ-KA-2	灰黄褐 (10YR4/2) 粘性。しまり有。上層よりシルト質。黒色土混入。植物遺体上層より多混入
IX-KA	灰黄褐 (10YR5/2) 粘性。しまり有。暗褐土、黒色土ブロック微混入。植物遺体少混入
(X)-KA-1	灰黄褐 (10YR5/2) 粘性。しまり弱。暗褐土ブロックなど微混入
(X)-KA-2	暗オリーブ (2.5GY4/1) 上層に類似。現水位による変質
KA-12	黒　褐 (10YR3/1～3/2) 粘性有、しまり弱。炭化物粒微、植物遺体少混入
KA-13	灰色中粒砂　砂層。植物遺体少混入
KA-14	灰色細砂　炭化物、植物遺体微混入
KA-15	暗オリーブ (2.5GY4/1) 粘性、しまり弱。炭化物微混入
KA-16	暗オリーブ (2.5GY3/1) 帯状にやや濃い色調のシルト層が入る
KA-17	暗オリーブ (2.5GY4/1) 粘性、しまり有。炭化物、植物遺体微混入
KA-18	上層に比べ粘性、しまり弱。粘質土、炭化物、など微混入

屋代遺跡群①ｃ区西壁

I	現耕作土
II	砂質土　酸化鉄分集積
III-Y1-1	黒　褐 (10YR2/2～2/3) 細砂
III-2	にぶい黄褐～暗褐 (10YR5/3～3/3) 細砂
IV-Y1-1a	灰黄褐 (10YR5/2) シルト　溶脱層
IV-Y1-1b	黄　褐 (10YR5/6) シルト　集積層
IV-Y1-2a	灰黄褐 (10YR5/3) シルト　溶脱層
IV-Y1-2b	にぶい黄褐 (10YR5/4) シルト　集積層
VI-Y1-1	黒　褐 (10YR3/2) シルト　上部やや灰色、IV層より粘性やや有
VI-Y1-2	黄　褐 (10YR5/8) シルト～細砂　やや酸化鉄分集積有、VII層よりは粘性有
VII-Y1-1	褐　(10YR4/6) 細砂
VII-Y1-2	VII-1層に比べやや黒みがかる
VII-Y1-3	VII-2層より砂質が強まる
VII-Y1-4	VII-3層より黒みがかる
VIII-Y1-1	暗　褐 (10YR3/4) シルト　細砂混じるがVII層よりは粘性がでてくる。炭化物粒混入

図17　基本土層(1)

している（第6表、図91）。

Ⅳ層は植物遺体を多量に混入した泥炭層であり灰色がかった黒褐色を呈している。上面には9世紀後半の条里水田が造成されており、上部が若干溶脱気味になる（Ⅳ-1層）。

この泥炭層下の黒色粘土～シルトがV層である。9世紀中頃？のV-KA-1層水田とV-KA-5層水田の2枚の水田面が検出された。肉眼観察で植物遺体の混入が認められたが、Ⅳ層に比べると減少する。V-KA-5層水田の区画はV-KA-1層水田と類似しており、9世紀代を大きくさかのぼることはないと考えられる。ただし、この層には弥生時代後期以降の土器が混在しており、弥生時代以降徐々に形成されたわずかな堆積層を、9世紀代の水田耕作によってカクランした可能性がある。あるいは、弥生時代後期以降連続的に土地利用されていた可能性もある。

自然堤防Ⅰ群側で最大1m前後の堆積量を計るⅦ層（縄文晩期砂層）はこの地区では認められず、黒色で白色斑紋を含む層がV層下に見られる。この層はⅧ層に対応すると想定したが、V-KA-5層水田の影響が達しており、白色斑紋を含むなど他地区のⅧ層とは大きく異なっている。

Ⅸ層は他地区に比べシルト～粘土質となり、上部で縄文時代後期（加曽利B式）の土器が出土した。Ⅸ層直下のやや褐色気味に暗くなる層をX層と想定したが、他地区との対比は明確ではない。X層以下には砂層が互層をなしている。この砂層は一部で大きく落ち込み、縄文時代の河道であったと見られる。

屋代遺跡群①区（自然堤防Ⅰ群：水田域）（図17）　Ⅱ層は層厚が10cmと薄い。そのため現水田の影響を受け、鉄分などの集積層となっている。Ⅲ層（砂層）の層厚は30cm程度である。上部のⅢ-1層は黒褐色を呈し、9世紀第4四半期～中世の畠や、その他の遺構が確認されている。

Ⅳ層はシルト質で水田化されており、灰褐色の溶脱層と褐色の集積層が互層をなしている。Ⅵ層は灰黄褐～暗褐色シルトで、一部ではⅣ層との間に砂層が認められる。水田化されているが、集落域のⅥ層よりやや灰色がかっている程度であり、Ⅳ層のような溶脱・集積が明確に分離できる状況にはなっていない。

Ⅶ層以下は屋代遺跡群⑤区柱状図と類似した変化を示している。

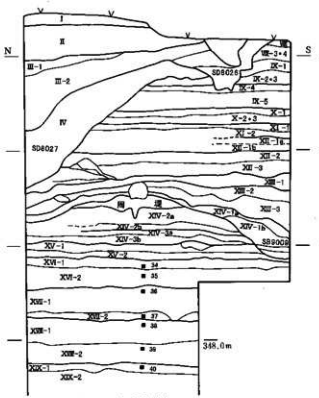
屋代遺跡群⑤区（自然堤防Ⅰ群：集落域）（図18）　Ⅱ層は水田域に比べ砂質となり、黒褐色を呈する。現耕作土の影響を受け、一部で鉄分の集積が認められる。Ⅲ層のうち、純粋な洪水砂（Ⅲ-2層）の堆積は竪穴建物や溝の埋土にしか残っていない。Ⅲ-1層としたものは黒褐色のシルト～砂で、この層も残存範囲は少ない。Ⅳ層は水田としての利用がなされなかったため、黒褐色のシルト～細砂の単層となっている。Ⅲ層に比べシルトが主体となる。Ⅵ層は暗褐色のシルトである。Ⅳ層に比べ粘質が強くなり色調もやや明るくなるが区分は難しい。Ⅶ層以下は、全地区の基準とした断面に当っており、前項2（P55.56）各層の特徴に記した通りである。

屋代遺跡群⑥区（旧河道A）（図19）　旧河道Aは古墳時代中期には河道であったと考えられる。その後、7世紀後半までの間に急速に埋積する。そのため、古代以降の堆積層が厚くなっている。

Ⅱ層は、シルト主体の層と砂層が互層をなしており、溶脱層と集積層に対応する場合が多くなっている。これらを基準に7細分した。Ⅱ-3層は旧河道A～Dおよび自然堤防Ⅱ群（篠河原遺跡）を被うⅡ-3層と同一層で、19世紀後半の可能性が高い層である。9世紀第4四半期の洪水砂であるⅢ層は、この地区で1.6m余りの層厚を計り、自然堤防以南とは堆積状況を異にしている。また、大きく3区分できる（第6章第2節参照）。下部は洪水当初に堆積した砂層である。中間に見られるのは下部砂層を流路状に削り込んでいた部分であり、ラミナが明瞭に観察される。上部は、さらに低地全体を埋め尽くす砂層である。

Ⅳ層（対応層群）の堆積量は、水田化された地点で1.0m以上に達する。Ⅳ-1は9世紀後半の水田耕土層で、それ以下は砂層と水田耕土層が互層をなしている。主に遺構や遺物出土状況の記載において、便宜的に第1水田対応層～第5水田対応層という呼称を用いた。表記は、第1水田対応層がⅣ-Y6-1a～Ⅳ-

屋代遺跡群⑤区東壁断面



■は灼熱消費量サンプル採取地点

屋代遺跡群⑤～⑥区東壁

Ⅷ-Y5-1　にぶい黄褐～褐（10YR5/3～4/4）中粒～細砂　⑥区内で北へ行くほど粒子が粗い
Ⅷ-Y5-2　にぶい黄褐～褐（10YR5/3～4/4）中粒～細砂　上下層に比べ軟い、やや震域
Ⅷ-Y5-3　にぶい黄褐～褐（10YR5/3～4/4）中粒～細砂　Ⅷ層中で最も粒子が粗い

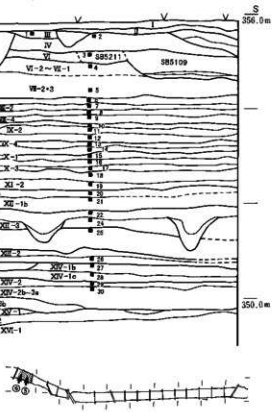
Ⅷ-Y5-1　暗　褐（10YR4/3）シルト　⑤区以南では分離が難しいが、⑤ａ区北寄りでは、ａ．ｂ層に細分が可能。
Ⅷ-Y5-2　黒　褐（10YR3/2）シルト　Ⅷ層中で最も黒色化した層
Ⅷ-Y5-3　にぶい黄褐～暗褐（10YR5/3～3/4）シルト　下部に向かい漸移的に粒子が粗く、色調は明るくなる
Ⅷ-Y5-4　にぶい黄褐～暗褐（10YR5/3～3/4）細砂～シルト　上層よりさらに粒子が粗い

Ⅸ-Y5-1　にぶい黄褐～暗褐（10YR4/3～3/4）細砂　Ⅷ-4層に比べ暗く腐植化
Ⅸ-Y5-2　にぶい黄褐（10YR5/3～4/3）中粒～細砂　最下部に粗砂堆積、上下に分離可能な地点有
Ⅸ-Y5-3　にぶい黄褐（10YR3/4）砂質　⑤区南側では、ａ．ｂに分離可能な地点有
Ⅸ-Y5-4　暗　褐（10YR4/3）シルト　⑤区南側でａ．ｂに分離可能な地点有、北ではａが強くなる。
Ⅸ-Y5-5　灰黄褐～にぶい黄褐（10YR4/2～4/3）シルト～細砂　砂層が筋状に見られる。⑤区南～漸次シルト化し、ａ．ｂに分離可能な地点有、北でａが強くなる

Ⅹ-Y5-1　にぶい黄褐～暗褐（10YR4/3～3/4）シルト　やや腐植化。⑥ａ区北壁では下部に砂層が部分的に見られる
Ⅹ-Y5-2　暗　褐（10YR3/4）シルト　最も腐植化が進む
Ⅹ-Y5-3　にぶい黄褐（10YR4/3）シルト

ⅩⅠ-Y5-1　灰黄褐～暗褐（10YR4/2～4/3）シルト～細砂　一部で腐植化?
ⅩⅠ-Y5-2　にぶい黄褐（10YR4/3）シルト～細砂

屋代遺跡群⑤区東壁断面



ⅩⅡ-Y5-1a　にぶい黄褐～黒褐（10YR4/3～3/2）シルト　黒色化
ⅩⅡ-Y5-1b　にぶい黄褐（10YR4/3）シルト　Ⅹ.Ⅱ-1層の層厚が薄く明確でない地点が多い
ⅩⅡ-Y5-2　黒　褐（10YR2/3）シルト　黒色化
ⅩⅡ-Y5-3　にぶい黄褐　（10YR4/3）シルト　やや砂質

ⅩⅢ-Y5-1　オリーブ褐（2.5Y4/3）シルト　⑤区よりも⑥区で黒色化
ⅩⅢ-Y5-2　黄　灰（2.5Y4/1）シルト　灰色がかっているが、上下層より黒色化、炭化物粒少混入
ⅩⅢ-Y5-3　暗灰黄（2.5Y5/2）シルト　やや砂質

ⅩⅣ-Y5-1a　暗灰黄～黒褐（2.5Y4/2～3/2）細砂～シルト　1b層との境に砂がブロック状堆積。集落域で黒色化
ⅩⅣ-Y5-1b　暗灰黄（2.5Y5/2～4/2）細砂～シルト　炭化物粒、焼土粒混入
ⅩⅣ-Y5-1c　暗灰黄～黄褐（2.5Y5/2～5/3）粗砂～細砂　炭化物粒微混入
ⅩⅣ-Y5-2　暗灰黄～黄褐（2.5Y5/2～5/3）中粒砂～細砂　しまり強、炭化物粒混入皆無
ⅩⅣ-Y5-3a　灰オリーブ～褐（5Y4/2～10YR4/4）粗砂～細砂
ⅩⅣ-Y5-3b　オリーブ黒（5Y3/2）細砂～シルト　黒色化　3c層との境に粗砂を含む地点有
ⅩⅣ-Y5-3c　灰オリーブ～褐（5Y4/2～10YR4/4）細砂～シルト　3b層よりも明るい

ⅩⅤ-Y5-1　黒褐～オリーブ黒（2.5Y～7.5Y3/1）砂質シルト　粘性弱、しまりやや有　炭化物粒微混入　下部に粘土ブロック
ⅩⅤ-Y5-2　暗灰黄～　灰（2.5Y4/2～7.5Y4/1）シルト　粘性、しまり有　粘土ブロック混入

ⅩⅥ-Y6-1　オリーブ黒（7.5Y3/1）シルト　しまり強
ⅩⅥ-Y6-2　灰～オリーブ黒（　－　）シルト　しまり強、層中に黒色化した部分有

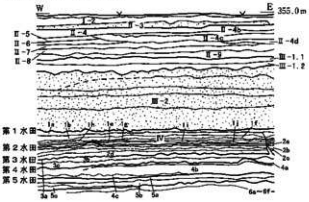
ⅩⅦ-Y6-1　オリーブ黒（7.5Y2/2）シルト　しまり強
ⅩⅦ-Y6-2　　灰　（7.5Y4/1）　細砂～シルト　しまり強

ⅩⅧ-Y6-1　オリーブ黒　（7.5Y3/1）シルト　しまり強
ⅩⅧ-Y6-2　　灰　（7.5Y4/1）

ⅩⅨ-Y6-1　オリーブ黒（7.5Y3/1）シルト　しまり強

図18　基本土層(2)

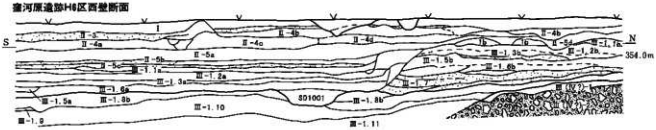
屋代遺跡群⑧区北壁断面



屋代遺跡群⑧区北壁

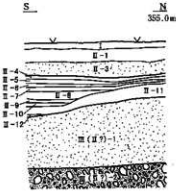
Ⅰ-Y6-1	シルト　表　土
Ⅰ-Y6-2	灰　(7.5Y4/1) シルト～細砂　溶脱層
Ⅱ-3	細　砂　集積層　(現地Ⅰ-2層)
Ⅱ-4	灰　(7.5Y5/1～4/1) シルト　溶脱層
Ⅱ-Y6-4b	シルト～細砂　集積層
Ⅱ-Y6-4c	黄　灰　(2.5Y4/1～5/1) やや溶脱
Ⅱ-Y6-4d	にぶい黄褐 (10YR5/3) やや集積が強い
Ⅱ-Y6-5	シルト～細砂　集積層
Ⅱ-Y6-6	灰　(5Y4/1) 溶脱層　上層水田の集積有
Ⅱ-Y6-7	シルト～細砂　集積層
Ⅱ-Y6-8	暗灰黄～オリーブ褐 (2.5Y5/2～4/3) 細砂～中粒砂。上層水田の酸化鉄分集積有
Ⅱ-Y6-9	暗灰黄 (2.5Y5/2)　細砂～粗砂
Ⅲ-Y6-1.1	黒　褐 (10YR2/3) 中粒砂　Ⅱ層との境が最も黒色・細粒化する。黄褐土ブロック微混入
Ⅲ-Y6-1.2	暗　褐 (10YR2/3) 中粒～粗砂。一部黒色化、上部に酸化鉄分集積有
Ⅲ-2	洪水砂
Ⅳ-Y6-1a	灰オリーブ (5Y5/2) シルト～粘土　白色化し下面に鉄分集積
Ⅳ-Y6-1b	暗灰黄 (2.5Y5/2～4/2) シルト　1aと1cの中間層、漸移的に移る。
Ⅳ-Y6-1c	褐灰～黒褐 (10YR4/1～3/1) シルト～細砂　細かな木片、有機物混入。ブロック状に下層の砂が入る。
Ⅳ-Y6-1d	1c層に比べ砂減少
Ⅳ-Y6-1e	オリーブ褐 (2.5Y4/3) 1b、1c層に比べ明るく、砂多く混入
Ⅳ-Y6-1f	灰黄褐 (10YR5/2) 中粒砂～細砂
Ⅳ-Y6-1g	黄　褐 (2.5Y5/3) 中粒砂～細砂。ラミナ有
Ⅳ-Y6-1h	暗灰黄 (2.5Y4/2) 粗砂～シルト　1j層に近い。粗砂混入。1g、1i層土がブロック状に入る
Ⅳ-Y6-1i	黄灰～オリーブ黒 (2.5Y4/1～5Y3/1) シルト～細砂　ラミナ有
Ⅳ-Y6-1j	オリーブ褐 (2.5Y4/3) 中粒砂～粗砂　1f層より粗くシルトブロックを含まない砂。
Ⅳ-Y6-2a	褐　灰 (10YR4/1) シルト
Ⅳ-Y6-2b	灰黄褐 (10YR4/2) 細砂～シルト
Ⅳ-Y6-2c	暗灰黄 (2.5Y4/2) 細砂～中粒砂　ラミナ有、細かな黒色粒多混入
Ⅳ-Y6-2d	黄　褐 (2.5Y5/3) 中粒砂～粗砂　ラミナ有
Ⅳ-Y6-3a	黄　灰 (2.5Y4/1) シルト～粘土
Ⅳ-Y6-3b	黄　灰 (2.5Y4/1) シルト～粗砂　ブロック状に混在、3a層に比べやや明るい
Ⅳ-Y6-3c	黄褐～にぶい黄褐 (2.5Y5/3～4/3) 中粒砂
Ⅳ-Y6-4a	黄　灰 (2.5Y4/1) 細砂～シルト
Ⅳ-Y6-4b	黄灰～オリーブ黒 (5Y4/1～10YR3/2) 細砂～シルト　砂が大半を占め、シルトブロック混入。炭化物粒微混入
Ⅳ-Y6-4c	オリーブ褐 (2.5Y4/3) 細砂～中粒砂
Ⅳ-Y6-5a	オリーブ黒 (7.5Y3/1) シルト
Ⅳ-Y6-5b	オリーブ黒 (5Y3/1) シルト　黄褐色土ブロック少混入
Ⅳ-Y6-5c	灰オリーブ (5Y4/2) シルト　黄褐色土ブロック多混入
Ⅳ-Y6-6a	黄褐～暗灰黄 (2.5Y5/3～5/2) 中粒砂～細砂
Ⅳ-Y6-6b	暗灰黄 (2.5Y5/2) シルト
Ⅳ-Y6-6c	暗灰黄 (2.5Y5/2) 細砂　ラミナ有
Ⅳ-Y6-6d	暗灰黄 (2.5Y5/2) シルト　6c層よりやや明るい
Ⅳ-Y6-6e	暗灰黄 (2.5Y5/2) 中粒砂～細砂　ラミナ有
Ⅳ-Y6-6f	灰　(7.5Y4/1) シルト～細砂　ラミナ有

窪河原遺跡H6区西壁断面



窪河原遺跡H6区西壁

Ⅰ	現耕土
Ⅱ-3	砂　層
Ⅱ-U6-4a	細砂～シルト　溶脱、集積の互層(畦畔有)
Ⅱ-U6-4b	細砂　土壌化(畝状遺構有)
Ⅱ-U6-4c	溶脱、集積層
Ⅱ-U6-4d	細砂　土壌化(畝状遺構有)
Ⅱ-U6-5a	細砂　土壌化弱い
Ⅱ-U6-5b	細砂　北寄りで集積見られる
Ⅱ-U6-5c	細砂　ラミナが見られ、集積有(＝Ⅱ-Y6-9か？)
Ⅱ-U6-5d	細砂～シルト (畝状遺構有)
Ⅲ-U6-1.1a	細砂～シルト　溶脱層、下部に集積若干有(畦畔有)
Ⅲ-U6-1.1b	細砂ブロック少量混入(畝状遺構有)
Ⅲ-U6-1.2a	シルト　溶脱、集積の互層
Ⅲ-U6-1.3a	シルト～粘土。溶脱、集積の互層
Ⅲ-U6-1.2b	シルト　土壌化進み腐植。しまり良粘性やや有(畝状遺構有)
Ⅲ-U6-1.3b	シルト　土壌化進み腐植。しまり良、粘性やや有
Ⅲ-U6-1.4	細　砂
Ⅲ-U6-1.5a	シルト～粘土　溶脱、集積の互層
Ⅲ-U6-1.5b	シルト　土壌化、1.2b層よりもしまり、腐植ともに弱(畝状遺構有)
Ⅲ-U6-1.6a	細砂～シルト　溶脱、集積の互層(畦畔有)
Ⅲ-U6-1.7	細砂　上部やや土壌化
Ⅲ-U6-1.8a	溶脱、集積の互層　(南側図面外、水田跡)
Ⅲ-U6-1.8b	細砂～シルト　土壌化 (鳥跡)
Ⅲ-U6-1.10	細砂～シルト
Ⅲ-U6-1.11	砂層と泥炭層の互層　ラミナ有
Ⅲ(Ⅳ?)-1	砂　層
Ⅲ(Ⅳ?)-2	砂礫層



窪河原遺跡　第5トレンチ南壁

Ⅰ	現耕土
Ⅱ-1	溶脱層
Ⅱ-3	砂、集積層
Ⅱ-4	溶脱層
Ⅱ-U5T-5	集積層
Ⅱ-U5T-6	溶脱層
Ⅱ-U5T-7	集積層
Ⅱ-U5T-8	溶脱層
Ⅱ-U5T-9	溶脱強い
Ⅱ-U5T-10	集積層
Ⅱ-U5T-11	溶脱層
Ⅱ-U5T-12	粘土層
Ⅱ-U5T-13	－
Ⅲ(Ⅱ?)-1	砂　層
Ⅲ(Ⅱ?)-2	砂礫層

図19　基本土層(3)

Y6-1dである。最も下部の第５水田対応層（Ⅳ-Y6-５）は７世紀後半に比定され、それ以前にこの河道が埋積したことを示している。Ⅳ-Y6-５層以下では、掘削が可能であった深さ（１ｍ以上）まで、幾重にも重なった砂層がつづき、ラミナ構造が明瞭に観察された。

窪河原遺跡H6区（旧河道Ｂ）（図19）　旧河道Ｂは Ⅲ層を削り込んでおり、少なくとも９世紀第４四半期以降の河道である。そのため、堆積層の中心は Ⅱ層から Ⅲ-１層（対応層群）である。

Ⅱ層は、１.０ｍ弱の堆積があり、シルトを主体とした層と砂層が互層をなしている。前述した Ⅱ-３層が鍵層となる。Ⅱ-U6-4a～5b層間では粗い砂が見られず、シルト～細砂が徐々に堆積していったと考えられ、畦畔や水田面の分離が難しくなっている。16世紀頃に比較的厚い砂層（Ⅱ-U6-5c層）が認められる。旧河道Ｂから自然堤防Ⅱ群には、旧河道Ａ以南に見られる洪水砂層（Ⅲ層）が存在していないため、時期的に Ⅲ-１層と対比できる層を Ⅲ-１層（対応層群）とした。そのため、Ⅲ-１層の形成過程や母材は旧河道Ａ以南と異なる。

Ⅲ-１層上部（Ⅲ-U6-1.1～Ⅲ-U6-1.8層間）は水田化されており、溶脱層と集積層の互層が見られ、一部で洪水性の砂堆積が認められる。最下層の水田は13～14世紀の遺物を伴っており、それ以下（Ⅲ-U6-1.9層以下）は、植物遺体を含む黒色粘土と砂層が互層をなしている。

窪河原遺跡H2～H6区（自然堤防Ⅱ群）（図19）　Ⅲ層に対応する層は河道内と見られる砂礫層であり、掘削できた数ｍにわたって砂礫の堆積が続いた（図20）。離水は出土した須恵器の特徴から、少なくとも９世紀後半以降である。

19世紀後半頃の鍵層となる Ⅱ-３層が認められる。Ⅱ～Ⅲ-１層には幾枚かの砂層を挟んで畠耕土が認められる。畠や集落が展開しはじめるのは13～14世紀以降である。土壌化が進んでいない Ⅲ-U2-1.12砂層上で12世紀代の珠洲甕が単独で出土しており、その頃に開発がはじまったことを示している。この層より下部は砂礫層となる。

窪河原遺跡H2トレンチ調査区（旧河道Ｃ・Ｄ）（図19）　中世に河道が存在した地点である。河道がある程度埋積し水田化される直前の層から、17世紀の志野焼が出土しており、調査対象は Ⅱ層が中心である。

Ⅱ層は砂層と水田耕土層の互層である。19世紀後半の鍵層 Ⅱ-３層が認められる。

図20　窪河原遺跡H5区砂礫層

第４章　時期区分

第１節　層位区分と出土土器による時期区分

１　出土土器による時期区分

基本土層と大時期区分　今回の調査では、各遺構・遺物包含層間に、洪水砂層などの無遺物層が存在する場合が多く、遺物の前後関係を層位的にとらえることができた。大別層位と時期決定の指標となる出土土器は図21・22に示した通りである。また、本報告書で使用する時期区分については表６に示した。

細別層位と中・小時期区分　同一層位から検出された遺構・遺物が多数にのぼり、遺構の切り合い関係などから細分が可能な時期については、土器を指標として時期細分を行っている。ただし、縄文時代から弥生時代後期のうち、出土量が少ない場合や、遺構の切り合い関係などの客観的な前後関係を示す資料が少ない時期については、既存の編年を活用した。

本節では、同一層内で細分が可能で、しかも本地域において良好な編年資料となり得る縄文時代中期後葉と、古墳時代～古代の細別時期区分について触れる。詳細については各分冊を参照していただきたい。

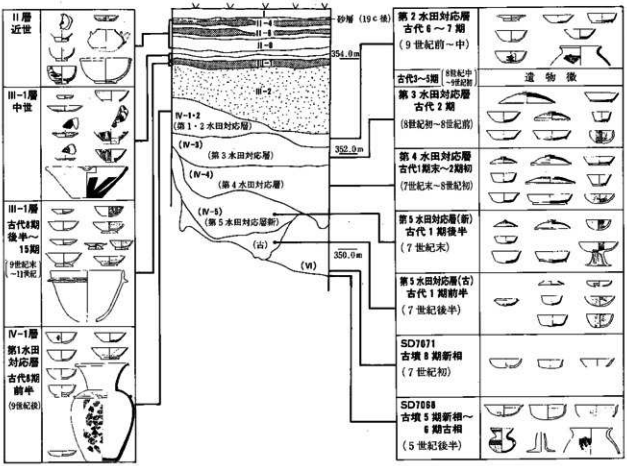


図21　層位区分と出土遺物(1)

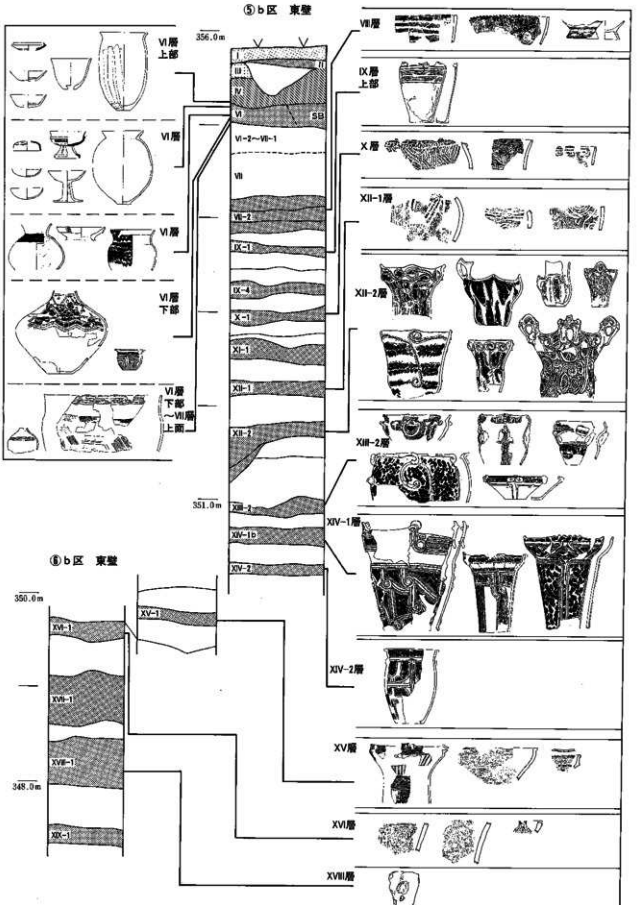


図22　層位区分と出土遺物(2)

表6　層位と時期区分

層位	層代⑥区・運河際H6区層位	時代区分	中時期区分	小時期区分	弥生・縄文編年(参考)	年代比定	遺構	備考
Ⅰ	Ⅰ	近・現代				20C後半	水路、畠ほか	
Ⅱ	Ⅱ-1・2	近代				19C後半～20C前半	水田・畠	
	Ⅱ-3	近世				19C後半		洪水砂(善光寺地震1847年より後、明治期より前)
	Ⅱ-4					17C～19C中頃	水田・畠	善光寺地震直前までの水田面数面有
	Ⅱ-5以下						水田・畠	
								Ⅲ-1層上に洪水砂
Ⅲ-1	Ⅲ-1.1～Ⅲ-1.10	中世	(後半)(前半)			14C後半～16C 12C～14C前半	集落・水田・畠	地表面安定
	Ⅲ-1		古代15期			11C後半	集落・水田・畠	
			古代14期			11C前半		
			古代13期			10C末～11C初頭		
			古代12期			10C後半		
			古代11期					
			古代10期			10C中葉		
			古代9期			10C前半		
Ⅲ-2	Ⅲ-2	古代	古代8期	後半		9C後半～末	9C末	全域を覆う洪水砂
Ⅳ・Ⅴ	1水田対応			前半			9C後半	集落・水田
	2水田対応		古代7期	後半		9C中頃～後半	9C中	地表面安定
				前半				
			古代6期			9C前半	集落・水田?	
			古代5期			8C末～9C初頭	集落	
			古代4期			8C後半		
			古代3期			8C中頃		
	3水田対応		古代2期			7C最末～8C前半	集落・祭祀施設・水田	記年銘木簡 養老7(723)年、神亀3(726)年
	4水田対応		古代1期	後半		7C末		「和銅」7(714)年 戊戌(698)年
	5水田対応			前半		7C後半		
			古代0期＝古墳9期			7C前半	集落	屋代⑥区旧河道堆積進む
Ⅵ	太田城Ⅳ層下部	古墳後期	古墳8期	新相・古相		6C後半～7C初頭	集落・水田?	地表面安定
			古墳7期	新相・古相		6C前半～中葉		
			古墳6期	新相・古相		5C末～6C初頭		
	Ⅵ中部	古墳中期	古墳5期			5C中葉～後半		←屋代①・②・③区水路周辺で洪水砂
			古墳4期	新相・古相		5C前半	集落・水田	
			古墳3期			4C後半		
		古墳前期	古墳2期			4C前半	集落・水路など	
			古墳1期			3C後半		
		弥生後期	弥生5期		箱清水		水路など	
	Ⅵ下部	弥生中期	弥生4期		栗林			
			弥生3期		栗林直前			
			弥生2期					
	Ⅵ下部	弥生前期	弥生1期		氷		遺物集中地点	
Ⅶ	Ⅶ	縄文晩期後半	浮線文期		浮線文		焼土跡など	全域で砂堆積
Ⅷ	Ⅷ	縄文晩期前半	佐野式期		佐野		焼土跡など	地表面安定
Ⅸ	Ⅸ-1	縄文後期中葉	加曽利Ⅱ式期		加曽利B1		焼土跡など	自然堤防側に砂層多数
	Ⅸ-2～5		—	—				
Ⅹ	Ⅹ	縄文後期前葉	堀之内Ⅱ式期		堀之内Ⅱ			
ⅩⅠ	ⅩⅠ		—	—				砂層
ⅩⅡ-1	ⅩⅡ-1		堀之内Ⅰ式期		堀之内Ⅰ			
ⅩⅡ-2	ⅩⅡ-2	縄文後期初頭	称名寺式期		称名寺		集落	地表面安定
		縄文中期後葉	後葉4		加曽利EⅣ併行	C14年代値 B.P4170±60～4270±50		
			後葉3	a～c	加曽利EⅢ併行			
	(ⅩⅡ-3)		後葉2	a.b	加曽利EⅡ併行			
ⅩⅢ	(ⅩⅢ-1)	縄文中期中葉	後葉1		梨久保B 併行		焼土跡ほか	シルト堆積続く
			中葉4期		勝坂Ⅳ併行			
	ⅩⅢ-2		中葉3期		勝坂Ⅲ併行			
			中葉2期		勝坂Ⅱ併行		集落	
			中葉1期		勝坂Ⅰ併行		焼土跡?	
	ⅩⅢ-3	中葉～前葉	中葉～前葉		～五領ヶ台直後		焼土跡	
ⅩⅣ	ⅩⅣ-1	縄文中期前葉	前葉2期		五領ヶ台Ⅱ併行	C14年代値 B.P4310±70～4650±50	集落	ⅩⅣ-1a層 砂層 地表面安定 ⅩⅣ-1c層 砂層
	ⅩⅣ-2						焼土跡	
	ⅩⅣ-3						焼土跡	自然堤防側に砂層多数
ⅩⅤ	ⅩⅤ	縄文中期前葉	前葉1期		五領ヶ台Ⅰ併行		焼土跡・墓坑ほか	集落縁辺部か?
ⅩⅥ	ⅩⅥ	縄文前期後半	下島式期		諸磯c式 併行		焼土跡など	
ⅩⅦ～ⅩⅨ		不明						大形礫出土
不明		縄文前期前半	神ノ木ほか					河道への遺物混入

2　XII－2層出土の中期後葉土器の変遷

(1)　中期後葉における時間軸の設定

XII－2層の時間幅　XII－2層の堆積（形成）という時間幅の中で廃棄された中期後葉土器は、深テンバコで約1400箱に上る。XII－3層・XII－2層層理面埋設土器、およびXII－2層上面～XII－1層埋設・廃棄土器の様相によって、前者は中期後葉2a期（加曽利EII式古～中）、後者は中期後葉4期（加曽利EIV式）であることが解っている。

XII－2層内の細別時期　調査時には、XII－2層を人工分層し、遺構がどの面から検出されたかが記録されたが、集落内での層厚の違いや激しい切り合いによって当時の地表面からの実際の掘り込みを検出できない場合も多かった。そこで住居跡出土の層別一括土器を中心に「時間セル」[1]を設定し、遺構間の切り合い関係と、土器の接合関係をもとにそれらを縦横に並べ、相互の序列を推定し、前述した検出面で補正することにした。検討の結果、2b期～3c期の細分が可能となり、都合中期後葉土器群の2a期・2b期・3a期・3b期・3c期・4期の6段階変遷が確認された。これを基準にその他の遺構の時期も含め、ピットを除いた全遺構754基のうち約30%の時期を確定した。

(2)　時期別の様相

次に土器の様相を時期別に概観してみたい。

後葉2a期　後葉2a期を代表する資料は極めて少なく、確実に遺構として確認されたものは、集落主体部南外れのSQ4803の2基の屋外埋甕のみである。両者は唐草文系II段階の深鉢で、特にSQ4803aは口縁部にS字状渦巻を持ち、体部に隆帯による規格渦巻文が添付されている。大木系情報の南下の中で生成された一連の土器群であると推測され、集落の開始がこの土器によって象徴されることの意義は大きい。**後葉2b期**　在地系としての圧痕隆帯文土器・渦巻多連文土器、大木系、加曽利E系、曽利・唐草文系が出揃う。圧痕隆帯文土器は口縁が外傾する大型のものが見られ、加曽利E系とともに埋甕となる。大木系は、各期を通じて最も東北のものに近い、9a式古相のキャリパー形土器が見られる。**後葉3a期**　加曽利E系の中に口縁部文様帯を持たないものが増え、大木系は前時期のコピーを作り続ける。ジョッキ形土器、釣手（付深鉢か）、ミニチュア土器、漆付着土器などが加わり、集落での諸活動が俄に活発化してきた様相が窺える。**後葉3b期**　圧痕隆帯文土器は口縁部が内湾するものが主体となる。特に胴部にくびれをもち、扁平台形のC字状隆帯が添付されるSB5345埋甕は造形的にも技法的にも卓越している。この時期は大木系が加曽利E系を凌駕する。ただし前時期のコピーを基に胴部文様構成や突起の形態を様々に工夫し、遺跡独自の「タイプ」を創造した観がある。この方向性は後続時期の「胴部隆帯文土器」の生成へと繋がっていく。萌芽しつつある柄鏡形住居の埋甕も大木系土器を含む。**後葉3c期**　渦巻多連文土器が消滅し、大木系土器のコピーも減少する。代わって圧痕隆帯文土器や加曽利E系が主体となる。本時期に完成された柄鏡形住居の埋甕もこれらから構成され、一方で串田新式やそれらが加曽利E式や圧痕隆帯文土器と折衷した様相をもつ土器が掘立柱建物や焼土跡から出土している。**後葉4期**　加曽利E系が主体を占め、圧痕隆帯文土器が伴う。赤彩の施された壺形土器や瓢箪形土器、注口土器など器種が豊富になる。全時期を通じて曽利・唐草文系土器は極少量であり前半は東北、後半は関東との強い繋がりが確認される。

註

1　水沢教子　2000「第10章1節2中期後葉の土器」『更埴条里遺跡・屋代遺跡群―縄文時代編―』参照。

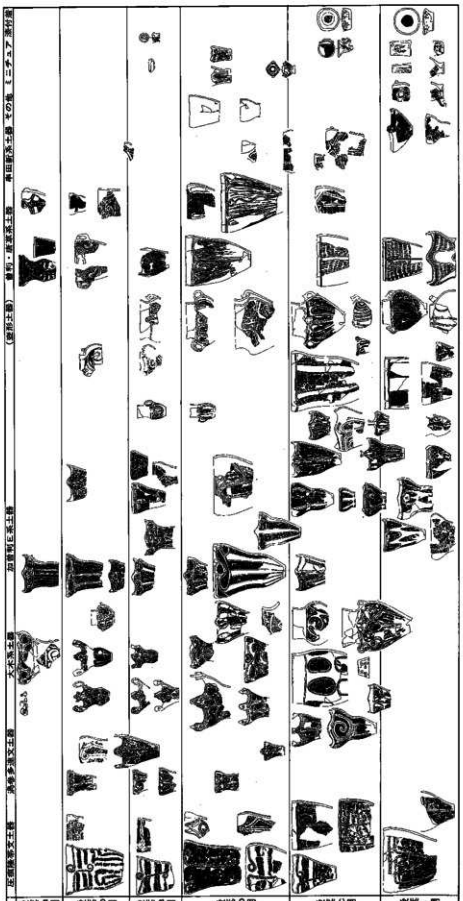


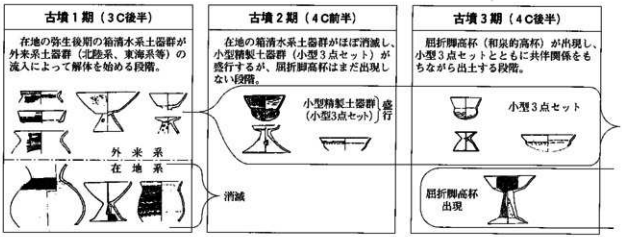
図23　縄文時代中期後葉の土器編年図

3　善光寺平南縁の古墳時代前期～古代の土器編年（3世紀後半～11世紀後半）

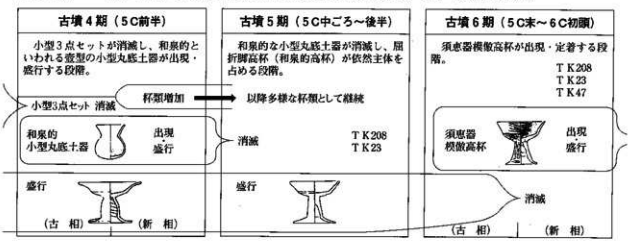
(1)　古墳時代の土器編年　－古墳1期～古墳9期（3世紀後半～7世紀前半）－

屋代遺跡群⑤区竪穴住居出土資料を主に、周辺遺跡例を加え9期に区分した。各期の特徴を図24、器種分類図を図25、その変遷図を図26、既存編年との関係を表7に示した。図37～42には代表例を集成した。

古墳前期……セット内における在地の箱清水系土器群と外来系土器群の割合や特徴的な外来系土器及び小型精製土器群のあり方を指標に古墳1期・2期・3期に細分した。



古墳中期……高杯や杯類、小型丸底土器のあり方や形態変化を指標に古墳4期・5期・6期に細分した。



古墳後期……杯E類の形態変化や杯類のあり方を指標に古墳7期・8期・9期に細分した。

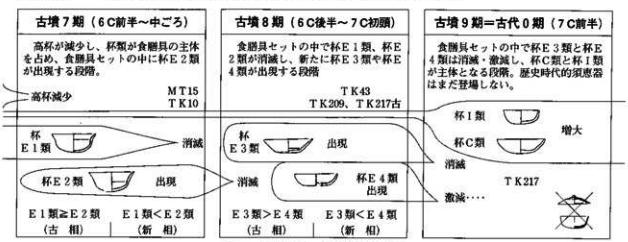


図24　古墳時代の土器編年簡略図　　S＝1：12

表7　北信地域における3世紀～7世紀初頭の土器編年研究史

図25　古墳時代の土師・器種分類

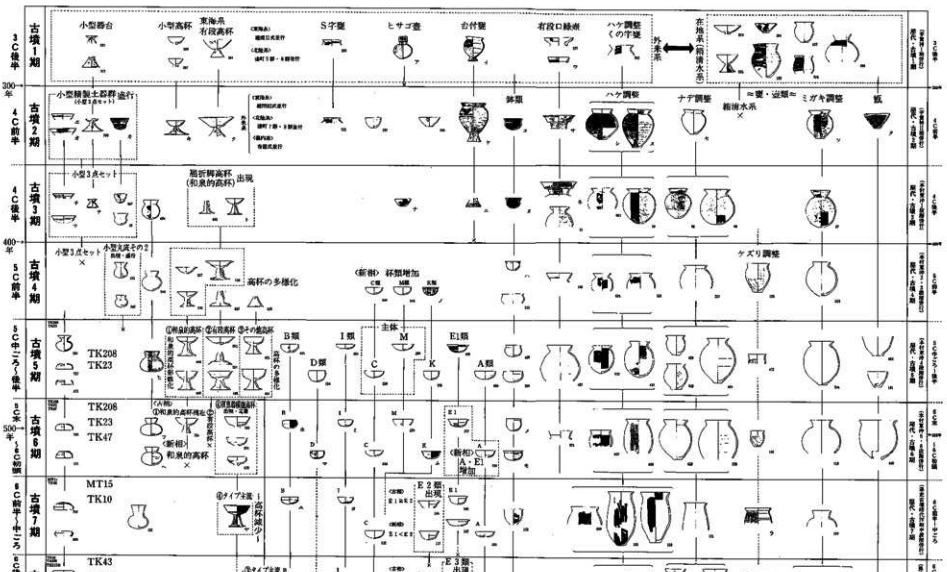


図26　善光寺平南縁　古墳時代の土器　編年表（３Ｃ後半～７Ｃ初頭）

「弥生・古墳編」掲載

(2)　古代の土器編年　－古代0期～古代15期（7世紀前半～11世紀後半）－

屋代遺跡群・更埴条里遺跡の竪穴住居出土資料を主に、周辺遺跡の資料を加えて16期に区分した（古代0期は古墳9期と同一で古墳後期に入るため、古代関係だけでは15期区分になる）。各期の定義は表8に、各器種の分類は図27～28に示した。長期にわたるため9世紀後半～末を境に、古代の土器編年その1（7世紀前半～9世紀末）と、古代の土器編年その2（9世紀後半～11世紀後半）に分割して提示する。古代の土器編年その1では、各期の特徴を図29に、各器種の変遷図を図30（食膳具）、図31（煮炊具・鉢類等）、図32（貯蔵具）に示し、図33には各期の特徴を図表化した編年概念表を掲載した。古代の土器編年その2では、各期の特徴を図34に、各器種の変遷図を図35に示し、図36には各期の特徴を図表化した編年概念表を掲載した。また、古代1期～15期までの代表的な遺構の出土遺物を、食膳具を中心に図42～46として示した。

表8　古代の土器編年（7世紀前半～11世紀後半）各時期の定義

	7c前半～中葉	7c前半～9c後半	古墳9期（古代0期）	食膳具の主体は非ロクロ土師器のみの段階で、歴史時代的須恵器（須恵器杯蓋A、杯G、杯A、杯B等）はともなわない段階。非ロクロ土師器杯C類・Ⅰ類が主体をしめる。出土量が少ない遺構で、非ロクロ土師器のみしか出土がない場合、古代0期～1期前半前葉として幅をもって扱う。		
1期前半前葉		7c後半	古代1期前半	須恵器杯蓋Aのみの段階。	古代1期	食膳具の中に歴史時代的須恵器（以後須恵器と呼ぶ）が登場する段階。須恵器杯蓋Aを組成にもち、須恵器杯蓋Bとの共伴関係により前半と後半に分けられる。
1期前半後葉						
7c末			古代1期後半	須恵器杯蓋Bが登場し、須恵器杯蓋Aと共存する段階。		
7c最末～8c前半			古代2期	食膳具の主体は須恵器がほとんどで、須恵器杯Aはすべてヘラ切り（手持ちヘラ削り、回転ヘラ削り、ヘラ切り後ナデ等も含む）の段階。須恵器杯蓋Aはなくなり須恵器杯蓋Bのみになる。		
8c中葉			古代3期	食膳具の主体は須恵器で、須恵器杯Aにヘラ切りと回転糸切り（以後糸切りと呼ぶ）が共存する段階。ヘラ切りの方が糸切りよりも多い。糸切りの須恵器杯Aの内面底径の平均は7cm中ごろ～7cm後半以上に集中する。		
8c後半			古代4期	食膳具の主体は須恵器で、須恵器杯Aにヘラ切りと糸切りが共存する段階。糸切りの方がヘラ切りより多い。糸切りの須恵器杯Aの内面底径の平均は7cm台～8cm台に集中する。		
8c末～9c初頭			古代5期	食膳具の主体は須恵器だが、黒色土器が増え始め、その比率は2割前後以下の段階。須恵器杯Aは糸切りのみとなり、その内面底径の平均は6cm末～7.5cm前後に集中する。		
9c前半			古代6期	食膳具における須恵器の比率が低下し、黒色土器が増えて、その比率が2割前後～4.5割前後の段階。須恵器杯Aの内面底径の平均は5cm後半～6cm後半に集中する。		
7期前半	9c中葉～後半	9c中葉～後半	古代7期	食膳具の主体は黒色土器になり、その比率が4.5割前後以上の段階。須恵器杯A（含、転質須恵器杯A）の内面底径の平均は5cm後半～6cm前半に集中する。須恵器杯Aの�thickと焼きが明らかに悪くなり、須恵器の蛍九タイプとBタイプ（同タイプとも転質須恵器）が6割まで主体だった硬質のDタイプの量を圧倒するようになる。出土量が豊富な場合黒色土器の比率が5.5割前後を境に前半と後半とに分ける場合もある。		
7期後半						
8期前半	9c後半～10c末	9c後半～10c末	古代8期	食膳具の主体は黒色土器であるが、新たに土師器の食膳具が登場し、須恵器がわずかに残る段階。黒色土器の方が土師器より多い。須恵器杯A（含、転質須恵器）の内面底径の平均は6.5前後でも大きめになり、ばらついた似を示すようになる。遺構を広範囲における9世紀後半の出土数の上下により、前半と後半とに分ける。洪水時の食膳具における土師器の比率は「1割～3割」程度である。		
8期後半						
9期						
10c前半			古代9期	食膳具の主体は、黒色土器から土師器に逆転し（以後、食膳具の主体は土師器となる）、土師器杯AⅡの口径は、おおむね11.0cm～13.5cmの範囲に分布し、その口径平均は12cm台となる段階。		
10c中葉			古代10期	土師器AⅡの口径は、おおむね10.0cm～12.9cmの範囲に分布し、口径平均は11cm台に縮小する段階。		
10c後半			古代11期	土師器AⅡの口径は、おおむね9.5cm～11.5cmの範囲に分布し、口径平均は10cm台に縮小する段階。器高はおおむね2.5cm～3.6cmに分布し、器高平均は2.9cm～3cm強の段階に集中する。		
			古代12期	土師器Aに明瞭な大小の2法量分化が出現する段階。土師器杯Aの縮小傾向と明瞭な2法量分化に伴い前段階の土師器杯AⅡは杯AⅢと呼称されるようになるが、その口径、器高は前段階とほぼ同じ値となる。		
10c末～11c初頭			古代13期	土師器AⅢの器高は、おおむね2.0cm～3.4cmの範囲に分布し、器高平均は縮小し、2.6cm～2.8cmになる段階。		
11c前半			古代14期	土師器AⅢの器高は、おおむね2.0cm～3.0cmの範囲に分布し、器高平均は縮小し、2.1cm～2.5cmになる段階。少数であるが器高1cm台のものがみられ始める。		
11c後半			古代15期	土師器AⅢの器高は、1cm台のものが増え、おおむね1.4cm～2.3cmの範囲に分布し、器高平均は、2.1cm未満となる段階。		

図27　古代の土器　器種分類　1

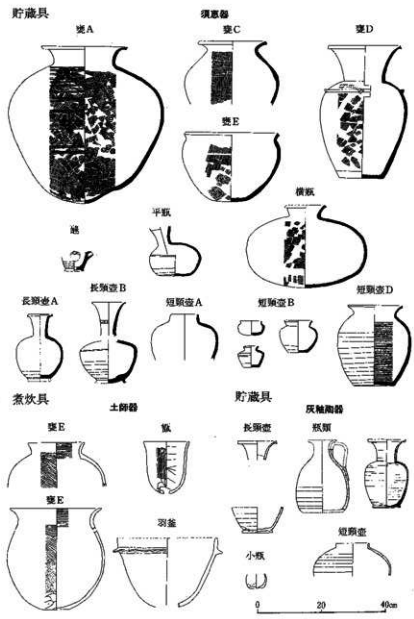


図28　古代の土器　器種分類　2

古代の土器編年　その１（古代０期～古代８期）
（７世紀前半～９世紀末）

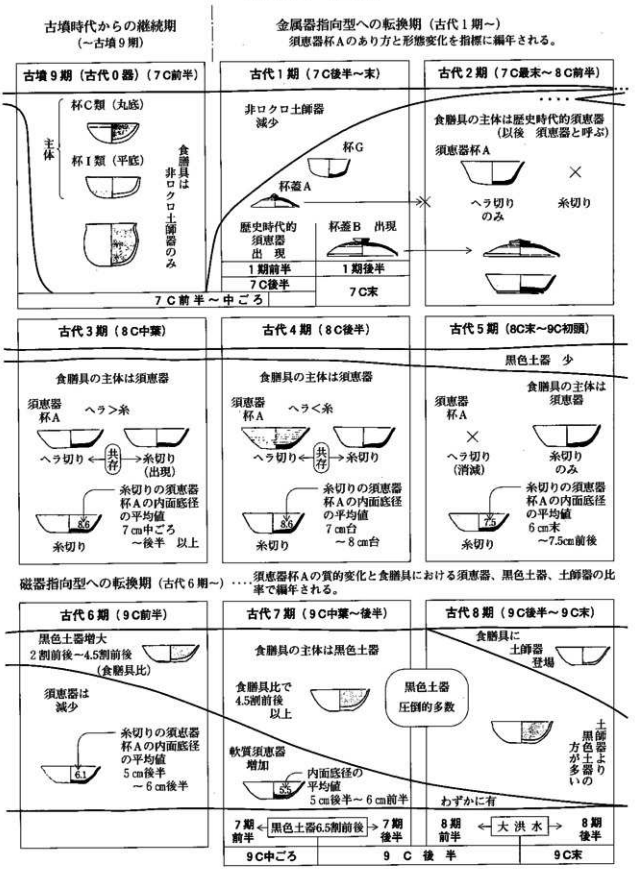


図29　古代の土器編年簡略図　その１　S=1：8

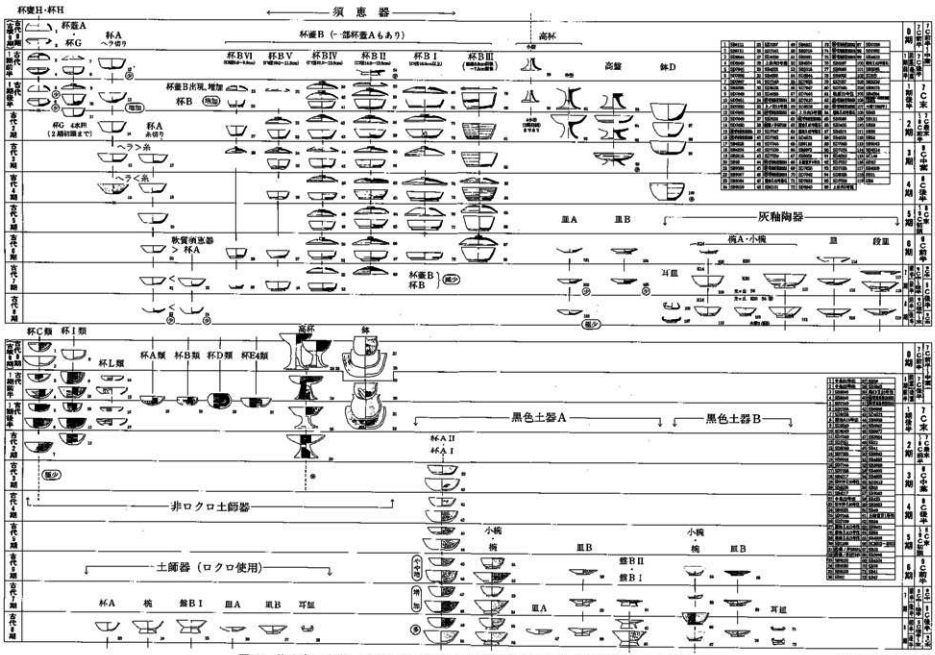


図30　善光寺平南縁　古代の土器の消長（食膳具）編年表1（7C前半～9C末）

『古代1編』に加筆

図31　善光寺平南縁　古代の土器の消長（煮炊具・鉢類等）編年表2（7C前半～8C末）　『古代1編』に加筆

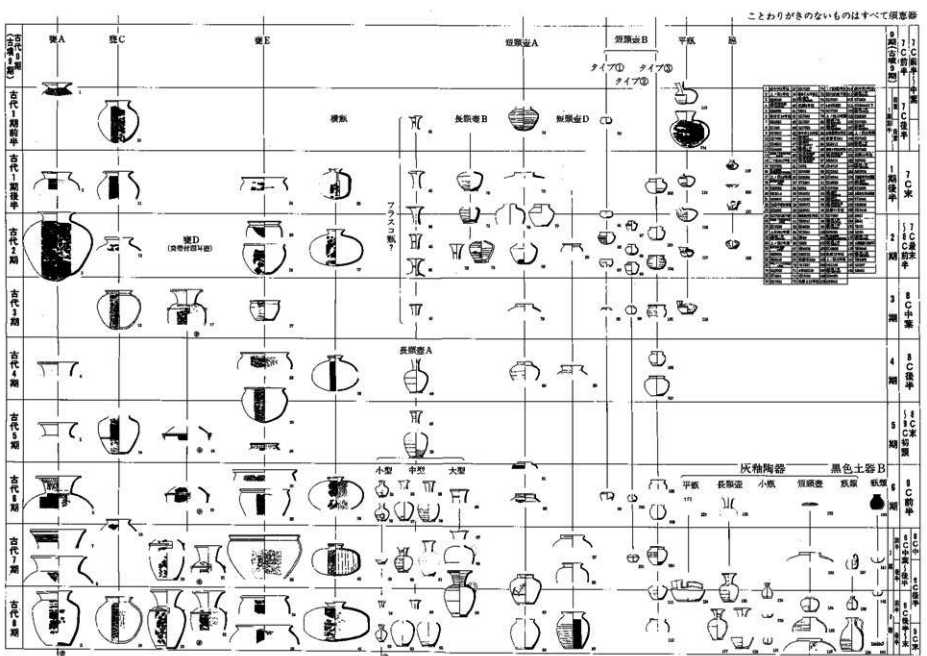


図32　善光寺平南縁　古代の土器の消長（貯蔵具）編年表３（７Ｃ前半～９Ｃ末）

『古代１編』に加筆

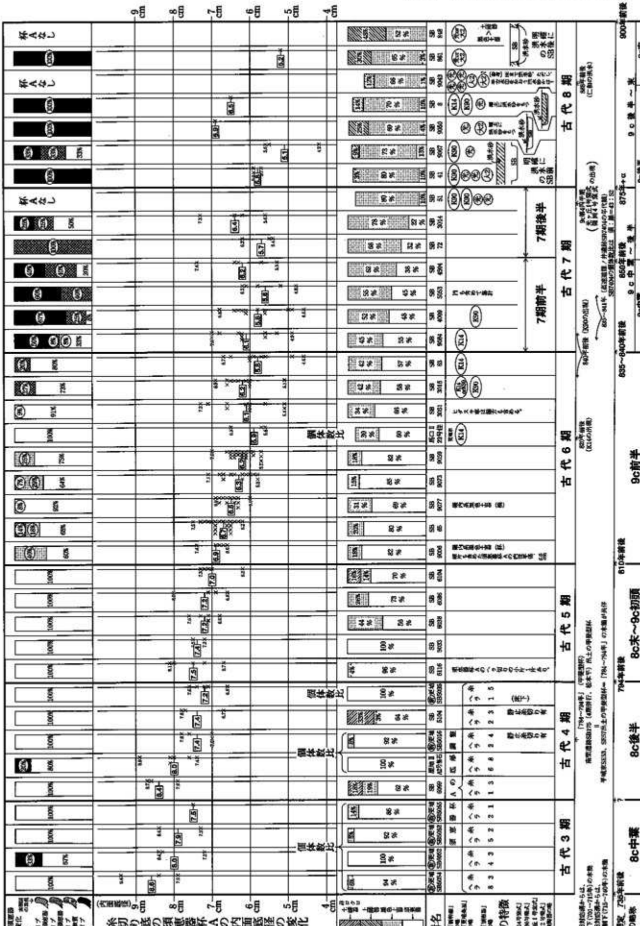


図33　善光寺平南縁　古代の土器の消長（編年概念表）編年表4（8C中～9C末）

『古代1期』に加筆

古代の土器編年　その2（古代8期～古代15期）
（9世紀後半～11世紀後半）

土師器杯Aの法量変化を指標に編年される。古代11期までは口径の縮小著しく、12期以降は器高の縮小が著しい。

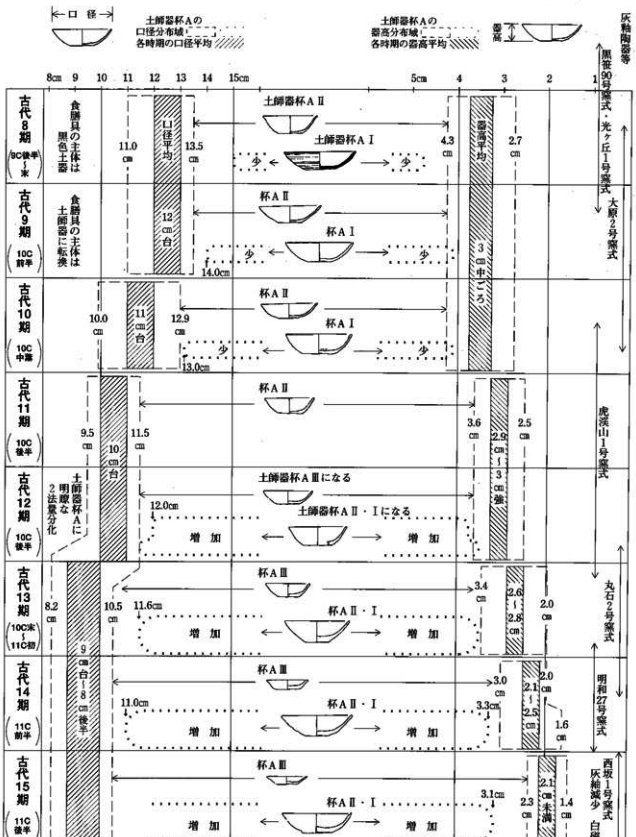


図34　古代の土器編年簡略図　その2　　S＝1：8

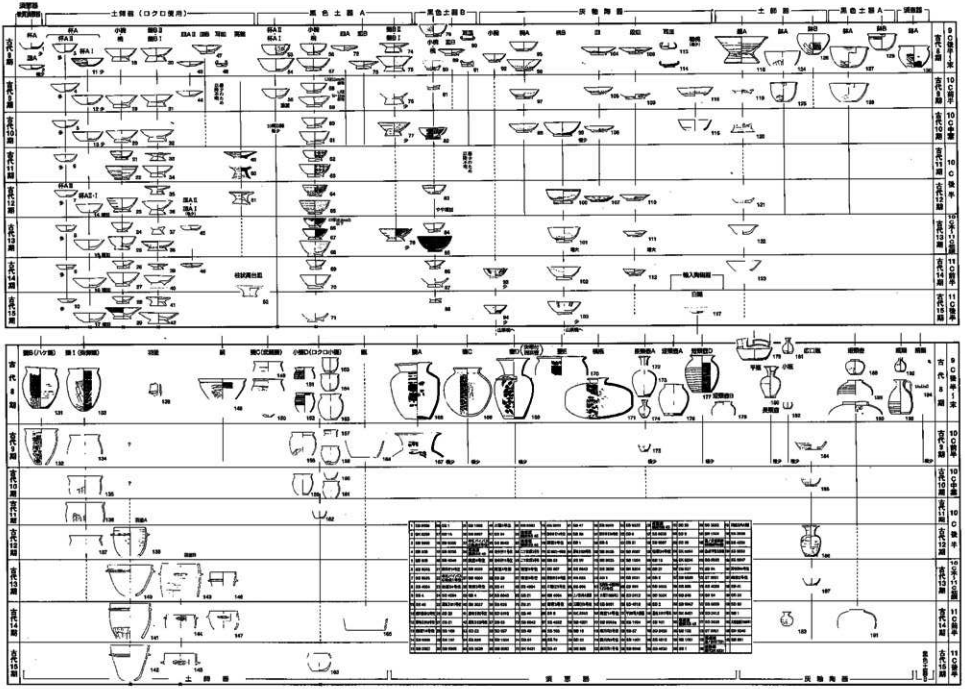


図35　善光寺平南縁　古代２の土器の消長編年表５（９C後半～11C後半）

『古代２、中・近世編』に加筆

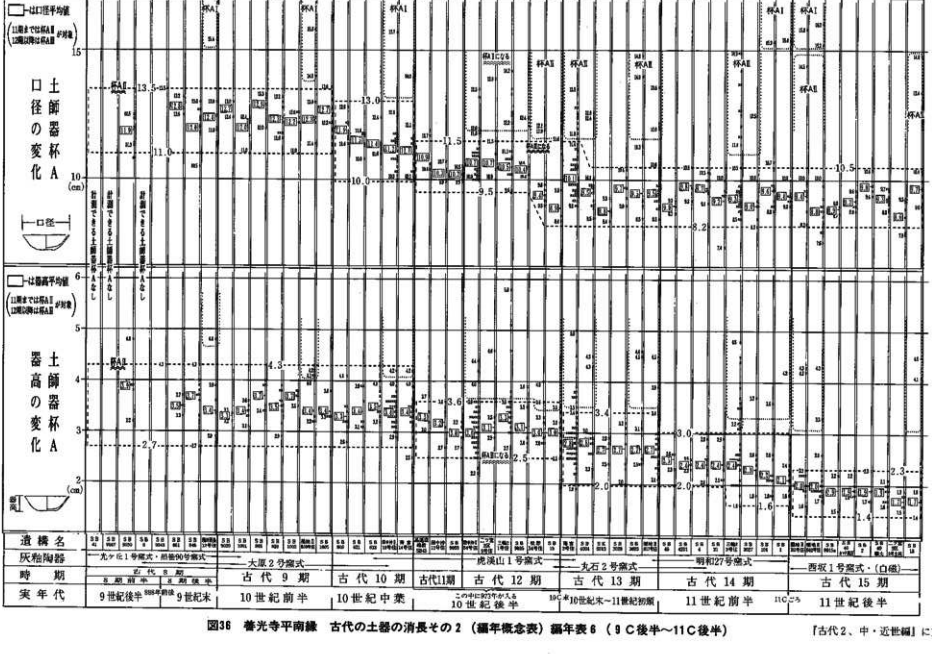


図36　蕾光寺平南縁　古代の土器の消長その2（編年概念表）編年表6（9C後半～11C後半）

『古代2、中・近世編』に加筆

古墳1期（四ツ屋9号住）

古墳2期（灰塚遺跡H1号住）

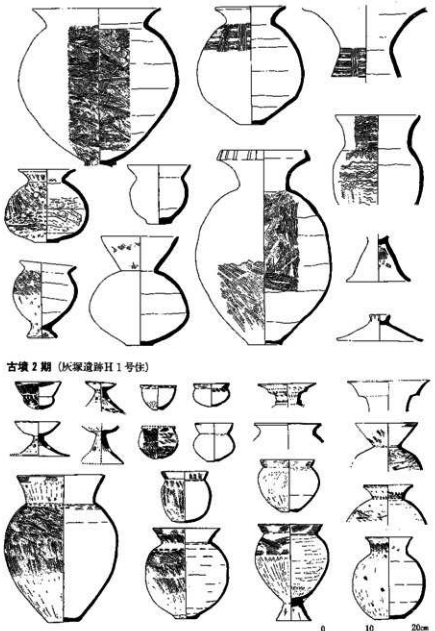


図37　古墳時代の土器　その1　　S=1：8

古墳3期（石川条里遺跡高速道地点　SK1033）

古墳4期　古相（屋代清水8号住）

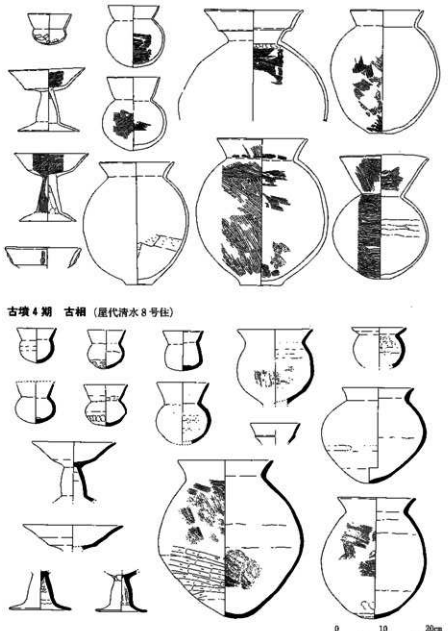


図38　古墳時代の土器　その2　　S=1：8

古墳4期　新相（生仁Ⅲ1号祭祀遺構）

古墳5期（屋代遺跡群高速道地点　SB6012）

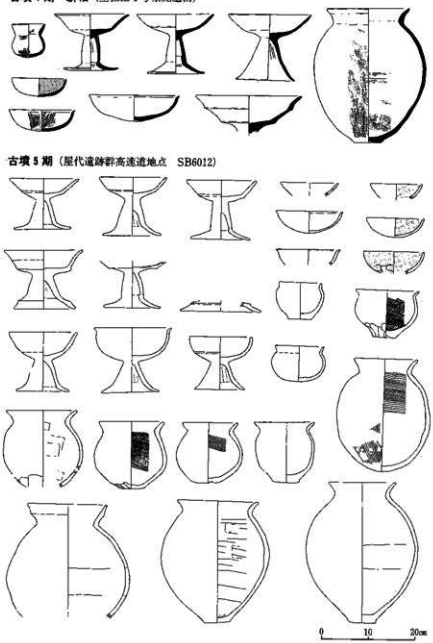


図39　古墳時代の土器　その3　　S=1：8

古墳6期　古相（大境Ⅳ・Ⅴ15号住）

古墳6期　新相（榎田　SB1006）

古墳6期　新相（生仁Ⅲ43号住）

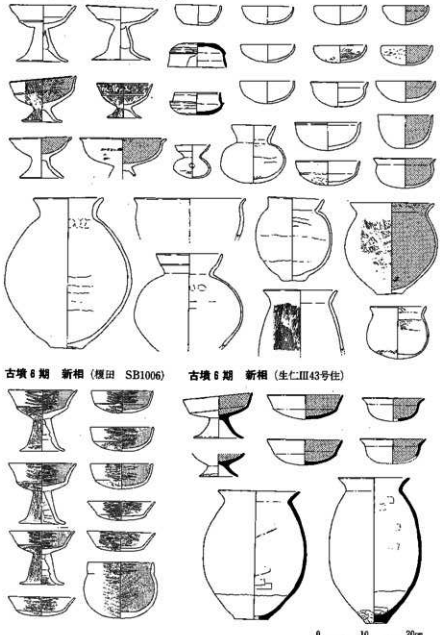


図40　古墳時代の土器　その4　　S=1：8

古墳７期（榎田　SB625）

古墳８期　古相（榎田　SB73）

古墳８期（中俣Ⅱ１号住）

0　10　20cm

図41　古墳時代の土器　その５

※遺構名のみのものはすべて更埴条里遺跡・屋代遺跡群

古墳８期　新相（屋地ⅡB29号住）

古墳９期＝古代０期（中条22号住）

古墳９期＝古代０期（屋地ⅡA15号住）

古代１期前半（溝坊南沖Ⅲ５号住）

古代１期前半（SD7065＝SD7067＝SD8044下層　４～５層＝SD8049）

古代１期後半（SD7058）

0　10　20cm

図42　古墳時代・古代の食膳具　その１

S＝１：８

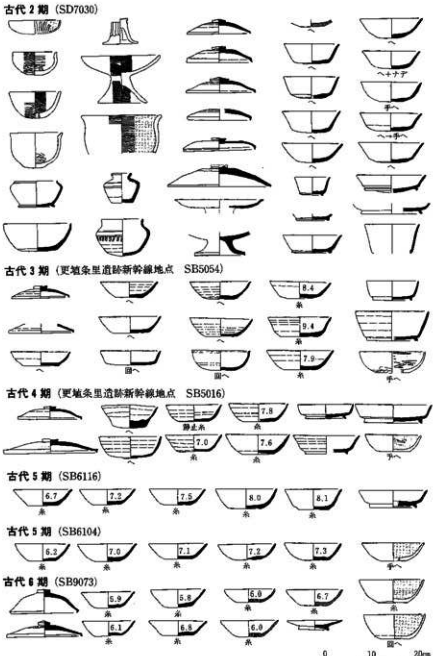


図43 古代の食膳具 その2

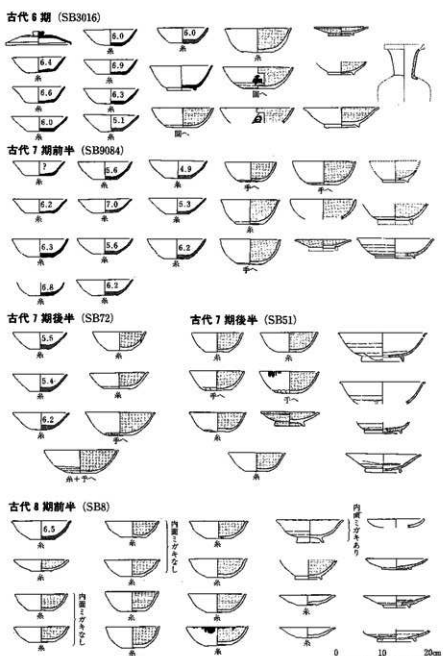


図44 古代の食膳具 その3

※土器内面の数値は内面底径値（単位cm）

S=1：8

古代８期後半（SB848）

古代９期（SB826）

古代10期（SB806）

古代11期（SB9053）

古代12期（三輪遺跡(2)１号住）　土師器杯ＡⅢ　土師器杯ＡⅡ

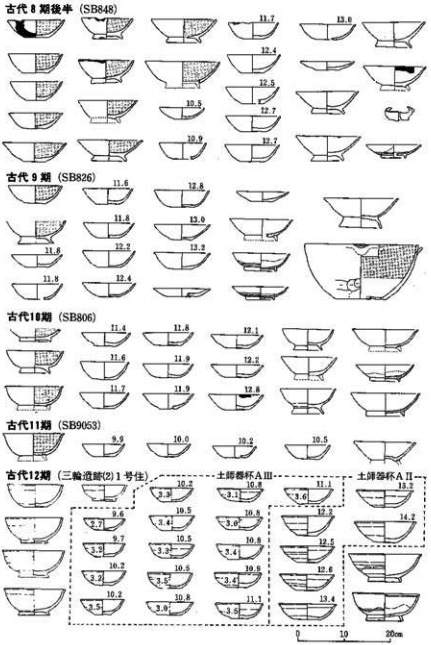


図45　古代の食膳具　その４

土器外面の数値は器高を示す（単位cm）

古代12期（SB9035）

古代13期（SB4004）

古代14期（SB8027）　古代14期（SB101）

古代15期（居地遺跡ⅡＢ２号住）

古代15期（SB40覆土）　古代15期（SB40カマド周辺）

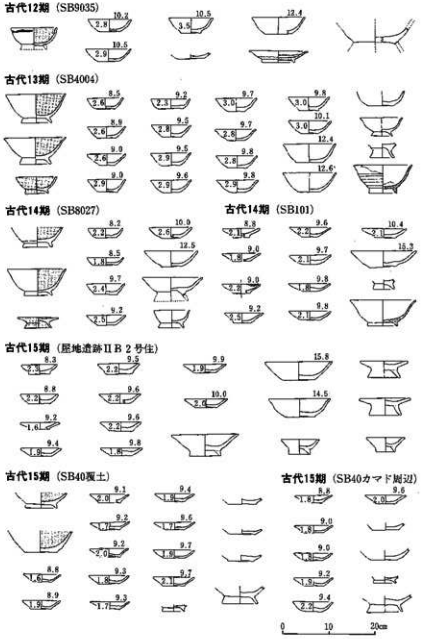


図46　古代の食膳具　その５

S＝１：８

第2節　暦年代への比定

1　暦年代への比定

各層位、および各層位から検出された遺構、遺物の暦年代を推定するため、

① 各層位から検出された遺構に伴う炭化物を利用した^{14}C値の測定

② 古代以降の資料については、溝の埋土における紀年銘木簡などとの伴出関係

③ 畿内系土師器や灰釉陶器など、他地域での年代がある程度おさえられる資料との共伴関係

などにより検討を行った。今回、古代の溝からは多量の木製品や自然木が出土したが、針葉樹を利用した製品には小型品が多く、また大型の杭（橛脚？）については広葉樹であったため、年輪による年代測定は見送った。また、今後、Ⅲ層が八ヶ岳崩壊に起因する洪水砂であると認定されれば、887年か888年の定点とすることが可能となろう[注1]。

ここでは、屋代遺跡群出土資料を用いて分析を行った①、②について取り上げる。

2　放射性炭素年代

(1) 目的と委託先

大きく3つに分かれる。

Ⅶ層以下（縄文層）の対応関係　離れた地点ではじまったⅦ層以下（縄文時代対応層）の調査では、明確なキー層が少なく、遺構・遺物も微量であったため、地区間での対比が困難であった。それを補うことを目的として、現地調査中に出土した炭化材の測定を、パリノ・サーヴェイ株式会社を通し、学習院大学に委託した。

縄文時代中期集落の年代　屋代遺跡群⑤・⑥区では縄文時代中期の集落跡が数層にわたって確認された。これらの集落は厚い堆積層に被覆されており、後世の影響や撹乱が及びにくい状況を示していた。各層位で検出された竪穴住居内からは炭化材や土器付着の漆が検出されており、これらの資料整理が進んだ報告書作成段階において、各集落の年代差や暦年代を明らかにすることを目的に年代測定を行った。測定は国立歴史民俗博物館が進めるCOE「縄文時代の高精度編年研究」の一環に組み込まれた。試料選択および準備は国立歴史民俗博物館で行われ、測定は米国のベータ・アナリティック社によって、タンデトロン加速器質量分析（AMS）法を用いて行われた。

縄文晩期から弥生中期の開発時期　縄文時代晩期から弥生時代中期の層位において、自然木が焼失、あるいは意図的に焼却（弥生・Ⅱ群土坑）されたと思われる炭化材が多く検出された。Ⅱ群土坑の一部からは石包丁片が出土しており、水田開発に伴う立木の伐採や焼却の可能性が考えられた。しかし、遺物の伴出例はごくわずかであり、低地林全体への火入れが弥生時代中期にまで下がるのか、あるいは縄文時代晩期末から継続的に行われていたのかを確認するため、個々の炭化自然木の年代を知ることを目的として分析を依頼した。現地調査中、先行してパリノ・サーヴェイ株式会社を通じ学習院大学に測定を委託した。また、炭化材サンプルの整理が完了した報告書作成段階において、測定方法を替える試みを行うため、株式会社古環境研究所を通じ、米国のベータ・アナリティック社に測定を委託した。

(2) 分析試料について

炭化材50点である。炭化材の採取は、現地において各地区担当者が行い、土のついた状態でアルミホイ

ルにくるんで保管しておいた。縄文時代中期の竪穴住居から検出された脆弱な炭化材については、出土の時点でボンコートなどの薬剤を使用し硬化させたものがある。分析試料は、径2～3㎝以上の炭化材を目安としたが、やむを得ず微細なものが含まれている（表中に明記）。また、エタノールなどの薬品に触れた試料、分析前にカビが発生したことのある試料については、表9中に明記した。

分析試料そのものの状態とともに、出土した状況にはいくつかのランクが存在する（表9参照）。

SB（竪穴住居）採取の試料は、焼失した竪穴住居の炭化材を中心に、柱や垂木、壁材などの建築材と炉に残された燃料材である。竪穴住居の存続年数は短期であり、また、伴出考古遺物との対応関係も把握できる試料となっている。

以下の試料については、伴出遺物が微量であるか皆無な例である。同一層から出土した遺物によって、おおまかな考古時期を把握することはできる。

SFは焼土や獣骨を伴う焼土跡（屋外炉）で、層との対応関係がはっきりつかめる。台帳番号1～5のSKは土坑内で火を焚いたもので、特定の時代（古代）に特有の遺構であり、発掘所見では炭化材形成の時期と遺構の時期は一致する。SXとSKの内、台帳番号7～12、16、22～24、30、31は自然の立木が何らかの理由で焼けたものと考えられる。残存していた炭化材が根の部分であるか、幹や枝の部分であるかによって検出した層との対応関係に問題点も残る。また、大木であったと仮定すると、樹木の外皮に近い部分か芯に近い部分が残存していたのか、など不明な点が残る試料である。炭化物集中や包含層出土の炭化材は、焼土跡で利用された燃料材か焼けた立木の一部であったと考えられるが、掘り込みなどはなく考古遺物との対応関係が明確にし得ない試料である。

よって、層・考古遺物との対応関係では、最も良好なものから、SB試料・SK（1～6）→SF試料→SK（7～10、22～24）・SX試料→炭化物集中、包含層試料の順となる。このため、更埴条里遺跡Ⅶ層以下において良好な試料が少なくなっている。

(3)　測定機関と測定方法の違い

委託先の測定方法には、学習院大学のガスカウンター法とベータ・アナリティック社のタンデトロン加速器質量分析（AMS）法がある。前者は、試料をガスに転換した上で比例計数管に充填して^{14}Cが放出するβ線をカウントするもので、後者は、^{14}C原子とその安定同位体をイオン源でイオン化し、タンデトロン加速器で加速、その同位対比を測定する質量分析法である（中村1999）。AMS式は、少ない試料で高精度の測定値を得られる方法として期待されている。

(4)　測定結果

分析に提供した試料は表9に示した。

(5)　成果と問題点

縄文時代中期集落の^{14}C値　中期前葉と中期後葉については、出土した土器型式から時期が比較的限定できる集落である。中期前葉集落は、五領ヶ台Ⅱ式の新しい段階に並行する遺構が最も多く、炭化材もこの時期に限られる。また、中期後葉集落は、加曽利EⅡ式新段階から加曽利EⅣ式（綿田1995）段階に限られる。いずれも、シルト～砂の層に覆われており、他時期の混在はないと考えられる。

AMS法による^{14}C値を見ると、いくつかの突出したデータを除くと、放射性炭素年代値が中期前葉では4550±60～4650±50（すべて五領ヶ台Ⅱ式併行期）に集中し、中期後葉では4140±60（加曽利EⅢ～Ⅳ式期）～4260±50（加曽利EⅡ新式期）の数値が得られている。これまで、長野県内で行われた測定値（川崎1997）

表9　更埴条里遺跡・屋代遺跡群　放射性炭素測定値一覧（層位順）

試料番号	遺跡名	仮地区	層位・検出面	出土遺構	遺構内層位・取上番号	試料の状態		採取年月日	遺構の特徴	考古時期	
9	更埴	J	Ⅵ層上面	SK10024		炭化材	乾燥	92.8	用途不明土坑	平安(9c前)	9cに多いﾀｲﾌﾟの土坑
10	更埴	J	Ⅵ層上面	SK10025		炭化材	乾燥	92.8	用途不明土坑	平安(9c前)	〃
11	更埴	J	Ⅵ層上面	SK10026		炭化材	乾燥	92.8	用途不明土坑	平安(9c前)	〃
12	更埴	J	Ⅵ層上面	SK10027		炭化材	乾燥	92.8	用途不明土坑	平安(9c前)	〃
13	更埴	J	Ⅵ層上面	SK10029		炭化材	乾燥	92.8	用途不明土坑	平安(9c前)	〃
5	更埴	C	Ⅵ層	SK2140		炭化材	乾燥	91.6.2	?	古墳時代	?
21	屋代	2d・e	Ⅶ層上面	SK1055		炭化材	乾燥	92.8	焼けた立木	弥生前～中期	同一層に氷～栗林式土器
C-7	屋代	2f	Ⅵ層下面	SK1075		炭化材	乾燥	92.11	焼けた根痕か?	弥生前～中期	同一層に氷～栗林式土器
C-8	屋代	2f	Ⅵ層下面	SK1080		炭化材	乾燥	92.11	焼けた根痕か?	弥生前～中期	同一層に氷～栗林式土器
22	屋代	2f	Ⅵ層下面	SK1080		炭化材	乾燥	92.11	焼けた立木か(流路付近)	弥生前～中期	同一層に氷～栗林式土器
23	屋代	1f	Ⅶ層上面	炭化物集中3		炭化材	土付き乾燥	92.6.10	焼けた立木	縄文晩期後半?	氷式より下層で、佐野式より上層
002	屋代	1f	Ⅶ層上面	炭化物集中3		炭化材	乾燥	92.6.10	焼けた根痕か?	縄文晩期後半?	〃
6	更埴	H	Ⅷ層	SK7002	SK702	炭化材	乾燥	91.12.11	炭化物集中	縄文晩期前半	同一層に佐野式土器
15	更埴	J	Ⅷ層	SF1002	旧SF102	炭化材	乾燥	92.9	焼土跡、獣骨有	縄文晩期前半	同一層に佐野式土器
資料1	屋代	6a	Ⅷ層	西壁炭化物集中		炭化材	乾燥	94.12.28	炭化物集中	縄文晩期前半	佐野式土器
6	更埴	I	Ⅸ層上面	SX811		炭化材	乾燥	93.8.5	焼けた根痕か?	縄文晩期前半	
1	更埴	A	Ⅸ層上部	SQ001		炭化材	乾燥	91.7.25	炭化物集中	縄文後期	同一層に加曽利B式土器
2	更埴	A	Ⅸ層上部	SQ002		炭化材	乾燥	91.7.25	炭化物集中	縄文後期	〃
3	更埴	A	Ⅸ層上部	SQ003		炭化材	乾燥	91.7.25	炭化物集中	縄文後期	〃
4	更埴	A	Ⅸ層上部	SQ004		炭化材	乾燥	91.7.25	炭化物集中	縄文後期	〃
14	更埴	J	Ⅸ層上部	SF1013	旧SF113	炭化材	乾燥	92.9	焼土跡	縄文後～晩期	
001	屋代	2f	Ⅸ層中部	SK1110		炭化材	乾燥	92.11.2	伐根・焼却根痕	縄文後期	
24	屋代	2	Ⅸ層中部	SK1100		炭化材	乾燥	92.11.2	焼けた立木	縄文後期	
8	更埴	H	Ⅸ層	SK7156		炭化材	乾燥	91.12.11	焼けた根痕か?	縄文後期	
7	更埴	H	Ⅸ層	炭化物集中34		炭化材	乾燥	91.12.11	炭化物集中	縄文後期	
8	更埴	H	Ⅸ層	東壁SF		炭化材	乾燥	93.8.23	焼土跡	縄文後期	
4	更埴	I	Ⅸ層中部	東壁SF		炭化材	乾燥	93.8.25	焼土跡	縄文後期	
1	更埴	I	Ⅸ層中部			炭化材	乾燥	93.8.25		縄文後期	
2	更埴	I	Ⅸ層中部			炭化材	乾燥	93.8.24		縄文後期	
7	更埴	I	Ⅸ層中部	SX810		炭化材	乾燥	93.8.11	焼けた根痕か?	縄文後期	
5	更埴	I	Ⅸ層下部	SX825		炭化材	乾燥	93.8	焼けた根痕か?	縄文後期	
資料2	屋代	6a	X層	西壁炭化物集中		炭化材	乾燥	94.12.28	炭化物集中	縄文後期前葉	
16	更埴	J	XⅠ層	SF1019	旧SF119	炭化材	乾燥	92.10.27	焼土跡	縄文後期	
25	屋代	4	XⅡ-1層	SF4804		炭化材	土付,カビ?	93.11	焼土跡	縄文後期前葉	同一層に堀之内Ⅰ式土器
3	更埴	I	XⅡ層上面	SF803		炭化材	乾燥	93.8.24	焼土跡	縄文後期前葉	
17	更埴	J	XⅡ層	包含層		炭化材	乾燥	92.10.19	包含層出土の炭化物	縄文中～後期	

依頼先	測定者	測定方法	C14年代値 (年BP±1σ)	δC13C (‰)	補正C14年代値 (年BP±1σ)	較正層年代	測定コード番号	備　考
パリノ	学習院大	ｶﾞｽｶｳﾝﾀｰ	1780±120				Gak-17271	
パリノ	学習院大	ｶﾞｽｶｳﾝﾀｰ	1840±90				Gak-17272	
パリノ	学習院大	ｶﾞｽｶｳﾝﾀｰ	2880±160				Gak-17273	
パリノ	学習院大	ｶﾞｽｶｳﾝﾀｰ	1680±80				Gak-17274	
パリノ	学習院大	ｶﾞｽｶｳﾝﾀｰ	880±80				Gak-17275	
パリノ	学習院大	ｶﾞｽｶｳﾝﾀｰ	3910±100				Gak-16483	
古環境	ﾍﾞｰﾀ社	AMS	2550±40	-26.0	2530±40	交点 BC775 1σ BC790 TO 760, BC670 TO 550	Beta-126275	
パリノ	学習院大	ｶﾞｽｶｳﾝﾀｰ	3340±170				Gak-19528	
パリノ	学習院大	ｶﾞｽｶｳﾝﾀｰ	3190±80				Gak-19529	
古環境	ﾍﾞｰﾀ社	AMS	2610±40	-26.8	2580±40	交点 BC790 1σ BC790 TO 760, BC670 TO 551	Beta-126276	
古環境	ﾍﾞｰﾀ社	AMS	2500±40	-26.5	2480±40	交点 BC755, BC685, BC540 1σ BC770 TO 505	Beta-126277	
パリノ	学習院大	ｶﾞｽｶｳﾝﾀｰ	2570±90				Gak-17259	
パリノ	学習院大	ｶﾞｽｶｳﾝﾀｰ	4170±120				Gak-16484	
パリノ	学習院大	ｶﾞｽｶｳﾝﾀｰ	3170±100				Gak-17277	
パリノ	学習院大	ｶﾞｽｶｳﾝﾀｰ	2420±100					
パリノ	学習院大	ｶﾞｽｶｳﾝﾀｰ	3600±90				Gak-17554	
パリノ	学習院大	ｶﾞｽｶｳﾝﾀｰ	3910±100				Gak-16479	
パリノ	学習院大	ｶﾞｽｶｳﾝﾀｰ	4750±120				Gak-16480	
パリノ	学習院大	ｶﾞｽｶｳﾝﾀｰ	5060±290				Gak-16481	
パリノ	学習院大	ｶﾞｽｶｳﾝﾀｰ	4190±100				Gak-16482	
パリノ	学習院大	ｶﾞｽｶｳﾝﾀｰ	3910±220				Gak-17276	
パリノ	学習院大	ｶﾞｽｶｳﾝﾀｰ	3660±90				Gak-17258	
古環境	ﾍﾞｰﾀ社	AMS	3270±40	-24.2	3290±40	交点 BC1630 1σ BC1615 TO 1510	Beta-126278	
パリノ	学習院大	ｶﾞｽｶｳﾝﾀｰ	4370±130				Gak-16486	
パリノ	学習院大	ｶﾞｽｶｳﾝﾀｰ	3280±170				Gak-16485	
パリノ	学習院大	ｶﾞｽｶｳﾝﾀｰ	4110±110					
パリノ	学習院大	ｶﾞｽｶｳﾝﾀｰ	3350±140				Gak-17552	
パリノ	学習院大	ｶﾞｽｶｳﾝﾀｰ	3160±250				Gak-17549	
パリノ	学習院大	ｶﾞｽｶｳﾝﾀｰ	5810±700				Gak-17550	
パリノ	学習院大	ｶﾞｽｶｳﾝﾀｰ	3140±90					
パリノ	学習院大	ｶﾞｽｶｳﾝﾀｰ	3240±90				Gak-17553	
パリノ	学習院大	ｶﾞｽｶｳﾝﾀｰ	4320±140					
パリノ	学習院大	ｶﾞｽｶｳﾝﾀｰ	4830±290				Gak-17278	
古環境	ﾍﾞｰﾀ社	AMS	3690±40	-24.6	3690±40	交点 BC2035 1σ BC2130 TO 1985	Beta-126279	
パリノ	学習院大	ｶﾞｽｶｳﾝﾀｰ	3610±150				Gak-17551	
パリノ	学習院大	ｶﾞｽｶｳﾝﾀｰ	3280±130				Gak-17279	

試料番号	遺跡名	坂地区	層位・検出面	出土遺構	遺構内層位・取上番号	試料の状態		採取年月日	遺構の特徴	考古時期	
9	屋代	5b	XII-2層	SB5338	床面.1 =3	炭化材	ｴﾀﾉｰﾙ浸	93.8.9	竪穴住居	縄文中期後葉	加曽利EIII式
7	屋代	5b	XII-2層	SB5340	炭1.2 (炉内)	炭化材	土付き湿気	93.7.22	獣骨多数廃棄の竪穴住居	縄文中期後葉	加曽利EIV式
8	屋代	5b	XII-2層	SB5341	炉2# 上面.2	炭化材	ﾎﾟﾘｺｰﾄ硬化	93.7.8	竪穴住居	縄文中期後葉	加曽利EII新式
2	屋代	5b	XII-2層	SB5345	4	炭化材	ｴﾀﾉｰﾙ浸	93.8.9	(焼失)竪穴住居	縄文中期後葉	加曽利EIII古式
1	屋代	5b	XII-2層	SB5345	1	炭化材	ｴﾀﾉｰﾙ浸	93.8.9	(焼失)竪穴住居	縄文中期後葉	加曽利EIII古式
4	屋代	5b	XII-2層	SB5345	36 (壁材)	炭化材	ｴﾀﾉｰﾙ浸	93.8.9	(焼失)竪穴住居	縄文中期後葉	加曽利EIII古式
10	屋代	5b	XIV-1層	SB5401		炭化材	乾燥	93.10.29	竪穴住居内	縄文中期前葉	五領ヶ台II式併行
14	屋代	5b	XIV-1層	SB5412	下床直、炭化物集中部分2	炭化材	乾燥	93.12.16	竪穴住居内	縄文中期前葉	〃
13	屋代	5b	XIV-1層	SB5412	下床直、炭化物集中部分.4	炭化材	乾燥	93.12.1	竪穴住居内	縄文中期前葉	〃
11	屋代	5b	XIV-1層	SB5412	床面.2	炭化材	乾燥	93.12.1	竪穴住居内	縄文中期前葉	〃
18	屋代	5b	XIV-3層 (上面)	I-M10区	1	炭化材	乾燥	94.4.12	包含層出土炭化物	縄文中期前葉	〃
26	屋代	6	XV-1層	包含層中		炭化材	土付き乾燥	94.12	包含層出土炭化物	縄文中期前葉	同一層に五領ヶ台I式並行期の土器
27	屋代	5	XVI-1層上面	包含層中		微量炭化粒	土付き湿気有	94.4	包含層出土炭化物	縄文前期後～中期初	
28	屋代	6	XVII-2層	堆積層中		微量炭化粒	土付き	94.12	包含層出土炭化物	縄文前期？	

依頼先	測定者	測定方法	C14年代値 (年BP±1σ)	δC13C (‰)	補正C14年代値 (年BP±1σ)	較正暦年代	測定コード番号	備　考
歴博	ベータ社	AMS	4570±40	-26	4550±40	交点 BC3340 1σ BC3350-3310 BC3230-3120	Beta-119449	RH-90
歴博	ベータ社	AMS	4170±60	-27	4140±60	交点 BC2855, BC2820 BC2665 1σ BC2875-2790 BC2780-2590	Beta-119447	RH-88
歴博	ベータ社	AMS	4270±50	-25.9	4260±50	交点 BC2890 1σ BC2905-2875	Beta-119448	RH-89
歴博	ベータ社	AMS	4170±40	-26.4	4150±40	交点 BC2860, BC2815, BC2680 1σ BC2870-2795 BC2770-2610	Beta-119445	RH-86
歴博	ベータ社	AMS	4180±40	-25.4	4180±40	交点 BC2870, BC2800, BC2760 1σ BC2880-2855, BC2820-2665	Beta-119444	RH-85
歴博	ベータ社	AMS	5820±100	-26.7	5790±100	交点 BC4680 1σ BC4780-4515	Beta-119446	RH-87
歴博	ベータ社	AMS	4570±60	-26.3	4550±60	交点 BC3340 1σ BC3360-3285, BC3245-3105	Beta-119450	RH-91
歴博	ベータ社	AMS	4510±70	-25	4510±70	交点 BC3310, BC3230, BC3120 1σ BC3350-3070	Beta-119453	RH-94
歴博	ベータ社	AMS	4620±50	-27.6	4580±50	交点 BC3350 1σ BC3365-3325	Beta-119452	RH-93
歴博	ベータ社	AMS	4670±50	-26.5	4650±50	交点 BC3370 1σ BC3505-3425 BC3390-3355	Beta-119451	RH-92
歴博	ベータ社	AMS	4620±40	-26.3	4600±40	交点 BC3355 1σ BC3365-3340	Beta-119454	RH-95
古環境	ベータ社	AMS	4640±40	-25.1	4640±40	交点 BC3365 1σ BC3495 TO 3445, BC3380 TO 3355	Beta-126280	
古環境	ベータ社	AMS	4950±40	-24.7	4950±40	交点 BC3715 1σ BC3775 TO 3685	Beta-126281	
パリノ	学習院大	ｶﾞｽｶｳﾝﾀｰ	4270±160				GaK-18745	

※歴博は国立歴史民俗博物館、パリノはパリノ・サーヴェイ株式会社、古環境は株式会社古環境研究所
学習院大は学習院大学木越研究室、ベータ社は米国・ベータ・アナリティック社

に比べ、各々まとまった値を示している。

縄文時代晩期～弥生時代中期の^{14}C値　ガスカウンター法とAMS法の両方で測定を実施した。

結果的には放射性年代値が、ガスカウンター方式で3190±80と3340±170とかなり古い値が出、AMSでも2550±40と2610±40となり、土器型式から予測された推定年代よりは古くなっている。この時期は、^{14}C値が安定しない傾向があり（1981佐原）、今後に課題を残す結果となった。

問題点　Ⅷ層～Ⅻ－1層については遺物が少なっかたこともあり、^{14}C測定を多く行った。しかし、発掘担当者側が期待した数値が得られたとは限らない。その要因の一つには、現地での試料の選択、試料採取段階から測定へ至るまでにいかに夾雑物がないようにするか、あるいは各分析方法に適した炭化材の状態と量の確保、などで厳正さを欠いた点が指摘できる。こうした点を是正するためには、分析委託先と発掘担当者が、現地において、試料の選択から採取方法について共同作業するのが望ましいと思われる。今後の課題としておきたい。

註

1　昨年暮れ、南佐久郡小海町の大月川岩屑流に埋没していたヒノキを使用し、測定された年輪年代が887年を示した、との発表が信州大学・河内晋平、奈良国立文化財研究所・光谷拓実両氏の共同研究で示された（『朝日新聞』12月23日長野県東北信版）。さらに、年輪の境目を構成する細胞の状態から秋口まで成長していた、とのことであった。このことから八ヶ岳の大崩壊が887年の秋口に起きた可能性がでてきた。一方、千曲川流域で発掘された遺跡では、9世紀後半の洪水砂に被覆された水田には苗痕が明瞭に残っており、季節は田植え前とされてきた。八ヶ岳の大崩壊と大洪水の発生が連続的ではなかった可能性がでてきたことになり、今後、大崩壊から洪水発生までのメカニズムの解明、あるいは一連の事件ではなかったのか、といった問題を含め課題は続くこととなった。

2　縄文時代中期前葉土器の中に付着していた漆の年代測定も今後の予定としている。

参考文献

川崎　保　1997「長野県の遺跡における年代決定法について－相対年代と理化学的年代測定法などの対比と用い方－」『長野県考古学会誌』83号

キーリ，C．T．、武藤康弘　1982「縄文時代の年代」『縄文文化の研究』第1巻

佐原　真　1981「考古学者からみた自然科学者」『考古学のための科学10章』UP選書218

中村俊夫　1999「放射性炭素法」『考古学のための年代測定学入門』古今書院

浜田達二　1981「遺跡の年代をはかる－炭素14と年輪年代学－」『考古学のための科学10章』UP選書218

春成秀爾　1999「日本における土器編年と炭素14年代」『国立歴史民俗博物館研究報告』81

綿田弘実　1988「北信域における縄文中期後葉土器群の概観」『長野県埋蔵文化財センター　紀要』2

3　木簡による伴出遺物の暦年代推定

屋代遺跡群⑥区の溝・流路は、比較的厚く堆積した洪水砂によって第1水田対応層～第5水田対応層に大区分が可能であった。木簡は第2水田対応層～第5水田対応層で出土し、この内、年紀の記された例は第3・第4水田対応層で6点が出土した（図21、47）。

年紀の記された木簡　第4水田対応層からは、細別層ではほぼ中位に位置するSD7035-16層から、戊戌（698）年と記された13号木簡が出土し、上位に位置するSD7039＝SD8040からは、□□七年と記された44号木簡が出土した。後者は、間層を挟んだ上層の第3水田対応層から養老七年や神亀「二」年の木簡が出土していることから、それ以前で、しかも七年まで続いた年紀である「和銅」が有力である。これらの年紀から、第4水田対応層が形成された年代は7世紀末から8世紀初頭の可能性が高い。

第3水田対応層からは乙丑年（46号木簡）、養老七（723）年（90・92号木簡）、神亀「二」（725）年の木簡が出土している。乙丑年については層位的には725年に近い層位であるが、出土した層が埋め戻し土であり混在の可能性があること、8世紀以降で干支年を使用した例が皆無であることなどから、665年の可能性が強い。乙丑年を混在と考えると、第4水田対応層の形成された年代は8世紀前半頃と推定される。

木簡の記載方法など　出土した木簡は細別層位毎にグループ分けした（図47）。第4水田対応層には、最下層近くから「郡」と記された12号木簡などが出土しており、郡里制成立（大宝令施行）以降の木簡と考えられる。また、最上層の「和銅」七年とともに考え合わせると、第4水田対応層は7世紀末の資料を含むとしても、ほぼ郡里制下（701～715年）が主体を占めると考えられる。また、字体では「部」の表記に古い形である「ア」が使用されている例が見られる。

第3水田対応層では、郷里の記載のある荷札木簡が多数見つかっている。特に114号木簡は第3水田対応層の最上層から出土しており、第3水田対応層がほぼ郡郷里制下（715～740年頃）におさまることがわかる。第5水田対応層からは、時期を特定できる木簡は出土していないが、字体の特殊な例（1号木簡）などが存在しており、7世紀後半までさかのぼる可能性が強い。

このように、年紀が記されていない木簡についても、その記載方法から年代を推定することができた。

伴出遺物の時期　次に、各層から出土した土器群を見てゆく。竪穴建物出土土器の組成と切り合い関係、型式的特徴の変遷などで設定した屋代編年に即してみると、第4水田対応層の最下層でもあるSD7035最下層からは須恵器杯蓋Aが複数みられ、古代1期末の様相を呈している。この直上からは、「郡」と記された12号木簡が出土しており、その上層からは、須恵器杯蓋Aが見られなくなる。このことから、土器様相が1期から2期へ変化を見せる時期は7世紀最末頃と推定される。古代2期の範疇に入る土器群は、その後、第3水田対応層まで継続している。土器組成などに多少の変化は認められるものの、洪水砂層による区分や木簡の時期区分とは必ずしも一致した変化を示してはいない。

図47 屋代遺跡群⑧区 木簡出土層位と紀年銘木簡（「木簡編」を改変）

第5章　発掘調査資料総論

更埴条里遺跡・屋代遺跡群・窪河原遺跡の発掘調査資料は、時代・層位別の分冊方式を基本として報告を行ってきた。各々の分冊においては、遺構をその性格や形状毎に区分して掲載した。また、遺物については、加工品か自然遺物かに区分した上で、加工品は土製品・石製品などの材質毎に細分して掲載した。本章では、このような個別細分化した分析の中から得られた成果を、いくつかの観点に沿ってまとめ直し、縄文時代から近世に至る人間活動の変遷を概観する。また、各分冊の「手引き」的な機能を持たせた。そのため、各項目の詳細については各分冊（各執筆担当者分）に戻って確認していただければ幸いである。

第1節　居住域（集落ほか）関連資料

1　概　要

(1)　新たな問題を提起する資料群

今回の調査では、縄文時代中期前葉から中世に至るさまざまな時期の集落や短期間の滞在地（簡易な建物有）、逗留地（建物なし）が発見された。その成果は、集落や建物の数量の多さだけにとどまらない。

沖積地深部の縄文集落発見の意義　例えば、屋代遺跡群⑥区の地表下4～6mで縄文集落が確認された点は、善光寺平（長野盆地）における調査深度や調査方法に再考を促し、沖積地での調査技術の進展をもたらした。地表面での確認が不可能な集落の発見にあたっては、地質・土壌・地理学などとの連携による、堆積状況の分析が不可欠であることを体験した。先行トレンチの到達しない深さの堆積物確認にあたっては、ボーリングやグラムシェルなどの技術導入が必要となり、さらには、止水矢板や強制排水のシステムの採用、安全確保などについても、調査技術の進展や改良がなされた。

発見された集落の資料的な意義について見ると、石川条里遺跡、松原遺跡をはじめ、沖積地深くで相次いで縄文集落が発見されたことによって、沖積地を居住域とすることが一般的であったことを立証した。これは、内陸部に位置する当地域における縄文人の生活空間や領域を見直すきっかけの一つとなった。

旧地表面付近の遺構検出　次に、これらの集落が洪水砂などで被覆されて発見された点も重要である。このことによって、他時期資料の混在が少ない状態で、当時の地表近くに存在していた遺構をとらえることができた。中期後葉集落の地床炉を伴う掘立柱建物の検出は、集落内の居住施設の使用方法とその配置など、縄文時代中期の集落構造を見直す資料となっている。

集落の重層性　3つめには、同一地点で重層的に集落が検出されたことがあげられる。縄文時代中期から中世までの期間、断続的に続く集落遺跡は、土地利用の変遷と集落形態の変遷などを通史的にとらえることを可能にしている。

居住域と生産域の関係　また、空間的には、2.3kmに及ぶ範囲を調査することによって、各時代における集落間の関係や、耕地・猟場・漁場と集落の関係、あるいはその変遷過程を見るための良好な資料を提供できることとなった。

このように、今回得られた集落関係資料は、今後の研究にとって無限の可能性を秘めているといえよう。

(2) 発見された集落などの特徴

居住域などの大分類　今回の発掘資料にはどのような種類の居住地・逗留地が存在していたのか、大きく3分類してから説明を進めてゆきたい。

さまざまな集団が、一時的にでも特定地点にとどまり、調理といくらかの作業などを行った場所を対象として、大分類すると以下のようになる。

A．竪穴建物や掘立柱建物、さらには墓地やその他の施設が整った地点…集落と認定できる場所で、屋代遺跡群⑤区を例にあげると、縄文時代中期前葉、中期中葉、中期後葉、弥生後期～古代8期、中世などが該当する。

B．焼土（火床）跡と土坑が存在し遺物が集中する地点で、簡易な掘立柱建物と見られるピットが存在する地点…ピット群と簡易な建物とする仮説が正しければ、短期的な居住地となっていた可能性が大きい。縄文時代晩期前半の更埴条里遺跡E地区などが該当する。また、建物の有無が微妙であるが、弥生時代前期並行期の屋代遺跡群③a区遺物集中地点もこの類型に属すると見られる。

C．焼土（火床）跡と若干の遺物が散布する地点…獣骨を伴う焼土跡の存在と土器の存在などから、調理を行った可能性は高い。遺物が少量にとどまる点から、ごく短期間その場に逗留していた可能性が考えられよう。屋代遺跡群⑥区や更埴条里遺跡の縄文時代後期の焼土跡と遺物分布が該当する。

上記の大分類は、主に縄文時代から弥生時代前期並行期までに適用する。低地が耕地として開発され、集落が定着する弥生時代中期以降については、調査範囲内でB・C類型が見られなくなる。

各時代の集落概観　本項では、主にA類型（集落）とB類型（短期的滞在地？）について、各時代の特徴と変遷をまとめる。調査区内で検出されたA類型は表10に示した通りである。

各時代の集落の特徴と記載上の視点を述べると、縄文時代に関しては、中期前葉から中期後葉にかけての集落構造の変容、あるいは晩期～弥生時代前期並行期までの短期的滞在地のあり方を中心に据える。弥生時代以降の集落では、水田開発との関連が重要な視点となる。その中でも、7世紀後半～8世紀前半については、律令体制の確立にともなう集落構造の変革が中心となり、9世紀代については条里型地割・耕地開発と集落の関係が主体となる。また、9世紀第4四半期の大洪水以後については、被災後の短期的な復興と長期的な集落の変動が中心となる。さらに、古代末から中世集落では、土地支配体制の変化と集落立地の変化も一つの視点となってくる。

周辺遺跡との関係については第2章2節を、周辺環境や生産域を含めた景観に関する側面については第8章を参照していただきたい。

2　各時代の集落、短期的滞在地の特徴とその変遷

(1) 縄文時代中期集落

A．中期前葉2期（五領ヶ台II式併行期）の集落　（図48）

自然堤防上の立地　千曲川にほど近い、屋代遺跡群⑥区の自然堤防I群高所に立地する。この地点では前期からの遺構や遺物が認められており、隣接地区には前代から集落が形成されていた可能性もある。集落が存在していなかったとしても断続的に利用されて来た微高地であり、すでにある程度樹木などが伐採された、開けた環境にあったと考えられる。

集落の主体部は千曲川の旧河道によって削平され、あるいは調査区外に広がるため全貌は不明である。

竪穴住居の配置と変遷　集落初期の地床炉を持つ竪穴住居の段階（1段階）では、住居の配置は調査区西北部を中心に展開していた可能性が高い。中期前葉1期（五領ヶ台I式並行期）の遺構・遺物散布の中心が調査区西側に偏っており、2期集落のうち最も古い竪穴住居も調査区西壁に接している。このことから、

表10　検出集落一覧

層位	時代	地点	存続期間	要因 成立/廃絶	立地	検出遺構 竪穴建物	掘立柱建物	土坑	(土坑の内訳)	溝	その他の施設
Ⅲ-1	中世	庄河原 K2区	13～14世紀	旧河道内水田、自然堤防Ⅱ群上畠開発 /全面畠へ	自然堤防Ⅱ群	1	1	56	墓坑15	13	焼土跡14
		屋代 ④～⑥区	13～15世紀	居館＋周辺集落成立 /政治的要因？	自然堤防Ⅰ群高所	4	11	396	墓坑16、火葬施設3 井戸73、方形土坑72	58	焼土跡2 その他4
		屋代 ①区	12～14世紀	古代集落の継承発展 /自然堤防高所へ？	自然堤防Ⅰ群 五十里川岸	6	25	254	墓坑25、井戸11	31	
		更埴条里 K地区	12～14世紀	古代集落の継承発展 /自然堤防高所へ？	自然堤防Ⅰ群 五十里川岸	3	19	58	墓坑11、井戸1		
	古代	屋代 ④・⑤区	古代13～14期	自然堤防上耕地再開発 /？	自然堤防Ⅰ群高所	14	—	37	墓坑1、井戸3 焼土坑2	9	焼土跡2
		屋代 ②b区	古代13～14期	自然堤防上耕地再開発 /耕地拡大による移動？	自然堤防Ⅰ群	8	—	8	鍛冶関連土坑2	2	その他1
		屋代 ②区	古代14・15期	自然堤防上耕地再開発 /耕地拡大による移動？	自然堤防Ⅰ群	10	—	6	—	11	
		屋代 ①区	古代12～15期	自然堤防上耕地再開発 /中世集落へ継続	自然堤防Ⅰ群	27	—	39	墓坑7	13	
		更埴条里 K地区	古代8期後半～15期	洪水前集落の継承・発展 /中世集落へ継続	自然堤防Ⅰ群	30	2	41	墓坑1、井戸7	15	
		更埴条里 J地区	古代9期	K.Ⅰ集落の拡大・分散？ /耕地化？	後背湿地Ⅰ群 (Ⅲ層堆積で高燥化)	5	—	4	井戸1	25	その他1
		更埴条里 I地区	古代8期後半～10期	洪水後の復興集落 /耕地化	後背湿地Ⅰ群 (Ⅲ層堆積で高燥化)	61	10	75	墓坑1	46	
		更埴条里 H地区	古代9期のみ？	調査区外集落の拡大 /耕地化	後背湿地Ⅰ群 (Ⅲ層堆積で高燥化)	2	—	5	井戸7(1地区含む)	15	その他1
Ⅳ	古代	屋代 ④～⑥区	古墳～古代8期前	古墳時代から継続 縮小化の中で洪水被害	自然堤防Ⅰ群高所	282	28	202	井戸4、焼土坑6 鍛冶関係12	43	
		屋代 ③b区	古代6～8期前半	水田開発 耕地への転換	自然堤防Ⅰ群 水路分岐点	7	2	24	井戸1、焼土坑4	30	
		屋代 ③a区	古代6～8期前半	水田開発 耕地への転換？	自然堤防Ⅰ群 水路分岐点	16	17	40	—	81	
		屋代 ②区	古代6～8期前半	水田開発 耕地への転換	自然堤防Ⅰ群 水路分岐点？	21	9	21	焼土坑2、井戸1	78	
		屋代 ①区	古代6～8期前半	水田開発 縮小化の中で洪水	自然堤防Ⅰ群 水路分岐点	49	16	79	焼土坑8 鍛冶関連土坑12	272	
		更埴条里 K地区	古代5～8期前半 (8期以降継続)	水田開発の基点 —	自然堤防Ⅰ群 水路分岐、東西道路脇	52	15	64	井戸6、焼土坑7 鍛冶関連4	52	
Ⅵ	古墳	屋代 ⑤・⑥区	弥生5～古墳8期 (古代へ継続)	隣接集落の拡大 —	自然堤防Ⅰ群	109	5	138	—	71	
		更埴条里 K地区	古墳3～4期？	隣接地に集落本体？ /移　動？	自然堤防Ⅰ群	—	1?	2	井戸1	—	—
XⅡ-2	縄文中期後葉	屋代 ⑤・⑥区	中期後葉2～4期	地表面の安定 /移　動？	自然堤防Ⅰ群	53	27	452	墓坑7	16	焼土跡98 集石、炕列他
XⅢ-2	縄文中期中葉	屋代 ⑤・⑥区	中期中葉2期のみ	キャンプ地の延長？ /移　動	自然堤防Ⅰ群	1	1?	5	—	—	焼土跡21
XⅣ-1	縄文中期前葉	屋代 ⑤・⑥区	中期前葉2期	地表面の安定、高所化 /徐々に東へ移動	自然堤防Ⅰ群	22 +6?	—	37	—	2	焼土跡59

集落の中心は調査区西側外から、しだいに東へ移ってきた可能性がある。

その後、竪穴数が増加し、2b段階以降には、占拠する場によってA～Dグループが形成される（図48）。この段階で、北東調査区外を基点に竪穴住居が放射状に配置された可能性がある。炉は2a段階に埋甕炉へ変化する。また、調査区内では掘立柱建物は確認されなかった。

集落内の施設とその配置　竪穴住居の周辺には焼けた獣骨片の混じる屋外炉が点在している。廃棄物は各細別時期ともに、竪穴住居群の西側周縁部が利用されている。特にSQ7003は土器、石器、骨などの出土量が多い。また、SQ7003内には黒曜石の剥片が密集したブロックが6カ所認められ、石器製作後の石屑を一括して廃棄した跡と見られる。

埋葬場所は廃屋を利用しており（第3節）、各細別時期によって場所が移動する。場が固定されていないため、新たな竪穴住居の建築や竪穴凹地の再利用などによって、埋葬人骨が掘り返され散乱した状況が認められる。

調査区内で最も新しい竪穴住居（SB9009）埋土中にも埋葬が認められることから、中期中葉に移行する

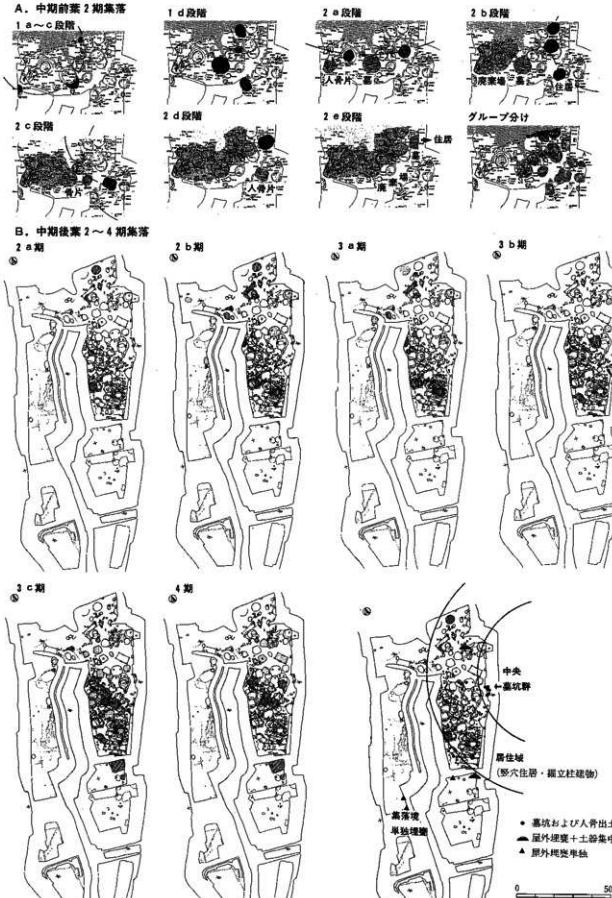


図48　縄文時代中期集落の変遷

段階には、集落の中心が東側調査区外へ移ったと考えられる。

B．中期中葉2期（勝坂Ⅱ・新道式併行期）の集落

中期中葉段階でも屋外炉や遺物散布が継続的に認められる。このことは、集落が他所へ移った後も短期的な逗留地として利用され続けていたか、あるいは調査区周辺に集落が存在していた可能性を示している。こうした中で、中期中葉2期に竪穴住居1軒が見つかっている。遺物もわずかであり、中期前葉や後葉の集落とは異なった、小集団による一時的な居住地であった可能性がある。

C．中期後葉2～4期（加曽利EⅡ～Ⅳ式併行期）の集落　（図48）

自然堤防の平坦化と集落　中期中葉以降、大規模な砂層の堆積は見られず、シルトが徐々に堆積し、土壌化（黒色化）が進む環境にあったと見られる。そのため、自然堤防の起伏は緩やかになり、広い平坦地が生まれる。こうした環境下で、中期後葉2期に集落が成立する。

いわゆる環状集落構造　細別時期によって多少の変化はあるが、いわゆる環状集落が形成される。集落の中央部（広場？）は調査区東壁付近から外に広がっており全貌は不明である。調査区東壁付近では、竪穴住居などが存在せず多数の墓坑（SK5589ほか）が認められている。竪穴住居や掘立柱建物はこれらを取り囲むように配置されている。特に掘立柱建物の主軸は、中央を基点に巡るように配置されている。住居域と中央部との間には、北西部で屋外埋甕群（SQ5537ほか）が存在し、墓坑群の南西では集落唯一の集石炉（SF5166）が見つかっている。

集落境の埋甕　居住施設から外側の集落縁辺部には南側と南西側に合計3個体の単独屋外埋甕が設置されている。これより外側では遺構数が極端に減少しており、これらの埋甕がムラの境界に埋められていた可能性がある。後葉2期～4期の細別段階毎の土器が1個体ずつ存在しており、ある期間を経て埋設されたと見られる。また、集落内や周辺で多様な列方向を示す柵列が確認されているが、用途の限定はできていない。

集落の変遷　集落の成立は中期後葉2b期である。この段階では、徹高地の中央を広く開けて竪穴住居が点在する形態を示しており、集落中央と竪穴住居との間には掘立柱建物や大形土坑などが存在していたと見られる。

後葉3期には、2期に比べやや内側に竪穴住居が展開するようになる。3b期には、竪穴住居の大きさの分化が進み、小形住居の中には柄鏡型敷石住居の萌芽が認められる。後葉3c期には、柄鏡形住居が中央寄りに集中するようになり、掘立柱建物や非柄鏡形住居がその外縁を巡るように配置される。

後葉4期には、ST5114を中心に敷石住居と掘立柱建物が同心円を描くように配置され、集落内の南と北には屋外埋甕を中心とした祭祀域が形成される。

D．中期前葉集落と後葉集落の差異

今回、ほぼ同地点（XIV層とXII層）において中期前葉集落と中期後葉集落が発見された。ここでは、その両者を比較し、400年ほどの間に、集落形態がどのように変化したかについてまとめておくこととする。集落構造や集落景観の違いに影響を与えた遺構としては、掘立柱建物の有無、竪穴住居と掘立柱建物の重複関係の有無、周堤の有無、一軒の竪穴住居における改装・改築の多寡、祭祀遺構（・遺物）の質量の差などをあげることができる。

掘立柱建物の有無　前葉集落では掘立柱建物は検出されず、一方、後葉集落では地床炉を持つ掘立柱建物が多数見つかった。炉付きの掘立柱建物を夏季の住居、炉付きの竪穴建物を冬季の住居（2節）と仮定することが許されるならば、前葉集落では、①竪穴住居と掘立柱建物（平地住居）の建てられる場が明確に区分されていたか、あるいは、②夏季の建物が簡易な構造であったため検出できなかったか、③夏季の住

居が存在していなかったか、のいずれかが想定される。①であれば、整然とした集落構造が継続していたこととなり、③であれば、季節毎の移動などをも考慮しなくてはならない。

一方、後葉集落には両建物とも存在することから、季節を越えての定住性が高かったと見られる。

竪穴住居と掘立柱建物の重複関係　そこで竪穴住居と掘立柱建物（住居）の重複関係に注目したい。中期前葉集落においては、集落成立以降、竪穴住居の配置に変化が見られるにもかかわらず、一棟の掘立柱建物も検出されなかった。このことは、掘立柱建物が竪穴住居に隣接した場にはなかったか、痕跡を残さないほど簡易な建物であったことを示していよう。これに対し、中期後葉集落では、住居配置の変化に伴って、掘立柱建物と竪穴住居の重複関係がひじょうに多く見られる。この点は、同一地点にある集落が、夏・冬を通して使用され、また、長期間継続していたことを強く印象づけるものである。

竪穴住居周堤残存の有無　竪穴住居周堤残存の有無も、集落の継続性に関わる点の一つである。前葉集落では周堤の残存率が高く、後葉集落では周堤の残存は皆無であった。竪穴が深く、周堤の高い前葉の竪穴住居は、労力が多大にかかる上、リフォームには向いていなかったと見られる。また、周堤や竪穴凹地が残った状態の前葉集落は、集落内の起伏が激しく、新たに集落内を整備するには利便性に欠けている。

これに対し、後葉集落では掘立柱建物（平地住居）を建てるための竪穴の埋め戻しが行われるなど、集落内が比較的平坦に保たれている。こうした点は、集落内の整備が盛んに行われていたことを示しており、定住化・集落の継続性を示唆する状況の一つといえよう。

一軒の竪穴住居における改築・改築の多寡　前葉集落では、同一竪穴プランにおける炉の調整や上屋の改築がほとんど認められず、同一住居敷地を長期間使用しつづけることがなかったと思われる。これに対し、後葉集落の竪穴住居では埋甕の追加？設置や上屋の改築などが認められる。このことは、同一竪穴部をより長く使用していたことを示していよう。

夏季と冬季という観点でみると、後葉集落では集落の継続性が高まっていたため、夏季には竪穴周辺の掘立柱建物で生活し、隣接する竪穴住居も活用しながら過ごし、秋には再び竪穴住居を整備し直したり、場合によっては改築するなどして住む、という行為が繰り返されたのではないだろうか。一方、前葉集落では、夏季の居住空間が竪穴とは離れた位置にあった場合を想定すると、空き家の手入れが行き届かない期間が増え、再びこの集落へ戻った時点で旧住居を再整備するよりは、新たな竪穴を掘削する方を選択しなければならない場合も増加したであろう。ただし、重複・隣接関係にある竪穴住居がA～Cといったグループを形成していることから、別集団が移って来るのではなく、同一集団がグループ毎に竪穴住居の占地場所を確保していた可能性が考えられる。また、隣接地に夏季の居住施設があり、竪穴住居の手入れも行われていたとすると、竪穴住居の構造自体にリフォームしづらい点があったと考えられる。

中期前葉集落と後葉集落の差異　中期前葉集落では、高い周堤と深い竪穴部を持つ竪穴住居であったために、継続的に使用する中でのリフォームには適していなかった。そのために新築が繰り返されており、定住に対して払う労力は多大であったと見られる。そして集落は凹凸の激しい利便性に劣る状況が進んでいった。一方、掘立柱建物が皆無で竪穴住居数が多い状況は、夏季における集団の移動・分散の可能性を想定させる。秋以降に集住した姿が屋代遺跡群⑤・⑥区集落であったのかもしれない。

冬季の屋代地区は、周辺の丘陵地帯に比べれば雪が少なく気候も多少は暖かかったと考えられる。千曲川の洪水もほとんどない季節であり、住み良い土地であったと考えられる。また、秋から初冬にかけて遡上してくるサケ科魚類も集落形成の重要な要因であろう。

一方、中期後葉の集落は年間を通して集落が維持され、さらにそれが長期にわたって継続していた可能性を想定した。竪穴住居と掘立柱建物の充実や、同一竪穴住居の改築回数が増加する点は、集落全体や個別の竪穴が長期にわたって維持・管理されていたこと、あるいはその時々の状況に応じて増改築を行って

いたことを示している。また、集落内は定住化に利するように起伏の少ない状態に保たれていた。さらに、祭祀関連遺構や遺物の充実も、長期にわたる定住を精神的に支える役割を担っていたと考えられる。

こうした、長期の定住を支えた食料資源としては、石器組成の変化から植物質食料の増加が見込まれる。また、植物遺体のデータはこの時期にクリやオニグルミが急増したことを示し、動物遺体ではイノシシが大量に集中廃棄されていたなど、動・植物に対する管理技術が向上していたことをうかがわせる。

以上、竪穴住居と掘立柱建物のあり方から、夏と冬の集落のあり方の違いや集落の継続性について仮説を述べてみた。これらは全て竪穴住居＝冬の住居、炉付き掘立柱建物＝夏の住居といった前提からはじめており、しかも、仮定が多く論証の域には達していない。炉付きの掘立柱建物が竪穴住居とは機能の異なる建物であったとすると、集落構造も集落景観もまったく違ってくるであろう。ただし、季節的移動の議論を抜きにしても、後葉集落の方が前葉に比べ定住のための装置が充実していることは確かであろう。

今回は問題提起にとどめ、今後、中期前葉期において竪穴の密集する集落と掘立柱建物の多い集落、あるいは短期的滞在地遺跡との比較を行うことが第1点。第2点としては、竪穴住居や掘立柱建物の調査方法の改良も含めて個々の遺構にあたり、使用・廃絶状況の確認を詳細に行うこと、などを課題としてあげておきたい。

(2)　縄文時代晩期前半～弥生時代前期並行期の短期的滞在地（図49）

晩期前半の短期的滞在地　更埴条里遺跡E地区（図49B）では、晩期前半（佐野式段階）に、遺物の集中する場所で1間×1間の柱穴配置が見られ、焼土（火床）跡や土坑が隣接する例も存在した（C）。1間×1間の柱穴配置は建物としての認定が難しいが、その他の状況証拠から簡易な建物の存在を想定した。この地区では、こうした建物が最低10棟は点在していたと見られる。遺物量が少量である点、埋葬や祭祀に関する施設や遺物が認められない点から、定住的な集落ではなく短期的な滞在地であった可能性が高い。

簡易な掘立柱と焼土跡、そして若干の遺物を伴うパターンは更埴条里遺跡の中で、F地区やG地区でも見られる（A）。地表面が安定したこの時期、低地に存在した島状の微高地上には、こうした短期的な滞在地が盛んに設置され、移動を繰り返していた可能性がある。

弥生前期並行期の短期的滞在地　前期並行期（水Ⅰ式段階）には、屋代遺跡群③a区で半径数mほどの範囲に遺物が集中する地点があり、焼骨を出土したSK3212を中心とした簡易な建物かテント？の存在を想定した（D～F）。やはり短期的な滞在地であったと見られる。この時期に至っても縄文時代晩期の居住スタイルを継承していた可能性が高く、石器組成に変化はあるものの、稲作の痕跡は確認できていない。

晩期～弥生前期並行期の特徴　このように、縄文時代晩期から弥生時代前期並行期にかけての低地では、短期的な滞在地の設営を繰り返し、移動する集団が存在していたと見られる。彼らの母村が近隣に存在していたか否かは不明である。縄文時代後期の低地では、簡易な建物がまったく検出されない逗留地が主流であった。後期には母村が周辺に存在し、小グループが短期的に低地を訪れては戻っていった光景が想定される。一方、晩期には簡易ではあっても居住施設を伴っており、居住形態をはじめとする生活のパターンに変化が生じていたと見られる。

(3)　弥生時代～古墳時代の集落（図50）

弥生時代中期　中期には、大規模な水田開発に伴う集落が自然堤防上に成立し、屋代遺跡群⑤区に隣接する土口バイパス地点や大境遺跡でも集落跡が見つかっている。

古墳時代　弥生時代末期から古墳時代前期には、屋代遺跡群⑤区へも既存の集落が拡大してくる。集落は自然堤防高所で東西方向に展開していたと見られ、調査区内だけでは集落構造を把握することは難しい。

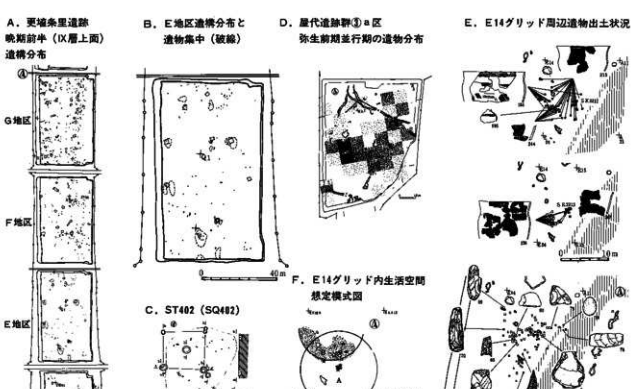


図49　縄文時代晩期～弥生時代前期並行期の短期滞在地点

しかし、古墳5期（5世紀中～後半）には、調査区中央を挟んで東側に大型竪穴住居が集中する傾向が顕著となる（図51A）。この時期、集落北側の湧水点から河道にかけて大規模な導水型祭祀施設（SD7068・SX7038）が構築される。湧水地点で摩耗したと見られる土器片が大型住居SB5190で玉類とともに出土しており、大型住居群と祭祀施設が密接な関係にあったことを示している。導水型祭祀施設は、規模とその後の継続性から見て、一集落単独の施設とは考えられない。このことから、東側の大型住居群が屋代・雨宮遺跡群の中で重要な地位を占めていた可能性がある。

(4)　飛鳥・奈良時代の集落（図50・51）

A．律令制確立期の集落（古代0～2期）

大型掘立柱建物群の成立　古代1期前半前葉までは、古墳時代の集落を継承する集落が屋代遺跡群④～⑥区に見られる。古代1期前半後葉（7世紀後半）には、大型の掘立柱建物（ST4201）を主屋とする建物群が旧集落の南側隣接地に成立する。この大型掘立柱建物群を中心とした集落は、主軸を変えながらも古代2期（8世紀前半）まで継続する。

集落構造　掘立柱建物群は主軸を揃え、主屋の周囲に付属屋、倉庫？などが配置されている（図51B）。建物群の周辺には、南側を除き、建物群を囲むように竪穴建物・住居が点在している。これらの竪穴建物・住居には、鍛冶炉を伴う例（SB4023、5061）、ガラス玉の鋳型を出土する例（SB5134）、紡錘車を複数出土する例（SB5090、6053）などが存在している。掘立柱建物群に付属して、手工業生産を担っていたと見られる。さらに、北側崖から東西流路にかけては、古墳時代から継承された祭祀場となっており、導水型祭祀

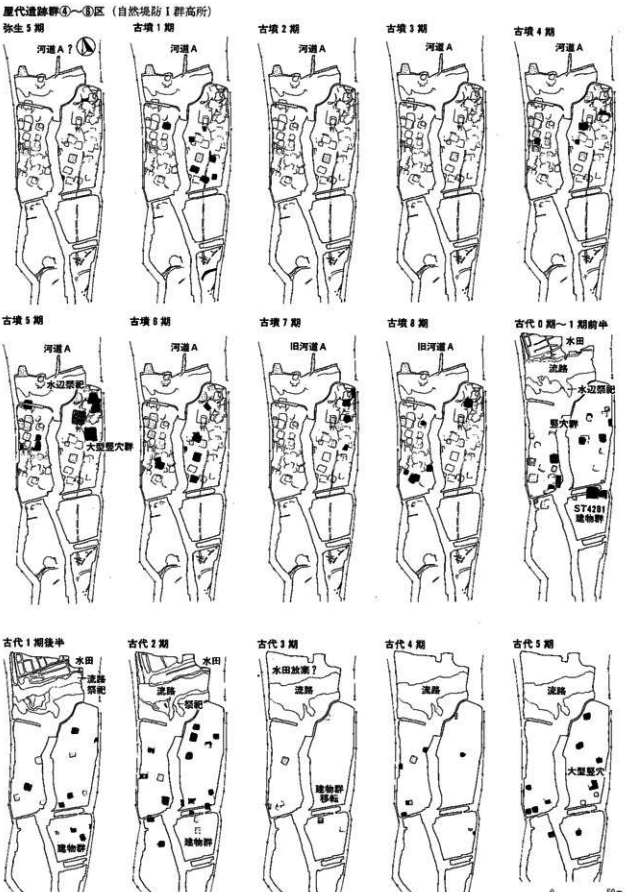


図50　弥生時代（弥生5期）～平安時代初頭（古代5期）の集落変遷

施設や湧水坑型祭祀施設のほか、木製祭祀具の廃棄が認められる。

建物群の性格　北側の溝や流路中からは国符、郡符をはじめとする木簡が出土しており、大がかりな祭祀施設も設置されている。これらは、官衙の存在を示す有力な手がかりである。ただし、ST4201を中心とする建物群については、掘立柱建物群と竪穴建物を明確に分離する施設が存在せず、古代２期には掘立柱建物群内にも竪穴建物が混在して建てられるようになる。こうした点から見ると、ST4201建物群を官衙（公務専用）の施設とするには無理があろう。各種の小規模な手工業生産施設が集中している点などは、在地有力者の居宅とそれを囲む集落である可能性が高いと考えられる。居宅と竪穴建物の境界が明確でない点は、卓越した実力者ではなかったと見られる。

Ｂ．一般集落へ変貌期（古代３・４期）

木簡や木製祭祀具の多量廃棄が見られなくなる８世紀中葉以降、掘立柱建物群も姿を消し、屋代遺跡群⑤区に少数の小型竪穴住居が残るのみとなる。

(5)　条里耕地の開発と集落（古代５～８期）（図52）

低地への集落進出　古代５期（８世紀末～９世紀初頃）、旧水路に沿って竪穴住居が進出をはじめる。最も早いのは更埴条里遺跡Ｋ地区集落である。古代６期（９世紀前半）には、再整備された水路の分岐点に隣接した微高地上に、相次いで集落が進出する。これらの集落は自然堤防Ⅰ群上の水田再開発のために、計画的に配置されたと見られ、その基点となる集落は更埴条里遺跡Ｋ地区西側に存在していたと予想される。

集落の構造　開発の基点がＫ地区西側にあるとした根拠には、①低地への進出が最も早かったこと、②水路の基点に最も近いこと、③古代６期に最も大規模な集落が存在したと想定されること、④この直後に開始される条里型地割の施工においても、最も早く施工されること、などがあげられる。

次に、その基点となった集落と、水路分岐点に配置された集落との構造の差異を明確にしておく。

更埴条里遺跡Ｋ地区集落（古代６期）　Ｋ地区では、古代６期の早い段階で、後の条里型地割線下に区画溝（SD974）が掘られる。この溝と材木（柵）列は屋代遺跡群①ｂ区まで続き、そこで古墳時代の地割に近い方向に大きく屈曲している（図52）。Ｋ地区において、この区画溝で囲まれた範囲には掘立柱建物が主軸をそろえて複数存在しており、東側に展開するＢ群、Ｃ群とは建物数において大きな格差を示している（図51E）。また、この地区からは畿内系土師器が出土している。

屋代遺跡群②区集落（古代６期）　水路分岐点や水路脇に進出した集落の構造にはいくつかのタイプが見られる。集落のほぼ全貌がわかる②区集落で見ると、東と西の２グループが存在する（図51C）。東グループは、掘立柱建物の主屋１棟＋倉庫１棟＋？に竪穴住居１軒が主軸を揃えて配置されている。これに対し西グループでは掘立柱建物１棟を取り囲むように竪穴住居が２～３軒存在している。東グループはこの集落における中心的な集団の宅地と見られ、西グループはそれに従属する集団の居住地と見られる。

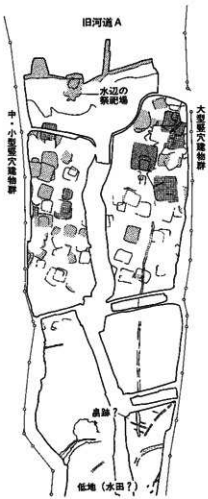
１集落内に見られる２グループの存在は、集落毎の格差はあるものの、低地へ進出した集落の基本的な構成であったと見られる。②区東グループのタイプには、屋代遺跡群①区集落、③ａ区集落、③ｂ区集落西グループがあたり、②区西グループに共通する集落には、更埴条里遺跡Ｋ地区の７期集落、屋代遺跡群③ｂ区集落東グループがあたる。

条里型地割の施工と集落移動　古代６期に一斉に低地へ進出した集落は、条里型地割の整備に伴って、９世紀代のうちに、再び編成され直す。

まず、６期の後半段階には、東西の坪境の設定に伴ってＫ地区集落と①区集落が北へ若干移動する。

①区以北については、条里型耕地造成の影響が現れるのは遅く、古代８期（９世紀後半）になってようやく②区集落、③ｂ区集落が畦畔や耕地造成のために移転、あるいは廃絶している。

A．古墳時代中期（古墳5期）
屋代遺跡群⑤・⑥区集落

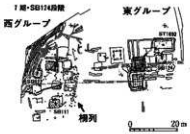


大型竪穴建物集中地点の確立

B．飛鳥時代（古代1期前半）
屋代遺跡群④～⑥区集落

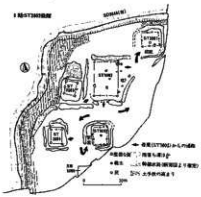
ST4201を中心に配置された
掘立柱建物と外縁の竪穴建物群

C．平安時代（古代7期）
屋代遺跡群②区集落



西グループ：掘立1＋竪穴2
東グループ：掘立3（主屋・倉庫・？）
＋竪穴1

D．平安時代（古代8期前半）
屋代遺跡群③α区礎石建物群



主屋1＋副屋2（居住棟）＋倉庫2

E．平安時代（古代6期～8期前半）
更埴条里遺跡K地区集落構造の変遷

6期：走水型地割（SD974）で分割された
A群とB・C群

7期：掘立柱建物を囲んで点在する
竪穴建物

8期：鍛冶工房（ST918）＋竪穴1

図51　古墳時代・古代の集落構造

条里型地割整備期の集落変遷　一斉に低地へ進出した集落は、条里型地割の整備が進む中で栄枯盛衰を遂げてゆく。その状況は建物の規模や数に反映されるとともに、出土遺物によっても知ることができる。ここでは、各集落で複数個見つかった一字墨書土器の成果を含めて各集落の変遷を概述する（図52）。

K地区集落は、5期に調査区西側集落が東へ進出する形（SB9011一軒）ではじまる。6期に掘立柱建物が立ち並ぶ有力な西側地区には、「冨」を保有する集団が居を構えており、区画溝（SD974）東側の低地へ新たに進出したグループは「八」を保有する集団である。しかし、7期にこれらの墨書土器が姿を消す段階には、集落構造にも変化を見せており、掘立柱建物1棟（ST921やST923）とそれを取りまく竪穴住居群、という形になる。さらに、集落が小規模・分散化する8期前半には、③a区集落と共通する「由」が見られる。

①区では、6期の集落成立以後着実に集落規模を拡大してゆく。7～8期には集落を囲繞する溝が完成し、掘立柱建物群内に連房式鍛冶施設が配置されるまでに力をつけてくる。この集団を象徴する墨書土器は「太」であり、急速に増加するのは8期前半である。

8期前半に廃絶する②区集落や③b区集落には複数個見つかった一字墨書土器は存在していない。ただし、③b区西側グループでは、6期に「八代」と郷名が記された墨書土器が大型竪穴住居SB3031から複数出土している。

③a区集落は、主屋（掘立柱建物？）＋複数の倉庫＋複数の竪穴住居からなっており、時期を追う毎に建物が大型化し、8期前半には掘立柱建物が礎石建物へ建て替えられる。墨書土器は当初より「由」を持っており、8期前半まで継承される。

④区～⑥区では基幹水路SD4514が掘削され、旧河道A内の水田が再整備される7期頃に住居数が増加し、それに合わせて墨書土器も増加する。複数の集団が存在していた可能性があり、墨書土器には「赤」「本」「真」「Z」が見られる。

このように、9世紀代に低地に進出した集落は、条里型地割・耕地の再整備に伴って移転・廃絶を余儀なくされる集落と、しだいに力をつけ発展していった集落、などに分かれ、さまざまな変遷をたどる。また、集落の盛衰を象徴する例として墨書土器の出土量の変化を取り上げた。このことは、特定の文字と集落内に居住する集団に一定の対応関係が成り立つ可能性を示していよう。この仮定が正しければ、③a区を中心とした「由」が、①区集落やK地区集落で微量ながら出土している点は、墨書土器単体の移動だけにとどまらず、集団の移動をも考慮に入れて検討する必要が出てこよう。今後の課題としておきたい。

(6)　古代2（洪水後）の集落　（図53）

A．洪水後の復興

洪水被害後の集落立地（古代8期後半）　9世紀第4四半期に起こった大洪水は、この地域にも多大な被害を及ぼした。その状況については第6章第2節図91、第5章第11節に詳述した。洪水が自然堤防Ⅰ群を乗り越えた状況や旧河道中の耕地の壊滅状況を考慮すると、自然堤防の高所ではあっても旧河道A沿いから集落が姿を消したのはうなずける。これに対し、標高も高く、一重山の低地への突出によって比較的洪水の被害が少なかったのが更埴条里遺跡西部地区であり、近接するK地区集落は、洪水後にも集落が存続している。また、砂堆積により高燥化した後背湿地Ⅰ群北部の更埴条里遺跡Ⅰ地区に新たな集落が成立する。これらの集落は、洪水後も水田耕作が可能であったと見られる後背湿地Ⅰ群に近く、一部では条里型地割の復元（溝の掘削）がなされている。

この時期の集落構造は不明確であるが、掘立柱建物に小型の竪穴住居が数棟加わる程度のグループを基本とし、集落自体も小規模であったと見られる。

復興集落の定着期（古代9・10期）　10世紀前半から中頃にかけて、更埴条里遺跡Ⅰ・K地区集落は継続

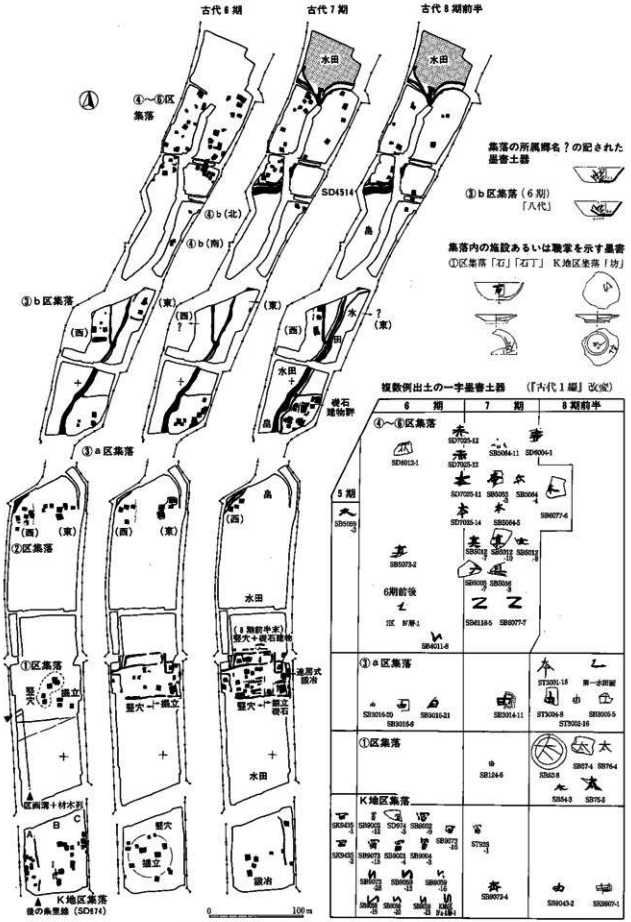


図52　古代6期～8期前半の集落変遷と墨書土器

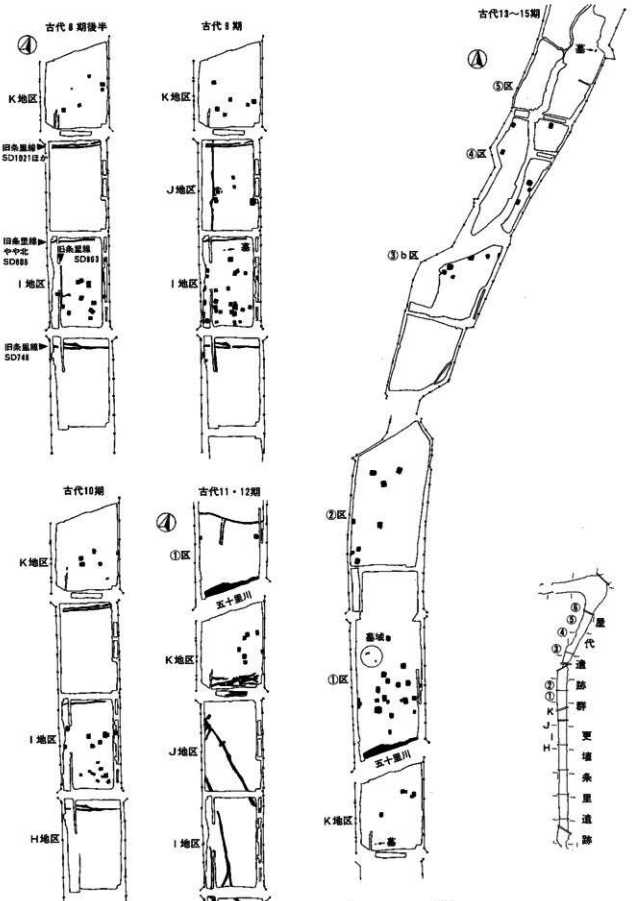


図53　平安時代（古代8期後半～15期）の集落変遷

し、さらに一時的にJ地区も集落域となる。新たな集落の進出というよりも、洪水後、生活を成り立たせていた集落がようやく定着する時期であったと見られる。

B．用水開発と自然堤防側への集落進出

用水の開発（古代11・12期）　災害からの復興の時期を過ぎ、新たな開発が進められる。10世紀後半以降、自然堤防Ⅰ群から後背湿地Ⅰ群北部において、水路の再整備がはじまる。更埴条里遺跡Ⅰ地区にも水路が引かれて耕地化し、集落が移転する。

自然堤防側への進出（古代13～15期）　11世紀には、幹線水路から引かれた用水が埋没し、水田開発は一時低調となる。その一方で、集落が自然堤防Ⅰ群側に進出し、周囲に畠跡と見られる畝状遺構（時期限定不可）が検出されている。このように、この時期の自然堤防Ⅰ群開発は畠を中心としたものと考えられる。

また、集落規模は屋代遺跡群①区を除き、いずれも小規模であり、竪穴住居が散在する傾向にある。また、①区集落をはじめ、いくつかの集落の縁辺部で土坑墓が見つかっている。各集落に1～4基程度しかなく、集落内の有力者の墓と推定される。

(7)　中世の集落（図54）

集落域の集約化（12世紀以降）　古代末に点在していた集落の多くは廃絶し、中世の集落は集約化の傾向を示す。また、用水路で2～3辺を囲うのを基本とするようになる。

12世紀代には古代末から継承される形で、屋代遺跡群①区と更埴条里遺跡K地区に中世集落が成立・再編される。個々の遺構については、時期限定が難しいため、建物の主軸方位によって大きく2時期に分けられる。13世紀以降、自然堤防高所に集落が成立した後、衰退に向かったと見られる。

五十里川を挟んだ両集落は密接な関係にあったと見られる。建物規模や井戸数などから①区が優位に立っていたと見られ、①区東寄りには「L」字に区画された地点がある。カクランが激しく区画溝内に存在した建物は不明である。井戸は集落内とともに五十里川河岸にも多く認められる。墓は各建物の敷地近辺や集落北西部に存在し、さらに集落周辺には畠が広がっている。

自然堤防高所の集落　13世紀には、基幹水路に則して自然堤防高所にも集落が成立する。⑥区では、調査区東外へ延びる区画溝があり、地割からの推定では居館の可能性がある。この区画溝をさらに囲むように居住施設や鍛冶施設などが展開している。用水路で画された集落の北西外側には墓域が存在している。墓は④区集落内でも検出されており、後者は屋敷墓であるか、あるいは時期差を考える必要があろう。

また、基幹水路の西側には井戸が密集する地域がある。井戸の時期は基幹水路が一時的に廃絶する15世紀代に集中している。生活用水だけでなく、畠への散水にも利用された可能性がある。また、この地は屋代古城や雨宮の渡しにも近く、何らかの理由で集中的に給水を必要とした可能性もある。

旧河道・自然堤防Ⅱ群の開発と集落　13世紀以降に旧河道と自然堤防Ⅱ群上の耕地開発が始まり、集落が成立する。調査区内では竪穴建物1＋掘立柱建物1しか見つかっておらず、耕地開発に携わる小規模集落であったと見られる。

以上、縄文時代中期から中世までの集落について、各々の成立要因、集落構造と特徴、変遷過程について見てきた。ここで取り上げた内容は高速道用地にかかった範囲での概要にすぎない。今後、個々の集落の全貌はもとより、更埴・屋代地区全体での集落間の関係、埴科・更級地域内や千曲川流域における集落の位置づけなどを見てゆく必要があろう。

参考文献　P121に掲載

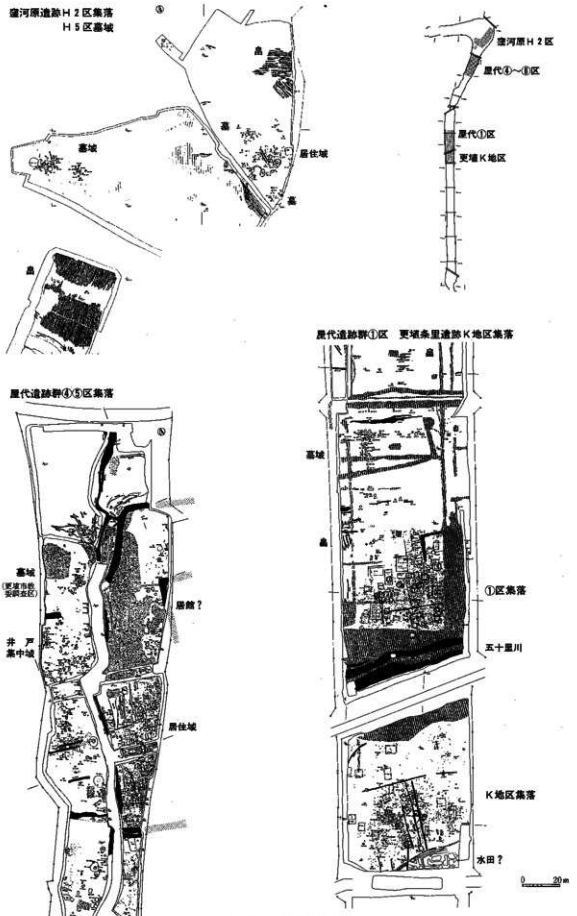

窟河原遺跡Ｈ２区集落
Ｈ５区墓域
墓域
居住域
窟河原Ｈ２区
屋代④～⑤区
屋代①区
更埴Ｋ地区
屋代遺跡群①区　更埴条里遺跡Ｋ地区集落
①区集落
五十里川
Ｋ地区集落
水田？
屋代遺跡群④⑤区集落
墓域
井戸集中域
居館？
居住域
0
20m

図54　中世の集落

第2節　集落内施設（建物など）

1　概　要

今回の調査では、合計783軒の竪穴建物跡、189棟の掘立柱・礎石建物跡、さらに建物に伴うと見られる柱穴が多数検出された。特記すべき発見としては、縄文時代中期前葉と平安時代の竪穴住居で確認できた周堤、縄文時代中期後葉の地床炉を伴う掘立柱建物跡、平安時代の礎石建物群、などがあげられる。また、縄文時代中期後葉の竪穴住居の壁材や各時期の炭化建築部材、あるいは古代の溝中から出土した建築材関連の木屑は、各々の時代における用材の傾向をとらえることを可能とした。さらに、水田域における古代竪穴住居については、改築が盛んに行われていたことが判明し、水田域における夏季の竪穴建物のあり方などを検討する上で、興味深いデータを提供したと言えよう。

ここではまず、集落を構成する多くの施設のうち、竪穴建物と掘立柱・礎石建物について各時代の特徴と変遷の概要を記す。また、集落内に存在したその他の施設について触れることとする。

2　竪穴建物の特徴とその変遷

(1)　竪穴建物（図55）

今回、竪穴建物に分類した遺構には、炉やカマドが設置された“いわゆる竪穴住居”のほか、炉がなく竪穴状遺構として報告されたもの、小鍛冶などの作業スペースとして利用された竪穴建物が存在する。ここでは、それらの全てを含めた広義の名称としては竪穴建物を使用し、炉やカマドの設置された例は従来通り竪穴住居として記述を進める。また、掘立柱建物の一部に付属する竪穴なども検討の対象に加えた。

ここでは、縄文時代中期～中世に至る全ての竪穴建物の中から、各々の時代の特徴を示す例を取り上げ、その特徴と変遷過程を概述する。

(2)　縄文時代中期の竪穴建物（図55右頁）

A．縄文中期前葉～中葉の竪穴住居

この時期には、いわゆる竪穴住居のみが見つかっており、前葉2期集落内では規模の差が認められる。

前葉2期1段階　中期前葉の遺構は、検出に困難な面があり柱穴などが未確認の例が多い。この段階の竪穴住居は、一方向にやや長い円形を呈し周堤が見られる。床中央付近に地床炉が設置されており、床下には集礫が見られる例がある。

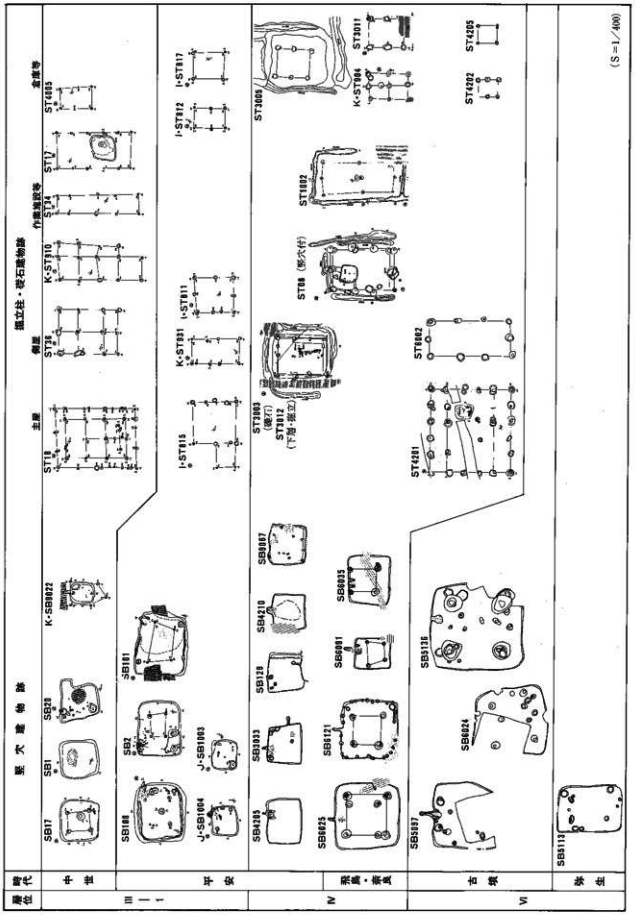
前葉2期2段階　楕円形から隅円長方形の平面プランを持ち周堤が見られる。炉は埋甕炉に変化し、一部の竪穴には床下集礫が認められる。

中葉2期　平面プランは円形に近くなる。床中央付近に埋甕炉が設置されている。

B．中期後葉の竪穴住居

この時期には、いわゆる竪穴住居のほか、炉や柱穴が確認されなかった竪穴状遺構が見られるようになる（SB5326）。竪穴住居では、後葉3b期に入口部が突出しはじめ、柄鏡形住居は後葉3c期に出現する。ほぼ同時期に、通常の竪穴住居や柄鏡形住居に敷石が施されるようになる。

後葉2～4期の竪穴住居　後葉2期の段階の竪穴住居は円形・楕円形・隅円方形などの平面プランを呈し、4～5本の主柱穴を配し、床中央付近に石囲炉、入口部に埋甕が設置される。3期～4期に移るにつれて平面プランは隅円長方形や五角形が出現する。また、全体的な傾向として竪穴部の掘り込みがしだい



竪穴建物跡
掘立柱・礎石建物跡
竪穴建物跡
時代
中世
平安
飛鳥・奈良
古墳
弥生
(S=1/400)

図55　竪穴建物、掘立柱・礫石建物の変遷

に浅くなる。SB5345は竪穴部平面プランは隅円の五角形であるが、そのやや内側に残存していた炭化壁材の配置は角ばった五角形を呈する。五角形の突出部には埋甕が設置されており入口部と見られる。この住居には炭化した垂木が放射状に出土しており、棟柱を持たない構造であったと推定される。この構造は柱配列の類似する柄鏡形住居にも引き継がれたと見られる。

3期末～4期には主柱穴が壁に近づき壁柱穴への変化が見られる。

住居内の特別な施設では、3a期のSB5332奥壁で祭壇状の施設が見つかっており、角礫が集中していた。

柄鏡形（敷石）住居ほか　竪穴住居のうち、入口部外側に施設を設置する柄鏡形住居形態が3c期に出現し、4期にかけて一般化する。一方、3b期には、竪穴内の柱を結んだ線上や炉のまわり、埋甕周辺に部分的な敷石が出現し、しだいに床面の広範囲と柄部に拡大してゆく。これらは、平面形態と礫敷設の特徴から、円形（敷石）住居、柄鏡形（周礫）住居、柄鏡形（敷石）住居などと呼称した。

柄鏡形住居の柄部は、幅が狭い例が多く、掘り込みはほとんど認められない。竪穴部の規模は通常の竪穴住居に比べ小さくなるが、竪穴外の空間や柱穴を検出することはできなかった。竪穴部入口付近と柄部には埋甕が設置されている。

敷石は、板石が竪穴中央付近にのみ見られる例（SB5325）、入口部埋甕周辺にのみ見られる例（SB5346）のほか多様な残存状況を示している。また、河原石などを壁際に巡らす例が認められる。柄部には板石を敷き詰めた例（SB5337）があり、石材は遺跡東方で産出する閃緑岩を主に使用している。

礫をめぐらせる例には、竪穴部の柱間と柄部外縁に川原石などを巡らす例（SB5316）が多く、4期には竪穴内に礫混じりの土を積み上げた周礫（SB5338）が出現する。

特殊な炉形態　後葉4期には、石囲炉の下部に深さ数10cmに及ぶ深い穴を掘削し、壁面が火（被熱）によって赤く硬化し、底面に炭化材が広がる炉が出現する。底部付近からは「焼け粘土塊」が出土した例もある。こうした状況は、住居の石囲炉として使用する以前に特殊な炉の使用方法が存在した可能性を示している。しかし、深さこそ浅いものの、中期後葉段階では石囲炉の設置前に炉の下部を赤く硬化させ、その後ある程度埋め戻してから、石や土器片によって炉を構築することが一般化している。後葉4期に見られる炉も、こうした炉設置前に行う湿気抜きなどの作業が特殊発展した可能性も捨てがたい。あるいは、中期後葉の全段階において石囲炉設置前に別な炉の使用方法（大型地床炉）が存在していたとの見方もできよう。今後の課題としておきたい。

(3)　弥生時代～古墳時代前半の竪穴建物（図55左頁）

今回、縄文時代後期から弥生時代後期の竪穴建物は見つかっていない。また、弥生時代末期（弥生5期）の可能性を持つ資料については、竪穴のごく一部が残存しているのみである。さらに古墳時代の例についても、古代の竪穴建物などに破壊された例がほとんどで、良好な残存例が少ない。

古墳時代での大きな転換点は、火処が炉からカマドへ転換する古墳時代中期（古墳5期）である。

古墳時代前期　長方形の平面プランを持ち、4本の主柱穴が見られる（SB5113）。短辺の壁際中央に入口施設用の小ピットが見られる。地床炉は入口から見て奥側の2本の柱穴の間付近に設置されている。壁溝の存在する例が認められる。

古墳時代中期　古墳5期（5世紀中～後）を境にして炉からカマドへの転換が起こる。SB5136では、床中央付近に炉が存在する一方、入口に対峙する奥壁中央にはカマドの痕跡も認められる。平面プランは方形に変化してゆくが、4本の主柱穴や入口ピットの存在は継承される。また、規模の大小が明確となる時期でもあり、大型竪穴の柱穴には礎板石（閃緑岩）が据えられる。

古墳時代後期　良好な残存例はないが、方形の平面プランに4本主柱穴、一辺の壁中央にカマドが設置さ

れた形式が確立しているようである。

(4)　古代の竪穴建物（図55左頁）

多種多様な竪穴建物が現れる時代である。竪穴住居の構造は、古代2期頃（8世紀前半）までは古墳時代の延長線上で捉えることが可能である。最初の変革は9世紀代に起こる。一つは、カマドの設置されない作業専用の竪穴が出現することである。竪穴住居に関してみると、4本主柱穴の棟築方法が崩れること、カマドが竪穴プラン外に突出し、竪穴外をも住居空間とした建物が現れることである。さらに、掘立柱建物の一部に竪穴施設が伴う例が存在すること、などがあげられる。古代における2度目の変革は、古代14・15期（11世紀）に訪れる。それまで一部の竪穴住居にだけ見られていたコーナーカマドが一般化し、平面プランも長方形になる。また、竪穴部の掘り込みもしだいに浅くなってゆく。

飛鳥・奈良時代前期（古代0～2期）　方形の平面プランに、一辺の壁中央付近にカマドが設置され、4本主柱穴を持つ基本構造に変化はない。壁柱穴を伴う例が見られる。この時期にも規模の大小が明確であり、大型竪穴の柱穴には礎板石（閃緑岩）が据えられる。

平安時代（古代6～13期）　9世紀代は竪穴建物が多様化する時期である。平面プランでは、方形のほか台形（SB3033）や不整形を呈する例が増加する。カマド火床の位置も竪穴部から外へ突出する例（SB4210）が現れ、4本主柱穴構造が崩れる（SB4205）など、竪穴建物の基本構造に変化が現れる。

カマド火床が突出する例では、竪穴部外周に建物の空間が広がっていたことが明白であり、一部では棚状施設が検出された（SB4031）。一方では、周堤が竪穴部の立ち上がりに接して認められる例（SB8）も存在し、こちらの例では竪穴部外周にスペースは存在しない。

カマドは割石（閃緑岩主体）の使用量が増加し、この時期には石組みカマドが一般化する。

上屋を支える柱については、柱穴がなくなる例が大半を占めるようになる。SB9067などで東床石が見つかっているが、それ以外の無柱穴例については柱構造は不明である。

また、カマドの認められない例では、構築途中で放棄されたと見られるSB3036のような長大な例がある。①区では、連房式鍛冶工房に隣接して一辺が2段掘り込みとなる竪穴（SB74ほか）が見つかっているが、半分以上が調査区外であるため不明な部分が多い。しかし、竪穴住居にしては特異な位置（調査区東端）にある上、構造も一般の竪穴とは異なっているため、鍛冶工房に関連した施設の可能性がある。

さらに、上記の竪穴建物に隣接して掘立柱建物（ST8）のコーナーに竪穴が伴う例が見られる。

古代8期後半以降は、9世紀代の傾向を継承し、整然とした方形プランはなくなり、カマドがコーナーに寄る傾向が見られ、無柱穴の例が大半である。

平安時代末期（古代14・15期）　平面プランが長方形を呈する例がほとんどとなり、カマドが南東および南西コーナーに設置されるようになる（SB108）。4本柱穴を持つ例が再び出現する（SB101）。

(5)　中世の竪穴建物（図55左頁）

基本的には竪穴建物の利用が激減する。隅円方形の平面プランを呈する。壁に設置されたカマドが消滅し、床中央に炉を持つタイプ（SB17）に転換する。柱は4本柱穴のものや無柱穴の例が存在する。SB20では一つのコーナーが入り口状に突出する。

この他、掘立柱建物の一部に浅い竪穴状の施設が伴う例が認められる（ST17）。

3　掘立柱・礎石建物の特徴とその変遷

掘立柱建物、礎石（立柱）建物には、住居のほかに倉庫、納屋、鍛冶施設など多種多様な施設が存在し

ている。今回の調査で注目される資料としては、縄文時代中期後葉の地床炉を伴う掘立柱建物が数多く検出されたこと、縄文時代晩期前半に１間×１間の柱配列をとる建物？が見られたこと、９世紀後半に掘立柱建物が一斉に礎石建物に建て替えられたこと、などがあげられる。

ここでは、縄文時代中期後葉から中世に至る全ての掘立柱・礎石建物の中から、各時代の特徴を示す例を取り上げ、その特徴と変遷過程を概述する。

(1)　縄文時代の掘立柱建物（図55右頁）

中期後葉の掘立柱建物　中期後葉の集落内からは、多くの掘立柱建物や柱列が検出された。

ST5104は柱が４×２本配列で、両棟に突出した棟持ち柱を有する掘立柱建物である。地表面には堅い床面があり、中央に掘り込みの浅い長楕円形に広がる地床炉が配置されていた。棟持ち柱がなく、柱穴間に浅い壁溝？が巡る３×２本柱の例（ST5101）や、竪穴住居に類似した五角形の柱配置を持つ例（ST5109）などがあり、いずれも地床炉が伴う。これらは、竪穴住居の密集する地区に建てられており、炉や硬化した床面が認められることから居住施設として利用された平地住居と見られる。

また、この他に炉を伴わない２×２や３×３本柱の掘立柱建物や円形に柱が配列された例（ST5122）が存在する。後者は、建物ではない可能性がある。

一方、中期中葉に遡るが、XIII－２層では、地床炉と見られる焼土跡の周囲に焼土粒を混入した浅い溝状の焼土跡が長方形に並ぶ例が見つかっている（SF9021ほか）。中期後葉のようなしっかりとした柱穴はなく、溝内に浅い窪みが数カ所認められるのみで、明確に建物であるとは言い切れないが、竪立ちの建物が焼けた可能性も考えられる。

晩期前半の掘立柱建物　更埴条里遺跡IX層上面では無数の根痕とともにほぼ垂直に掘り込んだ柱状の穴が見つかり、１×１間の建物になる可能性が指摘された。根痕との判別や、１×１間という柱配列に疑問も生じたが、根痕との区分は断面観察により確定した。また、１×１間の内側や周辺に遺物が集中すること、焼土跡や土坑が伴う例が存在すること、などから簡易な居住施設と考えた（P100-図49）。遺物量や種類が限られている点、重複例がない点、墓や祭祀施設が存在しない点は短期的な滞在地を示している可能性があり、集落（母村）外での建物のあり方を知る上で、貴重な資料となろう。

(2)　古墳時代・古代の掘立柱・礎石建物（図55左頁）

古墳時代の掘立柱建物　古墳時代の掘立柱建物は、屋代遺跡群⑤区で数棟検出された。しかし、古代以降の建物や住居との切り合いが激しく、典型例として提示できるものはない。ST5009は柱穴４本しか検出できていないが、直径約1.8m、深さ約１ｍの巨大な堀方の柱を持つ建物である。大型竪穴住居の密集する⑤ｂ区北に位置している点から集落の中心的な建物であったと見られる。この他、柱の配列から４×３間？の掘立柱建物（ST5011）などが復元想定されている。

飛鳥・奈良時代の掘立柱建物　屋代遺跡群④区・⑤区では、古代１期前半～２期（７世紀後半～８世紀前半）の掘立柱建物群が見つかっている。主屋のST4201は５×５間で南北に庇を持っており、74.64㎡を誇る大型掘立柱建物である。約1.0×0.7m、深さ約0.8ｍを測る柱穴の底面には礎板石が置かれていた。礎板石下にも柱痕跡の窪みがあり、建て替えられたことを示している。身舎下に相当する位置からは須恵器大甕の破片が集中した土坑が見つかっており、この建物に関連する施設の可能性がある。

この建物の周辺には、付属屋と見られる３×２間の建物や、２×１間や１×１間の倉庫か納屋と見られる建物が、主軸方向を揃えて存在している。

これらの建物群は、埴科郡家（郡衙）にも関係した有力者の居宅と推定している（第５章第10節）。

「(神) 宮室」「殿」　屋代遺跡群⑥区の古代2期（8世紀前半）の溝、SD7031から出土した114号木簡の中には、「(神) 宮室」「殿」といった建築物の名称が登場する。残念ながら、これらが、どのような建物を指していたのかは不明である。しかし、同時期の溝や流路からは、この時期の建築材の木屑が多量に出土している。そのうち、建築部材の一部や、鋸？による切断痕が残る切屑にはサワラ材が見られる。これらは、竪穴住居（SB5004）出土の炭化部材（ケンポナシ属ほか）とは異なっており、掘立柱建物の建築に利用されていた可能性が高い。

条里型地割内集落の掘立柱建物　古代6期～8期前半（9世紀）に入ると、自然堤防Ⅰ群内の微高地に集落が進出する。これらの集落では、住居と見られる3×2間の掘立柱建物に、2×1間の側柱建物や2×2間の総柱建物の倉庫が認められる。屋代遺跡群①区ST8は3×2間の側柱建物の一部にカマド屋と見られる竪穴施設が伴う。また、②区ST1002は柱穴が小さく、柱間の広い2×2間の建物であるが用途は不明である。さらに、この時期には鍛冶施設の建物（K地区ST919、①区ST9）も掘立柱建物となる。

周囲を水田域に囲まれた集落内の掘立柱建物には、地下水位の上昇による湿気を防ぐため、建物周囲に溝が掘られ、盛土がなされていた例が存在する。

礎石建物への変換　古代8期前半（9世紀後半）には、掘立柱建物の多くが礎石建物に変化する。①区や③a区集落では、掘立柱建物のあった位置にそのまま同じ規模と機能を有する礎石建物が建てられた例が多い。よって、礎石建物には主屋、付属屋、倉庫、鍛冶関連施設などが存在する。

礎石建物の構造は、周囲に溝を巡らす例が大半であり盛土を有する。版築は見られず、基壇というよりは、前代の掘立柱建物同様、周囲の水田に対し床面をかさ上げすることが目的であったと見られる。礎石の石材は遺跡の東方の生萱地区の閃緑岩を利用しており、立方体になるように簡単な整形が施されたものや、底面を平らにしてあるだけのものが見られる。柱を据える上面はやや凸形となっている場合が多い。①区集落内からは、「石丁」と記された刻書土器が出土しており、石の加工職人の存在を示唆している。

洪水後の掘立柱建物　9世紀第4四半期には、すでに緩小傾向にあった集落では、洪水によって壊滅的な打撃を受けた。洪水後に再建された集落では、3×2間（ST811）や変則的な柱配列を示す掘立柱建物が散見される程度であり、礎石建物は消滅する。これに2×1間や1×1間の倉庫？が伴う。

(3) 中世の掘立柱建物（図55左頁）

竪穴住居がほとんど見られなくなり、掘立柱建物にも大きな構造変化が現れる。時期を明確に示すことはできないが、3×2間の総柱建物が居住施設の基本と見られる。また、4×1間といった細長い建物や、一部に竪穴状の施設を伴う例が見られる。この他、庇がつく例や、規模が大きくより複雑な構造を持った建物が存在したと見られる。しかし、集落内には無数の柱穴が存在しており、正確な建物プランを導き出すことが難しかった。

4　竪穴建物・掘立柱建物の建築材

今回の調査では、縄文時代中期前葉のSB5412、中期後葉のSB5345、飛鳥時代（7世紀後半）のSB5004、平安時代（10世紀）のSB1004、12世紀のSB101などから炭化した建築部材が得られ、樹種同定を行った。その結果と各時代の用材の特徴については、第6章第5節で詳述する。ここでは、いくつかの特徴的な点について触れておくこととする。

縄文時代の建築材　中期後葉の竪穴住居の壁材が残存していたことは、貴重な発見の一つである。これはクリ材を薄く板状に加工したものであった。また、中期前葉の材にほとんどクリが使用されていなかったのに対し、この時期には、建築材のほとんどをクリ材が占めるようになる。

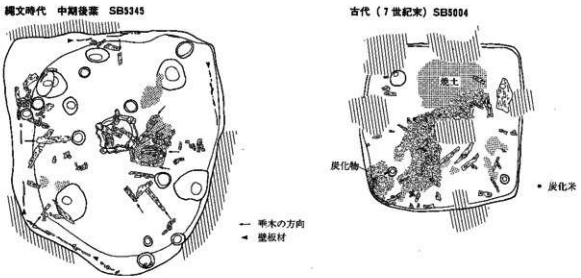


図56　炭化建築材の残存資料

古代の建築材　竪穴住居の建築材は、同一竪穴住居内でも複数の樹種にまたがっており、広葉樹が多い傾向を示していた。これは、遺跡周辺に生育していた樹木を利用したために起こった現象と見られる。一方、屋代遺跡群⑥区の溝や流路中には、サワラ材の建築材の木屑が含まれていた。少なくとも、同時期の竪穴住居では広葉樹が使われており、サワラ材は掘立柱建物などの部材として活用されていた可能性が高い。また、この溝・流路中からは多種多様な樹種が活用されていたことを示す証拠が見つかっている。

竪穴住居（SB5004）では、直径数cmの丸木炭化材（ケンポナシ属）の上に、細い炭化材（イネ属タケ亜科）が縦横に重ねられ、灰状の繊維（ススキ属）が認められ、その上に焼土ブロックが重なった状態で出土していた。これらは土屋根か壁の状況を示していると考えられ、貴重な資料となろう。

5　竪穴建物（住居）の改築と利用期間の問題

古代8期前半（9世紀後半）における竪穴住居の改装・改築　古代においても、同一竪穴プランを使用した改装・改築は盛んに行われていた。この時代、周辺に水田が広がる低地へ集落が進出し、竪穴住居が造られている。そのため、水田に水が入る時期に竪穴住居が機能していたのかが焦点となる。

屋代遺跡群①区における竪穴住居の変遷　①区集落は古代6期～8期前半にかけて集落が存続している。このうち、条里水田が明確に存在していたと見られる8期前半にしぼって、SB8周辺に例をとって竪穴住居の改築状況を見ることとする。SB8はSB52、56と重複しており、少なくとも3回の竪穴建物の建て替えが認められる。さらにSB8にはカマドと破壊された煙道を合わせると、4回のカマド付け替えに伴う改築がなされていたと見られる[注1]。カマドの付け替えは、SB8のように煙道部まで位置をズラした場合は確認しやすいが、火床部のわずかな重複などは見逃しやすく、実状はもっと盛んに付け替えられていたものと考えている。さらに、『古代1編』ではカマドの位置関係や竪穴の主軸方位からSB52とSB8古の間にSB55が構築されていたと推定した。

これらの仮定が受け入れられるとするならば、①区集落では、古代8期前半の間に4回の竪穴建物の建て替えと、4回程度の改築・改装（SB8）が行われていたことになる。古代8期前半の年代比定は土器と洪水砂によって875年以降～888年頃の約10年余りと推定されている。このことは、3～4年に一度は竪穴住居を建て直す必要があり、同一の竪穴部を活用していたとしても、カマド付け替えに伴う上屋の改築、あるいはカマド作り替えによる部分改装が、頻繁に行われていたと見られる。

水田との関係　こうした改装・改築が必要であった理由の一つとして、①区集落が水田域の中央部に位置しており、水田に水が入る時期には、竪穴床面が水田の水位より数10cmも下になることに注目したい（図57、SB54例など）。夏には水田から滲みだした水によって、竪穴は水没状態であったと推定される(註7)。そのため壁から屋根部まで徹が生え、壁材などは腐敗して耐久性と快適性に問題が生じたと見られる。

現状では推測の域を出ないが、度重なる改築の必要性は、水田による竪穴の水没にあったのではないだろうか。ちなみに、この時期の掘立柱・礎石建物については、盛土で床面をかさ上げをし、さらに周囲に溝を巡らすなどの対策を施した例が多い。

洪水（Ⅲ層堆積）時に竪穴住居が存在しない理由　これまで善光寺平南部では、9世紀後半の洪水砂によって埋もれた竪穴住居が数多く発掘されてきた。しかし、カマドが完存し、家財道具類が残存した状態で検出された例は皆無であった。この洪水砂の堆積は水田の状況から田植え前と見られている。上記の仮説が正しければ、この季節には竪穴住居は使用されておらず、そのため、遺物も少なかったのではなかろうか。更埴条里遺跡K地区では、洪水直前、直後の竪穴住居が連綿と確認されており、たまたま洪水が襲った年にだけ集落が放棄されていたとは考えにくい。集落は存続しており、洪水発生時は竪穴を利用していなかった季節であったと考えたい。

SB8の堆積状況　洪水発生時に最も近い時期に建っていたと見られるSB8の堆積状況を再検討すると、洪水砂堆積よりも下層に堆積している壁際や床中央の堆積土の解釈が問題となる。1/80図（『古代1 編』）に記載し切れなかったSB8の所見では、床面が鉄分集積により硬くなっており、その上部に砂などが混じり込んだ粘土が1cmほど堆積していたとされている。その上に焼土粒や炭化物片と砂の混じった堆積土が若干あり、さらに洪水砂で埋没している。こうした堆積状況を積極的に解釈すると、次のようになる。まず、水田への配水が進んで竪穴部の水没が進行し、竪穴最下部に泥が沈殿する。この時期に洪水が襲って上屋を潰し、砂と共に屋根土が住居中央付近に堆積する。それと同時に周堤が崩れ壁際に堆積する。最後に凹地となった竪穴部が洪水砂によって完全に埋め尽くされる。といった状況である。または、竪穴部が水没を始める前の段階で人為的に上屋を解体し、土屋根の一部が洪水砂前に堆積していたとも考えられよう。しかし、この堆積土中にも砂が混在している点は、前者の可能性が高いと見られる。

これまで善光寺平南部においては、洪水被害にあった竪穴住居内の堆積状況について、その解釈が積極

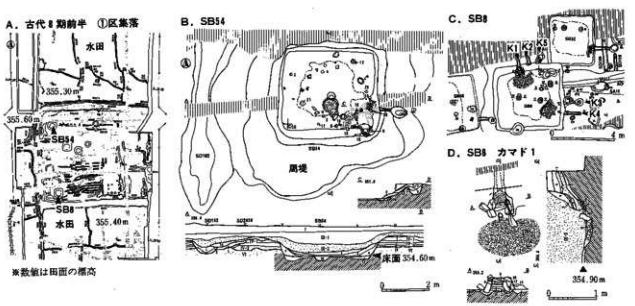


図57　水田域における古代竪穴住居の改築

的になされてはこなかった。また、洪水時に竪穴住居がどういう状態であったかも説明されてこなかった。上記の解釈の正否はともかく、今後、議論が発展するためのたたき台となることを願いたい。

註

1　北カマドと東カマドが同時存在していたと仮定しても、2～3回の改築が必要である。また、SB8のみが特殊な例である可能性も残っている。今回の調査では、竪穴住居におけるカマドの改築状況（火床と火床や、火床と袖石間の微妙な重複関係など）が一律の基準でとらえられていないため明確ではないが、一部の例から見てもカマドの部分的な修復、改築は一般的な行為であったと考えている。

2　深さ4mの止水用矢板で囲んで実施した調査時においても、水田に水が入る時期には、浸透圧によって滲みだした地下水によって竪穴建物が水没する状況がしばしば見られた。

6　集落内に存在するその他の施設

各時代の集落には、居住施設、倉庫、作業小屋といった建物以外にも、さまざまな施設がある。この内、埋葬に関わる施設については第3節で、祭祀に関連する施設については第4節で取り上げる。これ以外では、集落を囲繞する施設、道、集落内の区域を仕切る区画施設、生活用水を確保するための井戸、畠・菜園とみられる畝状遺構（第6節）、廃棄物の集積場、用途不明のいわゆる焼土坑（『古代1編』参照）などが存在する。

(1)　区画や境界を示す施設

縄文時代中期後葉集落　集落縁辺部に屋外埋甕が埋設されており（図48）、集落の境界を示していた可能性がある。また、同一層位の集落内外からは多種多様の杭列が認められた。ただし、杭列が集落内の何を囲っていたのか、さらには集落と同一時期であるのかについては確証を得られなかった。

古代集落に見られる区画施設　古墳時代や飛鳥・奈良時代までの集落では、集落や特定の区域を囲う施設は明確でない。官衙風の建物群が成立する屋代遺跡群④～⑥区集落においても、建物群とその他の竪穴建物群との境ははっきりせず、かなり開放的な関係にあったと見られる。

集落を囲繞する施設が現れるのは、水田開発に伴って低地へ進出した9世紀代の集落である。

更埴条里遺跡K地区集落の古代6期初頭段階（9世紀前半）では、南北に集落を画する溝と材木（柵？）列が屋代遺跡群①b区にまでおよんでおり、大規模な囲繞施設があったことを示している（図52）。こうした点からも、K地区集落が条里開発の中心的な集落であったと言えよう。

その他の低地へ進出した集落では、集落成立後しばらくおいてから徐々に区画施設が整い始める。

屋代遺跡群①区集落では、古代7期～8期前半（9世紀中～後半）に条里畦畔や用水路を兼用して集落囲繞施設が完成する（図58）。特に北辺では入口を中心に両脇に柵列と溝が配置されており、厳重な構えとなっている。集落内は竪穴住居が集中する区域と掘立柱建物が集中する区域に分かれており、その境には簡単な溝・柵が存在していたと見られる。

この他、更埴条里遺跡K地区や屋代遺跡群③a区、③b区集落では、用水や条里畦畔を利用して集落域の2～3辺を画し、それ以外の辺を簡単な溝や柵で囲っていたと見られる（図52）。③a区集落のように用水路内側には簡単な土手が築かれた例も存在する（図51）。

また、集落内では、②区集落で見られるような柵列によって東西2グループが分割された例、③b区西グループ内のように、溝によって特定の区域を他の建物と区分した例が認められる。

中世集落の区画施設　9世紀第4四半期の洪水以後の古代集落では、区画施設は明確ではない。

中世においては、用水路を屈曲させ、その２～３辺を集落囲繞施設に利用し、他の一辺に溝？などを配して方形の区画を作る例が基本となる（図54）。集落内の中心部は、さらに方形やＬ字の溝で区画された区域が配置されており、居館が存在していたと見られる。

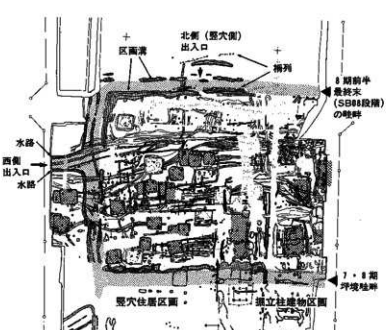


図58　古代集落の囲繞施設と区画（屋代遺跡群①区集落）

(2) 井　戸

生活用水の確保は、集落の必須条件である。今回の調査で発見された井戸跡は、古墳時代前期から中世にかけての資料である。井戸は建物などに比べ長期的に活用されていたと見られる。さらに、調査上の安全確保の観点から、充分な時期決定資料を得られなかった例が多い。ここでは、簡単に井戸数と設置場所の変遷と井戸の構造変化について触れる。

井戸数と設置場所の変遷　今回検出された最も古い井戸は、更埴条里遺跡Ｋ地区の古墳３期（４世紀後半）の例である。集落の本体は調査区西側外と見られており、集落の外縁に井戸が存在していたことがわかる。竪穴住居の集中する屋代遺跡群⑤区では、時期不明の井戸が大半であり、古墳時代に限定できた例はない。

古代に入ると、各集落に最低１基は井戸が掘削されていたと見られる。ただし、集落全域を調査していない屋代遺跡群①区集落などでは調査区内で井戸が見つかっていない。

更埴条里遺跡Ｋ地区集落では、Ａグループ、Ｂグループともに、建物群東南部の低地寄りの位置に井戸が掘削されている。各建物群単位に少なくとも１基は井戸が存在していたことになる。これに対し、屋代遺跡群②区集落では、有力者の建物群と見られる東グループ側に井戸が存在せず、竪穴住居を主体とした西グループに１基のみ井戸が存在している。やはり、井戸の位置は西グループの東南隅である。

中世に至ると集落内に数カ所の井戸が認められる例が多くなり、さらに①区集落のように、集落外の五十里川河岸に井戸や井戸状の施設が多数配置されるようになる。後者は、単なる飲料水の確保には限定されず、水辺での何らかの作業に活用された可能性がある。15世紀以降には、④～⑥区集落の隣接部に多くの井戸が集中的に掘削されている。集中的に給水を必要とした事態が何であったのかは不明である。

井戸掘削技術と構造の変化　古代から中世にかけての井戸掘削は、表土からある程度の深さまでを作業者が入れる広さに掘削し、さらに湧水の認められる地点まで掘削する方法を採っていた。次に、方形を呈する枠を設置した後、広げてあった作業用のスペースを埋め戻し完成に至る方法である。これに対し中世後半に一般化する方法は、湧水地点まで狭いスペースのまま一気に掘り進む方法で、携わる作業者は１名に限定される。井戸は円筒状を呈するようになる。また、人が入れない幅の例が出てくる（SK6057）。

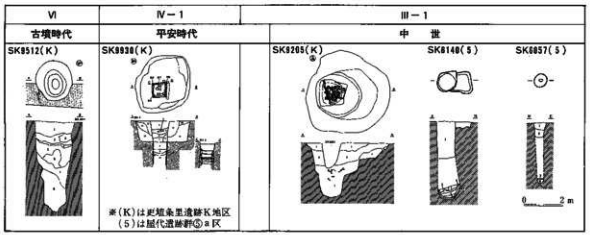


図59　井戸変遷図

以上、縄文時代から中世に至る時期の建物を中心に、集落内の施設について見てきた。縄文時代においては、掘立柱建物と竪穴住居の関係や柄鏡形（敷石）住居の成立過程の問題、古代では、水田域での竪穴住居のあり方や洪水時に竪穴住居がどのような状態にあったのか、あるいは、当地域での礎石建物導入の意義など、今後の課題としておきたい。

参考文献

大塚昌彦　1988「X　まとめ」『中筋遺跡第2次発掘調査概要報告書』
宮本長二郎　1988「縄文の家と村」『古代史復元2　縄文人の生活と文化』

参考文献（第1節分）

宇野隆夫　1991『律令制社会の考古学』
小平和夫　1990「松本盆地、奈良井川西岸地域における古代、中世集落の変遷」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4　総論編』
縄文中期集落研究グループ・中津水台地区考古学研究会　1995『シンポジウム　縄文中期集落研究の新地平（発表要旨、資料）』
縄文集落研究グループ　1998『シンポジウム　縄文集落研究の新地平2　発表要旨』
谷口康浩　1998「縄文時代集落論の争点」『國學院大学考古学資料館紀要』14
鶴口定志　1990「中世東国の居館とその周辺－南関東におけるいくつかの発掘調査事例から－」『日本史研究』330
山中敏史　1994『古代地方官衙の研究』

第3節　埋葬関連資料

1　概　要

埋葬の場所は、各時代によって、集落内や集落隣接地に置かれる場合、集落から離れた地点に設定される場合などがある。また、埋葬方法は各々の時代の死生観や社会構造などの違いを強く反映しているため、集落関連施設からは独立させて節を設けた。

今回の調査では、縄文時代集落内、古代末期集落の縁辺部、中世集落の内外から多くの埋葬施設が検出された。縄文時代では、廃屋を利用した中期前葉2期集落段階、中央墓坑群のほかにも多種多様な埋葬方法や特殊な頭骨の埋納などを示す中期後葉集落段階と、各時代の特徴を有している。その後、調査区内からは埋葬施設が見られなくなり、再び墓坑が確認されるのは古代9期になってからである。中世には、各時期の集落に隣接して数多くの墓が作られるようになる。集落構成員の多くが居住地の近くに葬られたと見られる。また、集落近くの河川（旧五十里川）からも人骨が出土している。

ここでは、上記の時期の埋葬施設の場所や埋葬方法、あるいは火葬施設や副葬品などについて、各時代の特徴を示し、その変遷を概述する。被葬者の死亡推定年齢や特徴については第7章を参照していただきたい。

2　各時代の埋葬施設とその変遷　（図60）

検出された埋葬施設のうち、各時代の代表的な例について図60に示した。墓坑については、人骨などの出土がなく不明確な例については、ここでは取り上げないこととした。各時代の特徴をとらえるための視点としては、埋葬施設の場所、単独かあるいは墓域を形成しているのか、埋葬数、埋葬形態、人骨から得られたデータとの関連性、などに留意した。

(1)　縄文時代の埋葬形態

A．中期前葉の埋葬形態

中期前葉1期　中期前葉1期には、屋代遺跡群⑤a区で墓坑が1基確認されている。石鏃が2点出土したが、副葬品か否かは不明である。遺物の分布が調査区西寄りにあることから、集落が西側調査区外に存在していた可能性がある。

中期前葉2期集落と埋葬　中期前葉2期の集落内では、廃屋を利用した埋葬が行われている。ただし、環状集落であったと想定すると、その中央部分が調査区外になるため、一般的な中央墓坑群の有無については不明である。廃屋墓は、各細別段階に使われていた住居の外縁部に位置する竪穴凹地が利用されている（P96-図48）。竪穴凹地内の層位では、床面直上から埋土上部にかけて埋葬が認められており、埋没状況にはこだわらず、死者が出た時点での凹地をそのまま利用していたと見られる。埋土の区分が難しかったため、埋め戻し土や掘り込みは確認できていない。埋葬姿勢は仰臥や横臥の屈葬が認められる。副葬品は認められず、年齢や性別に片寄りもないことから、集落構成員であればほぼ同一の条件で埋葬されていたようである。

住居に隣接して埋葬施設が存在することは、埋葬時点での集落構成員と死者の結び付きを強く意識していたと考えられる。しかし、新たな竪穴住居が掘削される段階になると、埋葬骨へのこだわりは薄れたようである。新たな竪穴の掘削により埋葬骨の一部が失われている例（SB7501）や、竪穴凹地を廃棄場所な

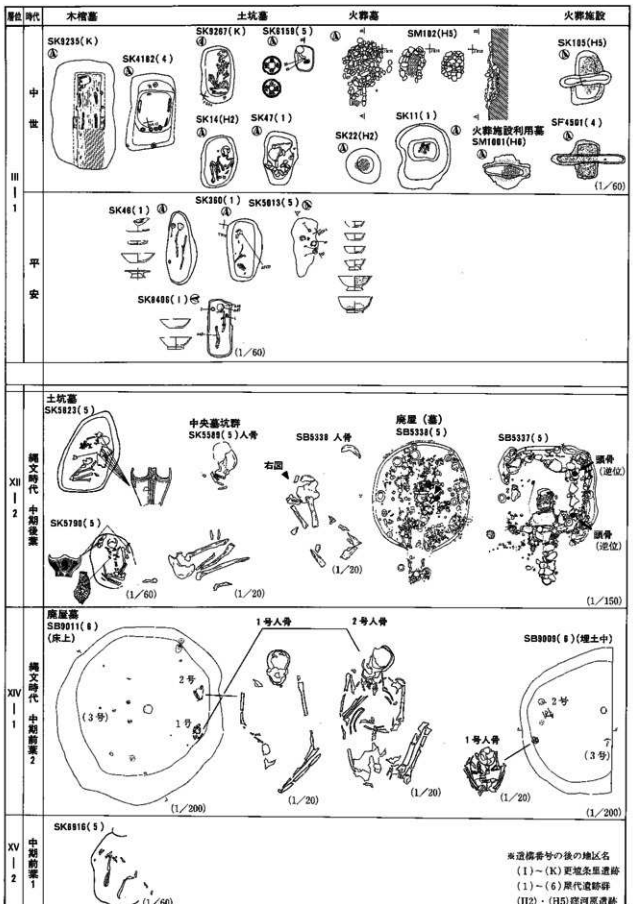


図60　埋葬施設および埋葬姿勢の変遷

どに再利用したためにカクランを受けた例（SB9011埋土）が存在するからである。

土器や石器、獣骨などの廃棄場所であるSQ7003から幼児の頭骨が1個体出土している。これも、本来埋葬されていたものが、後に廃棄場所になった時点でカクランされた可能性が高い。しかし、幼児で、しかも頭骨しか出土しなかった点から、特殊な扱いを受けていた可能性も残っていよう。

B．中期後葉集落での埋葬形態

埋葬形態の分類　中期後葉2～4期の集落内に埋葬施設が認められる。中期前葉段階に比べ、埋葬場所や埋葬の方法に多様化が認められる。それらを列挙すると、①集落中央の墓域（墓坑）への埋葬、②廃屋の床面上や埋土に埋葬される例（SB5338）、③頭部のみを廃屋内に埋葬、あるいは置いた例（SB5337）、④埋葬か否かは不明であるが、多量の獣骨とともに人骨が検出された例（SB5340）が認められる。

中央墓坑群への埋葬　ごく一般的な中期集落に見られるように、いわゆる環状集落の中央部付近で多数の埋葬骨が見つかった。調査区の関係上、排水トレンチを掘削していた段階で見つかり、墓坑などの状況を把握できないまま取り上げている。一部の人骨では屈葬姿勢が確認できた。この他、中央部より若干ズレるが、墓坑に埋葬された例では横臥屈葬などの、通常見られる埋葬形態を示している。

廃屋への埋葬例　SB5338の例では、頭部が本来の位置から離れて出土しており、別の場所で一端埋葬？された骨が集骨され、並べられた可能性がある。人骨とともにシカやイノシシの歯、多量の礫や土器片が混在した状態で出土しており、北側には焼土の堆積が認められた。土坑への埋葬例に比べ特殊な状況を示している。

頭骨への意識　SB5337は、検出された敷石住居が廃絶された段階で4隅の柱穴の一部に立石が設置されるなどして、柱穴が封鎖された可能性を持っている。この住居中の残存した敷石の上部より頭骨が2個体逆位で検出された。周辺には一切骨が見つかっておらず、上層からの掘り込みも存在していない。敷石との間には若干の埋土が認められることから、住居が埋没しはじめ、立石と周礫がまだ形をとどめていた段階で頭骨が納められたと見られる。頭部に対する何らかの思想を反映した例と思われる。

中期前葉との比較　中期後葉では集落内の中央付近に埋葬施設を集中させる傾向が顕著で、主に廃屋を利用していた中期前葉とは違いを見せている。その一方で、一端骨化した人骨を収集して、周礫の残る廃屋で再配置する例や、頭骨のみを納めるなど、特殊な儀礼が見られるようになる。こうした特殊な出土状況が、どのような儀礼によるものであるのか今後の課題となろう。

この時期の出土人骨は残存状況がひじょうに悪く、多くの情報を得られなかった。その中では、年齢や性別による差はなく、乳児～壮年に至る年齢の人が埋葬されていた。

(2)　弥生時代～古代の埋葬形態

弥生時代～平安時代　弥生～古墳時代、さらに古代8期後半（9世紀末）に至るまで、調査区内に埋葬施設は存在しない。弥生時代から古墳時代前期にかけては、集落隣接地に墓域が存在した可能性もあるが、屋代地区では確認されていない。また、古墳時代中期以降は、森将軍塚古墳周辺に古墳群が形成され、後期から奈良時代にかけては周辺山地に群集墳が築造され続ける。平安時代前半の埋葬施設は、古墳への追葬を除き不明である。

平安時代末期の墓坑　古代9期（10世紀前半）に、更埴条里遺跡Ⅰ地区集落周縁部で1基のみ墓が見つかっているが、集落周辺の埋葬施設が一般的に見られるようになるのは古代13？～15期（10世紀末～11世紀後半）に入ってからである。屋代遺跡群①区集落では、その北西側に墓坑が4基存在する。また、④区集落の北側（⑤b区）に1基、更埴条里遺跡K地区でも集落外縁に1基墓坑が存在している（P106-bd53）。

墓坑の平面形は隅円長方形を示しており、横臥屈葬の例が確認されている。いずれも、集落規模に対し

て墓坑数が極端に少なく、副葬品が認められることなどから、被葬者は各集落の有力者層に限られていたと見られる。①区集落北西部で並置されていた墓坑の被葬者は、SK358が12歳よりやや上、SK359が7～8歳程度の女性、SK360が熟年（男性）であった。

(3) 中世の埋葬形態

中世に入ると集落内や集落周辺で多くの埋葬施設が確認されるようになり、埋葬される階層が広がる。しかし、屋代遺跡群①区に隣接する旧五十里川（SD23）からも人骨の出土があり、すべての人が墓地に埋葬されたとは限らないようである。

墓　域　埋葬施設の場所は、集落内で建物と切り合うような位置に造られる例と、集落外隣接地に墓地が形成される例が認められる（P108-図54）。前者は、各居住者（集団）ごとに各自の敷地内に墓所を作ったためと見られ、居住者の変化や移動によって建物と重複する例が出てきたものと考えられる。後者は、集落成立後のある段階から墓所が定められたものと見られる。

埋葬方法　埋葬方法には、火葬と土葬が存在する。火葬の場合、焼骨は土坑に埋められた例が多く、まれに火葬施設へそのまま埋葬された例がある。いずれにおいても、容器の残存は認められなかった。

土葬の場合には平面形が円形、長方形、長楕円、その他の土坑が認められた。長方形を呈する例には木棺が安置されていたと見られ、木片や釘の出土例がある。埋葬姿勢では横臥屈葬の例がある。

墓標として礫が積み上げられた例が存在する。また、墓から離れた位置で出土したため、直接墓に関係したかは不明であるが、笹塔婆形の木製品や五輪塔の風輪部分が出土している。副葬品には土器などのほかに、銅銭や硯の模造品などがある。

以上、更埴条里遺跡K地区から窪河原遺跡にかけては、縄文時代、平安時代末期、中世の埋葬施設や埋葬人骨が発見された。人骨の残存状況は必ずしも良好ではなかったが、内陸部での縄文人骨の出土や、多様な埋葬形態は、貴重な資料と言えよう。また、歯にエナメル質減形成の認められた例があり、縄文人の生活が不安定であったことを示している。長野県内でも縄文人骨の出土例が増加してきており、遠からず内陸部縄文人の形質的な特徴と変遷が明らかになる時が来ると期待される。

中世の墓域は、今回の調査や隣接する大境遺跡（更埴市教育委員会1995）などで、多くの資料が得られた。今回、多種多様な土坑形態や埋葬方法、埋葬場所の違いなどが何によるのかについて触れることができなかった。今後の課題としておきたい。また、被葬者の中には海岸部縄文人や現在の海女に比較的多く見られる外耳道骨腫が2体に認められた。今後、千曲川流域でその要因が考えられるのか、あるいは海岸部からの人の移動ととらえるべきなのか、検討していく必要があろう。

参考文献

更埴市教育委員会　1995『大境遺跡VI』

第4節　祭祀・宗教関連資料

1　概　要

祭祀・儀礼に関わる遺構や遺物を特定することは、困難を伴う場合が多い。ごく日常的な場所で、常日頃使用していた道具を利用して行う場合が見られるからである。また、痕跡をほとんど残さない場合、祭祀場と祭祀に使用した道具類の廃棄場所が異なることがあるためである。ここでは、明らかに祭祀・儀礼に使われたと見られる場所と施設（祭祀専用施設）や、専用の道具類（縄文時代のいわゆる第2の道具やト占骨、仏具など）をまず取り上げる。これに、水田の水口や畦畔の一部といった、祭祀の場となり得る場で特別な痕跡が認められた場合、さらには、建物や井戸、カマドのように構築時や廃棄時に一時的に祭祀を行った場合を加えた。遺物では、穿孔により仮器化した土器類、祭祀に関連した場所から出土した各種の模造品やその他の遺物を取り上げる。

また、埋葬に関連する項目は第3節で取り上げる。

祭祀、儀礼、宗教関係と考えられる資料は、縄文時代中期から中世までの長期にわたって認められる。そのため、遺構のあり方や意味する所の差も大きい。ここではまず、縄文時代から弥生時代と古墳時代以降に大きく二分し、各時代の特徴を示し、その変遷を追うこととする（表11）。

2　各時代の祭祀・儀礼・宗教関連施設、遺物とその変遷

(1)　縄文時代の祭祀・儀礼痕跡（図61）

縄文時代の資料は、集落が営まれた中期前葉と中期後葉に集中する。集落外については、対象とした調査範囲が狭かったため明確にはできなかった。また、短期的な滞在地と見られる縄文時代晩期前半の更埴条里遺跡の各地点からは、明確に祭祀を示す痕跡は確認されていない。

A．中期前葉2期集落内の祭祀・儀礼痕跡

集落の中央と目される地点が調査区外であるため、集落全体での祭祀については不明である。個々の竪穴住居内での祭祀も、明確な施設が残されているわけではない。唯一、各細別時期に該当する住居の内、必ず1軒の床下から集礫が認められた。ピット状の掘り込みを有する場合と掘り込みが確認できなかった場合があり、玉砂利大の礫を中心に集められていた。焼成は受けておらず、必ず床下で発見されている点から、建築儀礼の一種である可能性が浮上する。一応、取り上げておきたい。

祭祀に関連する道具としては土偶、石棒が出土している。また、土器装飾が発達し神話的世界を描いていた可能性があるが、立証することは困難である。ただ、獣面や人面の付いた突起がその一部をかいま見せてくれる。

B．中期後葉2～4期集落内の祭祀・儀礼痕跡

集落中央の場が祭祀や儀礼に使用された可能性がある。また、廃絶した住居を祭祀などに活用する例や、住居内に祭壇状施設が設置された例が現れる。また、石棒などの製品が増加する傾向を示している。

集落境の祭祀？　まず、集落全体に関わる祭祀・儀礼の可能性が想定できる痕跡を見て行く。一つには、集落南西部と南部の遺構が希薄になった地点に見られる屋外埋甕があげられる（P96-図48）。いずれも底部などを打ち欠き仮器化している。周囲での祭祀の痕跡は見つかっていないが、設置された場所と状況から集落境における祭祀・儀礼に関わる可能性があろう。埋甕は後葉2期～4期の各細別段階の土器が各1個体は埋設されており、集落の存続期間中、ある一定期間をおいて境界儀礼が行われた可能性がある。

表11 祭祀・儀礼・宗教関連遺構と遺物一覧

階位	時代	実年代比定	生産域(水田・畠域) 畦畔・田面	生産域(水田・畠域) 水路	集落域 集落全体・特定敷地	集落域 個別建物 構築時	集落域 個別建物 使用中	集落域 個別建物 廃絶時	集落域 関連遺物	集落近隣 集落隣接水辺	集落近隣 関連遺物	集落近隣 その他	墓
Ⅱ	近世	16c～19c											
Ⅲ-1	中世	13c～15c			獣骨堀納土坑(H2)						鉄鐸		集落隣接地に墓域形成
	平安	9c末～12c							瓦塔片			(瓦転用)	集落隣接地に墓坑数基
Ⅳ-1(1水田)	平安	9c後	畦畔上に杯類(⑥区) 畦畔上・中に牛馬骨や歯	水路分岐点上に杯(⑥区) 水路内に四耳壺(③、⑥区)		礎石建物床下勾玉、ガラス玉(③区)		井戸廃棄時遺物・獣骨集中など カマド破壊など 灯明皿				屋代寺	
Ⅳ-2(2水田)		9c中	畦畔内に杯(⑥区)										
		9c前										瓦片	
Ⅳ-3(3水田)	奈良	8c前				井戸底部遺物?				導水型祭祀 清水坑型祭祀 木製祭祀具廃棄 火焚き土坑	馬・牛・犬骨 モモ・ヒョウタン		群集墳
Ⅳ-4(4水田)	飛鳥～奈良	7c末～8c初	畦畔水口付近に陽物形(⑤区)								石製模造品類 ト骨		
Ⅳ-5(5水田)	飛鳥	7c後					ト骨(⑤区)						
Ⅵ上部	古墳後期												有明将軍塚古墳
	古墳中期		土坑内に坩や底部穿孔土器(F・G地区)	モモ、高坏集中(D地区) 勾玉集中(①区)	集積遺構(⑤区)	床下玉類?(⑤区)							倉科将軍塚古墳 森将2号墳
	古墳前期				竪穴内集積遺構(⑤区)								森将軍塚古墳
Ⅵ下部	弥生前期～中期			石包丁・土器畫(I地区、①区)					土偶				
Ⅷ～XⅡ-1.	縄文後・晩期												
XⅡ-2	縄文中期後葉				屋外埋甕群	埋甕設置	(敷石)		土偶 石棒他				集落中央土坑群および廃屋
XⅢ-2	縄文中期中葉								土偶				
XⅣ-1	縄文中期前葉2					床下集礫			土偶				廃屋利用
XⅤ・XⅥ	縄文前・中期前葉1												墓坑1基

集落中央部付近の屋外施設　集落存続期間の後半にあたる後葉4期に、集落中央からやや北西へ寄った位置に屋外埋甕群が形成される。いずれも体部下半を打ち欠き仮器化している。地表面に埋甕上部が現れた状態であったと見られ、打ち欠いた破片が埋甕内に入ったままの例もあるため、埋葬施設とは考えにくい。埋甕群の周囲には大量の土器片が広がり、近辺では火を焚いた痕跡が見られることから、何らかの祭祀・儀礼が行われたことを示していよう。住居が占地していた場よりも集落内部に寄っており、集落全体に関わる施設であったと見られる。後葉4期に限定されるため、他の時期には行わなかったか、あるいは調査区東外の別の場に同様の施設があった可能性が考えられよう。

廃絶後の竪穴住居空間の利用　第3節の埋葬関連の項でも扱ったが、SB5337、SB5338から出土した人骨は単なる埋葬とは異なった状況を示している。SB5337は後葉4期の柄鏡形（敷石）住居である。住居廃絶後、四隅の立石（検出は3ヶ所）や周礫がはっきりと確認できる程度に埋まった時点で、人の頭骨が2個体分置かれた？状況が認められた。想像を逞しくすれば、集落の開拓者や英雄といった霊力が強く宿っていると考えられる頭骨を安置していた可能性、などが想定されよう。頭骨は表面の剥離が激しく、「劣くない」といった以外、年齢・性別ともに不明である。

一方、SB5338（後葉3c期）でも特殊な人骨の出土状況が見られる。こちらも住居廃絶直後と見られる段階に、床面中央付近に集骨された人骨が並べ直された状況で出土している。ここでは、獣歯や多量の礫・土器片が混在しており、北側には厚い焼土が見られた。こちらも、単なる埋葬ではなく祭祀・儀礼的な要素が含まれていたと見られる。人骨は壮年に達していた人物と見られ、性別は不明である。また、こうした行為が集落全体に関わるのか、否かは不明である。

住居内に設置された祭壇状施設　後葉3a期のSB5332の奥壁には、石皿や石棒などを出土した祭壇状の高まりが存在し、角礫の集中が見られる。また、後葉4期のSB5324では、奥壁敷石上や周礫中から、一般の住居跡に比べて、多量の石棒片が出土している。

このように、後葉集落では特定住居に祭祀的な施設や遺物の集中が見られるようになる。これらの住居は、シャーマンなどに関する建物であった可能性も想定できよう。

竪穴住居の建築・廃絶に伴う儀礼？　個々の住居に対する祭祀・儀礼には、建築儀礼の一つとの見方もある入口部埋甕の設置や、廃絶儀礼の一つと見られる炉・柱穴の封鎖行為が指摘できる。

入口部や柄部の埋甕は、体部過半を打ち削ったり、体部脇に穿孔を施すなど仮器化が認められる。また、柄部埋甕では、時期が新しくなるにつれて住居中央屋根部を向くように斜めに設置される例が増える。屋代遺跡群では、中期前葉集落の床下から建築儀礼の可能性がある集礫がみつかっており、こうした行為がしだいに入口部へ移動、土器利用に変化していった可能性も考慮に入れる必要があろう。また、焼けたオニグルミなどが出土した例があり、祭祀的な意味あいも含めて検討すべきであろう。

炉の封鎖については、土器片を利用する場合が多く、そのため封鎖用の土器片なのか、火床に土器を敷いたのかで議論が分かれるところである。SB5336のように礫で石囲炉内をしっかりと塞いだ例が見つかっており、廃絶に伴う封鎖の行為（儀礼）が存在した可能性がある。

動物を利用した祭祀・儀礼　中期前葉集落では見られなかった行為として、イノシシ顎部を単独で土坑に埋納する例（SK5602）や竪穴凹地に顎骨を主体とした大量のイノシシ骨を集中廃棄した例が認められる（SB5340）。これらは単なる廃棄行為とは異なっており、祭祀・儀礼性を強く感じさせる。遺跡全体の出土量からするとシカも一定数認められるにも関わらず、上記の例ではイノシシがほとんどを占めており、イノシシとシカの扱いの違いを示している。イノシシを直接対象とした祭祀・儀礼であるのか、他の祭祀・儀礼のためにイノシシを必要としたのか、などは今後の課題である。

祭祀関連遺物　これまでに指摘した集落内の祭祀・儀礼行為と関わる場では、石棒、異形凹石、三角壔形

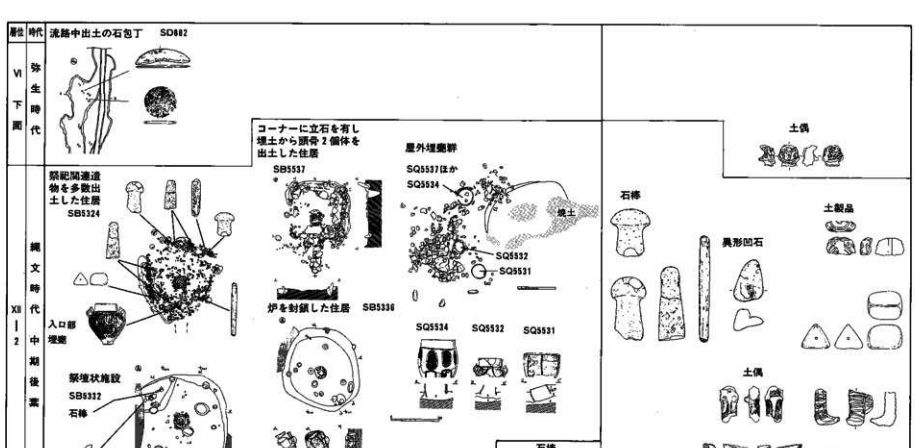


図61　縄文・弥生時代の祭祀関連遺構と遺物

土製品、土偶など、祭祀・儀礼専用の道具類が一部出土している。しかし、使用された大半のものは、土器類や礫であり、祭祀性の認定には困難を伴う点が多い。

(2) 弥生時代の祭祀・儀礼痕跡（図61）

水路への祭祀・儀礼？　調査区内では集落跡が検出されなかったため、水田域に祭祀・儀礼の可能性を探っていく。水田開発がはじまる以前と見られる弥生1～2期の低地では、小型壺が単独で出土した土坑（①区SK154）などが見られる。また、同じ①区では土偶頭部が単独で包含層から出土している。いずれも、集落からは離れた地点であり、祭祀に関わるか否かを含めて用途は不明である。

弥生3・4期には水路の掘削や自然流路の改修が進められ、水路内からも土器・石器片が見つかるようになる。そうした中で、更埴条里遺跡Ⅰ地区SD882の深みからは完形の石包丁と土器蓋が出土している。祭祀・儀礼と言えるかは不明であるが、特異な出土例としてあげておく。

(3) 古墳時代の祭祀・儀礼痕跡（図62・63）

古墳時代の資料は、A．水田域（生産域）、B．集落域（生活域）、C．旧河道傾斜部（祭祀域）の3カ所において確認できる。

A．水田域における祭祀

祭祀行為の存在は、溝（水路）、土坑、畦畔などから出土した遺物によって確認できる。更埴条里遺跡D地区SD302（古墳4期）と屋代遺跡群①区SD235（5世紀代）は灌漑用水路であり、その底部では勾玉、臼玉、小型丸底壺、ミニチュア土器、モモ核といった遺物が出土した。また、更埴条里遺跡H地区では小型丸底壺を埋納した土坑（SK7214、古墳3～4期）があり、水田面や畦畔上からも勾玉、管玉、ミニチュア土器、小型丸底壺、高坏などが出土している。これらは生産（農耕）に関わる祭祀に使用されたものと考えられる。

B．集落域における祭祀

集落内での祭祀行為の存在は、住居内出土の施設や遺物、住居外の特殊な遺構の存在によって確認できる。最も早い段階の事例としては古墳3期（4世紀後半）の竪穴住居内（SB5039）の礫敷きがあげられる。周囲からは玉類の出土も見られ、祭壇的な施設であった可能性がある。

古墳4期（5世紀前半）においては、土坑の周囲に礫を敷き詰めた特殊な遺構（SH5001・SK5038）が集落内の広場と見られる地点に存在する。土坑からは小型丸底壺や土製丸玉などが出土しており、祭祀に関わる特別な施設と考えられる。

住居内では、特に古墳5期（5世紀中頃～後半）をピークとして石製模造品類の出土が目立つ。この内、床下で多数の臼玉が出土した事例（SB5136）は、住居構築に際しての儀礼行為に関わるものと考えられる。また、勾玉模造品、剣形模造品、臼玉のセットが出土した住居（SB5190）もある。このような石製模造品類の存在は、住居内での祭祀行為の痕跡、あるいは祭祀具を保有する人物の住居といった観点で考える必要がある。また、SB5190で出土した摩耗土器片には、酸化鉄分が付着しており、後述する屋代遺跡群⑥区の祭祀に関わる湧水点（湧水坑）付近で多数確認された摩耗土器片と同様のものである。祭祀具を保有する住居と祭祀の場の関連性を示唆する資料といえよう。

C．旧河道傾斜部における祭祀

古墳5期（5世紀中頃～後半）の段階で、集落域の北端部の旧千曲川河道に至る傾斜面（屋代遺跡群⑥区）に導水型祭祀施設（SD7068・SX7038）が造営される。湧水を木樋によって導水し、テラスに築かれた石組みの堤によって貯水した後、川へ排水する構造をもつ大規模なものである。刀形木製品、須恵器甕、モモ

層位	時代	水田域	集落域	水辺の祭祀域
Ⅲ－1	中世		ウマ骨埋納	
Ⅳ（第1水田対応）	平安時代	屋代遺跡群⑥区水田・水路関連遺物（古代8期） 水路分岐点中正置 畦畔内ウマ歯 畦畔内土器 畦畔内ウマ骨 水路分岐点上置ね正置 畦畔上正置	屋代遺跡群③a区集落ST3003（古代8期） 更埴条里遺跡K地区 SK9930（古代6～8期） （S＝1／20）	屋代遺跡群⑥区 湧水型祭祀遺構 SD7042上層（古代1期後半） 燈明受皿石？ 木樋
Ⅳ（第4水田対応）	奈良・飛鳥時代	水口脇畦畔内の腸物形木製品（古代1期末）		湧水坑型祭祀遺構 SD8032・SX7036（古代1期前半） 須恵壺（各湧水坑と接合） 玉類・ト骨 SD7062・SX7037（古代1期後半）（SD7042下層・湧水坑型） 玉類 ウシ・ウマ四肢骨
Ⅳ（第5水田）				

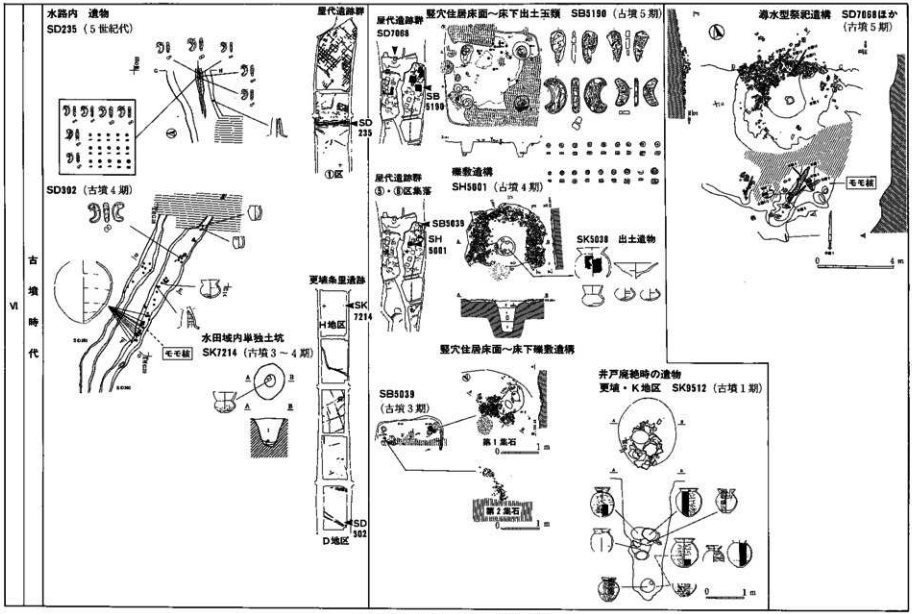


図62　古墳時代～中世の祭祀関連遺構

枝などを伴い、水に関わる祭祀が行われ、一定期間それが継続されていた様子が窺える。三重県城之越遺跡、奈良県南郷大東遺跡、群馬県三ツ寺Ⅰ遺跡などにみられる導水施設と共通する部分があり、古墳時代における主要な祭祀が屋代遺跡群でも執行されていたことがわかる。遺構周辺は植物遺体の観察から、樹木が生育していた形跡が認められず、開放的な空間となっていたようである。この時点からこの一帯は祭祀域と認識され、古代に引き継がれていく。

祭祀施設の大規模化　以上のような古墳時代における祭祀の対象とするもの、祭祀を執行する人間、それに関わる集団は多様であり、それぞれを特定することは困難である。ただ、前述した特殊な祭祀施設の存在時期に注目すると、住居内（古墳3期）→集落域内広場（古墳4期）→集落外傾斜面（古墳5期～）というように、時期の変遷によって施設の大規模化がみてとれる。このことは、それぞれの祭祀に関わる集団が、より広範囲になっていくことを窺わせ、同時に祭祀執行の中心となる主宰者の地位を反映しているものと思われる。

(4)　古代の祭祀・儀礼、宗教関連資料（図62・63）

古代（7世紀～11世紀）においても古墳時代同様に、A．水田域、B．集落域、C．旧河道域それぞれにおいて祭祀の痕跡が確認でき、豊富な遺構、遺物に恵まれている。

A．水田域の祭祀

祭祀関連遺物　千曲川旧河道が埋没した後の離水域に造成された水田では、古代2期の段階（屋代遺跡群⑥区第4水田）において、畦畔水口付近で陽物形が出土した。この状況は『古語拾遺』の一節にみられる「以牛尖置溝口、作男茎形以加之」に共通する部分があり、古代の農耕儀礼の一端を窺わせる。古代8期の段階（屋代遺跡群⑥区第1水田）においても、畦畔内、畦畔上あるいは水路分岐点からウマの歯や禦骨が出土したり、土器が正置された状況がみられる。いずれも水田耕作に関わる祭祀行為の痕跡とみなすことができるだろう。

B．集落域の祭祀

竪穴住居内の祭祀遺物　竪穴住居に関しては古代6期まで石製模造品類の出土が確認できる。古墳時代にみられた勾玉模造品、剣形模造品は姿を消し、双孔円板が主体となり、臼玉は古代1期以降大型化したものが登場する。その他、灯明具が出土した住居が多い。特に灯明具は古代7期をピークとして、古代6～8期の間に多くみられる。また、口縁部、体部および底部に穿孔を施した土器が出土した住居も存在する。1例のみであるが卜骨が出土した住居（SB5090、古代1期）があり、ここからは線刻の施された石製紡錘車が複数出土している。穿孔土器や卜骨などの遺物は日常生活とは異なる時間帯や空間で使用された道具と考えられ、集落内あるいは住居内での祭祀行為の痕跡を示すものと思われる。

礎石建物　屋代遺跡群③a区の古代8期に属する礎石建物ST3002、ST3003の盛土中からガラス玉、勾玉がそれぞれ出土した。ややレベルに相違はあるが、奥福寺中金堂須弥壇土壇、東大寺大仏殿須弥壇正面の地中、元興寺塔心礎周辺、鳥羽離宮の礎石建物基壇地内などからガラス玉の出土が確認されている（秋山1992）。屋代遺跡群の例も勾玉を含め、建物建設に関わる地鎮的な意味合いを持つ可能性が高い。

井戸に関わる祭祀　集落内で検出された井戸底部から曲物が出土する例が多い。井戸は人為的に埋め戻されている場合が多く、底部で出土する曲物は井戸廃絶（あるいは創設）に関わる儀礼行為に伴って埋納された可能性がある。特に更埴条里遺跡K地区SK9930（古代6～8期）から出土した曲物側板にみられる「井」に類似する刻みは、呪符等にみられる魔除け記号であるとも考えられ（平川1991）、井戸に関わる祭祀行為の存在が指摘できる。また、同じK地区の洪水後の集落では、底部付近に多量の獣骨が埋納された井戸（SK9282）が検出された、底部には曲物があり、獣骨の埋納は井戸廃絶に際してのものと考えることがで

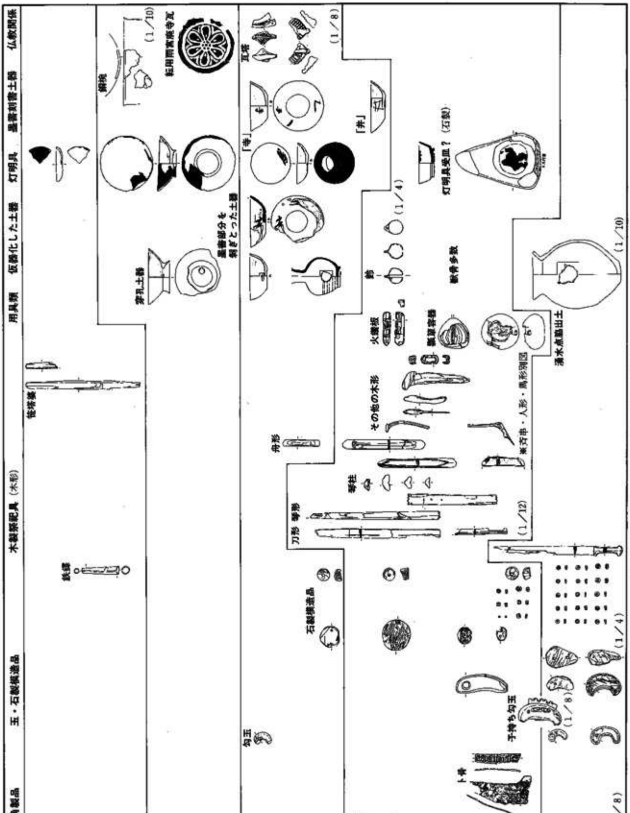


図63　古墳時代〜中世の祭祀・宗教関連遺物

きる。

C．旧河道域の祭祀

屋代遺跡群⑥区では、千曲川河道が北に移動した後も集落北端の傾斜面から自然流路内にかけ、祭祀施設および多量の祭祀遺物が確認された。

導水型祭祀と湧水坑型祭祀　ここで特徴的なのは、2種類の湧水に関わる祭祀遺構が確認されたことである。ひとつは、古墳時代にその初現をみる、湧水を導水する構造をもつ祭祀施設（導水型祭祀施設）で、古代1期前半から古代2期初頭前後まで段階的に4遺構の変遷がみられる。施設の基本は湧水点を起点に掘削された溝であるが、木樋をもつもの（SD7042＝古代1期後半）、水門をもつもの（SX7035＝古代1期前半、SD7038＝古代1期末～2期初頭）、礫敷きを行うもの（SD7049＝古代1期後半）というように導水部の施設に違いがある。これらの施設付近では遺物の出土が希少で、流出部から自然流路に至る範囲で刀形、斎串、琴形、舟形などの木製祭祀具、甕罐柄杓、獣骨などの遺物が出土した。導水施設は一定期間存続していたものと思われ、人為的に埋め戻されたり、多量の遺物が廃棄された状況はみられない。

もうひとつは古代1期前半の段階で、湧水点を起点とする溝ではあるが特に導水施設を伴わないものが登場する（湧水坑型祭祀施設）。溝底部に湧水点を掘削した湧水坑が複数みられるものも存在し、石製模造品、卜骨、獣骨等が出土した例もある。この湧水坑型祭祀施設は古代2期までの間、段階的に4遺構の変遷がみられる（SX7036・SD8032＝古代1期前半、SX7037・SD7062＝古代1期後半、SD7035＝古代1期末～2期初頭、SD7030＝古代2期）。湧水坑は埋め戻されたものが目立ち、祭祀終了後にそれに関わる祭祀具を入れ、故意に埋めた様子が窺える。この段階で祭祀のために掘られた溝はその役割を終了し、前述の導水型祭祀の溝とは対照的に集落方向からの廃棄の場となり、多量の遺物が重層的に出土している。

両者は湧水に関わる祭祀である点では共通するが、導水型祭祀は湧き出た水の流れに祭祀の主体があり、湧水坑型祭祀は湧き出る水そのものが対象となる点で相違するように思われる。特に湧水坑型祭祀を特徴づけるのは古代1期にみられる卜骨であり、祭祀の行程の中に「占う」という行為が伴っていたことがわかり、それが湧水と深い関わりがあったことを示している。また、湧水坑に入れられた多量の獣骨（特にSD7062P1の複数体のウマ、ウシの四肢骨）の存在は、律令によって統制された国家的祭祀とは系統を異にする祭祀であったことを示す。

水辺にみられる祭祀遺物（図63・64）　湧水坑型祭祀の登場と同じ段階から、湧水溝がのぞむ自然流路中を中心に木製祭祀具が廃棄される。器種は斎串、人形、馬形、蛇形という屋代遺跡群における基本4種が古代1期前半（7世紀後半）に存在する。また、斎串の集中、馬形の集中、蛇形と斎串の集中というように、単体での使用とは異なる祭祀具の組み合わせが確認でき、獣骨（ウマ臼骨、四肢骨）を伴うものも目立つ。古代1期後半から古代2期にかけこれらの祭祀具の出土量が急増するとともに、各器種のバリエーションも豊富になる。しかし、これらの木製祭祀具が湧水坑内から出土することは皆無であり、祭祀の系統が異なっていた可能性がある。

特に木製祭祀具を使用する祭祀の画期となるのは古代1期末～2期初頭（屋代遺跡群⑧区第4水田対応層）の段階である。これ以前は数も少なく、単体で出土するのみであった人形が、その数を急増させ、祭祀具の組み合わせの中に登場する。これに伴って祭祀具の組み合わせの種類も豊富になっていく。また、祭祀具をまとめて置き去る地点も、流路中州から集落北端傾斜面（湧水溝埋没部も含む）、水田南端斜面というように増えていく傾向がある。このことは、ほぼ8世紀を境として、木製祭祀具を使用する祭祀に新たな要素が加わったことを示唆し、人形がそこに大きな影響を及ぼしていたことが分かる。さらに祭祀具の組み合わせに獣骨が伴わなくなる点も注目される。この変化は文書木簡等の出土量の増加と連動しており、律令的枠組みが祭祀のありかたにまで影響を及ぼしてきたことを物語るものであろう。

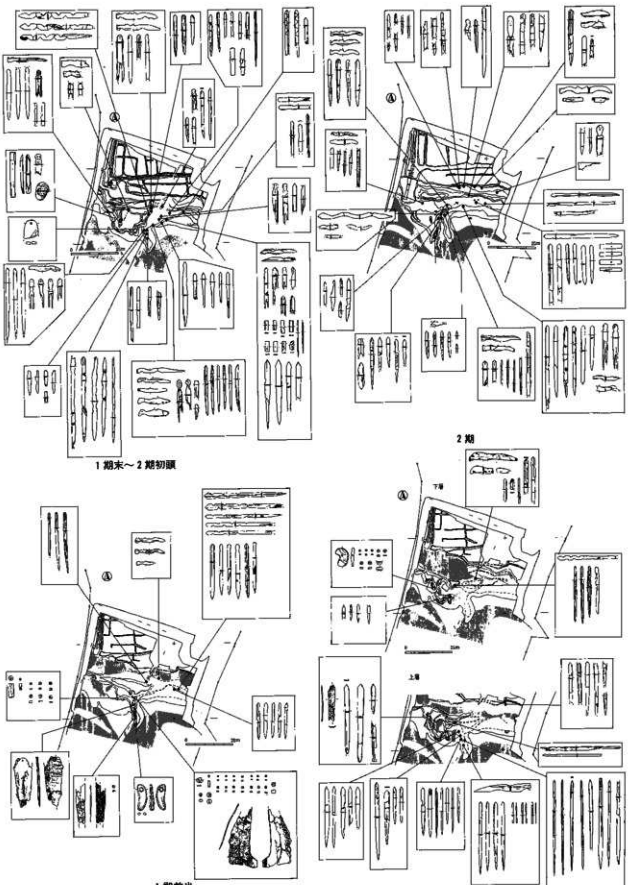


図64　古代の木製祭祀具集中廃棄地点

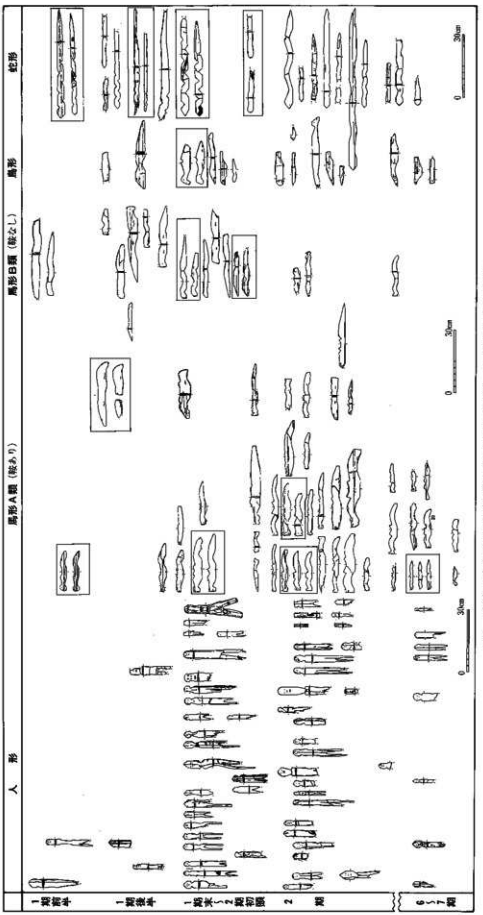


図65　古代の木製祭祀具（人形、動物形）の変遷　※「古代Ⅰ編」から転載

しかし、導水型祭祀、湧水坑型祭祀も依然行われており、旧来の木製祭祀具の組み合わせも残存する点、さらに木製祭祀具をまとめて置き去る地点が、各段階で存在していた湧水溝の東側一帯に限られる点などをみると、新たな祭祀形態を享受しながらも旧来からの祭祀を存続させ、祭祀域を統制していた権力者や集団の姿が浮かんでくる。

祭祀域の終焉　古代3期から5期にかけてこの一帯で祭祀が行われていたことを示す資料は確認できない。この間、自然流路の埋没が進み、古代6期～7期の段階（屋代遺跡群⑥区第2水田対応層）では再び木製祭祀具の廃棄がみられるが、その量は激減する。また、湧水に関わる祭祀施設はその姿を消す。これ以後、古代8期の段階では水田が造成され、古墳時代以降祭祀域として継承されてきた水辺はその終焉を迎えることとなる。

(5)　仏教関連資料（古代～中世）

上記の祭祀施設や祭祀の痕跡を示す遺物の他、仏教信仰に関わると考えられる遺物が認められる。

墨書土器　「寺」と墨書された土器が古代8期の条里水田面（屋代遺跡群③a区）から出土している。その他直接仏教に関わるか断定はできないが、古代6～7期の住居（更埴条里遺跡K地区SB9071）から出土した、「坊」と刻書された土器2点も資料として提示しておく。

瓦塔片　屋代遺跡群④区から8片の土師質瓦塔片が出土した。時期の特定はできないが、仏教信仰の痕跡を示す重要な資料である。

軒丸瓦　古代13期の竪穴住居のカマドに転用されていたと考えられる軒丸瓦は、雨宮廃寺（屋代寺）出土のものと文様が酷似する。上記「寺」の墨書土器とともに、866年に定額寺に列せられた屋代寺の存在と関連づけていく必要がある。屋代寺の瓦は7世紀後半に遡る可能性をもち、屋代遺跡群周辺では、前述の湧水に関わる祭祀、木製祭祀具による祭祀に並行して仏教信仰も導入されていたことを示唆する。

斎　串　屋代遺跡群①区SD23（旧五十里川）中の中世対応層から出土した斎串は、その大きさと切り欠きの形状が古代のものと大きく異なり、中世に多くみられる笹塔婆に類似する。これも仏教的要素をもつ遺物としてあげることができるだろう。屋代遺跡群①区中世集落では多数の墓も検出されており、この斎串との関連も考える必要があるだろう。

引用・参考文献

秋山浩三　1993「古代のガラス玉について」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第34集
江浦　洋　1996「古代の土地開発と地鎮め遺構」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』7
日本考古学協会　1996『1996年度三重大会　シンポジウム1　水辺の祭祀』
平川　南　1991「墨書土器とその字形－古代村落における文字の実相－」『国立歴史民俗博物館研究報告』第35集